兵庫県文化財調査報告　第442冊

尼崎市

塚口城跡

－ 都市計画道路尼崎伊丹線立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 －

平成25(2013)年3月
兵 庫 県 教 育 委 員 会

尼崎市

塚口城跡

－ 都市計画道路尼崎伊丹線立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 －

平成25(2013)年3月

兵 庫 県 教 育 委 員 会

例　　言

1．本書は尼崎市塚口本町１丁目に所在する塚口城跡の発掘調査報告書である。

2．調査は、兵庫県阪神南県民局県土整備部西宮（尼崎）土木事務所が計画・施工する都市計画道路尼崎伊丹線立体交差事業に伴うものである。

3．確認調査は平成10・12・15年度に、本発掘調査は平成13・16・17年度に行った。すべて兵庫県教育委員会が調査主体となり、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が調査担当した。

4．確認調査は山上雅弘・甲斐昭光・岡本一秀が、本発掘調査は岡田章一・渡辺　昇・西口圭介・山田清朝・山上雅弘・松岡千寿が担当した。

5．調査で使用した方位は国土座標第Ⅴ系を使用し、水準は兵庫県設定の２級基準点ならびに３級基準点を使用した。

6．遺物出土状態や土層断面図などの遺構図は調査員・調査補助員が実測した。

7．遺構写真は調査担当者が撮影した。図版１の空中写真は国土地理院撮影のものを使用した。

8．整理作業は、平成21～24年度の４ヵ年に渡って兵庫県立考古博物館で行った。平成24年度は組織改編によって兵庫県立考古博物館において公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部が担当した。

9．執筆は本文目次の通りで、編集は島田留里の協力を得て渡辺が行った。

10．本調査において出土した遺物や作成した写真・図面類は、兵庫県教育委員会（兵庫県立考古博物館）で保管している。ご活用ください。

11．発掘調査・整理調査にあたって、地元関係者をはじめ多くの方々・機関のご協力・ご教示を得ました。感謝致します。（敬称略・順不同）

尼崎市教育委員会・福井英治・岡田　務・益田日吉・高梨政大・山上眞子

第１図　塚口城の位置

本　文　目　次

例言

第１章　はじめに……渡辺……1

第１節　調査に至る経緯

第２節　確認調査の経過

第３節　本発掘調査

第４節　整理作業の経過

第２章　位置と環境……渡辺……4

第３章　遺構……7

第１節　南区（平成13年度）の調査結果……渡辺

第２節　北区（平成16・17年度）の調査結果……西口

第４章　出土遺物……14

第１節　土器・陶磁器……岡田

第２節　瓦……渡辺

第３節　木製品……西口

第４節　金属器……渡辺

第５節　石製品……渡辺

第６節　塚口城跡以前の遺物……渡辺

第７節　近代の煉瓦・タイル・碍子類・瓶類……深井

第５章　自然科学分析……31

第１節　塚口城跡の地形環境……青木哲哉……31

第２節　塚口城跡出土木製品の樹種同定……㈱パレオ・ラボ……39

第６章　おわりに……渡辺……45

挿　図　目　次

第１図　塚口城の位置……i
第２図　塚口城跡遠景……2
第３図　調査風景……3
第４図　整理作業風景……3
第５図　若王寺遺跡……4
第６図　周辺の遺跡……5
第７図　猪名庄遺跡……6
第８図　尼崎城跡……6
第９図　南区　陸橋部実測図……7
第10図　調査区周辺の地形面区分図……32
第11図　調査区付近における微地形の分布……33
第12図　北－Ⅰ区のa－a’地質断面図とb－b’地質断面図……35
第13図　北－Ⅲ区c－c’地質断面図（北壁断面と内堀北斜面の合成図）……36
第14図　北－Ⅲ区d－d’地質断面図（北壁断面と内堀北斜面の合成図）……37
第15図　塚口城跡出土材の光学顕微鏡写真（１）……43
第16図　塚口城跡出土材の光学顕微鏡写真（２）……44
第17図　調査区と塚口城周辺……46

表　目　次

第１表　器種別の樹種構成……39
第２表　樹種同定結果……42

図　版　目　次

図版１　各年度調査地点位置図
図版２　南区　平面図
図版３　南区　橋状遺構
図版４　南区　畦断面図１～７
図版５　北－Ⅰ～Ⅲ区　遺構平面詳細図Ⅰ
図版６　北－Ⅰ～Ⅲ区　遺構平面詳細図Ⅱ
図版７　北－Ⅰ～Ⅲ区　土層断面図Ⅰ
図版８　北－Ⅰ～Ⅲ区　土層断面図Ⅱ
図版９　北－Ⅲ－２区　南壁土層断面図Ⅰ
図版10　北－Ⅲ－２区　南壁土層断面図Ⅱ
図版11　北－Ⅰ区　上層・下層遺構全体図
図版12　北－Ⅰ区　下層遺構全体図・土層断面図
図版13　北－Ⅰ区　下層遺構図
図版14　北－Ⅰ区　木棺墓SX2001
図版15　北－Ⅱ区　全体図・土層断面図
図版16　北－Ⅲ区　下層遺構Ⅰ
図版17　北－Ⅲ区　下層遺構Ⅱ
図版18　北－Ⅲ区　下層遺構Ⅲ
図版19　南－３区・北－Ⅱ区　上層（土器１）
図版20　北－Ⅱ区　SD01（内堀）（土器２）
図版21　北－Ⅱ区　下層・堀１（土器３）
図版22　北－Ⅱ区　下層・堀２　北－Ⅰ区　SD0001（土器４）
図版23　北－Ⅰ区　SD0001（土器５）
図版24　北－Ⅲ－１区　SD003・北－Ⅰ区　SD1001（土器６）
図版25　北－Ⅰ区　SD1001（土器７）
図版26　北－Ⅰ区　SD1001（土器８）
図版27　北－Ⅰ区　SD1001～SD1003（土器９）
図版28　北－Ⅰ区　SX1001・SD2001・北－Ⅲ－２区　SD2002（土器10）
図版29　北－Ⅲ－２区　SD2002（土器11）
図版30　北－Ⅲ－２区　SD2002（土器12）
図版31　北－Ⅲ－２区　SD2002（土器13）
図版32　北－Ⅲ－２区　SD2002（土器14）
図版33　北－Ⅲ－２区　SD2002・SD2003・植木鉢埋納遺構（土器15）
図版34　北－Ⅲ－２区　SD2002・包含層１（土器16）
図版35　包含層２（土器17）
図版36　包含層３（土器18）
図版37　瓦１
図版38　瓦２
図版39　瓦３
図版40　木製品１
図版41　木製品２
図版42　木製品３
図版43　木製品４
図版44　木製品５
図版45　木製品６
図版46　金属器１
図版47　金属器２・石製品１
図版48　石製品２
図版49　煉瓦・タイル
図版50　碍子・硝子瓶

写　真　図　版　目　次

写真図版１　塚口城跡遠景(南上空から)
塚口城跡遠景(西上空から)
写真図版２　塚口城跡遠景(北上空から)
塚口城跡遠景(東上空から)
写真図版３　出土瓦
出土土器
出土煮炊具
写真図版４　土器(１)
写真図版５　土器(２)
写真図版６　土器(３)
写真図版７　土器(４)
写真図版８　土器(５)
写真図版９　土器(６)
写真図版10　土器(７)
写真図版11　土器(８)
写真図版12　土器(９)
写真図版13　土器(10)
写真図版14　土器(11)
写真図版15　土器(12)
写真図版16　土器(13)
写真図版17　土器(14)
写真図版18　土器(15)
写真図版19　土器(16)
写真図版20　土器(17)
写真図版21　土器(18)
写真図版22　土器(19)
写真図版23　土器(20)
写真図版24　土器(21)
写真図版25　土器(22)
写真図版26　土器(23)
写真図版27　土器(24)
写真図版28　土器(25)
写真図版29　土器(26)
写真図版30　土器(27)
写真図版31　塚口城跡垂直写真
写真図版32　南区　３区堀全景(東から)
３区堀全景(西から)
写真図版33　南区　調査区全景(東から)
調査区全景(西から)
１区全景(西から)
１区堀(東から)
１区堀
１区全景(北から)
２区全景(東から)
調査地全景(東から)
写真図版34　南区　３区畦畔１断面(東から)
３区畦畔２断面(東から)
３区畦畔３断面(東から)
３区畦畔６～８断面(東から)
３区畦畔６断面(東から)
３区畦畔９断面(東から)
３区№２橋状遺構(南から)
３区№６橋状遺構(南東から)
写真図版35　南区　３区№６橋状遺構(南から)
東門付近(南西から)
３区調査風景
機械掘削(西から)
調査風景
調査風景
調査区全景(東から)
調査区全景(東から)
写真図版36　外堀の状況(2005年度)
内堀・外堀の状況(2004年度)
内堀の蛇行状況(2005年度)
内堀の西端の状況(2005年度)
写真図版37　2004年度の調査　全景(東から)
全景(西から)
全景(東から)
内堀と外堀(西から)
外堀内の柱穴(南東から)
堀　断面(西から)
写真図版38　2004年度の調査　北－Ⅱ区西壁(南東から)
北－Ⅱ区北壁　西端部(南東から)
北－Ⅱ区北壁(南西から)
SD01断面(西から)
SD02(西から)
SD02　断面(西から)
SD03(北西から)
SD01　一石五輪塔出土状況
写真図版39　2005年度の調査　北－Ⅰ区　全景(西から)
北－Ⅰ区　全景(東から)
北－Ⅰ区　外堀内側の状況
北－Ⅰ区　SD2001(南から)
写真図版40　2005年度の調査　木棺墓SX2001(北から)
SX2001完掘(北から)
SX2001検出状況(北から)
北壁際の焼土部分(南から)
SX2001ほか検出状況(南から)
SX2001ほか(北から)
SX2002(東から)
SX2003(東から)
写真図版41　2005年度の調査　北－Ⅰ区　SD2001東壁の土層断面(西から)
SD2001北壁の土層断面(南から)
SD2001コーナー部分土層(南東から)
北－Ⅰ区　西壁(南東から)
北－Ⅲ－１区　全景(西から)
北－Ⅲ－１区　全景(東から)
北－Ⅲ－１区　全景近接(東から)
写真図版42　2005年度の調査　北－Ⅲ－２区　全景(西から)
北－Ⅲ－２区　全景近接(東から)
北－Ⅲ－３区　全景(西北から)
北－Ⅲ－３区　全景(東から)
SD2002張出部の状況(西から)
SD2002張出部周辺(東から)
北－Ⅲ－１区　張出部と陸橋(西から)
SD2002陸橋(北から)
写真図版43　2005年度の調査　SX2004(南から)
SD2003セクション10(西から)
SD2003セクション13(東から)
SD2003曲物出土状況(東南から)
SD2003東コーナー(北東から)
SD2003ブリッジ部分(西南から)
SD2004セクション19(東から)
SD2004セクション18(西から)
写真図版44　2005年度の調査　下層旧河道の状況　近接
下層旧河道の状況(南西から)
北－Ⅲ－２区　東端南壁　SD2003コーナー
北－Ⅲ－２区　東端南壁
北－Ⅲ－２区　東半南壁
北－Ⅲ－２区　中央付近　南壁
北－Ⅲ区　セクション６(東から)
SD2002セクション５(東から)
写真図版45　2005年度の調査　SD0003石積護岸(西南から)
SD0003石積(東南から)
SD0003石積状況(南から)
SD0003石組(東から)
SD0003石組(北から)
SD0003下層板材護岸(北から)
SD0003下層杭列(北から)
立命館大学　青木哲哉先生の現地指導
写真図版46　2005年度の調査　SD2001断割状況(南から)
北－Ⅰ区東端　断割状況(東から)
北－Ⅲ－１区東端　下層の状況(南西から)
北－Ⅲ－１区　下層の状況(東から)
北－Ⅲ－１区東半　下層の状況(南西から)
下層精査状況
北－Ⅲ－２区西半　下層の状況
北－Ⅲ－２区中央　下層の状況(南から)
写真図版47　瓦(１)
写真図版48　瓦(２)
写真図版49　木製品(１)
写真図版50　木製品(２)
写真図版51　木製品(３)
写真図版52　金属器
写真図版53　石製品
写真図版54　煉瓦・タイル
写真図版55　碍子類・瓶類

第１章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

交通量の増大に伴い、県内各地で交通渋滞が生じている。県道尼崎池田線は産業道路と一般に呼称され、尼崎港や臨海工業地帯と伊丹市・川西市・川辺郡・豊能郡を結ぶ南北の大動脈として重要な役割を有し、交通集中する頻度も高くなっている。兵庫県西宮土木事務所では、交通渋滞を解消するために順次改良工事が計画施工されている。主に南から実施され４車線化工事が行われている。特に阪急神戸線部分は平面交差していることから、渋滞がより深刻化している。県道尼崎池田線改良事業の塚口城跡付近は４車線化に合わせて、阪急神戸線の高架工事が計画された。合わせて阪急神戸線塚口駅北側道路の整備事業も計画されている。

阪神間都市計画道路事業尼崎伊丹線４車線化工事（阪急電鉄神戸線立体交差化）として都市計画決定された事業である。尼崎市南塚口３丁目から塚口本町１丁目にかけての地域が対象である。県道拡幅部分393mと駅北側の阪急付属街路１号線370mと同２号線170mが対象である。高架工事予定部分には周知の埋蔵文化財包蔵地塚口城跡が存在していることから、兵庫県教育委員会と兵庫県西宮土木事務所との間で協議がなされた。

第２節　確認調査の経過

塚口城跡は周知の埋蔵文化財包蔵地であることから、計画段階から協議を行っている。市街地化しており、分布調査出来ないことから直接確認調査を実施した。用地買収を終えた部分や本体工事の進捗に合わせて３回の確認調査を行った。すべて兵庫県西宮土木事務所からの依頼で担当者を派遣する直接執行の形態を採った。

最初の確認調査は平成10年９月25日～29日の実働３日間、14ヶ所に試掘坑を設定して55.5㎡の調査を実施した。調査は復興調査班山上雅弘･岡本一秀が担当した（調査番号930135）。主に予定地東半線路北側の架線予定部分が対象地で、比較的旧状が保たれており残存度は良好であった。特に東側では土塁基底部が残っており、近世以前の堆積土も残り、１Gでは弥生時代後期の竪穴住居跡が確認されている。中央部では近世水田面とその後の堆積層が確認されている。西側では堀跡が検出されているが、「塚口村絵図」による南町門は確認されなかった。下り車線部に入れたトレンチでも堀が検出されている。西側の未調査部分は未確定だが、それ以外はすべて遺構が残存しており、本発掘調査が必要とされた。

平成10年度の確認調査は新たに仮架線を敷く部分にグリッド・トレンチを設定したが、平成12年度は線路撤去部分を確認調査対象地とした。平成13年２月15・16日の２日間で７ヶ所の試掘坑を設定して調査した。調査は企画調整班甲斐昭光が担当した（調査番号2000366）。構成に大きな削平を受けているが、３ヶ所で堀を検出している。

平成15年度は調査未確定となっていた事業地北西部の確認調査を実施した。平成15年９月11日に４ヶ所のトレンチを設定して21.5㎡調査したところ、堀が確認された。調査は調査第３班山上雅弘が担当した（調査番号2003160）。

第３節　本発掘調査

３ヶ年４回に渡って本発掘調査を実施している。

平成13年度　　調査番号2001040

阪急神戸線下り車線部分を対象としたもので、絵図などによる塚口城跡範囲で確認調査結果から調査範囲を確定した。調査面積は805㎡で、平成13年５月28日から７月17日まで実働22日間を費やして調査を行った。５月28日現地立会を行い調査準備に入る。それまでに本体工事側で矢板や架梁工事などの安全対策工事と盛土除去を施工していただく。翌週６月５日から本格的に調査に入り、１区・２区から着手する。機械掘削後面精査を行う。３区も機械掘削を始める。８日に１区・２区の全景撮影を行う。線路近接工事のため空中写真測量が出来ないことから調査員・調査補助員によって図化する。梅雨時期で降雨の日もあり、排水作業だけ実施した日もあったが、極端に遅れることなく６月22日に３区全景写真を撮影した。翌週は３区の実測作業と断ち割り作業・実測を行い、７月２日の週は出来形の検測と書類作成を行い、11日に中間検査（工事検査室山中参事）を受ける。補足作業・後片付けを行い、７月17日器財など埋蔵文化財調査事務所に搬出し調査終了する。

調査事務

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

所　長　　大村敬通

主　幹　　苦瓜一成・輔老拓治・泉　吉嘉

総務課　　森　俊雄

企画調整班　井守徳男・山田清朝・稲田　毅

調査第４班　西口和彦

調査担当

調査第４班　渡辺　昇・松岡千寿

調査参加者　竹村陽子・野田希和子・前田陽子・永野　香

作業委託　　株式会社野原建設工業

平成16年度　調査番号2004200・2004242

工事進捗に合わせて２回の本発掘調査が実施された。平成13年度は下り車線部分を対象としたが、本年度からは上り車線を対象としている。調査面積に大きな差があるのは、確認調査の結果によって堀は下り車線の一部にしか広がらないことからである。兵庫県の組織改編により、事業者は兵庫県阪神南県民局県土整備部尼崎土木事務所に変更された。

１回目は本体工事に先んじて遮音壁設置工事が計画されたので、その部分について先行して調査を実施した。平成16年９月10日に現地立会を行い、10月７日まで実施した。調査方法などは昨年度同様である。調査面積は165㎡と狭長な部分である。

所　長　　平岡憲昭

主　幹　　大西義明・輔老拓治・栗原利光

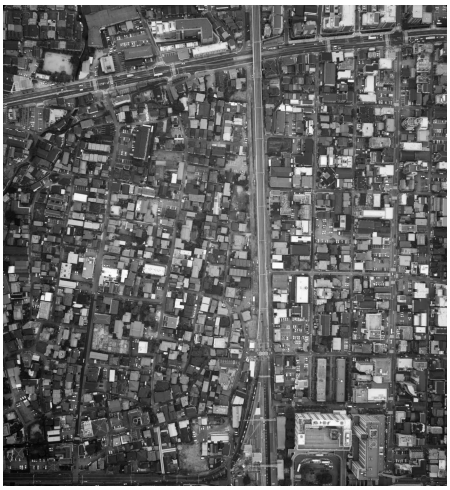
総務課　　織田正博・丸野真衣

企画調整班　深井明比古・稲田　毅

調査第１班　吉田　昇

調査第１班　岡田章一・山田清朝・山上雅弘

作業委託　　株式会社野原建設工業



第２図　塚口城跡遠景

２回目は上り車線部分で408㎡の本発掘調査である。平成17年１月24日から３月14日まで調査を実施した。二重の堀があることが確認されたのが大きな成果である。

平成17年度　調査番号2005002

昨年度実施した本発掘調査部分以外の遺跡範囲の上り車線部分である。1,675㎡と最も広い調査区で、平成17年５月23日から９月23日まで調査を実施した。

所　長　　平岡憲昭
総務課　　大西義明・丸野真衣
企画調整班　深井明比古・稲田　毅
調査第１班　吉田　昇
調査第１班　岡田章一・西口圭介
調査参加者　野村大作・門田諭佳・高田祐一
　　西山はるみ・北山由紀子
作業委託　　株式会社野原建設工業

第３図　調査風景

第４節　整理作業の経過

整理作業は平成21～24年度の４ヶ年に渡って実施した。平成21年度は水洗いから実測作業までを、平成22年度は実測・拓本・復元作業と金属器の保存処理を、平成23年度は復元・トレース・写真撮影・写真整理・図面補正と分析鑑定を、平成24年度はレイアウト作業から報告書刊行と木製品の保存処理を行った。組織改編によって、平成21年度から兵庫県立考古博物館で担当していたが、平成24年度は公益財団法人兵庫県まちづくり技術センターに変更され実施した。

調査主体　兵庫県教育委員会

平成21～23年度　兵庫県立考古博物館

館　長　　石野博信
整理保存課　森内秀造・村上泰樹・岡田章一
　　菱田淳子・篠宮　正・山本　誠
　　深江英憲
平成24年度　公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
埋蔵文化財調査部長　高尾尚登
整理保存課　　村上賢治・篠宮　正・深江英憲

第４図　整理作業風景

平成21～24年度
整理担当　　岡田章一・渡辺　昇・西口圭介
整理嘱託員　　友久伸子・佐伯純子・榎真菜美・島田留里・柏木明子・栗原美緒
　　久保夏美・古谷章子・有田遥香・坂東知奈・守田奈津子
保存処理担当　岡本一秀
整理嘱託員　　今村直子・岡田美穂・桂　昭子・浜脇多規子・村上令子・前田恵梨子

第２章　位置と環境

塚口城跡は尼崎市塚口本町に所在する遺跡である。尼崎市は兵庫県南東部に所在する大都市で大阪市と接しており、阪神工業地帯の中核をなす地域である。東西8.4km、南北11kmの面積49.17㎢である。猪名川・武庫川によって開析された谷部と沖積地・低地によって形成されている。市街地の多くは平地であるが、北側だけ伊丹段丘が延びてくる部分がある。その端部に塚口城跡は構築されている。塚口城跡は元々塚口御坊として浄土真宗本願寺の宗教拠点の１つであった。段丘上であることから、古墳も多く構築されている。

旧石器の遺跡は知られていない。川西市加茂遺跡などで僅かにナイフ形石器の出土が確認されているだけであるが、六甲山麓では芦屋市朝日ケ丘遺跡では層的な調査が行われている。有舌尖頭器なども表面採集されている。縄文時代になっても遺跡数は余り増加しない。増えるのは晩期になってからで、弥生前期の遺跡と重複している。伊丹市口酒井遺跡では縄文土器に籾痕があり注目された。伊丹市大阪空港Ａ・Ｂ遺跡、尼崎市猪名川川床遺跡・藻川川床遺跡・田能遺跡・上ノ島遺跡でも縄文土器が出土している。

弥生時代前期の遺跡は前記の縄文土器出土地や上流の川西市栄根遺跡で生活を継続する。尼崎市上ノ島遺跡は前期前葉から後葉までの単純遺跡で、弥生人の開拓ムラとされている遺跡である。田能遺跡は東側の豊中市勝部遺跡とともに拠点集落と考えられる遺跡である。伊丹段丘北側には加茂遺跡が中期初頭から生活を開始し拠点集落となっている。同様に池田市宮ノ前遺跡も同様である。震災復興事業で調査された武庫庄遺跡は中期からの遺跡で、独立棟持柱を有する大形建物が検出されている。柱根が残っており、年輪年代学の分析から絶対年代（BC200頃）が提起され知られるようになった。尼崎市域では北裏遺跡なども生活をはじめる。西摂平野周辺部には高地性集落が築造されており、加茂遺跡などの段丘上の遺跡とも比較され、高地性集落検討の好例である。後期になってから、遺跡が開発されるところが多く小規模集落が多く認められる。中ノ田遺跡・東園田遺跡・若王寺遺跡・善法寺遺跡や豊中市利倉西遺跡・穂積遺跡・上津島遺跡などである。その一方で田能遺跡はさらに勢力を増大し古墳時代の胎動を予測させる遺跡であるが、古墳時代まで続かない。

古墳時代の集落は拠点集落であった田能遺跡・勝部遺跡は消滅するが、加茂遺跡・宮ノ前遺跡は継続している。さらに後期から継続する栄根遺跡・東園田遺跡・若王寺遺跡・利倉西遺跡に加えて下坂部遺跡で生活を始める。若王寺遺跡は古墳時代後期になると鉄づくりを行った大規模な遺跡である。

古墳は前期から終末期にかけて構築されている。前期古墳は西摂平野北側の長尾山丘陵に万頼山古墳・長尾山古墳が、五月山丘陵に娯三堂古墳・茶臼山古墳が、豊中丘陵に御神山古墳・待兼山古墳、武庫川東岸に安倉古墳が認められる。尼崎市域の低地部には確認されていない。前期末になって伊丹段丘上にも古墳が築かれるようになる。猪名野古墳群と呼ばれるもので、大塚山古墳・南清水古墳・池田山古墳・御願塚古墳・柏木古墳・御園古墳などである。塚口城跡の調査で埴輪が出土していることから、後期はじめ

第５図　若王寺遺跡

第６図　周辺の遺跡

1．塚口城跡	2．座頭塚古墳	3．上園橋遺跡	4．前畑遺跡	5．柏木古墳
6．南野遺跡	7．御願塚遺跡第１地点	8．御願塚古墳	9．平松町遺跡	10．南本町遺跡
11．南町遺跡	12．田能遺跡	13．原田西遺跡	14．猪名川川床遺跡	15．田能高田遺跡
16．四ノ坪遺跡	17．藻川川床遺跡	18．古宮遺跡	19．伊居太古墳	20．下川田遺跡
21．若王寺遺跡	22．春日遺跡	23．二ノ坪遺跡	24．下坂部遺跡	25．西川遺跡
26．猪名庄遺跡	27．栗山・庄下川遺跡			

頃には塚口まで古墳群の範囲が広がったことになる。この時期東側千里丘陵にも大石塚古墳・小石塚古墳・大塚古墳などの桜塚古墳群が構築される。尼崎市では伊居太古墳や粘土槨を主体部とする水堂古墳が中期の古墳である。武庫川西側では芦屋市金津山古墳・阿保親王塚古墳、西宮市池田山古墳さらに神戸市では万葉集に詠われた処女塚伝説で知られる処女塚古墳・西求女塚古墳・東求女塚古墳とヘボソ塚古墳が存在する。後期古墳は平野周辺部の丘陵上に築かれる。長尾山丘陵には雲雀ケ丘古墳群・雲雀山古墳群・中筋山手古墳群があり、終末期の中山荘園古墳が八角形古墳として異彩を放っている。西側六甲山地には八十塚古墳群・朝日ケ丘古墳群が築かれている。尼崎市域では岡院古墳が現存する唯一の古墳であるが、塚口城跡や猪名庄遺跡で後期の古墳が存在しており、埋没古墳として広く分布していた可能性が高い。

奈良時代になると、各地に寺院が建立される。尼崎市では法隆寺式伽藍配置を採る猪名寺廃寺、伊丹市には伊丹廃寺、芦屋廃寺、豊中市に新免廃寺がある。集落跡は中ノ田遺跡・松ケ内遺跡・東武庫遺跡・上ノ島遺跡と伊丹市南本町遺跡がある。大型建物が検出され、墨書土器や硯・石帯・施釉陶器が出土している。この時期、初期荘園の代表例となった東大寺領猪名庄遺跡は大型掘立柱建物が検出され荘所が確認された。猪名庄を最古として、橘御園・潮江荘・長洲荘などほぼ市域全域に広がっている。平安時代にかけても遺跡は継続するが、長洲荘の力が強いことから長洲浜に遺跡が多い。金楽寺貝塚・石ノ戸遺跡・辰巳橋遺跡・小田遺跡などである。猪名庄遺跡も継続しており、鴨社領長洲御厨との土地争いが頻発している。

中世になると遺跡数は増加する。荘園遺跡は継続するが、注目される遺跡は大物遺跡である。古代末から近世にかけての港湾遺跡を代表するものである。搬入土器も多く、各地との交流形態が推測できる。中世城館として富松城跡が早くに築城され、続いて塚口城跡・有岡城跡が築かれる。塚口城跡は塚口御坊として設置され城砦化されていく。荒木村重が摂津を治め、有岡城主として着任した。そして織田信長に反旗を翻したのを契機に、有岡城を中心とするものに変化し、南側の防備として塚口城跡は整備されることになる。

第７図　猪名庄遺跡

第８図　尼崎城跡

第３章　遺構

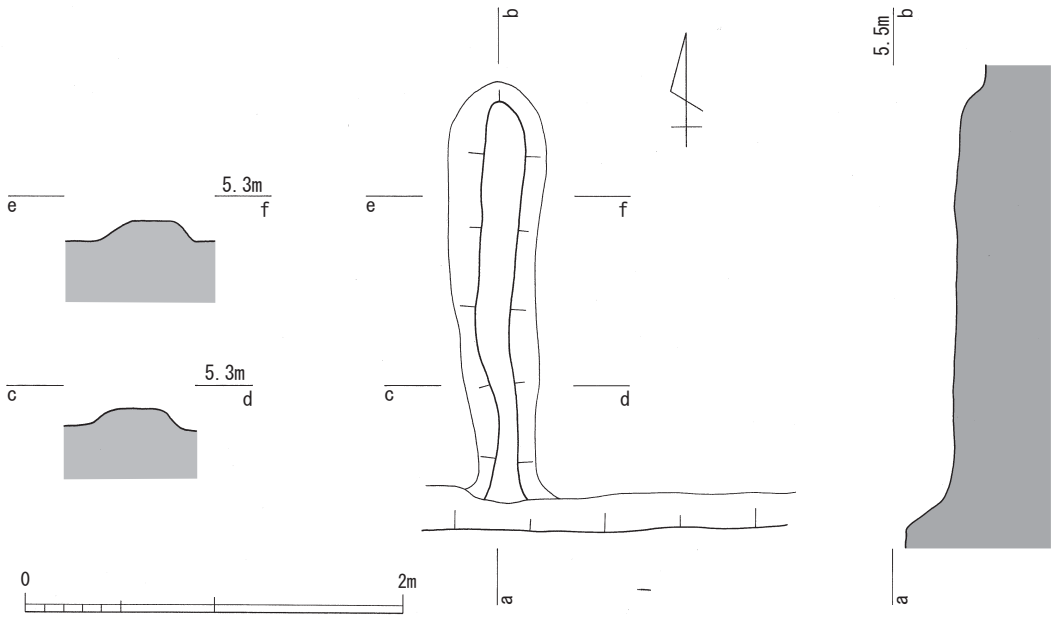
第１節　南区（平成13年度）の調査結果

検出した遺構は堀とその付属施設である。調査区は３区に分かれており、東側で小面積の１・２区と３区は離れてはいるが、調査結果は同じである。阪急電車の線路近接工事であることから矢板を打ち込み、架梁を渡すなどの安全工法の下で調査を実施した。そのため、断面観察や写真撮影などに支障をきたしたことは否めない。

基本土層は１層が盛土、２層黒褐シルト質細砂、３層灰褐礫層、４層褐灰シルト質細砂、５層灰白粗砂、６層地山となっている。２層は近現代溝の埋土になっている。

１・２区は高架橋脚部分を対象としており、規模はともに７×７ｍと小面積である。１区では北端近くでかろうじて堀の肩を検出している。ただ残存状態は悪く肩部近くまで攪乱を受けており、調査区端部であることからも堀の深さは確認できなかった。２区は中央付近で堀南肩を検出している。現在の地割と平行ではなく、北側に向かって湾曲している。

３区でも全体にわたって堀を検出している。堀は東西方向に延びており、西側は攪乱によって堀は削平されていた。全体に堀南肩を検出しており、一部で北肩を検出している。調査段階では一重と思っていたが、平成16・17年度の調査で二重堀であることが確認され、その外堀を調査したことになる。長さは東西150mを調査している。№.２から№.３にかけてだけ北側肩を確認しており、堀幅は5.4～5.6mを測る。東西方向には直線でなく湾曲したり、部分的な幅の増減も認められる。全体的に弧を描いている。３区中央付近が南端になりそうである。旧地表（遺構）面を確認することが出来なかったので、上部は大きく削平されているようである。そのことから、堀の深さは確認出来ない。検出した深さは0.3～0.5



第９図　南区　陸橋部実測図

mである。

橋状遺構は２ヶ所で検出している。東側（測点№２周辺）にある橋状遺構１は堀南肩下場近くから始まっている。やせ細って本来より小さくなっており、幅0.15～0.3m、長さ1.2mを測る。ほぼ直線状に延びているが堀南肩付近でややすぼまっている。

西側（測点№６周辺）にある橋状遺構２は、調査区中央にあり堀を南北に横切っている。堀北肩は調査区外なので明らかではない。僅かに東側に出ているが、ほぼ直線的に延びている。調査した長さは3.1mを測る。畦畔状になっているが、断面形状は地点によって変化している。半円形と台形になっている。縦断面は緩やかな凹凸になっている。幅0.3～0.5mである。

第２節　北区（平成16・17年度）の調査結果

平成16・17年度の本発掘調査は東西方向に一連の調査区をなしており、遺構（堀）も接続する。両年度を合わせた調査区の東西延長は約320mである。

ここでは、各年度の調査概要を述べた後は、遺構については一括して扱うこととする。

平成16年度（北－Ⅱ区）の概要

上下２面の調査を実施した。

上層の遺構は塚口城廃絶以降の近世から現代の遺構と考えられる。SD02・SD03を検出した。

下層の調査では、東西方向に走る２本の溝（堀）を検出した。調査区が東西方向に長く、北側の溝は南肩を、南側の溝は北側の肩部を検出しており、共に調査区の制約から対岸の肩部の検出ができず、両溝の規模については明らかにできなかった。

両溝は何れも人為的に埋められており、北側の溝に関しては少なくとも２回の再掘削が確認できた。

２本の溝は平成17年度調査区においてその延長が確認されており、北側の溝（内堀SD01）は平成17年度のSD2002である。また、南側の溝（外堀）は平成17年度のSD2001であり、西側において屈曲し北側へと延びることが明らかとなった。

溝は大きく３層に亘って埋められており、出土遺物は18世紀後半から19世紀前半のものが主体を占めることから19世紀前半までは溝浚えを行い存続していたものと判断された。

平成17年度（北－Ⅰ～Ⅲ区）の概要

平成16年度の本発掘調査区（2004242）の西側を北－Ⅰ区、東側の調査区を北－Ⅲ区とし、Ⅰ区は調査後、埋め戻しを行った。

また、北－Ⅲ区は機械掘削残土搬出の工程上、東西２小区に分割して、西半を北－Ⅲ―１区、東半をⅢ―２区として、調査を実施した。

北－Ⅰ区は上下２面の調査を実施した。上層は塚口城廃絶以降の近世から現代の遺構である。

調査区からは堀埋没後に敷設された近世の溝SD1001・近代の溝SD0001、時期不明の土坑SX2002・SX2003、盛土（地業）、焼土坑が検出された。下層は、塚口城跡に関連する遺構面である。

平成16年度に調査を行った外堀の西側への延長部分を検出した（SD2001）。外堀はⅠ区内で直角に北へと屈曲している。堀は江戸時代に入ると埋没し、水田として使用され、最終的には多量の陶磁器を含む土砂で埋められたことが判明した。堀底からは中世後期に使用された丹波焼壺の他、須恵質円筒埴輪片が出土した。

また、堀に一部を損壊された木棺墓１基SX2001を検出した。規模は、全長約1.40m以上・内幅約0.35mの木棺を使用している。時期は出土した土師器皿片から中世前期の範疇に入ると考えられる。

北－Ⅲ区において検出できた遺構は少ない。Ⅲ－１区の一部を除き、その大半が近年に実施された阪急電鉄による排水管敷設工事によって遺跡が壊滅的に損壊されたためである。確認調査（2004200）によって存在が明らかとなっていた内堀に取り付く大溝２本や弥生時代の竪穴住居跡などは消滅していた。

上層の遺構として、北－Ⅰ区と同様に、堀埋没後に敷設された近世の溝SD1003・近代の溝SD0003が検出されている。

Ⅱ区ではこれらの溝については調査対象に挙げていないが、SD0003は、北壁に石垣を組み、やや南東に頭を振って流れ、調査区外へと出てゆく。SD0001の延長と理解できる溝である。

SD1003はⅡ区南壁ではSD0003の下層溝として石垣構築以前の溝と理解できるが、SD0001と連結するか否かについては不明である。

下層の遺構は、辛うじて飛島状に残存していた地山面上から、平成16年度調査区から続く内堀（SD2002・SD2003及び2004）と北側から内堀に流れ込む溝状遺構SX2004を検出した。内堀は平成16年度調査区から出現しており、蛇行する。このことから地形に沿って穿たれたことが判明した。また、堀底２箇所から陸橋状の遺構を検出した。時期は不明である。

内堀は、東半部では新旧２本（SD2003・2004）存在しており、SD2003は北肩、SD2004はかろうじて南肩を検出した。両方とも東端で直角に北へ屈曲していることが判明した。

遺物は堀底から中国製白磁皿など中世後期の遺物が出土しているが全体として近世・近代遺物の混入が激しい。

平成17年度の調査では平成16年度において検出された２本の溝（堀）の延長を検出したが、大きく攪乱を被り２本の溝の同時性・先後関係については不明な部分が多く残った。

平成16年度・17年度の調査区は一連のものであり、ここでは層序・遺構をまとめて述べる。

層序（図版７～12・写真図版38）

北地区は阪急電鉄神戸線が元々敷設されていた部分にあたり、地表下の堆積については残りが良いと考えられてきたが、神戸線移設の後、下水管埋設などの工事によって大半が攪乱を受け、健常な土層堆積を残す部分は乏しい。その中でも北－Ⅰ区では比較的攪乱が少ない部分である。この地点を中心に述べる。

調査地点は各地区を通じて段丘崖縁辺部にあたり、調査区の北壁では現表直下から地山面が出現している。本遺跡の特徴を成す堀は段丘崖の高低差を利用して掘削されており、調査区の南壁では低い標高まで湿地状堆積あるいは近世・近代の溝・石組みに伴う堆積土あるいは盛土が観察できる。

現地表下には現代の盛土（攪乱土・整地）があり、この土には多分に現代の火事による塵芥が含まれている。その下層には火災層（炭層）が部分的に見られる。これは18世紀の火災層であり、多量の遺物を含んだ片づけ層が堀（SD2001）を最終に埋め、段丘崖の高低差を解消し、現代につながる景観を造る契機となっている。現代と火災層の間には近現代の石垣・水路が堀を埋めて構築され、北－Ⅱ区の中央をやや南に振って東へと流れており、石垣の裏込めに伴う盛土がところによって厚く残っていた。火事の時期は18世紀代と考えられる。盛土下には、段丘の周辺の低地に水田土壌が広がり、上層遺構の溝SD1001が対応する。その下層には洪水砂礫が入り、下層遺構（堀）が廃絶した後、若干時間差があったことが推測される。

下層遺構として認識できる堀は最終的に濁灰茶色土によって埋没しており、堀が掘削されたと考えられる16世紀の堆積は、堀下半に若干残るのみである。これら、16世紀の堀及び13世紀の木棺墓は地山面から掘り込まれており、更に下層には部分的に旧河道の痕跡が認められる。

遺構

上層の遺構

SX1001(図版11・写真図版39)

Ⅰ区北東端より検出した。SD1001と切り合い古い。

調査区の隅にあり規模形状は明らかではない。規模は南北約3.50m以上、東西2.20m以上、深さ約70㎝を測る。土坑の底部はやや窪むが平坦である。褐灰色礫混じりシルトが堆積している。

図化できる遺物の出土はない。

焼土坑(図版13　写真図版40)

Ⅰ区東半、北壁際より検出した。SX1002～SX1004として、火災に伴う片付け土を投入した重複する土坑群である。SX1004は不整な円形の一部が検出されている。一部は調査区外にある。規模は東西約2.0m、南北約1.50m以上、深さ約80㎝を測る。土坑の底部は平坦である。SX1002はSX1004と切り合い新しい。大半は調査区外にある。規模は東西約0.5m、南北約1.0m以上、深さ約70㎝を測る。土坑の底部は丸い。SX1003はSX1004と切り合い新しい。一部は調査区外にある。規模は東西約1.0m、南北約0.7m以上、深さ約30㎝を測る。土坑の底部は箱形である。

植木鉢埋納遺構(図版16　写真図版41)

Ⅲ－１区東端の地山面より検出した。

浅い円形の土坑に、植木鉢を正位で据えている。口縁部以下の大半が削られており、全貌は詳らかではない。植木鉢の直径は25㎝、土坑規模は東西約0.50m、南北約0.55m、深さ約５㎝を測る。浅い皿状を呈し、底部は平坦である。黒色シルト質細砂が堆積している。

植木鉢288が出土している。

溝

SD02(図版15　写真図版37)

北－Ⅱ区中央において検出した。SD01の上層に位置する。

断面形状は箱形を呈する。規模は全長約7.0m・幅0.7m、深さ約10㎝を測る。土坑底は平坦で、黒色シルト混じり粗砂が堆積する。

SD03(図版15　写真図版37)

北－Ⅱ区中央において検出された。SD02の東側に位置する。

溝は北側に向かって漏斗状に開く。規模は、検出全長約12m・最大幅10m、深さ約50㎝を測る。土坑底は、中央がやや深く、舟底形の断面形状を呈する。

土坑の下半には黒灰色礫混じりシルトが溜まり、その上に青灰色シルト混じり黒灰色砂質シルトが堆積している。

SD0001・SD0003(図版６・11)

SD0001・SD0003は調査区の南端を東西方向に走る近代の溝である。SD0003は下層のSD2003・SD1003と重複しており、各溝の埋没に伴い、上層に構築されていったと考えられる。SD0003はⅢ区において調査区の南壁に入っており、最終的には石組の溝となる。SD0001は幅50㎝～90㎝、深さ40㎝を測り、

底面はやや丸みを帯びる。溝底には灰色砂土あるいは砂壌土が堆積し、上半は攪乱を受けている。

SD1001・SD1002（図版11　写真図版39）

SD1001・SD1002は調査区の南端を東西方向に走る近世～近代の溝である。SD1001はⅠ区においてSD0001と切り合い古く、Ⅰ区中央で終息する。幅2.3m、深さ30cmを測り、底面はやや丸みを帯びる。黄灰色極細砂が堆積する。

SD1002はSD1001と合流する。幅5.5m・深さ15cmを測る、浅い皿状形の溝である。埋土は灰褐色極細砂が堆積している。

図示できる出土遺物はない。

SD1003（図版９・10　写真図版45）

SD0003の下層に存在する。SD2003と重複しており、SD2003の埋没に伴い、上層に構築されていったと考えられる。調査区の南端を東西方向に走る近世～近代の溝である。調査区の南壁に入るため規模・形状は詳らかではない。

下層の遺構

木棺墓SX2001（図版14　写真図版40）

北－Ⅰ区の東端において検出した。南北方向に軸をもつ木棺直葬墓である。南小口を含む南端をSD2001によって損壊している。全長1.60m以上・幅0.75mの隅丸長方形の墓壙に全長1.40m以上・幅0.48m（内法0.35m）の棺痕跡を検出した。

墓壙底は平坦であり、断面形状は箱形を呈する。埋土は、細砂を含む褐灰色シルト質埴壌土である。

棺は痕跡のみが残り、棺釘や小口孔などは確認されていない。小口幅は北小口では幅34cmを測る。また、棺材の厚みは土の変色から側板では５cm前後、小口板では10cm、底板では７cmを測る。残存する棺の深さは約15cmである。

棺内より土師器小皿片が出土している。時期は中世前期に入ると考えられる。

SX2002（図版13　写真図版40）

北－Ⅰ区の東端において検出した。木棺墓SX2001の北側にある。不整な空豆形を呈し、断面は極浅い皿状である。規模は東西約1.20m、南北約0.57m、深さ約10cmを測る。黒褐灰色シルト質埴壌土が堆積する。

SX2003（図版13　写真図版40）

SX2002の北側にある。不整な涙滴形を呈し、断面は極浅い皿状である。規模は東西約0.64m、南北約0.42m、深さ約４cmを測る。炭粒を含む黒褐灰色シルト質埴壌土が堆積する。

外堀・SD2001（図版17　写真図版12）

北－Ⅰ区中央北壁より出現し、ほぼ直角に屈曲して東へと延びる堀を検出した。この堀はⅠ区ではSD2001、北－Ⅱ区では外堀と呼ぶものである。SD1001と部分的に重なり古い。屈曲部より南西に延びる落ち込みは堀に流れ込む溝の残欠と考えられる。堀は南北方向に９m、東西方に43m分検出されており、北－Ⅱ区において調査区外へと延びる。堀幅は、南北方向の堀部分で約3.5m・深さは堀内側から1.70m、外側から0.6mを測り、断面形状はV字形である。東西方向では幅約5.0m・深さは堀内側から1.60m、外側から0.6mを測り、断面形状はU字形である。

外堀は最下層に若干の砂礫が溜まり、暗灰シルトがその上に入る。これらが、堀掘削当初の堆積層と考えられ、埴輪など古墳時代の遺物とともに16世紀代の遺物が出土している。堀の大半は濁灰茶色土に

よって埋没し江戸時代に入って広く水田化しており、SD1001が敷設される。最終的には18世紀代の火事に伴う火事片づけ土によって大きく埋め立てられ、SD0001が敷設される。

内堀SD01・SD2002（図版５　写真図版42）

北－Ⅱ区西端の北壁より出現し、北－Ⅲ－１区南壁へと抜ける堀である。張り出し部分を隔て、SD2003とは被覆する堆積土が同一であることから、蛇行し、一部が調査区外に出た同一の内堀である可能性が高い。延長約80m、幅６m前後を測り、断面形状は箱形である。内堀は数度の掘り替え、あるいは溝浚えが行われており、下層には褐灰～黒灰色中礫混じり砂質シルト、中層には灰色シルト・粗砂などが堆積する。上層には褐灰色シルト（重埴土）が堆積する。SD2003同様、幅1.0mの陸橋状の張り出しが１ヶ所検出されている。また、肩部に柵列状のピットが３個穿たれている。

SD2003（図版６　写真図版43）

SD2002と張り出し部分を隔て北－Ⅲ－１区の南壁より出現し、Ⅲ－２区東端において収束する。SD2002とは被覆する堆積土が同一であることから、蛇行し、一部が調査区外に出た同一の内堀である可能性が高い。殆どを攪乱によって損壊されているが、上部にSD1003・SD0003の埋土が確認でき、時期を追って造り変えられたことが判明した。北肩部分を中心に延長約141m、調査区の南壁に沿って走り、西端では幅５mを測るが、東端では攪乱のため幅20cm前後が検出できたに過ぎない。東端は弧状に収束しており、この部分で北へと屈曲するものと考えられる。SD2002同様、幅１mの陸橋状の張り出しが２ヶ所検出されている。黒褐色シルト質埴壌土が堆積している。

SD2004（図版18　写真図版43）

北－Ⅲ－２区において検出した。その殆どを攪乱によって損壊され、更に上部にSD1003・SD0003の埋土が被覆している。南肩部分を中心に延長約20m、幅30cm前後が検出できたに過ぎない。暗灰茶色シルトが堆積している。東端は弧状に収束しており、この部分で北へと屈曲するものと考えられる。図示できる遺物は出土していない。SD2003と時期差をもつ、ある時期の外堀であった可能性が高い。

小結

平成16年度（北－Ⅱ区）は、平成17年度（北－Ⅰ・Ⅲ区）の調査によって、塚口城に伴う戦国時代の遺構・遺物、塚口城が廃された江戸時代から明治時代の遺構・遺物、そして塚口城が築かれる以前の遺構・遺物を検出することができた。

塚口城に伴う遺構・遺物（戦国時代）として、城を守る２重の堀や城の東西のコーナー部分を見つけることができた。また、城が営まれていた時期に使用されていた土器や木器、墓石などが堀の中から出土している。

平成16年度の調査（北－Ⅱ区）によって、阪急電鉄沿いの東西方向には内外２本の堀が存在することが判明していた。外堀の幅は約５m、内堀の幅は約5.5m、深さは、堀の外側から測ると外堀で60cm、内堀で90cm程度をはかる。平成17年度の調査ではⅠ区において外堀が北へと直角に曲がる部分（城の南西端）と、Ⅲ区において内堀が北へ直角に曲がる部分（南東端）を調査することができた。両者の間隔は約290mである。

戦国時代の遺物として、丹波焼壺や中国製の白磁皿が出土しており、戦国期に城の堀として機能していたことが確定した。また興味を引く遺物としては、漆椀や下駄、擂鉢にこびりついた味噌などを掻き落とす木の篦＝切匙が出土している。墓石は一石五輪塔が出土している。

塚口城が廃された後の江戸時代以降、堀は半ば埋まり、大半は田圃となっていたことが明らかとなっ

た。また、江戸時代後半に入ると残っていた土塁を崩し埋め立てられたことが文献などから指摘されている。今回の調査では、埋め立てた土砂の中から大量の陶磁器が出土しており、考古学の面からも裏付けられる結果となった。

また、現代まで線路沿いに流れていた小川はこの時に付け替えられたことが明らかとなり、現在の景観の始まりを知る上で一つの資料が提示できたと考えている。

塚口城ができる前の遺構・遺物（古墳時代から室町時代）としては、堀の中や周辺の土の中から、埴輪や奈良時代の須恵器、鎌倉時代の瓦器椀片などが出土した。城が存在した高台には古墳や古代・中世の集落もあったことが推測される。また今回の調査では中世前期の木棺墓が見つかっている。

調査の結果、堀の内と外では、1.5m以上の落差があり、実際の堀の深さ以上に深く感じることが判明した。立命館大学講師　青木哲哉氏に指導を依頼したところ、塚口城はその大半が丘（段丘）の上にあって、周囲を旧河道や谷、あるいは沖積地（川や洪水によって運ばれた土砂が堆積してできた地形）に囲まれていることが判明した。城の内側は硬い地盤＝更新世段丘上に乗っており、堀は崖下の土の柔らかい部分＝沖積層や旧河道上に巡らされたことが明らかとなった。元々塚口御坊のある寺内町は周囲より1.5m以上高かったと考えられる。城はこの高さを利用し、さらに土が掘り易く、水が湧きやすい地点を選んで堀を巡らせている。北－Ⅲ区の調査では、堀が蛇行している部分が検出されている。これは元々あった小さな谷の凹みに沿って堀を巡らせたためと考えられる。

現在も流れる東側の小川（堀）や今回発見した西端の堀も、古い谷の中を通っていると考えられる。戦国時代には水田や湿地が広がる平野の中に小高い丘が突き出し、堀と土塁を巡らせた姿は遠く離れたところからも非常に目立つ存在であったことが今回の調査結果によって明らかとなった。

第４章　出土遺物

第１節　土器・陶磁器

南－３区出土遺物

１は土師器の羽釜である。体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁端部は丸みをもつ。体部外面に断面台形状の鍔を貼り付ける。２は七輪の五徳である。体部は直線的に外上方に延び、内面に鍋を受ける長方形の粘土塊を貼り付ける。３は土師質の土管である。器面は磨滅が著しい。内面は横方向のナデ調整が施される。４は秉燭である。口縁部は外方にひらき、内面に凸帯が１条巡る。口縁部内面～体部外面に灰釉を施釉し淡黄緑色に発色する。瀬戸・美濃系で19世紀前半代に比定される。５は燭台である。内外面に白釉を施釉し器面に細かい貫入が見られる。底部外面は露胎で糸切痕が残る。６は朱泥急須の蓋である。頂部に宝珠形のつまみをもつ。19世紀前半以降の煎茶器である。７は青磁の小型急須である。外面に広形の蓮弁文をヘラ彫りで施文する。底部外面には淡く鉄釉を施釉する。８は平底の燗徳利である。肩部に草花文を施文し透明釉を施釉する。９は蕎麦猪口である。体部は直立し、外面に二重網目文を描く。19世紀前半の肥前系磁器である。10は小型の端反碗である。外面に太い界線１条とよろけ文、草花文を描く。19世紀前半以降の瀬戸・美濃系磁器と考えられる。11は蛇ノ目凹形高台をもつ粗製の染付皿である。外面に簡易な唐草文、内面に丸文と簡略化された草花文を描く。19世紀前半以降の肥前系染付磁器と考えられる。12は碗の底部である。高台は比較的細く高い。底部内面に呉須で草花文を描く。肥前系磁器である。

北－Ⅱ区　SD03出土遺物

13は土製の十能である。型造り成形の後、全面にナデ調整を施し、部分的にケズリ調整を加える。内面に部分的に煤が附着する。

北－Ⅱ区　SD01出土遺物

14は備前焼甕の口縁部である。外面に凹線が２条巡る。備前焼Ⅴ期の製品で16世紀代に比定される。15は丹波焼擂鉢である。口縁端部は丸く収め、口縁部内面に沈線が１条巡る。内面にヘラ描きで比較的疎に擂目を施文する。16世紀後半代の製品である。16も15と同様に丹波焼擂鉢である。口縁端部はやや角ばり、内面には凹線が巡る。15とほぼ同時期の16世紀後半代の製品である。17は堺・明石産擂鉢である。18は絵唐津皿である。高台は粗く削りだす三日月高台で、高台裏には縮緬皺と兎巾が見られる。内外面とも灰釉を薄く施釉し、口縁部内面に鉄絵で施文する。底部内面に胎土目跡が４ヶ所見られる。また、高台裏には墨書が見られる。17世紀初頭の絵唐津向付である。19は唐津焼皿である。内外面とも白濁釉を施釉し、底部内面の釉は蛇ノ目状に釉ハギする。17世紀後半～18世紀前半代の製品である。20・21は灰釉陶器椀である。20は高台はほぼ直立し、底部の器壁は厚い。内外面とも灰釉を施釉し、淡い黄橙色に発色する。器面には細かい貫入が見られる。瀬戸・美濃系陶器と考えられる。21は外面にヘラ描き施文し、色調はオリーブ灰色を呈する。22は青磁鉢である。外面にヘラ彫で施文する。龍泉窯系青磁と考えられる。23は青磁花瓶の口縁部である。内外面とも青磁釉を施釉し、淡オリーブ灰色に発色する。肥前系青磁と考えられる。24は波佐見産の粗製のくらわんか手碗である。外面に一重網目文を描く。18世紀後半代の製品である。25は肥前系広東碗である。細く高い高台をもち、外面には梅花文を施文する。19世紀前半代の製品である。26・27・28は波佐見産のくらわんか手碗である。26は外面に丸文を施文す

る。27は外面に一重網目文を描く。いずれも18世紀後半代の製品である。28は外面にコンニャク印判で紅葉文を施文する。18世紀前半代の製品である。29は染付青磁の筒形碗である。外面に青磁釉、内面に四方襷文と底部内面にコンニャク印判で五弁花文を描く。18世紀代の波佐見産の製品である。30・31は波佐見産のくらわんか手碗である。30は外面に二階菱文を描き底部内面にはコンニャク印判の五弁花文を描く。31は外面に雪輪文を描く。いずれも18世紀後半代の製品である。32は肥前系で型押し成形の蓋付碗である。外面に松竹梅文、雪輪文などを描く。19世紀前半以降の製品と考えられる。33は初期伊万里皿である。高台は細く小さく、畳付には砂が附着する。内面は手慣れた筆致で花鳥文を描く。17世紀前半代の肥前系の製品である。34は碗蓋である。内面に四方襷文、外面に草花文を描く。19世紀前半以降の製品である。

北ーⅡ区　堀出土遺物

35・36は土師器焙烙である。底型造りで底部は丸底気味である。体部は僅かに内傾する。口縁端部は丸みをもつ。底部外面はヘラケズリ、体部～口縁部内外面は横方向のナデ調整を加える。36の外面には煤が附着する。18世紀前半代の製品である。37は土師器の火舎香炉である。平底で比較的細く高い高台を貼り付ける。色調は淡赤褐色を呈する。38は土師器の徳利である。平底で体部は内彎気味に上方に延び、頸部はつぼまる。神棚に供えた小型の御神酒徳利であろう。39は丹波焼の火入れである。底部外面に板状工具による調整痕が見られる。焼成は堅緻で色調は暗赤褐色を呈する。40は丹波焼擂鉢である。口縁部は断面台形状に肥厚する。口縁部外面に凹線が２条巡る。体部内面に６条１単位の櫛描きの擂目を施す。41は無釉陶器擂鉢である。焼成はあまく、色調はにぶい橙色を呈し土師器擂鉢に酷似する。口縁部は断面三角形状に肥厚し外面に凹線が２条巡る。内面に12条１単位の櫛描きの擂目を施す。形態的には丹波焼擂鉢に類似のものが見られる。42は丹波焼擂鉢である。口縁部は断面三角形状に肥厚し、内面に６条１単位の櫛描きの擂目を施文する。17世紀後半代に比定される。

44・45は備前焼甕の口縁部である。44は外面に凹線が２条巡る。色調は暗赤褐色を呈し焼成は堅緻である。備前焼Ⅴ期の製品で16世紀代に比定される。45は外面に凹線の見られないⅣ期相当のもので15世紀代に比定される。46は唐津焼の皿である。平底で外面には糸切痕が見られる。内面に灰釉を施し、淡オリーブ灰色に発色する。底部外面に墨書が見られる。17世紀前半の製品である。47は波佐見産の粗製の白磁皿である。断面台形状の低い高台を削り出し、底部の器壁は非常に厚い。内外面とも透明釉を施し、底部内面の釉は蛇ノ目状にかきとる。17世紀後半～18世紀前半代の製品である。48は施釉陶器香炉である。断面台形状の低い高台をもち、底部の器壁は非常に厚い。口縁部～体部外面に緑釉を施釉する。内面及び底部外面は露胎である。近代以降の製品と考えられる。49は小型椀である。小さい高台をもち、口縁端部は大きく外方にひらく。内外面とも白濁釉を施釉し灰白色に発色する。50は唐津焼椀である。断面三角形状の比較的高い高台を削り出し、口縁部は屈曲して僅かに外反する。内外面とも灰釉と白濁釉の２釉を掛け分ける。17世紀初頭の朝鮮唐津椀と考えられる。51は肥前系京焼風陶器椀である。呉須で淡く草花文を描き透明釉を施釉する。色調は鈍い黄橙色を呈する。17世紀後半～18世紀前半代の製品である。52は刷毛目唐津椀である。底部の器壁は非常に厚い。比較的幅の広い高台を削り出し、灰釉施釉の後、刷毛目で白濁釉を横方向に施釉する。底部内面は蛇ノ目状に釉ハギする。18世紀前半代の製品である。53は瀬戸腰錆椀である。内面～体部外面の上半には灰釉を体部外面の下半以下には黒釉を施釉する。19世紀前半以降の製品である。54は肥前系京焼風陶器椀である。断面長方形状の比較的端正な高台を削り出す。内外面とも透明釉を施釉し淡黄色に発色する。17世紀後半～18世紀前半代に比定される。

高台裏に刻印が見られる。55は鍋蓋である。口縁部は水平に外方にひらき、体部は内彎し、つまみは短く直立する。内面は薄く灰釉を施釉し、外面はトビガンナ施文の後、部分的に鉄釉を帯状に施釉し、最後に白泥のイッチン掛けで菊花文を描く。京焼系陶器で19世紀前半代に比定される。56は緑釉陶器の皿である。内外面とも緑釉を施釉し、焼成は堅緻で器壁も比較的薄い。近代以降の製品であろう。57は土師器皿である。平底で体部は短く外上方に延びる。底部外面には回転ヘラケズリ痕が残る。底部内面に透明釉を施釉するいわゆる柿釉の灯明皿である。19世紀前半代に比定される。58～60は肥前系白磁紅皿である。型作り成形で58・59は外面に放射状に沈線が見られる。内面のみ透明釉を施釉して外面は露胎である。60は外面に型押しで唐草文を施文する。いずれも19世紀前半代の製品と考えられる。61は白磁皿である。高台を浅く削り出し、底部内面にヘラ描きの草花文を施文する。内外面とも施釉するが高台裏は露胎である。17世紀前半の初期伊万里と考えられる。62は61同様初期伊万里皿である。口縁部に鉄釉を施釉する。63は三田青磁鉢である。型造り成形で高台は平面八角形状で透かしをもつ。内外面とも灰被りのため白濁する。19世紀前半以降の製品である。64は初期伊万里皿である。小さく浅い高台を削り出し、高台裏には兎巾が残り、砂が附着する。内面は淡い呉須で簡略化された草花文を施文する。17世紀前半代の製品である。65は太鼓形の火入れである。外面に鋲と年輪文を施文する。京焼系磁器で近代以降の製品であろう。66は染付磁器碗である。外面に一重網目文を施文する。波佐見産のくらわんか手碗で18世紀代の製品である。67・68は波佐見産のくらわんか手皿である。67は高台が断面三角形状で低く、底部の器壁は厚い。内面に草花文などを施文する。68は内面に唐草文を施文する。底部内面は蛇ノ目状に釉ハギする。いずれも18世紀後半代の製品である。69は湯呑碗である。高台は外方に踏ん張り、口縁端部は尖り気味に収める。外面に格子目文を施文する。19世紀前半以降の製品であろう。70は赤絵磁器碗である。全体に薄手に成形され、外面に赤絵で一重網目文を施文する。近代以降の製品であろう。71は波佐見産くらわんか手碗である。底部の器壁が非常に厚い。外面に草花文を施文する。18世紀後半代の製品である。72は肥前系染付磁器碗である。外面に斜格子状文を描く。内外面とも灰被りで著しく白濁する。19世紀前半代の製品である。73は波佐見産のくらわんか手碗である。底部の器壁は非常に厚い。外面にコンニャク印判で紅葉文を施文する。18世紀前半代に比定される。74は肥前系染付磁器杯である。高台は比較的細く低く、体部は直立する。外面に濃い呉須で松葉文、内面にくずれたコンニャク印判で五弁花文を描く。19世紀前半代に比定される。75は瀬戸・美濃系の端反碗である。外面に丸文、口縁部内面に太い界線が巡る。19世紀前半以降の製品である。76は染付磁器碗である。外面は窓絵で笹文に細かい斜格子文を、口縁部内面には雷文帯を描く。77は肥前系染付磁器碗である。外面に線描きの草花文、口縁部内面には雷文帯を描く。19世紀前半代に比定される。78は染付磁器猪口である。断面三角形状の比較的低い高台をもち体部は斜め外方にひらく。底部の器壁は比較的厚い。外面に呉須で草花文を施文する。79は肥前系染付青磁の碗蓋である。外面は青磁釉を施釉し、内面は四方襷文、五弁花文を施文する。つまみの頂部には渦福文を描く。18世紀代の製品と考えられる。80は碗の底部である。高台脇に×印、内面に草花文を描く。

北ーⅠ区　SD0001出土遺物

81は土師器焙烙である。体部は短く直立し、内外面とも強いヨコナデ調整を施す。口縁部上面に斜め方向に穿孔を施す。焼成は堅緻でにぶい赤褐色を呈する。82は波佐見産の小型の油壺である。外面に簡易な草花文を描く。内面は露胎である。18世紀代に比定される。83は土師器灯明皿である。平底で体部はやや外反する。底部外面には糸切痕が見られる。内面に透明釉を施す柿釉の灯明皿である。19世紀前

半代に比定される。84は燭台の底部である。浅い皿状を呈し中央部に脚が貼り付く。内面に白濁釉を施釉し、外面は露胎で糸切痕が残る。19世紀前半代の製品である。85は桶形の小鉢である。体部外面中央に箍を模した凸帯が１条巡る。内外面とも黄釉を施釉する。近代以降の珉平焼と考えられる。86は無釉陶器火入れである。体部外面に把手を貼り付け、内外面に赤土部を塗布する。丹波焼と考えられる。87は無釉陶器甕である。体部外面には凹線が巡る。口縁部上面にも凹線が巡る。内外面に赤土部を塗布する。17世紀代の丹波焼である。88は施釉陶器壺である。内外面とも灰釉を施釉する。底部外面は露胎である。89は丹波焼甕の底部である。焼成は堅緻で外面には胡麻状に灰被りが見られる。90は丹波焼徳利である。外面は鉄釉施釉の後、白泥のイッチン掛けで屋号を施文する。近世末から近代の製品である。91は小型の端反碗である。底部の器壁は厚く、口縁部は若干外方にひらく。内外面ともやや濃い呉須で草花文を描く。19世紀前半以降の瀬戸・美濃系の清朝青花写しと考えられる。92は肥前系染付磁器碗である。底部の器壁は非常に厚く、外面に割筆で二重網目文を描く。18世紀代の製品である。93は白磁皿である。ロクロ成形の後、型打ちで口縁部を波状に、内面に草花文を施文する。19世紀前半以降の瀬戸・美濃系の製品と考えられる。94は初期伊万里皿である。底部の器壁は非常に厚い。高台を浅く削り出し、高台裏に兎巾が残る。底部内面に兎と草花文を淡い呉須で描く。17世紀前半の製品である。95は染付青磁皿である。蛇ノ目凹形高台をもち、底部内面に草花文を施文する。18世紀代の肥前系の製品である。

96・97いずれも瓦質土器焜炉である。型作り成形で５枚の板状の粘土板を貼り合わせて成形する。外面はミガキ調整により平滑に仕上げる。19世紀前半以降の製品と考えられる。

北－Ⅲ－１区　SD0003出土遺物

98は粗製の天目茶碗である。形態は丸碗で口縁部外面が僅かに窪む。内外面とも鉄釉を施釉し、黒褐色に発色する。外面の高台脇以下は露胎である。99は施釉陶器壺である。外面に灰釉を施釉し浅黄色に発色する。19世紀前半以降の京焼系陶器である。100は素焼きの小皿である。底部内面に桜花を赤絵で施文する。盃と考えられる。101は型打ち成形の輪花鉢である。ロクロ成形の後、型打ちで口縁部を輪花状に、内面に雲文と花卉文を施文する。底部内面には呉須で山水楼閣を、外面には木葉文をそれぞれ描く。19世紀前半の肥前系の優品である。

北－Ⅰ区　SD1001出土遺物

102～106は土師器焙烙である。いずれも型作り成形である。102は内外面ともヨコナデ調整を施し、底部外面に煤が附着する。103は体部がやや内傾し底部の器壁は薄い。104は口縁部を部分的に肥厚させ、上面から外側に向けて穿孔する。105は体部がほぼ直立し内外面ともヨコナデ調整を施す。106は体部は非常に低く底部の器壁は薄い。底部外面は全面に煤が附着する。

107～109は丹波焼擂鉢である。107は口縁端部が長方形状を呈し、内面にヘラ描きの擂目を施す。16世紀後半代～17世紀前半代に比定される。108は体部が直線的に外上方に延び、口縁部内面に指ナデによって凹部をもつ。内面にヘラ描きによる擂目をもつ。16世紀後半～17世紀初頭の製品と考えられる。109は口縁部が上下に拡張して縁帯をもつ。口縁部外面には凹線が２条巡る。内面には７条１単位のクシ描きの擂目を施す。18世紀代の製品である。110は堺･明石産擂鉢である。丹波焼擂鉢と比較して器壁が厚い。口縁部は上下に肥厚して縁帯を作り、口縁部外面に凹線が２条巡る。体部内面にはクシ描きの擂目を施す。18世紀後半代の時期が考えられる。111は備前焼擂鉢である。口縁部は上下に拡張して縁帯をもつ。口縁部外面には赤土部を塗布し、更に胡麻状に灰被りが見られる。体部内面に７条１単位の

クシ描きの擂目が見られる。備前焼Ⅳ期の製品で15世紀代に比定される。112・113は丹波焼擂鉢である。112は器壁が比較的薄い。口縁部は上下に拡張して縁帯を作り、外面には凹線が２条巡る。内面にクシ描きの擂目を施文する。18世紀代の製品である。113は口縁部が上下に拡張して縁帯を作り口縁部内外面は強いヨコナデ調整を施す。体部内面に６条１単位のクシ描きの擂目を、底部内面に同心円状のクシ描きの擂目を施す。18世紀代の製品である。114は備前焼擂鉢である。口縁部は上下に拡張して縁帯を形成し、外面に凹線が２条巡る。内面にクシ描きの擂目が見られる。焼成は堅緻で灰赤色を呈する。備前焼Ⅴ期で16世紀代の製品である。115～119は堺・明石産擂鉢である。115～117・119は同タイプで器壁は比較的厚い。口縁部は縁帯をもち外面に凹線が２条巡る。体部内面に10条１単位のクシ描きの擂目を施文する。18世代の製品であろう。118は縁帯の断面形が長方形を呈し、口縁部外面に沈線が２条、内面に凸帯が１条巡る。体部内面に９条１単位のクシ描きの擂目を施文する。120は無釉陶器の甕である。体部は内彎し口縁部は大きく外方にひらく。色調は褐灰色を呈し焼成は堅緻である。丹波焼と考えられる。121は備前焼盤である。内外面ともヨコナデ調整を施し内面に胡麻状に灰被りが見られる。16世紀後半代に比定される。122は無釉陶器甕である。口縁部は短く内彎してほぼ直上に延びる。口縁部外面に凹線が２条巡る。丹波焼と考えられる。123は備前焼甕である。口縁部は断面楕円形状に肥厚する。備前焼Ⅳ期の製品で15世紀代に比定される。124は急須蓋である。宝珠つまみをもち、外面上面に線刻で草花文を施文する。19世紀前半代の備前焼朱泥急須蓋であろう。

125は朱泥急須である。器壁は全体に薄い。平底で体部は内彎し棒状の注口と吊環をもつ。色調はにぶい赤褐色を呈する。備前焼と考えられる。126・127は丹波焼の火入れである。平底で体部は「く」の字状に屈曲し口縁部上面は水平に端面をもつ。内外面とも自然釉が附着する。128は甕もしくは壺の底部である。器壁は全体に薄い。内外面とも回転ナデ調整を施し、底部外面は未調整である。丹波焼と考えられる。129は灯明皿である。外面は露胎、内面は灰釉を施釉してにぶい橙色に発色する。130は施釉陶器の猪口である。あげ底で内外面とも薄く灰釉を施釉する。131は青磁碗の底部である。器壁は非常厚く、内面に印花で文字文を施文する。内外面とも施釉するが高台裏は露胎である。龍泉窯系青磁と考えられる。132は瀬戸・美濃系灰釉陶器皿の底部である。碁笥底で内面の釉ははぎとる。黄瀬戸皿で16世紀後半代の製品である。133は唐津焼椀である。内外面とも灰釉を施釉してオリーブ灰色に発色する。外面の高台脇以下は露胎で高台裏には兎巾が残る。17世紀前半代の製品である。134は椀の底部である。端正な輪高台をもち、高台裏に「福次」銘をスタンプする。肥前系京焼風陶器で17世紀後半～18世紀前半代に比定される。135は内外面とも灰釉を施し、高台脇以下は露胎の粗製の湯呑椀である。136は波佐見産のくらわんか手椀である。外面に簡易な草花文を描き、焼成はあまい。18世紀後半代に比定される。137・138は肥前系京焼風陶器椀である。端正な高台をもち、体部はほぼ直立する。外面に呉須で簡易な山水文を施文する。外面の高台脇以下は露胎で「清水」銘をスタンプする。17世紀後半～18世紀前半の製品である。139は舞子焼の粗製の湯呑椀である。内面は白釉、外面は灰釉をそれぞれ施釉する。外面の高台脇に「舞子」「□□」軒銘をスタンプする。近代の汽車茶瓶付属の湯呑と考えられる。140・142は刷毛目唐津椀である。褐釉施釉の後、白釉を刷毛で施釉する。底部の器壁は非常に厚い粗製の椀で18世紀前半代に比定される。141は137と同様の肥前系京焼風陶器椀である。外面の山水文に赤絵が上絵付けされている。143は現川焼の椀である。灰釉施釉の後、まだ乾かないうちに白釉を施釉する。144は鉢蓋である。小さいつまみを持ち、外面に沈線が３条巡る。内外面とも白釉を施釉する。145は壺蓋である。外面は灰釉施釉の後、丸文を鉄釉で３ヶ所施釉する。内面は露胎である。明石焼に類品が見られる。

146は鉢蓋である。内面に灰釉、外面に緑釉を施釉の後、外面にイッチン掛けで亀甲文を部分的に描く。近代以降の製品と考えられる。147は水差である。注口は直立する。焼成はあまく、外面に部分的に灰釉が残る。瀬戸・美濃系陶器と考えられる。148は頭部が欠落しているが、尊形花瓶である。体部に大きな縦耳を貼り付ける。外面には鉄釉を施釉するが内面及び底部外面は露胎である。近世後半の瀬戸・美濃系の製品である。149は梅瓶形の御神酒徳利である。外面全面に酸化コバルトを施釉する。近代以降の製品である。150は肥前系の紅皿である。型作り成形で内面に透明釉を施釉する。19世紀前半代に比定される。151は三田青磁鉢の底部である。型作り成形で高台の平面形は方形である。19世紀前半代に比定される。152は青磁鉢である。内外面とも型押しで草花文を施文する。内外面とも青磁釉を施釉するが底部外面は露胎で淡赤褐色に発色する。京焼系の青磁で近世後半～近代の製品と考えられる。153は波佐見産のくらわんか手の杯である。外面に簡易な草花文を施文する。18世紀後半代の製品である。154は肥前系の杯である。底部の器壁は厚く口縁部は大きく外方に開く。外面には唐草文を描き若干灰被りが見られる。19世紀前半代の製品である。155～162はいずれも波佐見産のくらわんか手碗で18世紀後半代に比定される。文様は155～157・159・162は草花文、158・160は一重網目文、161は二重網目文を描く。163は波佐見産の粗製の染付磁器皿である。底部内面は蛇ノ目状に釉ハギし、高台脇以下は露胎である。18世紀前半代に比定される。164は肥前系の碗蓋である。外面は松葉文、内面はコンニャク印判で五弁花文を施文する。18世紀代に比定される。165は肥前系の油壺である。外面に呉須で蛸唐草文を施文する。18世紀代の製品である。166は金襴手大皿である。口縁部はヘラで波状に整形する。内面に染付と上絵付けで赤・緑・金彩で牡丹唐草文、松文、鶴文などを全面に描く。明治以降の製品と考えられる。

167は土製品の天神像である。両型作りで中央部に貼り付け痕が見られる。彩色はすべて失われているが、いわゆる伏見人形で19世紀前半代の製品である。168も伏見人形で、頭部を欠くが馬形である。169は七輪の五徳である。外面に凹線が２条巡る。内面には煤が附着する。170は瓦質土器の火鉢の脚部である。部分的に透かしの痕跡が認められる。171は刷毛目唐津鉢である。内面～口縁部外面に灰釉を施釉したのち内面に刷毛で波状に白釉を施釉する。17世紀後半～18世紀前半代の製品である。172は三島唐津鉢である。体部内面にヘラで草花文、波状文、花弁文を施文し、白泥で象嵌した後、内面～口縁部外面にかけて灰釉を施釉する。底部内面に砂目跡が認められる。17世紀後半～18世紀前半代に比定される。173～175はいずれも唐津焼皿である。底部内面に砂目跡が見られる。173は口縁部内面に凹線が１条巡るいわゆる溝縁皿である。いずれも17世紀初頭～前半代の製品である。176は染付磁器杯である。底部の器壁は非常に厚く、口縁部は大きく外方にひらく。外面に草花文を描く。177～179はいずれも波佐見産のくらわんか手碗で器壁は厚く、外面に草花文を描く。18世紀後半代に比定される。180～184は肥前系染付磁器皿である。180は内面に草花文を描く。181・183は波佐見産のくらわんか手の粗製の皿である。181は内面に墨弾きでよろけ文を、コンニャク印判で五弁花文を描き18世紀前半代に比定される。183は外面に唐草文、内面に草花文を描く18世紀後半代の製品である。182･184はいずれも高台径が小さい。また182は底部に砂が附着し、184は器面に虫食いが見られる。いずれも17世紀前半代の製品である。185は土製品の人面である。型作り成形で彩色は剥落している。内面に十字形の墨書が見られる。玩具の部品と考えられる。186～188はいずれも瓦質で瓦塼の一部と考えられる。

北－Ⅰ区　SD1002出土遺物

189は土師器焙烙である。体部は短く内傾し口縁部は断面三角形状に肥厚する。口縁端部に上下方向

に穿孔する。焼成は良好で浅黄橙色に発色する。

北－Ⅰ区　SD1003出土遺物

190・191は備前焼甕の口縁部である。断面は楕円形状を呈し、外面には凹線が２～３条巡る。備前焼Ⅴ期の製品で16世紀代に比定される。192は唐津焼皿である。幅の広い低い高台を削り出し、底部内面に砂目跡が４ヶ所認められる。17世紀前半代の製品である。193は堺・明石産擂鉢である。口縁部は上下に拡張して縁帯をもつ。外面に凹線が２条巡る。内面は11条１単位の擂目を施文する。19世紀前半代の製品である。

194は丹波焼擂鉢である。口縁端部は丸みをもつ。体部内面にヘラ描きの擂目を施す。16世紀後半～17世紀前半代の製品である。

北－Ⅰ区　SX1001出土遺物

195は丹波焼の通い徳利いわゆる貧乏徳利である。平底で体部は内彎気味にほぼ直上に延びる。頸部は短く直立し口縁部は玉縁状に肥厚する。外面に鉄釉を薄く施釉した後、白泥のイッチン掛けで「辰馬支店」、□辰と書く。底部外面には砂が附着する。辰馬酒造の通い徳利で近代のものと考えられる。

北－Ⅰ区　SD2001出土遺物

196は丹波焼壺の口縁部である。頸部は直立し口縁部は玉縁状に肥厚する。内外面ともヨコナデ調整を施す。外面には自然釉が附着し灰褐色を呈する。16世紀後半代に比定される。197は丹波焼壺である。外面に鉄釉を施釉し底部外面は露胎である。近代以降の製品と考えられる。198は壺の底部である。底部外面に回転糸切痕が残る。内面に全面に鉄釉が施される。199は丹波焼の植木鉢である。内外面とも回転ナデ調整の後、赤土部を塗布する。色調は黒褐色を呈する。200は備前焼擂鉢の口縁部である。外面に凹線が２条巡る。備前焼Ⅴ期の製品で16世紀代に比定される。201は丹波焼擂鉢である。口縁部は上下に拡張して縁帯を形成し、外面に凹線が２条巡る。内面には８条１単位のクシ描きの擂目を施文する。外面には自然釉が掛かる。202は瀬戸･美濃系灰釉陶器皿である。体部内面は型押しで花弁文を施文する。底部内面はヘラ彫りで花弁文を施文する。黄瀬戸菊皿で16世紀代に比定される。203は太鼓形鉢である。鉄釉と白釉を掛分け鋲は鉄釉で表す。近代の珉平焼の製品と考えられる。204は志野焼の皿の底部である。浅い高台を削り出し底部外面以外は全面に長石釉を施釉する。器面に細かい貫入が入る。17世紀初頭の製品である。205は明青花皿の底部である。低く細い高台をもち底部内面に寿字文を描く。底部外面に砂が附着し器面に虫食いが認められる。16世紀代に比定される。206は高台が外方にひらく皿である。外面に細かい唐草文を描く。207は粗製の陶胎染付椀である。

北－Ⅲ－２区　SD2002・SD2003・植木鉢埋納遺構出土遺物

208～210は土師器焙烙である。208は器壁が比較的厚く、体部は短く直立し、把手を作り出す。把手には穿孔が見られる。色調はにぶい橙色を呈する。209は体部が短く直立する。内外面とも強いヨコナデ調整を施し、外面に煤が附着する。210は丸底で底部の器壁は薄く体部はほぼ直立する。底部外面は板ナデ、体部内外面はヨコナデ調整を施す。色調はにぶい黄褐色を呈する。211は土師器鍋である。叩き作りで外面に平行叩き目が残る。16世紀代に比定される。212は備前焼盤である。色調は灰褐色を呈し焼成は堅緻である。16世紀代に比定される。213は小型の陶器の壺蓋の未成品である。焼成はあまく色調はにぶい黄橙色を呈する。上面に糸切痕が残る。214は瓦質土器火鉢である。外面は細かいミガキ調整を加える。215は丹波焼甕である。色調はにぶい黄橙色を呈し、焼成は堅緻である。17世紀前半代に比定される。216は備前焼Ⅴ期の甕の口縁部片である。16世紀代に比定される。217は丹波焼壺の口縁部

である。色調はにぶい褐色を呈する。16世紀代の製品である。218は備前焼小壺である。色調は灰赤色を呈し焼成は極めて堅緻である。外面には胡麻状に灰被りが見られる。16世紀代の製品である。219・220は備前焼火入れである。219は淡く墨書が見られる。220は焼成がややあまく、色調はにぶい橙色を呈する。底部外面に刻印が見られる。221は瓦質土器の火鉢である。内外面とも回転ナデの後、ナデ調整を加え器面を平滑に仕上げる。炭素の吸着はほとんど見られず色調はにぶい黄橙色を呈する。222は丹波焼の植木鉢である。外面に白泥のイッチン掛けで輪状文を描く。223は唐津焼皿である。高台を浅く削り出し内外面とも灰釉を施釉し灰白色に発色する。外面の高台脇以下は露胎である。底部内面に砂目跡が見られる。17世紀前半の製品である。224は備前焼擂鉢である。備前焼Ⅲ期の製品で14世紀代に比定される。225は丹波焼擂鉢である。体部内面にはヘラ状工具で擂目を施文する。色調は橙色を呈し、焼成は堅緻である。16世紀後半代の製品である。226～230はいずれも堺・明石産擂鉢で口縁部が上下に拡張して縁帯をもつ。226は底部内面にウールマーク状の擂目を施文するのに対して、228・229は放射状の擂目をもつ。226は堺産、228・229は明石産の可能性が高い。

231・232は備前焼擂鉢である。231は口縁部は上下に拡張して縁帯を形成する。口縁部外面には凹線が２条巡る。体部内面には櫛描きの擂目を施す。焼成は堅緻で色調は暗赤褐色を呈する。備前焼Ⅴ期の製品で16世紀代に比定される。232はⅤ期相当で内面に胡麻状に灰被りが見られる。233・234はいずれも丹波焼擂鉢である。口縁部は上下に拡張して縁帯を形成し、外面に凹線が２条巡る。体部内面に６条１単位の櫛描きの擂目を施文する。焼成は非常に堅緻で色調は褐色を呈する。18世紀後半代に比定される。235は小型の丹波焼擂鉢である。平高台をもち、口縁部内面から体部外面にかけて鉄釉を厚く施釉する。内面に12条１単位の櫛描きの擂目を密に施文する。近代以降の製品と考えられる。236は瀬戸・美濃系の天目茶碗である。低い内反り高台を浅く削り出し、口縁部は屈曲して端部は若干外方に開く。内面から体部外面上半にかけて天目釉を施釉する。17世紀代の美濃系の製品と考えられる。237は施釉陶器椀である。内外面とも透明釉を施し淡黄色に発色する。美濃系の灰釉椀と考えられる。238は白磁皿である。断面三角形状の低い高台をもち、口縁部は外方に大きくひらく。16世紀後半代の華南産白磁と考えられる。239は朱泥の壺蓋である。

240は山笠形の壺蓋である。外面に白釉を施釉した後、鉄釉で松葉文を施文する。内面は露胎である。241は山笠形の壺蓋である。外面に灰釉を施釉した後、白泥をイッチン掛けで施文する。内面は露胎である。242は落とし蓋である。外面につまみを貼り付け、透明釉を施釉し、淡黄色に発色する。内面は露胎である。243は丹波焼植木鉢である。外面に貼花で、草花文、波状凸帯などを施文する。19世紀前半以降の時期が考えられる。244は施釉陶器甕である。口縁部は水平方向に拡張し、上面に凹線が認められる。外面には鉄釉を施釉する。245は丹波焼甕である。外面上半には沈線が巡り体部外面上位に不游環が認められる。17世紀後半代に比定される。246は丹波焼徳利の体部である。水挽ロクロ成形で器壁は比較的薄い。全面に鉄釉を施釉し、暗赤褐色に発色する。19世紀前半以降の製品と考えられる。247は大型の醤油瓶もしくは酒瓶と考えられる。底部に栓口が設けられている。近代以降の製品である。248は刷毛目唐津鉢である。内面から体部外面上半にかけて灰釉を施釉し、さらに刷毛状工具で白濁釉を波状に施釉する。17世紀後半～18世紀前半代の製品である。249は唐津焼鉢である。内面から体部外面の上位にかけて灰釉を施釉し、内面に鉄絵で文様を描く。体部外面下半から高台脇にかけては鉄釉を施釉する。17世紀後半～18世紀前半の製品である。250は施釉陶器鉢である。口縁部は型打ちで多角形に整形する。内外面とも白濁釉を施釉した後、口縁部に緑釉を施釉する。外面の高台脇以下は露胎である。

251は施釉陶器鉢である。内外面とも灰釉を施釉し外面に白釉を刷毛で波状に施釉する。口縁部に１ヶ所注口を貼り付ける。酒を徳利に分ける鉢と考えられる。252は小型の行平鍋である。把手と注口をもつ。内外面とも灰釉を施釉し、淡黄色に発色する。外面の体部下半以下は露胎で煤が附着する。253は施釉陶器鍋である。内面から口縁部外面まで白濁釉を施釉する。京焼系陶器である。254・255は施釉陶器灯明皿である。254は内面に芯を置く凸帯が巡る。いずれも内面には灰釉を施釉し明灰色に発色する。外面は露胎である。256は陶器の御神酒徳利である。外面は高台以外に酸化コバルトを施釉し、藍色に発色する。257･258は梅瓶形の御神酒徳利である。外面にはややくすんだ緑釉を施釉する。259は素焼きの御神酒徳利である。色調は灰白色を呈する。260はクローム青磁の小型碗である。外面は雑な手法で施文し、色調は淡黄緑色を呈する。近代以降の製品である。261は粗製の染付磁器小碗である。外面に雨降り文を施文する。19世紀前半代に比定される。262は染付磁器小碗である。外面に丸文を銅版転写で施文する。近代以降の製品である。263は小型の染付磁器端反碗である。外面に朝顔文を描き、口縁端部には口紅が認められる。19世紀前半代の瀬戸･美濃系の製品である。264は二重網目文を描く染付磁器碗である。18世紀代の肥前系の製品である。265～268は波佐見産のくらわんか手碗である。265･267･268は梅花文、266は紅葉文を描く、いずれも18世紀後半代に比定される。269は染付磁器端反碗である。外面に草花文、内面に渦巻文をそれぞれ描く。肥前系と考えられ19世紀前半代に比定される。270は外面に蛸唐草文と蓮弁文を施文する染付磁器碗である。肥前系で19世紀前半代に比定される。271は外面に梅花文を描く波佐見産のくらわんか手碗である。18世紀後半代の製品である。272は外面に格子目文と草花文を描く肥前系の広東碗である。19世紀前半代に比定される。273はやや小ぶりの広東碗である。外面には蝶と草花文を描く。274は外面に雨降り文を描く肥前系の染付磁器端反碗である。19世紀前半代の製品である。275は肥前系染付青磁筒形碗である。外面は青磁、口縁部内面には四方襷文を描く。18世紀代に比定される。276はよろけ文を描く湯呑碗である。肥前系と考えられる。277は外面に草花文を描く小型の碗蓋である。内面に太い界線が１条巡る。瀬戸系で19世紀前半以降の製品と考えられる。278は外面に蛸唐草文を描く梅瓶形の花瓶である。肥前系で18世紀後半代に比定される。279は波佐見産の粗製の染付磁器皿である。全面に施釉するが底部内面は蛇ノ目状に釉ハギされ、外面の高台脇以下は露胎である。18世紀前半代に比定される。280は肥前系のくらわんか手皿である。内面に瓔珞文、コンニャク印判の五弁花文、外面は唐草文を描く。18世紀後半代に比定される。281も同様のくらわんか手皿である。内面は荒磯文とコンニャク印判の五弁花文、外面は唐草文、底部外面には「大明年製」銘を描く。282は丸形の段重である。外面には蝙蝠文、草花文を描く。19世紀前半以降の製品である。283は染付磁器鉢である。底部内面に海浜風景図を描く。284は土製容器の蓋である。上面に糸切痕が認められる。285は施釉陶器小型の壺蓋である。全面に白濁釉を施釉した後、上面に緑釉を掛ける。京焼系である。286は丹波焼茶壺の肩部と考えられる。外面全面に灰釉が掛かる。287はインク瓶である。型作り成形で六角形に成形する。底部外面に「ゴコー」銘を刻む。288は筒形植木鉢の底部である。外面には灰釉が全面に掛かる。外面に箍状の凸帯が巡ることから桶を模倣した桶形容器と考えられる。289は土師器鍋である。口縁部外面に退化した断面三角形状の鍔をもつ。底部外面には煤が附着する。

包含層出土遺物

290は土師器皿である。手づくね成形で口縁部内外面は強いヨコナデ調整を施す。291は土製の五徳である。口縁部は拡張して外面に凹線が１条めぐる。焼成は比較的堅緻である。292は堺・明石産擂鉢で比較的小型のものである。口縁部は上下に拡張して縁帯を作り、外面に凹線が２条巡る。293は丹波焼

壺である。焼け歪みが著しいが体部は大きく内彎し口縁部は玉縁状に肥厚する。16世紀後半～17世紀初頭の製品と考えられる。294は施釉陶器の壺底部である。内外面に格子目状叩き目が残る。外面には鉄釉が施釉されている。17世紀初頭の叩き唐津の可能性が考えられる。295は備前焼Ｖ期の甕の口縁部である。16世紀代に比定される。296は無釉陶器火入れである。丹波焼と考えられる。297は丹波焼甕の口縁部片である。口縁端部を水平方向に折り曲げるもので、16世紀後半代の製品である。298は丹波焼甕の口縁部で17世紀前半代に比定される。299は丹波焼擂鉢である。内面にヘラ描きの擂目を施す。16世紀後半～17世紀初頭の製品である。300は堺・明石産擂鉢である。口縁部は上下に拡張して縁帯を形成し、外面は沈線が２条巡る。内面は櫛描きの擂目を密に施文する。301は丹波焼擂鉢である。口縁部は上下に拡張して縁帯を形成し内面は７条１単位の櫛描きの擂目を施文する。302は堺・明石産擂鉢である。口縁部は断面三角形状に肥厚し外面に凹線が２条巡る。内面には11条１単位の櫛描きの擂目を施す。色調はにぶい赤褐色を呈する。303は丹波焼甕の口縁部である。内外面とも赤土部を塗布する。304は丹波焼の蓋をもつ壺である。口縁部内面から外面全面に赤土部を塗布する。外面は胡麻状に灰被りが見られる。焼成は堅緻でにぶい赤褐色を呈する。305は台付の植木鉢である。全面に鉄釉を施釉し、内面は露胎である。近代以降の瀬戸・美濃系の製品と考えられる。306は唐津焼皿の底部である。高台を浅く削り出し、内面に灰釉と白濁釉を施釉する。外面の高台脇以下は露胎である。17世紀前半代の製品である。307も唐津焼皿である。内外面とも灰釉を施釉し、内面に砂目跡が３ヶ所見られる。17世紀前半代の製品である。308は天目茶碗である。口縁部は屈曲してほぼ直立する。鬼板を塗布した後全面に天目釉を施釉するが、外面の高台脇以下は未施釉である。17世紀代の瀬戸・美濃系天目と考えられる。309は灰釉陶器皿である。断面三角形状の比較的低い高台を貼り付ける。内外面とも灰釉を施釉し淡黄緑色に発色するが外面の高台脇以下は露胎である。底部内面に鉄釉で菊花文を施文する。310は丹波焼のいわゆる貧乏徳利である。外面は全面に鉄釉を施釉した後、白泥のイッチン掛けで「中通り□」「酒類」などの文字を描く。19世紀前半以降の製品と考えられる。311・312は口縁部にのみ鉄釉を施す火入れである。平底で体部は大きく屈曲する。丹波焼と考えられる。313は山笠形の壺蓋である。外面に白濁釉を施釉しさらに鉄釉で松葉文を描く。内面は露胎である。京焼系陶器で19世紀前半代に比定される。314は小型の灰釉陶器行平鍋である。内外面とも灰釉を施釉し淡黄緑色に発色するが、外面の体部下半以下は露胎で煤が附着する。京焼系陶器で19世紀前半以降の製品である。315は施釉陶器の醤油差しである。型作り成形で竹葉文を施文する。近代以降の淡路淡陶社製の製品と考えられる。316は龍泉窯系青磁碗の底部で面子に転用されている。317は水滴で外面の体部まで鉄釉を施釉し、底部外面は露胎である。318は全面に酸化コバルトを施釉する御神酒徳利である。319は全面に緑釉を施釉する尊形花瓶である。320は尊形花瓶で全面に鉄釉を施釉する。321は大型の染付青磁鉢である。外面は青磁釉を施釉し内面は線描きの草花文を描く。肥前系の製品と考えられる。322は蛇ノ目凹形高台をもつ染付青磁鉢の底部である。内面は染付で荒磯文、外面は青磁で、底部外面に文字文を描く。肥前系で18世紀代に比定される。323は白磁徳利である。形状は切頭円錐状を呈する。神棚に供える御神酒徳利と考えられる。324は龍泉窯系青磁碗の底部である。半截されているが面子として転用されたものであろう。325は粗製の染付磁器碗である。外面は草花文を描き、底部内面の釉は蛇ノ目状に釉ハギする。326～331はいずれも波佐見産のくらわんか手碗である。外面の文様は梅花文（326）、コンニャク印判の山水文（327）、丸文（328）、紅葉文（329）、鳥文（330）、草花文（331）などが見られる。時期は327が18世紀前半、326・328～331が18世紀中頃～後半代にそれぞれ比定される。332・334は瀬戸・美濃系の端反碗である。332は外面に丸

文、334は外面に紅葉文をそれぞれ描く、いずれも内面には太い界線が巡る。19世紀前半代に比定される。333は外面に草花文を描く肥前系染付磁器碗である。19世紀前半代に比定される。335は外面に簡易な草花文を描く端反碗である。19世紀前半以降の時期が考えられる。336は肥前系染付磁器碗で体部はほぼ直立する。外面には草花文、底部外面には崩れた「大明年製」銘が入る。18世紀後半代に比定される。337は肥前系染付磁器碗蓋である。外面には線描きの草花文が描かれる。19世紀前半代に比定される。338は肥前系染付磁器広東碗である。外面には簡易な草花文を描く。19世紀前半代の製品である。339は染付磁器鉢である。外面には銅版転写で「前赤壁賦」が書かれている。幕末から明治初期の製品であろう。340は赤絵磁器鉢である。外面に紅釉、緑釉、黒色釉で細かい草花文と寿字文が描かれる。近代以降の製品であろう。341は波佐見産の粗製の染付磁器皿である。底部内面は蛇ノ目状に釉ハギし、外面の高台脇以下は露胎である。18世紀前半代に比定される。342は瀬戸・美濃系の染付磁器小皿である。底部内面に鼎文をスタンプする。19世紀前半以降の製品である。343は瀬戸・美濃系染付磁器碗蓋である。外面には草花文が描かれる。19世紀前半代の製品である。344は肥前系染付磁器皿である。内面は墨弾きで草花文が、外面は唐草文が描かれる。17世紀後半代に比定される。345は肥前系染付磁器皿で口縁部は型打ちで波状に成形される。内面は細かい草花文と松竹梅文、外面は唐草文、高台裏は崩れた「大明成化年製」銘がそれぞれ描かれる。18世紀後半～19世紀前半代の製品と考えられる。346は染付磁器皿である。内面は松竹梅文が全面にプリントされ、口縁部には鉄釉が施される。近代以降の製品である。

第２節　瓦

軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・桟瓦・鬼瓦・烏衾瓦が出土している。原則すべていぶし瓦であるが、銀化の弱いものも含まれる。

軒丸瓦は８点図化しており、巴文に限られる。巴文には文様幅そのものの狭い広いや巴文の尾の長さ・巻き方やその幅の違いなど細かい変化がある。珠文の数も12～16と差があり、大きさも大小がある。Ｋ７は笵の木目が良く残っており、周縁は包み込んで製作している。巴文が大きく、珠文帯が狭い。Ｋ９・10は菊丸と呼称される小型の軒丸瓦でともに12葉の菊花文である。径や周縁の大きさは同じであるが、弁の太さがＫ９は太くK10は狭い。K11・12は軒平瓦で均整唐草文である。K13は軒桟瓦である。瓦当面は周縁だけで文様は施されていない。凸面には滑り止めにヘラで＃状に施している。K14は鬼瓦破片である。K15は烏衾瓦で瓦当文様は巴文である。幅広の13個の珠文帯を有し、中心文様は小さめで、巴の幅は狭く尾は長い。K16～18は丸瓦で長さに差がある。内面はナデで強く仕上げ、布痕が見られる。K19・20は伏間瓦や紐丸瓦と呼ばれるもので寺院建築など大型建物に使用されることが多い製品である。

第３節　木製品

南区調査の堀出土木製品

Ｗ１は連歯下駄である。台板は小判形、台頭部分が大きく欠損しており、前壺が中央にあるか左右に偏るかは詳らかではない。後歯は摩耗が激しい。Ｗ２は歯を作りださない所謂中刳りの下駄である。台板は小判形、前顎には傾斜を持たせており、右近下駄ともいわれるものである。中刳りは波状に凹凸を

削りだしている。Ｗ３は黒漆塗の箱物の蓋である。内外面に若干、黒漆が遺存する。両端は丸く設えられ面取りされていることから、隅丸方形の箱物に使用したと考えられ、一辺31.2cm、10寸の規格と考えられる。７ヶ所に木釘の跡が残るが、その間隔にはばらつきがある。また、内面には波状の沈線が彫られており内面の装飾に伴う造作と考えられる。Ｗ４は内外面に柿渋を塗布した箱物の部材である。Ｗ３同様箱物の蓋と考えられる。上下２辺には面取りがあり、釘孔が４ヶ所認められる。一辺28.0cm、９寸の規格と考えられる。他辺については両端を欠き、不明である。Ｗ５は桶の側板である。２枚あり、間を木釘によって接ぎ、箍によって締め付けた痕跡がある。内面には底板と接した痕跡がある。出土した側板は２枚と少なく、口径は不明であるが、タライであった可能性が高い。Ｗ６は桶・樽の底板である。２枚の板を鉄釘によって接いでいる。また長辺には２ヶ所釘孔が開く。Ｗ７は厚さ約１cmの板材の残欠である。両短辺は当初のままであるが、長辺側は欠失している。幅18.1cmを測る。

北－Ⅱ区調査の内堀SD01・井戸出土木製品

Ｗ８は内堀SD01内、下層から出土した朱漆椀である。口縁端部・底部を欠く。木地に黒漆を施し、更に内外面とも朱漆を施す。外面の文様は黒漆で描くが、剥落が激しく、詳細は不明である。口径は11cm前後と考えられる。Ｗ９は内堀SD01内、中層から出土した朱漆椀底部である。高台は細く、磨滅が激しい。高台裏に朱漆が遺存する。W10は内堀SD01内から出土した下駄である。台板は踵側が細くなる卵形、逆台形の断面形状をもつ。全長18cmを測り、歯は嵌め込み式となっている。台表に差し込み先が突き抜ける露卯下駄である。前壺は台頭中央にあるが、足指の圧痕から推して主に右足用として使用されている。また、足のサイズは16.5cm前後と考えられ、子供もしくは女性用であろう。W11は内堀SD01内、下層から出土した下駄である。台板は小判形、全長20.6cmを測り、連歯下駄である。歯は後歯がよくすり減っている。前壺は台頭中央にあるが、足指の圧痕から推して主に左足用として使用されている。台板のかかと部分に木の葉の陰刻がある。W12は内堀SD01内、下層から出土した容器（曲げ物もしくは桶）の底板である。W13はSE01、下層から出土した桶・樽の底板あるいは樽の鏡板である。２枚の板を４本の釘によって接いでいる。また長辺には２ヶ所の扁平な釘孔が開く。

北－Ⅲ区調査のSD2002出土木製品

W14は内堀SD2002内の肩部上層から出土した。結櫛のなかの筋立櫛である。鬢などの毛筋を整えるために使用されたものである。柄の先端・小櫛の両側が折損している。W15は内堀SD2002内、堀底近くから出土した下駄である。台板は隅丸方形、全長14.75cmを測り、連歯下駄である。前顎の磨滅が顕著である。また、歯は両歯ともよくすり減っているが若干前歯の磨滅が激しい。前壺は台頭中央にあり、どちらの足用かは不明である。左後壺には鉄釘が打ち込まれている。W16は内堀SD2002内、堀底近くから出土した下駄である。台板は小判形に近く、全長13.6cmを測り、歯を作りださない中刳りの下駄である。前顎には傾斜を持たせており、右近下駄ともいわれる。台表の後壺付近には微かに五弁の花びら状の変色があり、焼印もしくは朱描きの花びらが印されていた可能性があるが、詳細は不明である。子供もしくは女性用であろう。W17は内堀SD2002内、下層から出土した下駄である。台板は小判形に近く、逆台形の断面形状をもつ。全長11.9cmを測り、歯は嵌め込み式である。台表に差し込み先が突き抜けない陰卯下駄である。後壺間には後緒をすげる浅い溝が掘られている。前壺は台頭中央にあり、どちらの足用かは不明である。また、足のサイズから子供もしくは女性用と考えられる。W18は内堀SD2002内、下層から出土した木札状の木製品である。長方形の板材に円い頭の突起が付く。板材の両面には刃物痕があり、三角形に一部を削りとっている。隙間に差し込むなどの使用法が想起される。W19は内堀SD

2002内、堀底から出土した木札あるいはヘラ状木製品である。上端は面取りを行い、下端（先端）については片面をブレード状に削り出している。W20は内堀SD2002内、堀底から出土した宝珠状の加工がある円柱状の部材である。上部に溝状の繰り込みをいれ、一方は宝珠状に加工し、他方は台形にカットしている。側面には弧状の毛引き及び刃物による彫り込みが存在する。仏具などの部材の木端・失敗作の可能性が考えられる。W21は内堀SD2002内、堀底から出土した切匙である。先端を丸く削り出し刃部を作り出している。関の部分の角度は鈍くアールを描く。柄部の先端は一部欠損しているが、先端を面取りし矩形に削り出されている。刃部の先端には釘孔痕とみられる欠損部があり、曲物などの底あるいは蓋板を再加工したものと考えられる。W22は内堀SD2002内、堀底に堆積する洪水砂の上層から出土した。黒漆塗の箱物の蓋である。全体に黒漆が遺存する。両端は丸く設えられ、面取りされていることから、隅丸方形の箱物に使用したと考えられ、一辺26.7㎝、９寸の規格と考えられる。３ヶ所に木釘の跡が残るが、その間隔は8.5㎝である。また、内面には格子状の沈線が彫られており内面の装飾に伴う造作と考えられる。また、外面には蓋の取手もしくは脚を張り付けたと考えられる方形の痕跡が２ヶ所残る。W23は内堀SD2002内、堀底から出土した桶・樽の底板である。長辺には２ヶ所の扁平な釘孔が開く。表面には刃物痕が存在する。W24は内堀SD2002内、堀底に堆積する洪水砂の上層から出土した。桶・樽の底板である。縁部分は面取りを施す。２枚の板を鉄釘によって接いでおり、長辺には２ヶ所釘孔が開く。W25は内堀SD2002内、堀底から出土した桶･樽の底板あるいは鏡板である。長辺には４ヶ所の扁平な木釘（楔）が残る。W26は内堀SD2002内から出土した柄杓の柄である。全長66.3㎝を測る。先端から約14㎝前後に杓部を固定する孔と接合部分の変色が存在しており、身の直径は14㎝内外であったと考えられる。

北－Ⅲ区調査のSD2003出土木製品

W27はSD2003内から出土した半円形の板材である。縁よりに７ヶ所釘痕があり、内６ヶ所には釘が残る。革靴のミッドソール、あるいは草履の底に使用された可能性が考えられるが詳らかではない。W28はSD2003内から出土した杓文字である。身の内側が若干窪む。W29はSD2003内から出土した容器蓋の取手である。全体に黒漆塗である。緩やかな馬の鞍状の形態をしており、一端を欠失しているが全長21㎝前後であったと推測される。W30はSD2003内から出土した円形の白木の容器蓋である。表面中央には取手を付ける溝が穿たれており一部に木質が残る。また、裏面中央には浅い孔が開く。蓋を円形に加工したときに開いたと考えられる。W31はSD2003内から出土した曲物の底もしくは蓋板である。一部を欠失するが直径約5.2㎝を測る。表面には刃物痕跡が残る。W32はSD2003堀底から出土した黒漆塗の曲物容器である。身・蓋の判別は難しいが、側に比べ底板の径が大きく縁が外側に張り出していることから身としておく。合わせ口の容器であろう。径13.0mを測る。底部の縁付近は若干丸みを帯びる。

北－Ⅲ区調査のSD2004出土木製品

W33はSD2004から出土した木地椀である。高台は体部境際にあり小さく突出する。体部は直線的に立ち上がり口縁部へと至るが、内面では底部中央から丸く削り出されている。W34はSD2004から出土した。歯を作りださない中刳りの下駄である。台板は小判形に近く、全長13.6㎝を測る。前顎には傾斜を持たせており、中刳りは箱形に彫り込み、俵を３つ並べた形状に削り出した木履の形をとる。子供もしくは女性用であろう。W35は内堀SD2004内から出土した下駄である。台板は隅丸長方形、扁平な逆台形の断面形状をもつ。全長18.2㎝を測り、歯は台裏に溝を彫って差し込み、台表に差し込み先が突き抜けない陰卯下駄である。後壺間には後緒をすげる浅い溝が彫られている。前壺は台頭中央にあり、ど

ちらの足用かは不明である。前顎・後顎ともに傾斜を持たせている。また、足のサイズから、子供もしくは女性用と考えられる。

北－Ⅰ・Ⅲ区調査のSD1003・SD0001・各調査地点包含層出土木製品

W36はSD1003最上層から出土した朱塗椀である。地に黒漆を塗り、内面及び高台裏（高台の内側）を除き朱漆を塗る。高台は高く外側へ踏ん張る。高台裏の繰り込みは半ばまでで、底部は厚い。体部は直線的に立ち上がり、深い器形である。W37はSD0001より出土した紡績具－綛の部材である。一端を欠損しているがほぼ全体が残る。全長17.4cm、中央の孔の径は約1.9cmを測る。W38はSD0001より出土した円形の板である。径は上面で5.5cm、下面で5.0cmと下面でやや小さく、樽の栓と考えられる。W39は南区調査の包含層より出土した黒漆椀の底部である。全体に歪みが激しい。W40は南区調査の機械掘削時に出土した朱漆塗容器である。口縁端部を欠く。腹径約11.8cm、内径約10.8cmを測る。筒形の形態から向付と考えられる。黒漆を地に塗り、更に朱漆を重ねている。胴部に１条の沈線が巡り、黒漆が表れている。W41は南区調査の包含層より出土した白木の杓文字である。全体になだらかに作り出し、柄と身の境があいまいな製品である。柄の内側に『宮嶋』の焼印がある。W42は南区調査の包含層より出土した白木の小判型の曲げ物の底（蓋）板である。側面に３ヶ所の孔が開く。W43は南区調査の包含層より出土した桶・樽の底板あるいは樽の蓋板である。半分以上折損する。W44は南区調査の包含層より出土した桶・樽の底板あるいは樽の蓋板である。全体の半分以上折損している。３ヶ所の鉄釘が貫通している。W45は北－Ⅲ区調査のⅠ区西側溝より出土した棒状木製品である。一端は丸く加工されている。用途は不明である。W46は南区調査の包含層より出土した円盤状の木製品である。側面は面取りされている。側面と表面には朱色の彩色があり、表面には正三角形の位置に四角い釘孔が存在する。何等かの台座に使用されたと考えられる。表面には刃物痕が著しく、俎板あるいは工作台に再利用されたと考えられる。

第４節　金属器

銭貨を含めて20点の金属器を図化した。Ｍ１～７は鉄製品、Ｍ８～20は銅製品（真鍮含む）である。Ｍ１～４は茎状の製品である。釘もしくは鏃などの茎かと思われるが明確でない。Ｍ４は釣針状を呈するが、飾り金具やフックの一部と思われる。上面が接合面で折れており、断面菱形である。Ｍ５は環状になっているが、器種は明瞭でない。Ｍ６は板状で用途不明である。Ｍ７は断面方形で釘であろうか。長さ14.4cmを測る。Ｍ８は鋲で本体と接続する把手である。垂直に近く接合されていることから、外側に付くものであろう。動きにくい構造なので、中央に付けば、動かない把手となる。Ｍ９は飾り金具で引き出しなどのつまみ部である。金具で本体に付き回るようになっている。鋲で付けている。M10・11は同一形状の金具で１対もしくはそれ以上の対となるものであろう。頭部には小さい円孔があり、中央部は挟むように仕上げている。端部は接合面と思われる。M12は装飾品で、鳥を意識したものであろうか。横断面は半円であるが、縦断面は歪な形状になっていることから、単純な蓋とは思われない。何かの装飾部分と思われる。M13は簪である。２股に分かれ頂部は耳かき状になっている。本体は径1.5cmの円形で鴨と思われる鳥を両面に彫り出している。金属器ではないが、装飾品（アクセサリー）として鼈甲製の簪も掲載した。BE１で頭部は扇形になり格子状にしている。M14～16は煙管である。M14・16は吸口、M15は雁首である。M17～20は銭貨である。M17は北宋銭の治平元寶で、M18は寛永通寶

（新寛永）、M19は寛永通寳（新寛永）と思われるが、寳の字しか判読できない。M20は近世の二銭銅貨である。

第５節　石製品

Ｓ１・２は硯である。Ｓ１は一部を欠くが全体像は把握できる。陸部中央は凹んでいるが、強く使用した凹みは見られない。褐色で筋目の残る石材である。Ｓ２は海部などの上半を欠いている。剥離が多く見られ、裏面には線描きが残る。Ｓ３～５は砥石である。Ｓ３は裏面に滑り止めの凹凸を刻んだ箱に入れる砥石であろう。Ｓ４・５は通有の砥石で複数面を使用している。Ｓ６・７は六甲花崗岩製の一石五輪塔である。下半部の残欠で、Ｓ６は地輪と水輪の下半で、地輪の底面は残っていない。定置式であろうが、多少長くなるかもしれない。Ｓ７は地輪で底は平坦である。Ｓ８・９は石臼で、共に上臼である。Ｓ８は中央に円孔が穿たれ、５本の擦り目が残る。Ｓ９は８本の刻みが入れられ８分割されたものである。

第６節　塚口城跡以前の遺物

弥生土器・埴輪・須恵器・土師器が出土している。明確な遺構は工事中に損壊を受けた弥生時代後期の竪穴住居跡だけであった。周辺の調査では弥生時代以降の遺構・遺物が検出されていることから、長期にわたる複合遺跡であったと思われる。347は弥生後期後半の甕である。底部はユビ成形の上げ底である。タタキ成形からハケ整形を施す。348・349は円筒埴輪で縦方向のハケが施される。348は比較的しっかりした断面M字形のタガが付く。350～356は古墳時代の須恵器である。350は杯蓋で小さな反りがある。351は３方透孔の高杯脚部である。352は大型の提瓶で口縁部を欠いている。カキ目が認められる。他は甕口縁部である。357・358は土師器である。357は甕口縁部で外反している。358は杯蓋で低く屈曲している。

第７節　近代の煉瓦・タイル・碍子類・瓶類

本項では近代遺物のうち、陶磁器を除く煉瓦・タイル・碍子類・瓶類を報告する。なお遺物は兵庫県埋蔵文化財調査基準にもとづき、選択的に取り上げたものを報告する。

煉瓦

当遺跡で出土した煉瓦は建築用煉瓦（赤煉瓦）であり、SD0001から出土している。いずれも木製の型枠に人手により粘土素地を押し込めて作る「手抜き技法」を示す凹線が見られる。刻印はなく、生産者は不明であるが、これらの煉瓦は規格や製作技法等の特徴から明治時代末から昭和初期ごろに生産されたものと考えられる。

タイル

当遺跡において出土したタイルは建造物の内装に使用された「内装タイル」、建造物の各所に使用された「モザイクタイル」が出土した。出土箇所は別表のとおり、各地区の攪乱土等から出土した。これらのタイルについては兵庫県南あわじ市珉平焼（みんぺいやき）窯跡から出土したタイルを考古学手法を用いて形態や文様、素地、裏型等により編年されており、これらを参考に分類し報告する。

内装タイルには壁面に使用される平坦な平（ひら）タイルがあり、形状や規模により分類される。６吋（インチ）の正方形はＴ１～Ｔ３がある。これらは素地や厚さが酷似しているが接合しない。裏側に幅４㎜の凹凸があり、四隅は45度の角度で凹部があり、４辺は平行に配置される。中央の四角部分は欠損していることから社名等が不明である。同類のタイルは兵庫県赤穂市田淵氏邸の炭小屋に保管されている（註１）。Ｔ４は裏面にＴ１～Ｔ３同様の文様をもつが、厚さが薄く色調がより白色で異なる。Ｔ６・Ｔ７は裏面に四角に区切られた中に細線が入るもので、外周の５㎜幅の枠が一段薄くなる。裏型は珉平焼窯跡乾式タイル裏型編年のＨタイプに類似し、昭和10年代～戦後すぐにかけての時期と考えられる。Ｔ５は横方向の細線が配され、「MADE　□」の文字が陽刻される。Ｔ８・Ｔ９は裏面に幅４㎜の凹線があり、Ｔ８には隅部が一段薄い。T10・T11は外縁の５㎜幅が一段薄くなり、T11はホームベース形の凹部がある。T12は裏面凹部にⓉの刻印がある。T13は裏面に幅６㎜以上の凸帯が端にかけて薄くなる。珉平焼窯跡のB18タイプに類似することから長方形の可能性が高い。T14～T18は磁器質で裏面は細い凸部が特徴的であり、いずれも刻印はない。T18は３吋正方形で、上部のベース形の凹部に菱形の中にDK印がある。これは淡陶株式会社が昭和32年から54年にかけて生産したものである（註２）。T19は白無地の笠形タイルで、壁面タイルの腰壁上端に配置されるもの。裏面には２条の凸帯が両端部で幅が狭まり消える。中央に接着していたモルタルを除去した結果「MADE　IN　JAPAN　SAJI」があり、佐治タイル製であることが判明した。珉平焼窯跡タイル消長表（編年）を参考にすれば昭和初期～昭和（戦前）から昭和（戦後）以降にかけて生産されたものと考えられる。

碍子類

碍子類として碍子及び電気配線関係部品が８点ある。Ｉ１は直径18.4㎝の懸垂碍子で、外面に日本碍子㈱の社印と1956－９が記されている。1956年９月に日本碍子半田事業所で生産されたものであろう（註３）。Ｉ２・Ｉ３は茶台碍子であり、Ｉ３は中央の穴に鉄製ワイヤーが残存する。Ｉ４～Ｉ６はクリート碍子である。Ｉ４は両端が直角をなすもの、Ｉ５・Ｉ６はなだらかな曲面をもつものである。Ｉ７はコンセント部分の部品と考えられ、「新案特許三池式」の文字が陽刻されている。Ｉ８は丸形のコンセント部分と考えられる。両極接触部には銅製の接点があり、部品接合の木ネジも残る。

瓶類

瓶類は５点ある。Ｇ１は牛乳瓶等を密封するための機械栓である。東京都豊島区雑司が谷遺跡のＡ－１a類である。Ｇ２は青緑色ガラスの胴長瓶である。底部の周縁が幅８㎜を呈する。Ｇ３は無色透明の小瓶で、底部に「花」と「トンボ」の陽刻がある。Ｇ４は口が小さな壺で底部に「M」があり丸善株式会社が戦前に生産していたインク壺である。口部にはコルクと外面スクリュー部にはセロハンと考えられるものが残る。Ｇ５は口の広い乳白色を呈したクリーム瓶と考えられる。底部には「H」の細い陽刻がある。

塚口城跡における近代化

塚口城跡では近世以降の近代においては市街化が著しく、建築物に使用されるタイルや生活用品の瓶類、電力関係部品が出土した。特に阪急電車神戸線沿線であることから架線等に使用される日本碍子製の部品が採集されたことも当地の都市変遷の歴史を考える上で重要なものである。

（参考文献）

柿田富蔵ほか．1991.『日本のタイル工業史』株式会社INAX

深井明比古ほか．2005.『珉平焼窯跡』兵庫県教育委員会

深井明比古ほか．2011.『西宮神社社頭遺跡』兵庫県教育委員会

両角まりほか．2010.『雑司が谷Ⅲ』豊島区遺跡調査会

（註１）田淵新太良氏、赤穂市教育委員会に協力いただいた。田淵氏邸の同類タイルの裏面にはモルタルが付着しており、社名等は不明である。

（註２）淡陶株式会社の社内JIS規格集による

（註３）日本碍子㈱は京阪神急行電鉄や近畿日本鉄道等に供給していた。日本ネットワークサポート㈱（旧大阪陶業）三浦章弘・笹岡毅志・中後浩一郎・喜多守幸、㈱奈良サンテック西本雅人の諸氏にご教示を得た。

第５章　自然科学分析

第１節　塚口城跡の地形環境

青　木　哲　哉（立命館大学非常勤講師）

１．はじめに

人間は、自然環境に影響され、またそれを利用しながら活動してきた。中でも地形は、人間の生活舞台であり、活動の場となってきただけに、地形環境と人間生活との間には密接な関係が存在する。地形環境は、第四紀に変化を続け、現在に至っている。そのため、過去の人間生活を浮き彫りにするには、各時期の地形環境とその変化を明らかにすることが必要と考えられる。

人間生活の解明につながる地形環境は、数万年や数千年オーダーでの考察だけでなく、それより細かいオーダーで捉えなければならない。これには、考古遺跡の発掘調査区における地形・地質調査が有効な方法となる。調査区では、微地形と堆積物が直接観察され、堆積物については詳細な区分が可能である。このため、地形環境を細かいオーダーで復原でき、また堆積物に含まれる遺物を通してそれらの時期を明確にすることができる。同時に調査区では、人間活動の痕跡である遺構が検出されるため、過去の人間生活が知られる。そこでは、地形環境と人間生活の係わりについても考察できるのである。

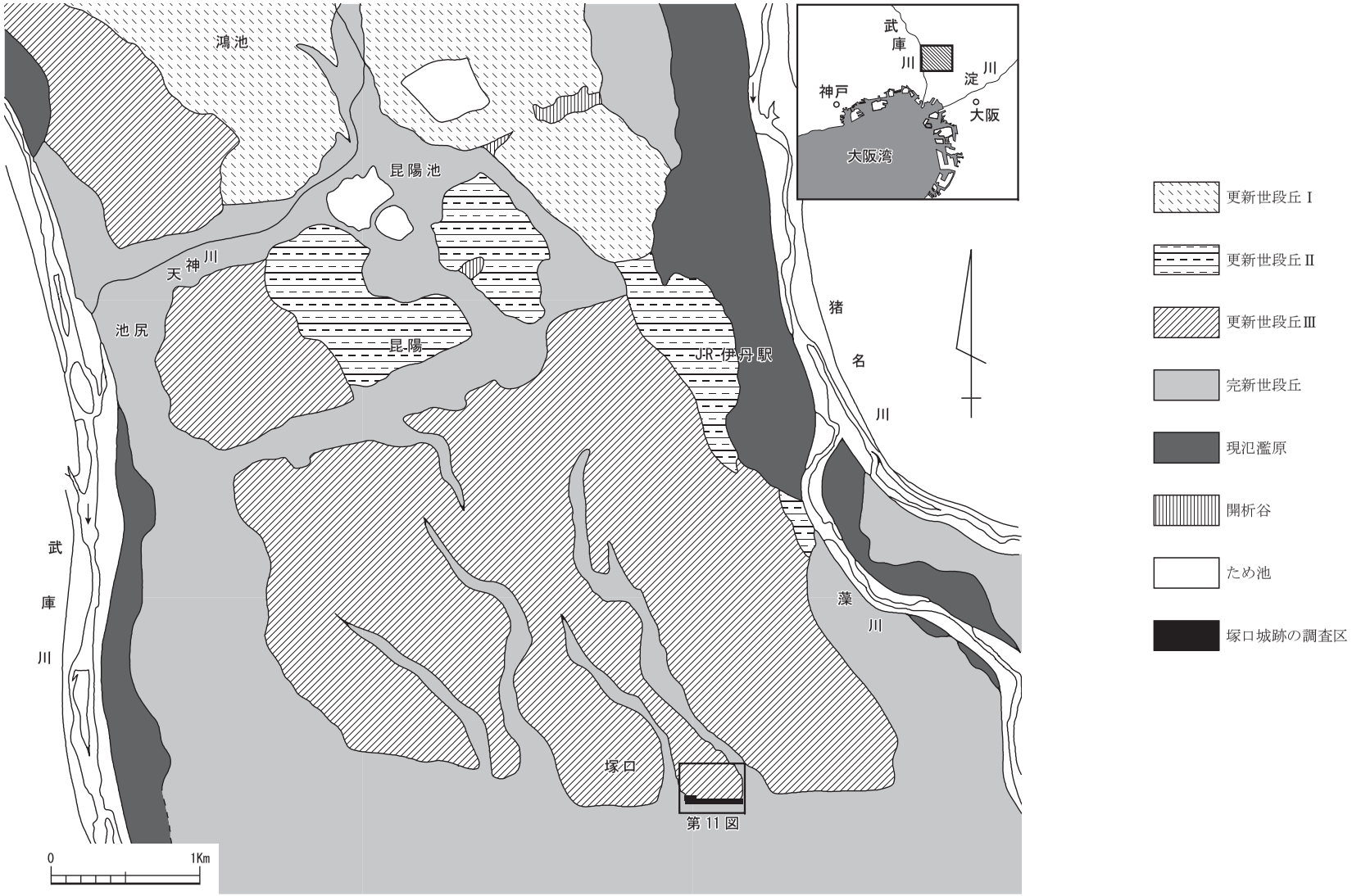
本稿では、塚口城跡における地形環境を明らかにしたい。調査では、塚口城跡付近の地形を分類するとともに、調査区（北－Ⅰ区・北－Ⅲ区）で堆積物の観察を実施した。地形分類では、まず１万分の１空中写真を判読することによって調査区周辺の地形面を区分し、ついで5,000分の１空中写真の判読と現地踏査にもとづいて調査区付近における微地形の分類を行った。一方、堆積物に関しては、遺構検出面より上位のものだけでなく、北－Ⅰ区において掘削したトレンチ断面と北－Ⅲ区で検出された堀の北側斜面で遺構検出面以深の堆積物を観察した。こうして得られた地形と堆積物の調査結果に、遺構の分布や時期などの発掘調査成果を加えて、調査区付近における地形環境の考察を行った。

２．調査区付近の地形分布

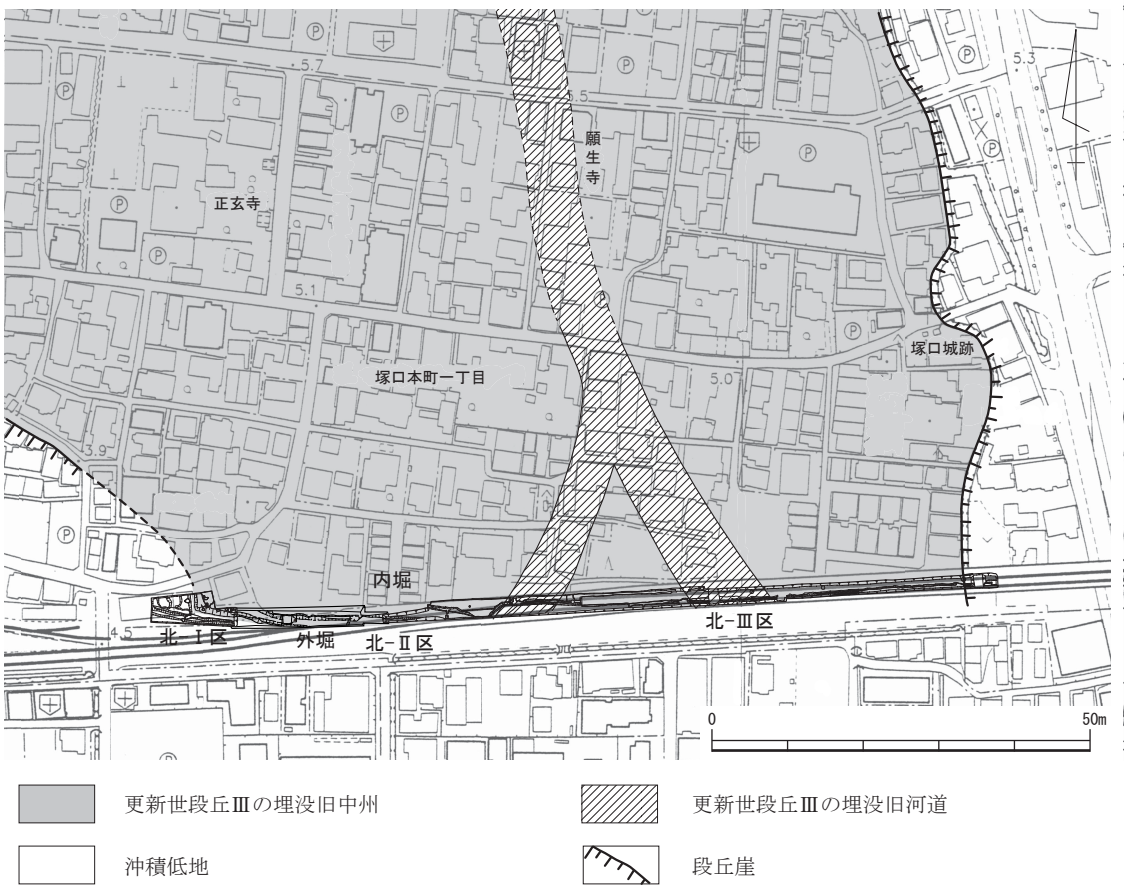
⑴　調査区周辺の地形概観

塚口城（前身は寺内町）跡は猪名川と武庫川によって形成された平野にみられる。この平野は、大阪湾に面し、北、東、および西は山地や丘陵に囲まれる。猪名川と武庫川は平野の東部および西部をおおむね南へ流れる。塚口城跡はこうした猪名川と武庫川に挟まれた平野の中央部に位置し、そこには更新世段丘と沖積低地が認められる（第10図）。ここでの更新世段丘は３面に、また沖積低地は完新世段丘と現氾濫原に分けられる。本稿では、３面の更新世段丘を高位のものから更新世段丘Ⅰ、ⅡおよびⅢと呼ぶ。

更新世段丘Ⅰは平野の北部にみられ、段丘面は更新世段丘Ⅱより約２m高い。更新世段丘Ⅱはその南側に断続的に分布し、更新世段丘Ⅲと比高およそ２mの段丘崖で接する。更新世段丘Ⅲは武庫川の東岸から更新世段丘Ⅱの南側にかけて広がる。この段丘には、幅500m以下の谷が小規模な河川によって刻まれている。段丘面は南南東へ比較的急傾斜しており、南方で沖積低地下に埋没する。猪名川や武庫川に沿う段丘崖は上流で２～３mの比高をもつものの、段丘の南端は沖積低地と傾斜変換線で接している。塚口城跡の調査区はこうした更新世段丘Ⅲの南端と沖積低地との境界付近に位置する。



第10図　調査区周辺の地形面区分図



第11図　調査区付近における微地形の分布

完新世段丘は猪名川と武庫川沿い、更新世段丘Ⅲの南側、および更新世段丘を刻む谷の中に認められる。この段丘は、現氾濫原と比高数十cm～１mの段丘崖で境され、猪名川東岸に位置する岩屋遺跡の調査によると13世紀以降に段丘化したと考えられている[1)]。現氾濫原は、最も低い地形面で、猪名川とその分流である藻川、ならびに武庫川沿いにみられる。これは最大およそ1.2kmの幅で細長く延びる。

⑵　調査区付近の地形について

調査区の北には更新世段丘Ⅲが分布し、南および東西には沖積低地が広がる（第11図）。更新世段丘Ⅲには北－Ⅰ区の北東部と北－Ⅲ区の全域が位置し、この段丘はそれらの南で沖積低地下に埋没する。北－Ⅲ区では、内堀が更新世段丘Ⅲの南端に沿ってほぼ東西に延びる。

調査区の東と西にみられる沖積低地は更新世段丘Ⅲを刻む谷の中に発達するものである。谷はほぼ北北西－南南東に延び、調査区付近では谷と更新世段丘Ⅲの境界に比高数十cmの段丘崖がみられる。沖積低地には北－Ⅰ区の西部と南部が位置し、更新世段丘Ⅲの段丘崖が北－Ⅰ区の北部から中央部にかけて認められる。北－Ⅰ区で検出された外堀は、北部から中央部で段丘崖下を南北に、また南部で更新世段丘Ⅲと沖積低地の境界を東南東へ延びる。これらの堀に囲まれた塚口城（寺内町）は、南に沖積低地が広がる更新世段丘Ⅲの南端に立地する。その東西は谷に挟まれ、推定されている東限と西限[2)]は更新世段丘Ⅲの段丘崖にほぼ沿う。

調査区付近の更新世段丘Ⅲでは、３つの埋没旧中州と２本の埋没旧河道が認められる。埋没旧中州は北－Ⅰ区北東部から北－Ⅲ区西端ならびに北－Ⅲ区の西部と東半部に分布する。そこでの地表は埋没旧

河道より20～30㎝高く、埋没旧中州上は比較的高燥な環境である。北－Ⅰ区北東部ではそこから中世後期の木棺墓が検出され、また塚口御坊（塚口城の前身である寺内町において中心的役割を担った寺院）と推定される正玄寺[3)]はこの微地形上に立地する。埋没旧河道は、埋没旧中州の間にみられ、北－Ⅲ区の西部と中央部を横切る。これらは、１ヶ所で確認される旧河道が北－Ⅲ区の30～40m北側で南南西および南東へ延びる２本に分岐したものである。

３．調査区における堆積物の特徴

⑴　更新世段丘Ⅲの堆積物について

北－Ⅰ区北東部と北－Ⅲ区では、更新世段丘Ⅲの堆積物が観察される（第12図～第14図）。それは下位から橙灰色や褐色を呈する砂礫（第12図上段の堆積物13・14、第12図下段の堆積物２～４、第13図の堆積物８・９、および第14図の堆積物８）、橙灰色のシルト質砂（第13図の堆積物７）、および橙灰色のシルト（第12図上段の堆積物12）に分けられ、その上位に近年の盛土がのる。

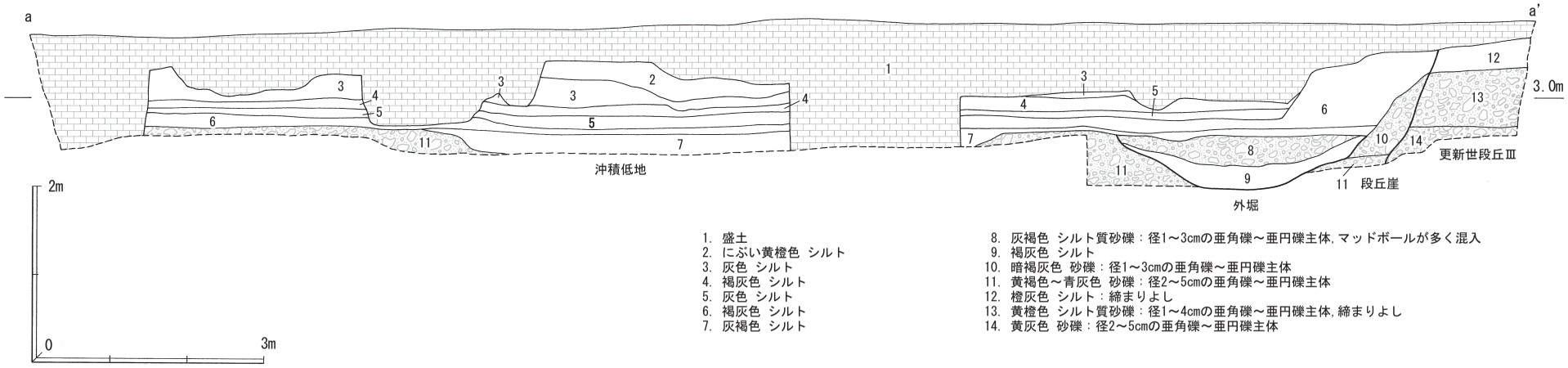
これらのうち、砂礫は扇状地堆積物である。この堆積物は、1.5m以上の厚さをもち、礫は径３～11㎝の比較的大きい亜角礫～亜円礫を主体とする。北－Ⅰ区北東部と北－Ⅲ区中央部では、この砂礫がさらに細分され、上部に小さい礫からなる砂礫（第12図上段の堆積物13）やシルト質砂礫（第12図下段の堆積物２と第13図の堆積物８）が薄くみられる。砂礫の上位に位置する橙灰色のシルト質砂とシルトは、それぞれ北－Ⅲ区中央部と北－Ⅰ区北東部で局地的に認められる。これらは扇状地を覆う洪水堆積物に相当する。

こうした堆積物には、北－Ⅲ区の西部と中央部で旧河道の堆積物が挟まれる。これらの旧河道は、砂礫（第13図の堆積物８・９、第14図の堆積物８）やシルト質砂（第13図の堆積物７）を切って分布し、31～36mの幅と1.25m以上の深さをもつ。旧河道には、砂礫と砂の互層（第13図の堆積物３～６、第14図の堆積物２～７）または砂質シルト（第13図の堆積物２）が堆積する。このような更新世段丘Ⅲの堆積物には、よく締まったものが多く認められる。また北－Ⅰ区の北部から中央部ではほぼ南北に延びる段丘崖が確認され、その比高は1.3m以上を有する。なお、調査区で観察される堆積物の上部は近年の人為的改変によって削り取られており、旧河道が切り込む層位も判然としない。

⑵　沖積層について

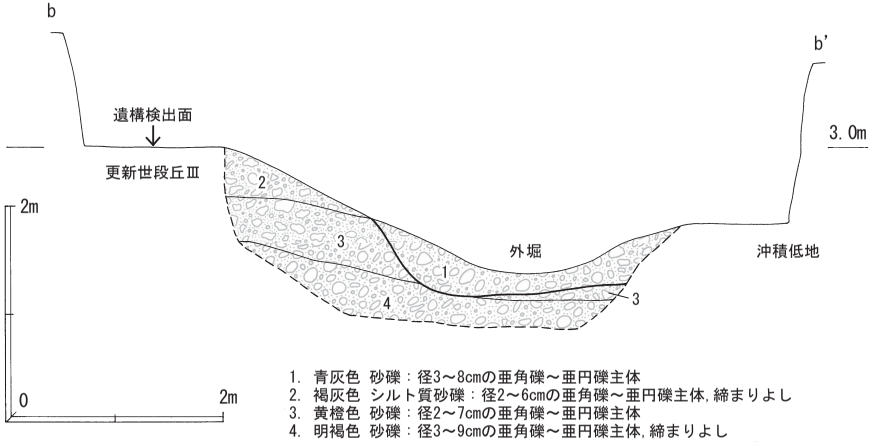
この堆積物は北－Ⅰ区の西部と南部で観察される（第12図）。北－Ⅰ区西部では、沖積層が更新世段丘Ⅲの段丘崖下に分布する。これは黄褐色～青灰色の砂礫（第12図上段の堆積物11）とその上位にみられる灰褐色～灰色のシルト（同図上段の堆積物２～７）に分けられる。砂礫は扇状地堆積物に相当し、礫は径２～５㎝の亜角礫～亜円礫を主体とする。砂礫の上面からは内堀と外堀が検出される。堀は主に洪水堆積物である砂礫やシルトなどで埋積されており、最上位に堀を人為的に埋め立てた盛土がみられる。堀の底には16世紀の遺物、また盛土には18世紀の遺物が混入する。その上位に位置するシルトは、おおむね６つに細分される。これらは、調査区西側の谷中を流れる小規模河川によってもたらされ、堆積後に耕土として利用されたものである。

一方、北－Ⅰ区南部では、沖積層が更新世段丘Ⅲの堆積物を被覆しており、更新世段丘Ⅲが浅く埋没している。そこでの沖積層は青灰色の砂礫（第12図下段の堆積物１）である。これは軟弱で、北－Ⅰ区西部に分布する黄褐色～青灰色の砂礫（同図上段の堆積物11）から連続するものにあたる。



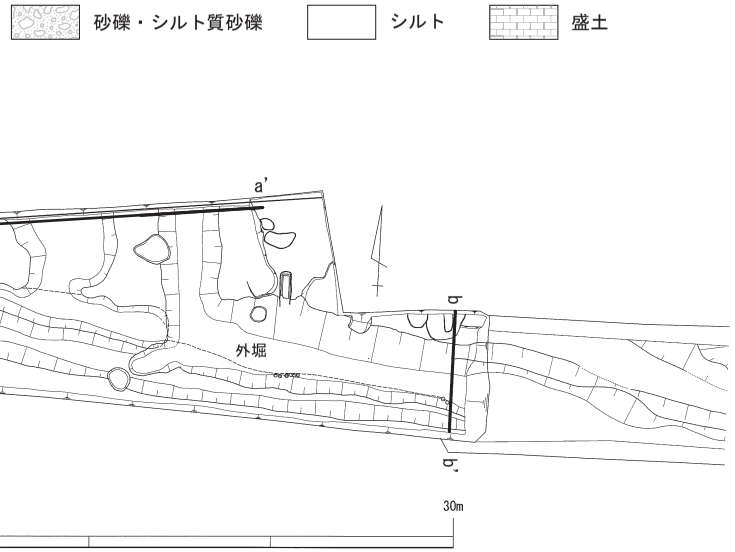
1. 盛土
2. にぶい黄橙色 シルト
3. 灰色 シルト
4. 褐灰色 シルト
5. 灰色 シルト
6. 褐灰色 シルト
7. 灰褐色 シルト
8. 灰褐色 シルト質砂礫：径1～3cmの亜角礫～亜円礫主体，マッドボールが多く混入
9. 褐灰色 シルト
10. 暗褐灰色 砂礫：径1～3cmの亜角礫～亜円礫主体
11. 黄褐色～青灰色 砂礫：径2～5cmの亜角礫～亜円礫主体
12. 橙灰色 シルト：締まりよし
13. 黄橙色 シルト質砂礫：径1～4cmの亜角礫～亜円礫主体，締まりよし
14. 黄灰色 砂礫：径2～5cmの亜角礫～亜円礫主体

a－a'地質断面図（北壁断面とたちわりトレンチ断面の合成図）

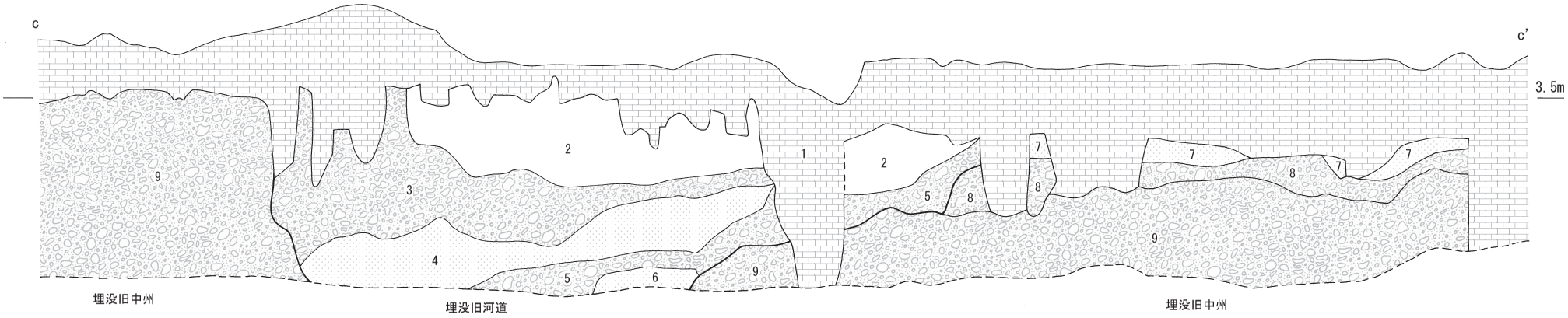


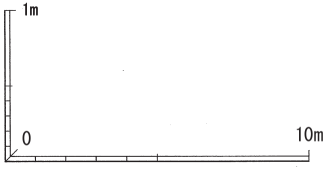
1. 青灰色 砂礫：径3～8cmの亜角礫～亜円礫主体
2. 褐灰色 シルト質砂礫：径2～6cmの亜角礫～亜円礫主体，締まりよし
3. 黄橙色 砂礫：径2～7cmの亜角礫～亜円礫主体
4. 明褐色 砂礫：径3～9cmの亜角礫～亜円礫主体，締まりよし

b－b'地質断面図（たちわりトレンチ断面図）



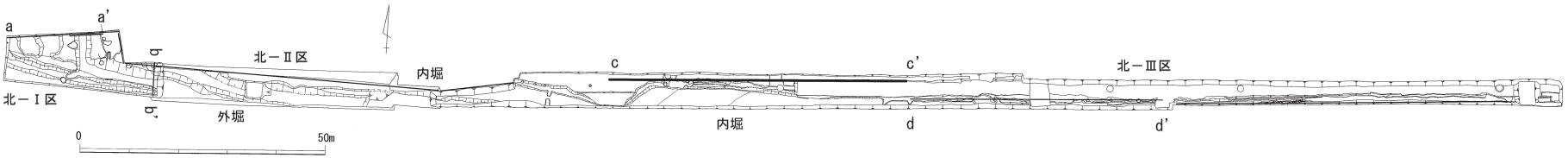
第12図　北－Ⅰ区のa－a'地質断面図とb－b'地質断面図



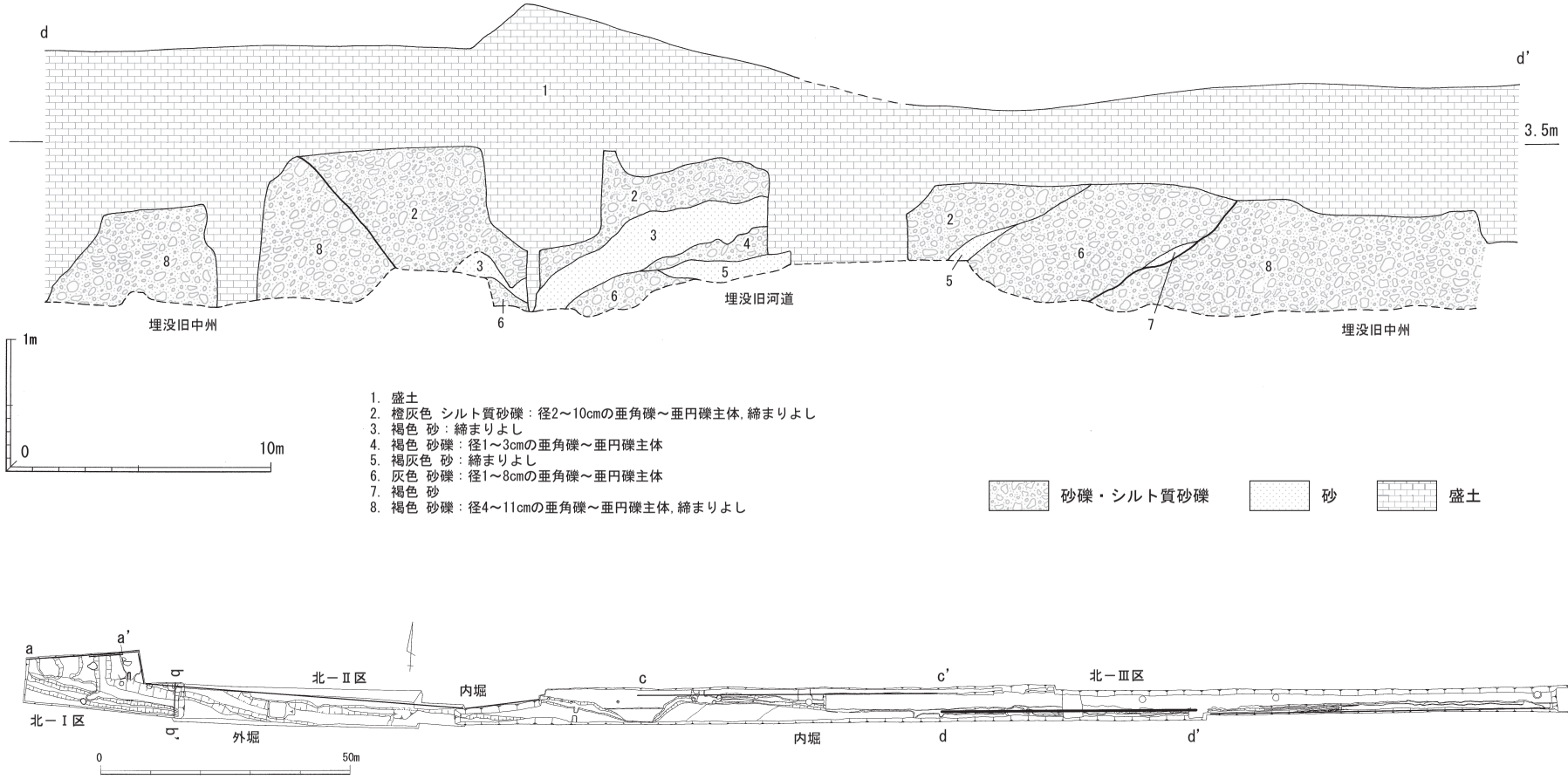


1. 盛土
2. 橙灰白色 砂質シルト：締まりよし
3. 橙灰色 シルト質砂礫：径1～4cmの亜角礫～亜円礫主体，締まりよし
4. 灰色 砂
5. 黄褐色 砂礫：径2cm以下の亜角礫～亜円礫主体
6. 灰色 砂
7. 橙灰色 シルト質砂：締まりよし
8. 橙灰色 砂礫：径1～3cmの亜角礫～亜円礫主体，締まりよし
9. 橙灰色 砂礫：径3～9cmの亜角礫～亜円礫主体，締まりよし

砂礫・シルト質砂礫　砂質シルト
砂・シルト質砂　盛土



第13図　北－Ⅲ区のc－c'地質断面図(北壁断面と内堀北斜面の合成図)



第14図　北－Ⅲ区のd-d'地質断面図（北壁断面と内堀北斜面の合成図）

４．調査区付近における地形環境の変遷

これまでに述べた事柄から、次のような地形環境の変遷が考察される。

〔ステージ１〕 調査区付近では、最終氷期に猪名川や武庫川によって砂礫が堆積した。このため、扇状地が発達し、中州が北－Ⅰ区北東部から北－Ⅲ区西端、および北－Ⅲ区の西部と東半部に形成された。

〔ステージ２〕 扇状地は、洪水によってシルト質砂やシルトに被覆され、埋没した。北－Ⅲ区の西部と中央部では、これらの堆積前後に河川が北から流下し、流路はその後砂礫や砂、砂質シルトによって埋積された。

〔ステージ３〕 最終氷期最盛期に向かう時期、海面は著しく低下し、猪名川、武庫川、およびその支流は下方侵食を行った。その結果、北－Ⅰ区西部と北－Ⅲ区の東側には小規模な谷が支流によって形成され、埋没した扇状地は段丘化した（更新世段丘Ⅲの形成）。

〔ステージ４〕 最終氷期最盛期以降、北－Ⅰ区西部の谷中には支流によって砂礫がもたらされた。北－Ⅰ区南部では、やがて谷が埋積され、砂礫が更新世段丘Ⅲの段丘面にも堆積するようになった。こうした砂礫の堆積によって北－Ⅰ区の西部から南部に小規模な扇状地がつくられた。

〔ステージ５〕 13世紀以降、猪名川と武庫川の下方侵食によって段丘化が起こり、完新世段丘が形成された。ただし、この現象は小規模な支流沿いではみられず、これまでと同様に北－Ⅰ区の西部と南部は支流の氾濫が及ぶ環境であった。一方、洪水の及ばない安定した環境下にあった更新世段丘Ⅲの南端では寺内町（後の塚口城）が形成され、16世紀には堀が掘削された。寺内町の南限につくられた内堀と外堀は、北－Ⅰ区の北部から中央部にみられる更新世段丘Ⅲの段丘崖や更新世段丘Ⅲと沖積低地を境する傾斜変換線に沿うものであった。

〔ステージ６〕 堀はその後砂礫やシルトによって埋積され、18世紀以降には北－Ⅰ区西部で数度の洪水によるシルトの堆積がみられた。これによって小規模な扇状地は埋没した。

５．おわりに

塚口城跡の調査区は更新世段丘Ⅲと沖積低地の境界付近にみられ、北－Ⅰ区の西部と南部は沖積低地に、また北－Ⅰ区北東部と北－Ⅲ区は更新世段丘Ⅲの南端に位置する。更新世段丘Ⅲは、埋没した扇状地が最終氷期最盛期に向かう海面低下期に段丘化したものである。その後沖積低地が発達した結果、調査区以南ではこの段丘が埋没した。他方、調査区以北の更新世段丘Ⅲは存続し、段丘面では段丘化の後洪水の及ばない安定した環境が続いていた。

寺内町（後の塚口城）はこうした環境下にある更新世段丘Ⅲの南端に地形を利用して形成された。その中心的存在とされる正玄寺は高燥な環境の埋没旧中州上に建てられ、寺内町の東限と西限は更新世段丘Ⅲの段丘崖にほぼ沿うものであった。南限を示す堀も同様で、北－Ⅰ区において南北ならびに東南東へ延びる外堀は、それぞれ更新世段丘Ⅲの段丘崖および更新世段丘Ⅲと沖積低地の境界に沿って掘削された。また、北－Ⅲ区の内堀はこの境界とほぼ平行して更新世段丘Ⅲの南端につくられた。以上のように、塚口城（寺内町）の立地や堀の掘削は地形環境と深く関連したと考えられる。

注

１） 拙稿「伊丹市付近における更新世末期以降の地形環境」，地域研究いたみ第40号，2011年

２） 藤田　実「中世真宗寺内町割の一類型－摂津国塚口寺内を中心に－」，大阪の歴史第55号，2000年

３） 前掲２）

第２節　塚口城跡出土木製品の樹種同定

黒沼保子（パレオ・ラボ）

1. はじめに

塚口城は尼崎市塚口本町に所在する、室町時代後期に築城された城郭である。遺跡から出土した木製品の樹種同定結果を報告する。

2. 試料と方法

試料は、塚口城跡の南側の堀から出土した、曲物や桶、漆器、板材などの木製品30点である。なお、№16の曲物は側板と底板、№24の下駄は台と歯、２ヶ所の同定を行った。

これらの試料から、剃刀を用いて３断面（横断面・接線断面・放射断面）の切片を採取し、ガムクロラールで封入してプレパラートを作製した。これを光学顕微鏡で観察・同定し、写真撮影を行った。

3. 結果

針葉樹はマツ属複維管束亜属、スギ、ヒノキの３分類群、広葉樹はハンノキ属、クリ、ブナ属、ケヤキ、モクレン属、ツバキ属、トチノキの７分類群、計10分類群が確認された。器種別の樹種構成を第１表、結果一覧を第２表に示す。

第１表　器種別の樹種構成

	紡績具	服飾具				食事具			容器									雑具					その他		
	紡績具	下駄（台）	下駄（歯）	靴のミッドソールか草履の底	付櫛子	杓文字	切匙	柄杓の柄	桶の底板	桶の板材	曲物（側板）	曲物（底板）	小判型曲物の底板	漆椀	漆椀の底	木地椀	箱物の蓋	箱物の蓋の底板	蓋	底板or台	底板	板材	不明	
分類群／器種																									
マツ属複維管束亜属																				1				1
スギ		2					1	1	3	1			1									1	1	11
ヒノキ	1	2				2					1	1					1	1	1		1	1		12
ハンノキ属				1																				1
クリ															1	1								2
ブナ属														1										1
ケヤキ		1																						1
モクレン属			1																					1
ツバキ属					1																			1
トチノキ														1										1
計	1	5	1	1	1	2	1	1	3	1	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	2	1	32

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、光学顕微鏡写真を図版に示す。

⑴　マツ属複維管束亜属　*Pinus* subgen. *Diploxylon*　**マツ科**　**第15図**　1a－1c（№4）

仮道管、垂直・水平樹脂道、放射組織、放射仮道管からなる針葉樹である。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部は広い。大型の樹脂道を薄壁のエピセリウム細胞が囲んでいる。分野壁孔は窓状で、

放射仮道管の水平壁は内側向きに鋸歯状に肥厚する。

マツ属複維管束亜属は暖帯から温帯下部に分布する常緑高木で、アカマツとクロマツがある。材は油気が多く、靱性は大である。

⑵　スギ　*Cryptomeria japonica* (L.f.) D.Don　スギ科　第15図　2a－2c(№12)、3c(№26)

仮道管、放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材から晩材への移行はやや急か穏やかで、晩材部の幅は広い。樹脂細胞は主に晩材部に接線状に配列する。分野壁孔は大型のスギ型で、１分野に通常２個並ぶ。

スギは暖帯・温帯下部に生育する常緑高木である。材は比較的軽軟で切削加工は容易、割裂性は大きい。

⑶　ヒノキ　*Chamaecyparis obtusa* (Siebold et Zucc.) Endl.　ヒノキ科　第15図　4a－4c(№18)、5c(№1)

仮道管、放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材から晩材への移行は緩やかである。樹脂細胞は主に晩材部に接線状に配列する。分野壁孔はトウヒ型～ヒノキ型で、１分野に２個存在する。

ヒノキは福島県以南の温帯から暖帯に分布する常緑高木である。材は加工容易で割裂性は大きく、耐朽性・耐湿性は著しく高く狂いが少ない。

⑷　ハンノキ属　*Alnus*　カバノキ科　第15図　6a－6c(№23)

小型の道管が放射方向に数個複合して分布する散孔材である。軸方向柔組織は短接線状もしくは散在状となる。道管の穿孔は10～20段程度の階段状である。放射組織は単列同性である。

ハンノキ属は主に温帯に分布する落葉高木または低木で、ハンノキ亜属とヤシャブシ亜属がある。材は一般に硬さ・重さ中庸である。

⑸　クリ　*Castanea crenata* Siebold et Zucc.　ブナ科　第15・16図　7a－7c(№15)

大型の道管が年輪のはじめに数列並び、晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、主に単列である。

クリは温帯下部から暖帯に分布する落葉高木で、材は耐朽性・耐湿性に優れ、保存性が高い。

⑹　ブナ属　*Fagus*　ブナ科　第16図　8a－8c(№28)

単独の道管が密に分布し、晩材部ではやや径を減ずる散孔材である。道管の穿孔は単一のものと階段状の２種類がある。放射組織はほぼ同性で、単列のもの、２～数列のもの、広放射組織の３種類がある。

ブナ属は温帯に分布する落葉高木で、ブナとイヌブナがある。材は堅硬・緻密・靱性があるが、保存性は低い。

⑺　ケヤキ　*Zelkova serrata* (Thunb.) Makino　ニレ科　第16図　9a－9c(№20)

大型の道管が年輪のはじめに１列に並び、晩材部では小道管が集団をなして接線状から斜線状に配列する環孔材である。道管の穿孔は単一で、小道管にはらせん肥厚がみられる。放射組織は３～５列幅程度の異性で、上下端の細胞に大きな結晶をもつ。

ケヤキは暖帯下部に分布する落葉高木で、肥沃地や渓畔によく生育する。材は、重硬だが加工はそれほど困難ではなく、保存性が高い。

⑻　モクレン属　*Magnolia*　モクレン科　第16図　10a－10c(№24－2)

小型の道管が単独もしくは３～４個複合して均等に分布する散孔材である。木繊維の壁は薄い。道管相互壁孔は対列～階段状、道管の穿孔は単一である。放射組織は１～２列幅で上下端の１～２細胞が直

立もしくは方形細胞である異性である。

モクレン属は温帯から暖帯上部に分布する常緑または落葉の低木・高木で、タイサンボク、ホオノキ、モクレン、コブシなどがある。材は一般にやや軽軟または中庸程度だが、緻密で狂いが少ない。

⑼　**ツバキ属**　*Camellia*　**ツバキ科**　**第16図**　11a－11c（№14）

小径でほぼ単独の道管が、晩材に向けてやや径を減じながら均等に分布する散孔材である。道管の穿孔は10段程度の階段状である。放射組織は方形もしくは直立細胞が上下に２～４細胞連なる異性で２列幅程度、多列部が単列部と同じ大きさである。

ツバキ属は温帯から暖帯に生育する常緑高木もしくは低木である。ヤブツバキ、サザンカ、チャノキなどがある。材は切削加工および割裂は困難であるが、強靱で耐朽性は大きく、重硬・緻密な有用材である。

⑽　**トチノキ**　*Aesculus turbinata* Blume　**トチノキ科**　**第16図**　12a－12c（№7）

やや小型の道管が単独もしくは数個放射方向に複合して均等に分布する散孔材である。道管の穿孔は単一で、道管内壁にはらせん肥厚がみられる。道管相互壁孔は交互状で大型である。放射組織は単列で、すべて平伏細胞で構成される同性である。接線断面において放射組織は層界状に配列する。

トチノキは温帯から暖帯に分布する落葉高木である。材は柔らかく緻密であるが、保存性は低い。

4. 考察

全体では針葉樹が多く、ヒノキが12点とスギが11点、マツ属複維管束亜属が１点認められた。広葉樹は７分類群が確認されたが、いずれも１～２点であった。

紡績具はヒノキであった。紡績具には、スギやヒノキなどの加工容易な針葉樹が多用される傾向があるが、カシ類やクヌギ類などブナ科の重硬な広葉樹の木材を用いることもある（島地・伊東，1988）。部位によって使用する樹種が異なる可能性が考えられる。

下駄の台には、スギ、ヒノキ、ケヤキが用いられている。スギ、ヒノキは木理直通な針葉樹で加工容易である。ケヤキも重硬で粘りがあるが、加工は困難ではない。№24のスギの下駄に付いていた歯はモクレン属であった。現在でもモクレン属のホオノキが、下駄の歯によく利用される（伊東ほか，2011）。モクレン属の材は軽軟で加工容易だが、狂いが少ない。靴のミッドソールか草履の底は、ハンノキ属であった。ハンノキ属の材は、比較的軽軟で加工は容易だが、肌目は緻密である。ハンノキ亜属は水湿地、ヤシャブシ亜属は荒れ地によく生育する樹木で、入手しやすい材である。

付櫛子はツバキ属であった。櫛にはツゲやイスノキ、ツバキ属といった非常に緻密で重厚な材が多く利用されるが、本試料もこの傾向に一致する。

食事具と容器の曲物・桶類、雑具、その他不明木製品はすべて針葉樹であった。杓文字、蓋、曲物、底板、箱物の蓋、板材はヒノキであった。スギは切匙、柄杓の柄、桶の底板と板材、小判型曲物の底板、板材、不明木製品で認められた。マツ属複維管束亜属は、底板or台で１点のみ利用されていた。針葉樹は全般に割裂性が大きく、製材しやすい。本遺跡でも、曲物や桶材、箱物など板材での利用が多くみられた。

容器の中でも漆器と木地椀には広葉樹が利用されていた。漆器にはクリとブナ属、トチノキ、木地椀にはクリが用いられていた。クリとブナ属は重硬で加工困難な材であり、クリは保存性も高いが、ブナ属は保存性が低く狂いも出やすい。トチノキは軽軟で加工容易な材である。いずれも漆器などの挽物に

良く用いられる樹種である。挽物の材は木地師によって主に山地で調達・加工されるため、トチノキやブナ属など冷温帯に生育する樹種も使用される。

本遺跡の木製品にはスギやヒノキの針葉樹を多用する傾向がみられたが、服飾具や漆器には広葉樹が利用されており、用途に応じて適宜樹種を選択利用していたと考えられる。

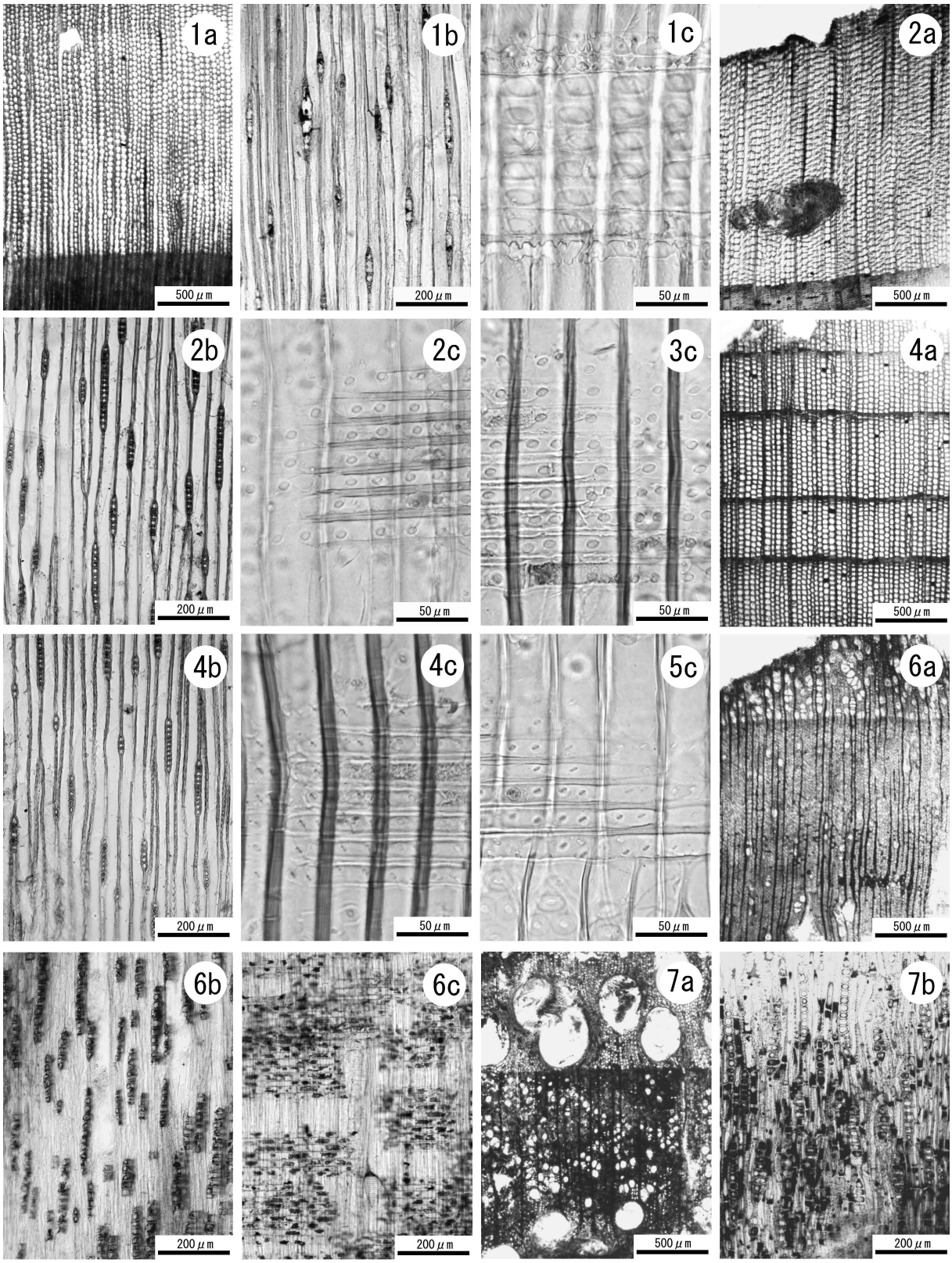
（引用文献）

伊東隆夫・佐野雄三・安部久・内海泰弘・山口和穂（2011）日本有用樹木誌．238p，海青社．

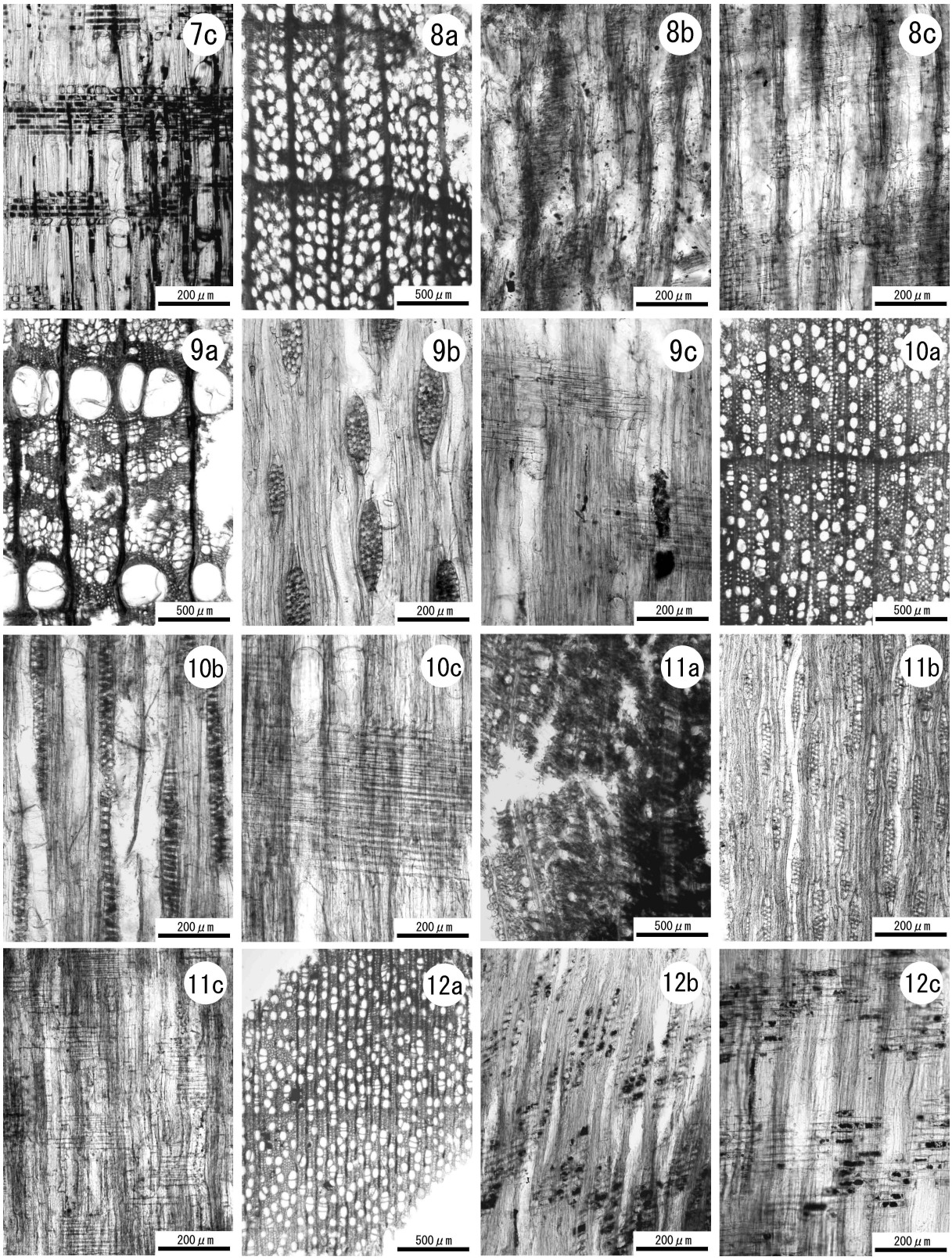
島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧．259p，雄山閣出版．

第２表　樹種同定結果

No.	報告番号	実測番号	調査番号	ネーミング番号	出土地区	器種	樹種
1	W16	W-2	2005002	59	北-Ⅲ-2	下駄	ヒノキ
2	W6	W-3	2001040	1	南-3	桶の底材	スギ
3	W3	W-4	2001040	4	南-3	箱物の蓋	ヒノキ
4	W46	W-5	2001040	6	南-3	円盤状の木製品	マツ属複維管束亜属
5	W44	W-6	2001040	8	南-3	桶・樽の底板か蓋板	スギ
6	W42	W-7	2001040	10	南-3	小判型曲物の底板	スギ
7	W40	W-8	2001040	13	南-3	漆椀	トチノキ
8	W43	W-9	2001040	16	南-3	桶・樽の底板か蓋板	スギ
9	W41	W-10	2001040	23	南-3	杓文字	ヒノキ
10	W2	W-11	2001040	24	南-3	下駄	ヒノキ
11	W5	W-12	2001040	26	南-3	桶の側版	スギ
12	W7	W-14	2001040	29	南-1	板材	スギ
13	W18	W-17	2005002	8	北-Ⅲ-2	木札状の木製品	スギ
14	W14	W-18	2005002	10	北-Ⅲ-2	筋立櫛	ツバキ属
15	W33	W-19	2005002	11	北-Ⅲ-1	木地椀	クリ
16-1	W32	W-20	2005002	14	北-Ⅲ-1	曲物	ヒノキ
16-2	W32	W-20	2005002	14	北-Ⅲ-1	曲物	ヒノキ
17	W29	W-21	2005002	22	北-Ⅲ-1	容器蓋の取手	ヒノキ
18	W23	W-22	2005002	25	北-Ⅲ-2	底板	ヒノキ
19	W34	W-24	2005002	30	北-Ⅲ-1	下駄	スギ
20	W35	W-25	2005002	31	北-Ⅲ-1	下駄	ケヤキ
21	W21	W-26	2005002	33	北-Ⅲ-2	切匙	スギ
22	W28	W-27	2005002	34	北-Ⅲ-1	杓文字	ヒノキ
23	W27	W-28	2005002	36	北-Ⅲ-1	半円形の板材	ハンノキ属
24-1	W17	W-29	2005002	39	北-Ⅲ-2	下駄	スギ
24-2	W17	W-29	2005002	39	北-Ⅲ-2	下駄	モクレン属
25	W37	W-30	2005002	51	北-Ⅲ-1	紡績具	ヒノキ
26	W26	W-31	2005002	54	北-Ⅲ-2	柄杓の柄	スギ
27	W22	W-32	2005002	63	北-Ⅲ-2	箱物の蓋	ヒノキ
28	W36	W-33	2005002	70	北-Ⅲ-1	漆椀	ブナ属
29	W4	W-34	2001040	3	南-3	箱物の部材	ヒノキ
30	W39	W-35	2001040	11	南-3	漆椀の底部	クリ



第15図　塚口城跡出土材の光学顕微鏡写真（１）
１ａ－１ｃ. マツ属複維管束亜属(No.４)、２ａ－２ｃ. スギ(No.12)、３ｃ. スギ(No.26)、
４ａ－４ｃ. ヒノキ(No.18)、５ｃ. ヒノキ(No.１)、６ａ－６ｃ. ハンノキ属(No.23)、
７ａ－７ｂ. クリ(No.15)
ａ：横断面、ｂ：接線断面、ｃ：放射断面



第16図　塚口城跡出土材の光学顕微鏡写真（２）
７c. クリ(No.15)、８a－８c. ブナ属(No.28)、９a－９c. ケヤキ(No.20)、
10a－10c. モクレン属(No.24－２)、11a－11c. ツバキ属(No.14)、12a－12c. トチノキ(No.７)
a：横断面、b：接線断面、c：放射断面

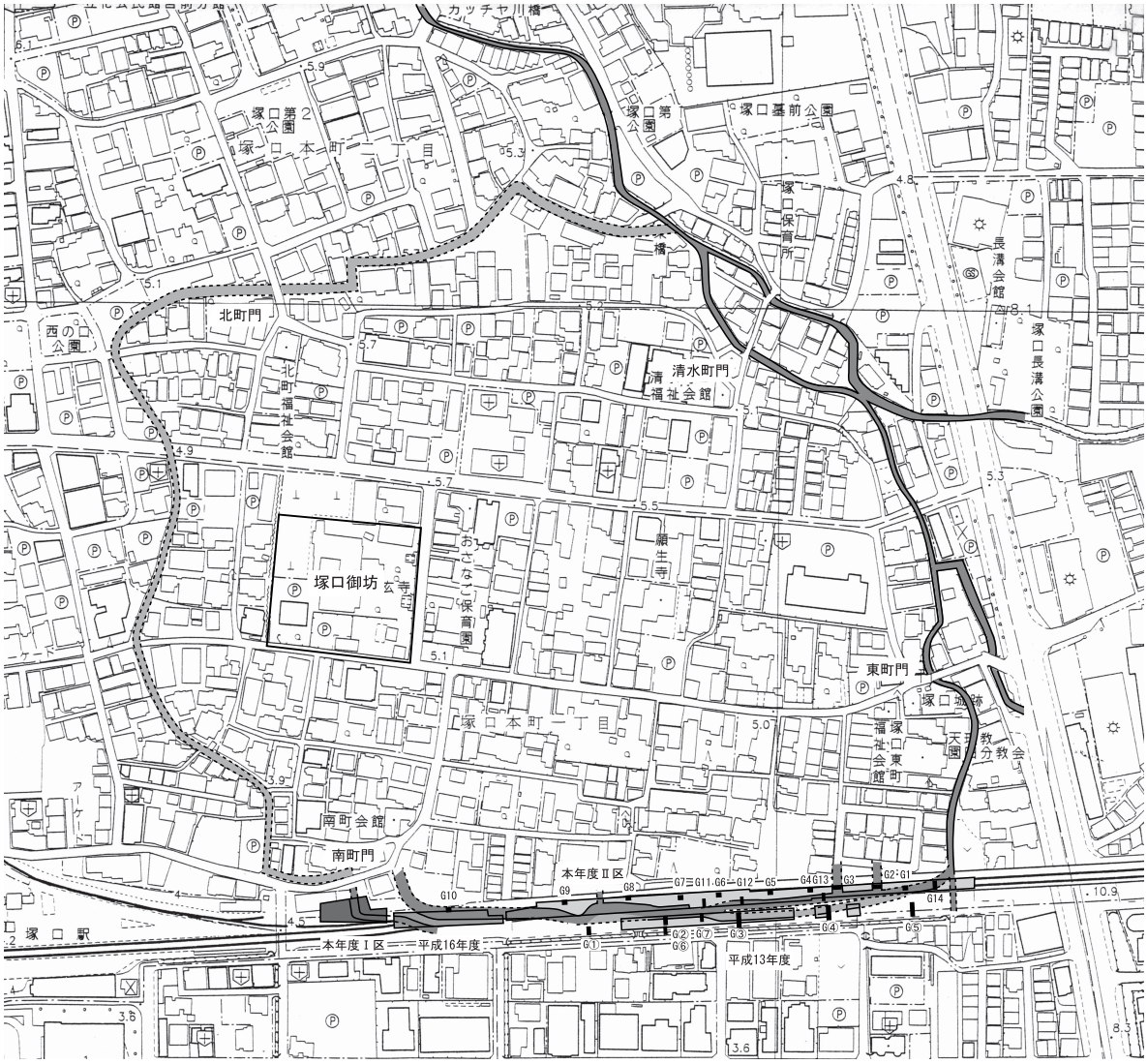
第６章　おわりに

都市計画道路尼崎伊丹線立体交差事業に伴う塚口城跡の発掘調査は、３回の確認調査と３ヵ年にわたる本発掘調査を行った。阪急電鉄の下り車線工事部分を平成13年度に、上り車線部分を平成16・17年度の２ヵ年に実施した。どちらも狭長な調査区で、面積も南区（下り車線部）が805㎡、北区（上り車線部）が合わせて2,083㎡と広いものではない。トレンチ調査に近い状況であった。そのため、堀の両肩を検出していない部分が大半である。片側肩部だけの調査が主であった。調査成果は塚口城跡の南側の堀を検出したことである。一部でなく多くの部分が二重堀であることが判明し、図上復元されていたものより南へ広がっている。規模はほぼ三間で記録どおりであった。南区では堀跡の中に橋状遺構が認められた。橋状遺構としたが、名のように橋の機能を有していたかは不明である。規模が小さく、橋にするには躊躇される。底部に設置されているので、堀としての性格を失ってからのものとは思われない。そうすると構造的に堀跡の底面を階段状とするものや簾子状にするなどの防御的な機能の可能性も想定できる遺構である。橋状遺構が複数あることは軍事上の可能性を示唆するものかもしれない。小規模な堀であることから意味をなす機能か自信はないが、可能性だけを上げておく。北区では堀以外に地業を行う際の盛土や焼土坑・溝などを検出している。堀は直線ではなく、地形に即していることが明らかになった。堀の東西コーナーを確認したことによって、東西290mと規模を明かにすることが出来た。幅は外堀が約５m、内堀が約5.5mを測る。

塚口城跡は塚口御坊を最初とし、それを拡大整備されたものである。城跡としては織豊期の短期間のものである。荒木村重が摂津に赴任してからのもので、織田信長に反旗を翻したことによって強固な城跡に変化していくものである。

出土遺物の中に前代の遺物も混じっている。確認調査終了時の不幸なことから本調査が出来なかったが弥生時代の竪穴住居跡も存在が確認されている。今回の調査でも古墳時代後期の埴輪・須恵器が出土している。周辺の尼崎市教育委員会の調査でも多くの埴輪が出土している。形象埴輪が多く出土しているのが特徴である。猪名野古墳群の南側に位置する次代の古墳群が埋まっているものと思われる。中世前期の墓も検出されている。阪神間では調査例の少ない中世墓の好例になるものと思われる。木棺墓であり、土師器皿を副葬している。少量ながら奈良時代の須恵器・土師器や室町時代の土器も出土していることから、弥生時代以降生活を継続する複合遺跡であることは明らかである。

今回図化した遺物は古相を示すものが比較的多いが、全体的には新しい遺物が多い。塚口城跡であることから、その時代もしくは近い時代を中心に選んだ結果による。中世末期の中国製陶磁器や織豊期の初期伊万里や唐津などがそれである。意図的に選択図化したものであり、総量の占める割合は低い。堀はその機能を失ってからも、集落の溝としての機能を保有していた。そのことから近世に至るまでの遺物が出土している。図化したものは全体の比率を示すものではないことを明記しておく。



第17図　調査区と塚口城周辺

別表１　土器一覧（１）

報告No.	図版	写真図版	種　別	器　種	調査番号	時　期	産 地 等	出土地区	遺　構	層　位	法　量(cm)		
											口径	器高	底径
1	19	4	土師器	羽釜	2001040			南-3	6G 堀		(20.35)	(8.25)	－
2	19	4	土製品	七輪の五徳	2001040			南-3	1～2G 堀		(25.8)	6.3	(20.9)
3	19	4	土師質	土管	2001040			南-3	堀	上層	23.6	31.4	18.1
4	19	4	施釉陶器	秉燭	2001040	19世紀前半	瀬戸・美濃系	南-3	1～2G 堀		3.6	3.4	4.2
5	19	4	施釉陶器	燭台	2001040			南-3			5.9	5.0	3.4
6	19	5	無釉陶器	蓋	2001040	19世紀前半以降		南-3			8.0	3.0	－
7	19	11	青磁	急須	2001040			南-3	8～10G	包含層	4.4	5.1	4.7
8	19	5	施釉陶器	燗徳利	2001040			南-3	8～10G	包含層	3.5	11.3	8.0
9	19	5	染付磁器	蕎麦猪口	2001040	19世紀前半	肥前系	南-3	8～10G	包含層	(8.5)	(5.5)	
10	19	6	染付磁器	碗	2001040	19世紀前半以降	瀬戸・美濃系	南-3	8～10G	包含層	8.0	4.3	3.5
11	19	6	染付磁器	皿	2001040	19世紀前半以降	肥前系	南-3	8～10G	包含層	13.6	3.5	7.1
12	19	5	染付磁器	碗	2001040		肥前系	南-3	4～5G 堀			3.0	6.6
13	19	5	土製品	十能	2004242			北-Ⅱ	SD03		長 (16.5)		
14	20	6	無釉陶器	甕	2004242	16世紀代	備前焼	北-Ⅱ	SD01			(7.8)	
15	20	6	無釉陶器	擂鉢	2004242	16世紀後半	丹波焼	北-Ⅱ	SD01		(40.0)	(8.7)	
16	20	6	無釉陶器	擂鉢	2004242	16世紀後半	丹波焼	北-Ⅱ	SD01			(7.2)	
17	20	6	無釉陶器	擂鉢	2004242		堺・明石産	北-Ⅱ	SD01	中層	(38.8)	8.6	－
18	20	5	施釉陶器	向付	2004242	17世紀初頭	唐津焼	北-Ⅱ	SD01		(13.9)	4.4	4.9
19	20	4	施釉陶器	皿	2004242	17世紀後半～18世紀前半	唐津焼	北-Ⅱ	SD01	上層	(11.7)	(3.45)	4.3
20	20	12	施釉陶器	椀	2004242		瀬戸・美濃系	北-Ⅱ	SD01		(9.05)	6.7	4.3
21	20	12	施釉陶器	椀	2004242			北-Ⅱ	SD01		(9.2)	6.7	4.2
22	20	4	青磁	鉢	2004242		龍泉窯系	北-Ⅱ	SD01		(21.5)	(4.5)	－
23	20	11	青磁	花瓶	2004242		肥前系	北-Ⅱ	SD01	中層	(8.6)	(4.4)	－
24	20	7	染付磁器	碗	2004242	18世紀後半	波佐見産	北-Ⅱ	SD01	下層	(9.7)	7.1	4.4
25	20	8	染付磁器	碗	2004242	19世紀前半	肥前系	北-Ⅱ	SD01	中層	(11.0)	5.5	6.1
26	20	8	染付磁器	碗	2004242	18世紀後半	波佐見産	北-Ⅱ	SD01	下層	(12.5)	6.3	5.1
27	20	7	染付磁器	碗	2004242	18世紀後半	波佐見産	北-Ⅱ	SD01		(9.6)	7.0	4.2
28	20	9	染付磁器	碗	2004242	18世紀前半	波佐見産	北-Ⅱ	SD01	中層	(9.4)	5.2	4.0
29	20	9	染付青磁	碗	2004242	18世紀代	波佐見産	北-Ⅱ	SD01	中層	(6.6)	6.1	(3.6)
30	20	6	染付磁器	碗	2004242	18世紀後半	波佐見産	北-Ⅱ	SD01	中層	(11.9)	(6.1)	(5.0)
31	20	9	染付磁器	碗	2004242	18世紀後半	波佐見産	北-Ⅱ	SD01	上層	10.0	5.9	4.0
32	20	9	染付磁器	碗	2004242	19世紀前半以降	肥前系	北-Ⅱ	SD01	中層	(11.0)	(6.8)	4.5
33	20	4	染付磁器	皿	2004242	17世紀前半	肥前系	北-Ⅱ	SD01			(3.1)	(4.5)
34	20	5	染付磁器	碗蓋	2004242	19世紀前半以降	肥前系	北-Ⅱ	SD01	黄褐色土（上層）	(9.9)	(2.7)	
35	21	9	土師器	焙烙	2004242	18世紀前半		北-Ⅱ	堀	上層	(22.5)	(5.7)	－
36	21	9	土師器	焙烙	2004242	18世紀前半		北-Ⅱ	堀、南北畦	下層	(25.65)	(6.7)	－
37	21	4	土師器	香炉	2004242			北-Ⅱ	堀	上層	(22.4)	10.3	(17.0)
38	21	19	土師器	御神酒徳利	2004242			北-Ⅱ	堀	中層	－	4.7	2.5
39	21	4	無釉陶器	火入れ	2004242		丹波焼	北-Ⅱ	堀	上層	(12.4)	5.1	(13.5)
40	21	7	無釉陶器	擂鉢	2004242		丹波焼	北-Ⅱ	堀	下層	－	6.5	－
41	21	7	無釉陶器	擂鉢	2004242			北-Ⅱ	堀	中層	－	(8.05)	－
42	21	7	無釉陶器	擂鉢	2004242	17世紀後半	丹波焼	北-Ⅱ	堀	中層	(35.4)	(4.8)	－
43	21	11	無釉陶器	鉢？	2004242			北-Ⅱ	堀	中層	－	5.2	9.1
44	21	7	施釉陶器	甕	2004242	16世紀代	備前焼	北-Ⅱ	堀	上層	(72.9)	(7.0)	－
45	21	7	無釉陶器	甕	2004242	15世紀代	備前焼	北-Ⅱ	堀	最下層	(51.2)	(7.2)	－
46	21	6	施釉陶器	皿	2004242	17世紀前半	唐津焼	北-Ⅱ	堀	中層	－	1.9	4.1
47	21	9	白磁	皿	2004242	17世紀後半～18世紀前半	波佐見産	北-Ⅱ	堀	中層	(13.45)	3.65	4.2
48	21	8	施釉陶器	香炉	2004242	近代以降		北-Ⅱ	堀、南北畦	上層	(9.4)	5.8	(4.8)
49	21	8	施釉陶器	椀	2004242			北-Ⅱ	堀	中層	(8.4)	(5.1)	(2.9)
50	21	5	施釉陶器	椀	2004242	17世紀初頭	唐津焼	北-Ⅱ	堀	上層	(9.2)	(6.8)	(4.0)
51	21	10	施釉陶器	椀	2004242	17世紀後半～18世紀前半	肥前系	北-Ⅱ	堀	下層	(9.6)	(6.6)	(5.2)
52	21	8	施釉陶器	椀	2004242	18世紀前半	唐津焼	北-Ⅱ	堀	中層	(11.0)	5.1	(4.25)
53	21	8	施釉陶器	椀	2004242	19世紀前半以降	瀬戸系	北-Ⅱ	堀	上層	(9.4)	(5.2)	4.3
54	21	9	施釉陶器	椀	2004242	17世紀後半～18世紀前半	肥前系	北-Ⅱ	堀	中層	(8.6)	(5.4)	4.8
55	21	5	施釉陶器	鍋蓋	2004242	19世紀前半	京焼系	北-Ⅱ	堀	上層	(17.2)	4.3	(4.8)
56	21	4	緑釉陶器	皿	2004242	近代以降		北-Ⅱ	堀	上層	19.5	3.8	12.4
57	21	6	土師器	灯明皿	2004242	19世紀前半		北-Ⅱ	堀	上層	(10.8)	1.8	5.1
58	22	11	白磁	紅皿	2004242	19世紀前半	肥前系	北-Ⅱ	堀	中層	4.5	1.15	1.6
59	22	11	白磁	紅皿	2004242	19世紀前半	肥前系	北-Ⅱ	堀	上層	4.8	1.4	0.9
60	22	11	白磁	紅皿	2004242	19世紀前半	肥前系	北-Ⅱ	堀	上層	6.3	1.7	2.6
61	22	12	白磁	皿	2004242	17世紀前半	肥前系	北-Ⅱ	堀	中層	－	(2.4)	4.8
62	22	7	染付磁器	皿	2004242	17世紀前半	肥前系	北-Ⅱ	堀、南北畦	下層	(12.8)	(3.4)	(3.8)
63	22	4	青磁	鉢	2004242	19世紀前半以降	三田焼	北-Ⅱ	堀	上層	－	(2.9)	(9.4)
64	22	4	染付磁器	皿	2004242	17世紀前半	肥前系	北-Ⅱ	堀	中層	－	(1.8)	(4.5)
65	22	13	染付磁器	火入れ	2004242	近代以降	京焼系	北-Ⅱ	堀	上層	(7.6)	4.5	(5.8)
66	22	7	染付磁器	碗	2004242	18世紀代	波佐見産	北-Ⅱ	堀	下層	9.1	(7.1)	(4.3)

別表１　土器一覧（２）

報告No.	図版	写真図版	種　別	器　種	調査番号	時　期	産 地 等	出土地区	遺　構	層　位	法　量(cm)		
											口径	器高	底径
67	22	14	染付磁器	皿	2004242	18世紀後半	波佐見産	北-Ⅱ	堀	中層	13.1	3.0	7.6
68	22	8	染付磁器	皿	2004242	18世紀後半	波佐見産	北-Ⅱ	堀	中層	(12.6)	(3.0)	(6.4)
69	22	9	染付磁器	湯呑碗	2004242	19世紀前半以降		北-Ⅱ	堀	上層	(6.5)	5.5	(3.5)
70	22	16	赤絵磁器	碗	2004242	近代以降		北-Ⅱ	堀	上層	(8.8)	(4.6)	3.6
71	22	19	染付磁器	碗	2004242	18世紀後半	波佐見産	北-Ⅱ	堀	上層	(10.0)	(5.7)	4.2
72	22	17	染付磁器	碗	2004242	19世紀前半	肥前系	北-Ⅱ	堀	上層	(10.5)	6.15	(3.95)
73	22	26	染付磁器	碗	2004242	18世紀前半	波佐見産	北-Ⅱ	堀	上層	(10.5)	5.35	4.1
74	22	15	染付磁器	杯	2004242	19世紀前半	肥前系	北-Ⅱ	堀	上層	(6.9)	5.6	3.4
75	22	18	染付磁器	碗	2004242	19世紀前半以降	瀬戸・美濃系	北-Ⅱ	堀	中層	9.76	4.8	(3.6)
76	22	16	染付磁器	碗	2004242			北-Ⅱ	堀	中層	(10.22)	5.75	(3.9)
77	22	19	染付磁器	碗	2004242	19世紀前半	肥前系	北-Ⅱ	堀	上層	(10.3)	5.45	(3.66)
78	22	22	染付磁器	猪口	2004242			北-Ⅱ	堀	中層	－	(5.25)	3.4
79	22	12	染付青磁	碗蓋	2004242	18世紀代	肥前系	北-Ⅱ	堀	上層	(10.05)	3.15	
80	22	20	染付磁器	碗	2004242			北-Ⅱ	堀	上層	－	1.7	6.5
81	22	7	土師器	焙烙	2005002			北-Ⅰ	SD0001・ｾｸｼｮﾝ3	濁灰茶混レキ土まで	(32.8)	(5.3)	－
82	22	23	染付磁器	油壺	2005002	18世紀代	波佐見産	北-Ⅰ	SD0001・ｾｸｼｮﾝ3	除去時	－	(2.6)	3.5
83	22	4	土師器	灯明皿	2005002	19世紀前半		北-Ⅰ	SD0001	層上半	5.6	1.0	4.2
84	22	25	施釉陶器	燭台	2005002	19世紀前半		北-Ⅰ	SD0001 中央		4.8	2.7	－
85	22	4	施釉陶器	小鉢	2005002	近代以降	珉平焼	北-Ⅰ	SD0001		(7.6)	(5.3)	(6.0)
86	22	8	無釉陶器	火入れ	2005002		丹波焼	北-Ⅰ	SD0001・ｾｸｼｮﾝ3	濁灰茶混レキ土まで	12.6	6.3	10.8
87	22	21	無釉陶器	甕	2005002	17世紀代	丹波焼	北-Ⅰ	SD0001・ｾｸｼｮﾝ3	SD0001部分	(39.2)	(17.0)	－
88	22	17	施釉陶器	壺	2005002			北-Ⅰ	SD0001		(14.1)	(10.3)	(13.6)
89	22	21	無釉陶器	甕	2005002		丹波焼	北-Ⅰ	SD0001		－	(12.7)	(15.2)
90	22	17	施釉陶器	徳利	2005002	近世末～近代	丹波焼	北-Ⅰ	SD0001 西半		－	(12.85)	8.2
91	23	16	染付磁器	碗	2005002	19世紀前半以降	瀬戸・美濃系	北-Ⅰ	SD0001		8.1	4.4	3.3
92	23	22	染付磁器	碗	2005002	18世紀代	肥前系	北-Ⅰ	SD0001	下層砂礫中	(10.3)	5.1	3.8
93	23	22	白磁	皿	2005002	19世紀前半以降	瀬戸・美濃系	北-Ⅰ	SD0001 西半		(9.2)	(2.5)	5.0
94	23	18	染付磁器	皿	2005002	17世紀前半	肥前系	北-Ⅰ	SD0001	層上半	(12.3)	(1.9)	5.3
95	23	10	染付青磁	皿	2005002	18世紀代	肥前系	北-Ⅰ	SD0001 西半		－	(3.9)	(8.2)
96	23	10	瓦質土器	焜炉	2005002	19世紀前半以降		北-Ⅰ	SD2001・SD0001	中・下層・層上半・中央	幅20.9	19.8	奥行20.1
97	23	10	瓦質土器	焜炉	2005002	19世紀前半以降		北-Ⅰ	SD0001ｶｸﾗﾝ(溝状)	層上半	幅20.6	19.7	奥行(15.5)
98	24	29	施釉陶器	天目茶碗	2005002			北-Ⅲ-1	SD0003内・ｾｸｼｮﾝ15		(11.0)	5.5	3.9
99	24	17	施釉陶器	壺	2005002	19世紀前半以降	京焼系	北-Ⅲ-1	SD0003内・ｾｸｼｮﾝ15		9.8	10.0	(8.2)
100	24	11	素焼	小皿	2005002			北-Ⅲ-1	SD0003 埋土中	石垣溝 埋土	(7.4)	(1.7)	(3.6)
101	24	20	染付磁器	輪花鉢	2005002	19世紀前半	肥前系	北-Ⅲ-1	SD0003上面まで	攪乱土主	22.5	8.3	11.8
102	24	12	土師器	焙烙	2005002			北-Ⅰ	SD1001	濁灰茶色シルトⅡ	(24.8)	(5.1)	－
103	24	12	土師器	焙烙	2005002			北-Ⅰ	SD1001埋土	濁灰茶色混礫土	(24.2)	(5.6)	－
104	24	12	土師器	焙烙	2005002			北-Ⅰ	SD1001埋土	濁灰茶色混礫土	(33.6)	(5.4)	－
105	24	12	土師器	焙烙	2005002			北-Ⅰ	SD1001埋土	濁灰茶色混礫土	(30.2)	(4.8)	－
106	24	12	土師器	焙烙	2005002			北-Ⅰ	SD1001 埋土		(40.6)	(3.8)	
107	24	12	無釉陶器	擂鉢	2005002	16世紀後半～17世紀前半	丹波焼	北-Ⅰ	SD1001 埋土	濁灰茶～焦茶混礫土	－	4.8	－
108	24	12	無釉陶器	擂鉢	2005002	16世紀後半～17世紀初頭	丹波焼	北-Ⅰ	SD1001 埋土	濁灰茶色混礫土	－	7.8	－
109	24	12	無釉陶器	擂鉢	2005002	18世紀代	丹波焼	北-Ⅰ	SD1001	濁茶色土	(38.8)	(5.8)	
110	24	12	無釉陶器	擂鉢	2005002	18世紀後半代	堺・明石産	北-Ⅰ	SD1001 埋土		(41.4)	(7.6)	－
111	24	12	無釉陶器	擂鉢	2005002	15世紀代	備前焼	北-Ⅰ	SD1001	濁灰茶色混礫土	－	(4.8)	－
112	24	11	無釉陶器	擂鉢	2005002	18世紀代	丹波焼	北-Ⅰ	SD1001 埋土	濁灰茶色混礫土	－	(7.2)	－
113	24	11	無釉陶器	擂鉢	2005002	18世紀代	丹波焼	北-Ⅰ	SD1001 埋土	濁灰茶色混礫土	(34.5)	14.45	(15.25)
114	24	25	無釉陶器	擂鉢	2005002	16世紀代	備前焼	北-Ⅰ	SD1001	濁灰茶色シルトⅡ	－	(4.7)	－
115	25	25	無釉陶器	擂鉢	2005002	18世紀代	堺・明石産	北-Ⅰ	SD1001 及び攪乱土	攪乱土 及び-Ⅰa	(45.6)	(7.7)	－
116	25	25	無釉陶器	擂鉢	2005002	18世紀代	堺・明石産	北-Ⅰ	SD1001 埋土		(37.8)	(5.4)	－
117	25	25	無釉陶器	擂鉢	2005002	18世紀代	堺・明石産	北-Ⅰ	SD1001 埋土		(38.0)	(6.3)	－
118	25	25	無釉陶器	擂鉢	2005002		堺・明石産	北-Ⅰ	SD1001 埋土	濁灰茶色混礫土	(30.0)	(11.8)	－
119	25	25	無釉陶器	擂鉢	2005002	18世紀代	堺・明石産	北-Ⅰ	SD1001 埋土		(36.0)	(10.0)	－
120	25	25	無釉陶器	甕	2005002		丹波焼	北-Ⅰ	SD1001埋土	濁灰茶色混礫土	(34.8)	(14.7)	－
121	25	25	無釉陶器	盤	2005002	16世紀後半	備前焼	北-Ⅰ	SD1001 上	濁灰茶～焦茶混礫土	(33.4)	(3.5)	－
122	25	25	無釉陶器	甕	2005002		丹波焼	北-Ⅰ	SD1001	濁灰茶色シルトⅡ	－	5.1	－
123	25	25	無釉陶器	甕	2005002	15世紀代	備前焼	北-Ⅰ	SD1001	埋土	－	8.7	－
124	25	22	無釉陶器	急須蓋	2005002	19世紀前半	備前焼	北-Ⅰ	SD1001 埋土	濁灰茶～焦茶混礫土	7.9	2.4	
125	25	22	無釉陶器	急須	2005002	19世紀前半	備前焼	北-Ⅰ	SD1001 埋土	濁灰茶～焦茶混礫土	－	(8.5)	8.4
126	25	17	無釉陶器	火入れ	2005002		丹波焼	北-Ⅰ	SD1001 埋土	濁灰茶色土 混礫土	(12.0)	5.65	(7.7)
127	25	26	無釉陶器	火入れ	2005002		丹波焼	北-Ⅰ	SD1001 埋土	濁灰茶色混礫土	(13.2)	(6.55)	
128	25	26	無釉陶器	甕か壺	2005002		丹波焼	北-Ⅰ	SD1001	濁灰茶色シルトⅡ	－	(8.25)	(12.1)
129	26	30	施釉陶器	灯明皿	2005002			北-Ⅰ	SD1001 及び攪乱土	攪乱土 及び-Ⅰa	6.0	1.2	2.4
130	26	25	施釉陶器	猪口	2005002			北-Ⅰ	SD1001 埋土		4.5	3.0	3.0
131	26	25	青磁	碗	2005002		龍泉窯系	北-Ⅰ	SD1001 埋土	濁灰茶～焦茶混礫土	－	(2.6)	5.3

別表１　土器一覧（３）

報告No.	図版	写真図版	種　別	器　種	調査番号	時　期	産 地 等	出土地区	遺　構	層　位	法　量(cm)		
											口径	器高	底径
132	26	12	施釉陶器	皿	2005002	16世紀後半	瀬戸・美濃系	北-Ⅰ	SD1001 肩埋土	茶色土中	－	(1.1)	(6.0)
133	26	17	施釉陶器	椀	2005002	17世紀前半	唐津焼	北-Ⅰ	SD1001 埋土	付近 抗列より北側		(3.4)	4.0
134	26	25	施釉陶器	椀	2005002	17世紀後半～18世紀前半	肥前系	北-Ⅰ	SD1001 埋土	濁灰茶色混礫土	－	3.1	5.15
135	26	7	施釉陶器	湯呑椀	2005002			北-Ⅰ	SD1001 上	濁灰茶～こげ茶混礫土	(8.4)	5.28	(2.72)
136	26	24	施釉陶器	椀	2005002	18世紀後半	波佐見産	北-Ⅰ	SD1001 埋土	濁灰茶色混礫土	(10.2)	(6.0)	(4.3)
137	26	23	施釉陶器	椀	2005002	17世紀後半～18世紀前半	肥前系	北-Ⅰ	SD1001 埋土	濁灰茶色混礫土	(9.16)	5.75	5.08
138	26	24	施釉陶器	椀	2005002	17世紀後半～18世紀前半	肥前系	北-Ⅰ	SD1001 埋土	濁灰茶色混礫土	(9.3)	6.0	5.4
139	26	8	施釉陶器	湯呑椀	2005002	近代	舞子焼	北-Ⅰ	SD1001 埋土	濁灰茶～焦茶混礫土	8.4	4.2	3.64
140	26	22	施釉陶器	椀	2005002	18世紀前半	唐津焼	北-Ⅰ	SD1001 東端	溝底	10.83	5.0	3.4
141	26	15	施釉陶器	椀	2005002	17世紀後半～18世紀前半	肥前系	北-Ⅰ	SD1001 埋土	濁灰茶色混礫土	(10.8)	(6.0)	6.0
142	26	12	施釉陶器	椀	2005002	18世紀前半	唐津焼	北-Ⅰ	SD1001 埋土	濁灰茶色混礫土	(10.95)	4.95	4.2
143	26	22	施釉陶器	椀	2005002		現川焼	北-Ⅰ	SD1001	濁灰茶色シルトⅡ	9.7	5.4	4.0
144	26	25	施釉陶器	鉢蓋	2005002			北-Ⅰ	SD1001 上	濁灰茶～焦茶混礫土	13.4	3.2	－
145	26	26	施釉陶器	壺蓋	2005002			北-Ⅰ	SD1001 埋土		10.4	2.5	13.4
146	26	26	施釉陶器	鉢蓋	2005002	近代以降		北-Ⅰ	SD1001 上	濁灰茶～こげ茶混礫土	(13.2)	4.0	
147	26	17	施釉陶器	水差	2005002		瀬戸・美濃系	北-Ⅰ	SD1001	濁灰茶色混礫土	－	(6.8)	7.0
148	26	26	施釉陶器	樽形花瓶	2005002	近世後半	瀬戸・美濃系	北-Ⅰ	SD1001 埋土		－	12.4	6.8
149	26	26	施釉陶器	御神酒徳利	2005002	近代以降		北-Ⅰ	SD1001 埋土	濁灰茶～焦茶混礫土	1.54	10.5	3.9
150	26	11	白磁	紅皿	2005002	19世紀前半	肥前系	北-Ⅰ	SD1001 上	濁灰茶～焦茶混礫土	4.6	1.4	1.2
151	26	9	青磁	鉢	2005002	19世紀前半	三田焼	北-Ⅰ	SD1001 埋土		－	2.2	5.2
152	26	27	青磁	鉢	2005002	近世後半～近代	京焼系	北-Ⅰ	SD1001 埋土	濁灰茶～焦茶混礫土	16.25	6.3	8.8
153	26	19	染付磁器	杯	2005002	18世紀後半	波佐見産	北-Ⅰ	SD1001 及び撹乱土	撹乱土 及び-Ⅰa	(6.8)	(3.25)	(2.8)
154	26	22	染付磁器	杯	2005002	19世紀前半	肥前系	北-Ⅰ	SD1001 埋土	濁灰茶色混礫土	(6.9)	(5.0)	3.2
155	26	28	染付磁器	碗	2005002	18世紀後半	波佐見産	北-Ⅰ	SD1001 埋土	濁灰茶色混礫土	(9.3)	5.4	(3.5)
156	26	15	染付磁器	碗	2005002	18世紀後半	波佐見産	北-Ⅰ	SD1001 埋土	濁灰茶色混礫土	(9.7)	5.6	(3.8)
157	26	19	染付磁器	碗	2005002	18世紀後半	波佐見産	北-Ⅰ	SD1001	濁灰茶色混礫土	(8.8)	(5.2)	(3.6)
158	26	27	染付磁器	碗	2005002	18世紀後半	波佐見産	北-Ⅰ	SD1001 上	濁灰茶～こげ茶混礫土	10.7	5.3	4.5
159	26	6	染付磁器	碗	2005002	18世紀後半	波佐見産	北-Ⅰ	SD1001 埋土	濁灰茶色混礫土	(9.9)	(5.8)	4.3
160	26	27	染付磁器	碗	2005002	18世紀後半	波佐見産	北-Ⅰ	SD1001 埋土	濁灰茶色土 混礫土	(9.6)	6.7	4.2
161	26	13	染付磁器	碗	2005002	18世紀後半	波佐見産	北-Ⅰ	SD1001 埋土	濁灰茶色混礫土	(10.0)	(5.1)	(3.6)
162	26	6	染付磁器	碗	2005002	18世紀後半	波佐見産	北-Ⅰ	SD1001 肩埋土		(10.1)	5.6	4.3
163	26	11	染付磁器	皿	2005002	18世紀前半	波佐見産	北-Ⅰ	SD1001 埋土	濁灰茶色混礫土	11.9	3.2	4.4
164	26	27	染付磁器	碗蓋	2005002	18世紀代	肥前系	北-Ⅰ	SD1001 埋土	濁灰茶色土 混礫土	10.1	3.3	3.8
165	26	29	染付磁器	油壺	2005002	18世紀代	肥前系	北-Ⅰ	SD1001	濁灰茶～焦茶混礫土	1.9	5.9	腹径7.5
166	26	19	色絵磁器	大皿	2005002	明治以降		北-Ⅰ	SD1001埋土・SD1001	濁灰茶～焦茶混レキ土	61.0	8.5	34.3
167	26	24	土製品	天神像	2005002	19世紀前半		北-Ⅰ	SD1001 埋土	濁灰茶色混礫土	長4.7	幅5.6	
168	26	24	土製品	馬形	2005002			北-Ⅰ	SD1001 埋土	濁灰茶色混礫土	長3.4	幅4.5	
169	27	12	土製品	七輪の五徳	2005002			北-Ⅰ	SD1001 埋土	濁灰茶～焦茶混礫土	(24.6)	(5.9)	(21.0)
170	27	12	瓦質土器	火鉢	2005002			北-Ⅰ	SD1001 埋土	付近 抗列より北側	－	(6.8)	(26.8)
171	27	11	施釉陶器	鉢	2005002	17世紀後半～18世紀前半	唐津焼	北-Ⅰ	SD1001埋土	濁灰茶色混礫土	(24.5)	(4.45)	－
172	27	28	施釉陶器	鉢	2005002	17世紀後半～18世紀前半	唐津焼	北-Ⅰ	SD1001 埋土	濁灰茶色混礫土	(25.5)	8.85	(9.8)
173	27	12	施釉陶器	皿	2005002	17世紀初頭～前半	唐津焼	北-Ⅰ	SD1001 肩埋土		(13.4)	(2.5)	(5.1)
174	27	12	施釉陶器	皿	2005002	17世紀初頭～前半	唐津焼	北-Ⅰ	SD1001 肩埋土	濁灰茶色混礫土	(12.6)	(3.2)	(4.9)
175	27	12	施釉陶器	皿	2005002	17世紀初頭～前半	唐津焼	北-Ⅰ	SD1001 セクション①	土器②	－	2.8	5.4
176	27	28	染付磁器	杯	2005002			北-Ⅰ	SD1001埋土	濁灰茶色混礫土	(5.6)	(3.7)	2.4
177	27	7	染付磁器	碗	2005002	18世紀後半	波佐見産	北-Ⅰ	SD1001埋土	濁灰茶色混礫土	10.0	5.4	4.1
178	27	12	染付磁器	碗	2005002	18世紀後半	波佐見産	北-Ⅰ	SD1001埋土	濁灰茶色混礫土	11.1	5.0	4.1
179	27	14	染付磁器	碗	2005002	18世紀後半	波佐見産	北-Ⅰ	SD1001	濁灰茶色混礫土	(9.6)	(5.6)	4.4
180	27	21	染付磁器	皿	2005002		肥前系	北-Ⅰ	SD1001 埋土	濁灰茶～焦茶混礫土	－	1.9	8.4
181	27	14	染付磁器	皿	2005002	18世紀前半	波佐見産	北-Ⅰ	SD1001 埋土	濁灰茶色混礫土	13.0	2.8	8.6
182	27	7	染付磁器	皿	2005002	17世紀前半	肥前系	北-Ⅰ	SD1001	濁茶色土	(12.8)	(2.7)	4.9
183	27	28	染付磁器	皿	2005002	18世紀後半	波佐見産	北-Ⅰ	SD1001 埋土	濁灰茶～焦茶混礫土	(13.7)	3.6	(8.0)
184	27	20	染付磁器	皿	2005002	17世紀前半	肥前系	北-Ⅰ	SD1001 肩埋土	濁灰茶色混礫土	－	1.8	5.4
185	27	24	土製品	人面	2005002			北-Ⅰ	SD1001 埋土	濁灰茶～焦茶混礫土	長3.15	幅1.5	厚0.65
186	27	24	瓦質	瓦塼	2005002			北-Ⅰ	SD1001 埋土	濁灰茶～焦茶混礫土	長2.4	幅3.2	厚1.3
187	27	24	瓦質	瓦塼	2005002			北-Ⅰ	SD1001 上	濁灰茶～こげ茶混礫土	長2.5	幅3.9	厚1.1
188	27	24	瓦質	瓦塼	2005002			北-Ⅰ	SD0001 中央		長17.0	幅3.0	厚1.7
189	27	18	土師器	焙烙	2005002			北-Ⅰ	SD1002E	灰茶色シルト	(42.1)	(5.9)	－
190	27	18	無釉陶器	甕	2005002	16世紀代	備前焼	北-Ⅰ	SD1003	最上層 濁灰茶色土Ⅱ	－	8.0	－
191	27	18	無釉陶器	甕	2005002	16世紀代	備前焼	北-Ⅰ	SD1003	最上層 濁灰茶色土Ⅱ	－	8.0	－

別表１　土器一覧（４）

報告No.	図版	写真図版	種　別	器　種	調査番号	時　期	産 地 等	出土地区	遺　構	層　位	法　量(cm)		
											口径	器高	底径
192	27	27	施釉陶器	皿	2005002	17世紀前半	唐津焼	北-Ⅰ	SD1003		(11.8)	(3.4)	(5.0)
193	27	18	無釉陶器	擂鉢	2005002	19世紀前半	堺・明石産	北-Ⅰ	SD1003		(32.2)	14.6	(16.3)
194	27	18	無釉陶器	擂鉢	2005002	16世紀後半～17世紀前半	丹波焼	北-Ⅰ	SD1003		－	7.3	－
195	28	15	施釉陶器	徳利	2005002	近代	丹波焼	北-Ⅰ	SX1001		3.1	26.3	8.5
196	28	29	無釉陶器	壺	2005002	16世紀後半	丹波焼	北-Ⅰ	SD2001a 西半	溝底近く 暗灰シルト	11.6	6.8	－
197	28	25	施釉陶器	壺	2005002	近代以降	丹波焼	北-Ⅰ	堀コーナー付近埋土		－	(8.1)	9.54
198	28	22	施釉陶器	壺	2005002			北-Ⅰ	堀コーナー付近埋土		－	(4.1)	5.35
199	28	18	無釉陶器	植木鉢	2005002		丹波焼	北-Ⅰ	SD2001	中・下層	(14.6)	(8.5)	(8.3)
200	28	18	無釉陶器	擂鉢	2005002	16世紀代	備前焼	北-Ⅰ	(SD1001東西堀)→SD2001b	濁灰茶色 細砂まじり	(29.6)	(3.9)	－
201	28	18	無釉陶器	擂鉢	2005002		丹波焼	北-Ⅰ	堀コーナー付近埋土		－	(4.75)	－
202	28	19	施釉陶器	菊皿	2005002	16世紀代	瀬戸・美濃系	北-Ⅰ	(SD1001東西堀)→SD2001b	濁灰茶色 細砂まじり	(8.5)	(2.3)	(4.8)
203	28	17	施釉陶器	鉢	2005002	近代	眠平焼	北-Ⅰ	SD2001-a 東半	攪乱土(大半土)含む	(10.5)	(6.2)	(9.5)
204	28	19	施釉陶器	皿	2005002	17世紀初頭	志野焼	北-Ⅰ	SD2001-c	溝底	－	(1.2)	(5.55)
205	28	6	染付磁器	皿	2005002	16世紀代	明青花	北-Ⅰ	SD2001-a	溝底	－	(1.75)	(5.2)
206	28	28	染付磁器	小皿	2005002			北-Ⅰ	SD2001-b	濁灰茶色土 Ⅰ対応	(11.58)	(3.35)	(6.9)
207	28	30	陶胎染付	椀	2005002			北-Ⅰ	SD2001-b	濁(暗)灰茶色シルト(粗・細砂あり)	(12.7)	(4.1)	－
208	28	18	土師器	焙烙	2005002			北-Ⅲ-2	SD2002埋土	濁灰茶色混レキ土まで	(32.2)	(6.1)	－
209	28	18	土師器	焙烙	2005002			北-Ⅲ-2	SD2002埋土	濁灰茶色混レキ土まで	(43.2)	(3.6)	－
210	28	10	土師器	焙烙	2005002			北-Ⅲ-2	SD2002	灰シルト主	31.0	(8.7)	－
211	28	18	土師器	鍋	2005002	16世紀代		北-Ⅲ-2	SD2002	濁レキまじり灰茶色シルト	(21.5)	(7.2)	－
212	29	18	無釉陶器	盤	2005002	16世紀代	備前焼	北-Ⅲ-2	SD2002まで	洪水砂～底	(29.0)	(4.3)	－
213	29	17	無釉陶器	壺蓋	2005002			北-Ⅲ-2	SD2002か？		3.0	1.6	－
214	29	18	瓦質土器	火鉢	2005002			北-Ⅲ-2	SD2002	灰シルト主	(38.0)	(10.1)	－
215	29	25	無釉陶器	甕	2005002	17世紀前半	丹波焼	北-Ⅲ-2	SD2002埋土	濁灰茶色混レキ土まで	(41.6)	(15.5)	
216	29	25	無釉陶器	甕	2005002	16世紀代	備前焼	北-Ⅲ-2	SD2002	濁灰茶色砂レキまじりシルト	－	(6.0)	－
217	29	25	無釉陶器	壺	2005002	16世紀代	丹波焼	北-Ⅲ-2	SD2002、洪水砂より上	濁灰茶 洪水砂以下含む	(12.9)	(7.9)	－
218	29	29	無釉陶器	小壺	2005002	16世紀代	備前焼	北-Ⅲ-2	SD2002	濁灰色土中砂洪水砂主	(9.6)	11.9	(11.6)
219	29	18	無釉陶器	火入れ	2005002		備前焼	北-Ⅲ-2	SD2002か？		13.3	8.3	15.2
220	29	22	無釉陶器	火入れ	2005002		備前焼	北-Ⅲ-2	SD2002埋土	濁灰茶色混レキ土まで	(12.3)	8.3	(13.15)
221	29	17	瓦質土器	火鉢	2005002			北-Ⅲ-2	SD2002	濁灰色土中砂 洪水砂主	(21.4)	(10.8)	(16.7)
222	29	17	無釉陶器	植木鉢	2005002		丹波焼	北-Ⅲ-2	SD2002、洪水砂より上	濁灰茶 洪水砂以下含む	(15.6)	10.1	7.85
223	29	25	施釉陶器	皿	2005002	17世紀前半	唐津焼	北-Ⅲ-2	SD2002	灰シルト	(11.5)	(3.1)	(4.2)
224	29	25	無釉陶器	擂鉢	2005002	14世紀代	備前焼	北-Ⅲ-2	SD2002	濁灰茶色土混レキ土	－	4.8	－
225	29	25	無釉陶器	擂鉢	2005002	16世紀後半	丹波焼	北-Ⅲ-2	SD2002	濁灰茶色土混レキ土	－	8.7	－
226	30	8	無釉陶器	擂鉢	2005002		堺産	北-Ⅲ-2	SD2002	灰シルト主	(39.6)	15.1	(17.4)
227	30	17	無釉陶器	擂鉢	2005002		堺・明石産	北-Ⅲ-2	SD2002	灰シルト主	(36.6)	(12.7)	－
228	30	29	無釉陶器	擂鉢	2005002		明石産	北-Ⅲ-2	SD2002埋土・SD2002	濁灰茶色混レキ土まで・濁灰茶色土混レキ土灰シルト・灰色シルト及び上層のフショク土	36.5	13.5	(17.5)
229	30	24	無釉陶器	擂鉢	2005002		明石産	北-Ⅲ-2	SD2002	濁灰茶色土混レキ土	(35.4)	14.0	(15.8)
230	31	19	無釉陶器	擂鉢	2005002		堺・明石産	北-Ⅲ-2	SD2002埋土	濁灰茶色混レキ土まで	(38.8)	(7.8)	－
231	31	15	無釉陶器	擂鉢	2005002	16世紀代	備前焼	北-Ⅲ-2	SD2002	濁灰茶色砂レキまじりシルト	(29.6)	(7.3)	－
232	31	15	無釉陶器	擂鉢	2005002	16世紀代	備前焼	北-Ⅲ-2	SD2002？溝底まで	濁灰茶色土、細砂まじり	－	(3.8)	－
233	31	19	無釉陶器	擂鉢	2005002	18世紀後半	丹波焼	北-Ⅲ-2	SD2002埋土	濁灰茶色混レキ土まで	(39.6)	(8.8)	－
234	31	19	無釉陶器	擂鉢	2005002	18世紀後半	丹波焼	北-Ⅲ-2	SD2002 埋土	鉄分 集積褐灰色土主	(32.4)	11.8	－
235	31	24	無釉陶器	擂鉢	2005002	近代以降	丹波焼	北-Ⅲ-2	攪乱土主 SD2002		17.3	7.4	9.2
236	31	30	施釉陶器	天目茶碗	2005002	17世紀代	瀬戸・美濃系	北-Ⅲ-2	SD2002	灰シルト主	(12.2)	6.25	4.4
237	31	25	施釉陶器	椀	2005002		美濃系	北-Ⅲ-2	SD2002	近世以降の攪乱土主	(9.6)	6.8	(4.2)
238	31	10	白磁	皿	2005002	16世紀後半	華南産	北-Ⅲ-2	SD2002まで	濁灰茶色レキまじりシルト	(11.9)	3.0	6.5
239	31	23	無釉陶器	壺蓋	2005002			北-Ⅲ-2	SD2002	洪水砂層中	7.0	2.1	－
240	31	26	施釉陶器	壺蓋	2005002			北-Ⅲ-2	SD2002	洪水砂より上	8.25	3.0	
241	31	10	施釉陶器	壺蓋	2005002			北-Ⅲ-2	SD2002まで	濁灰茶色砂まじりシルト含む	(7.2)	3.9	－
242	31	25	施釉陶器	落とし蓋	2005002			北-Ⅲ-2	SD2002	洪水砂より上	4.3	2.9	
243	31	28	無釉陶器	植木鉢	2005002	19世紀前半以降	丹波焼	北-Ⅲ-2	SD2002	濁灰茶色細砂まじりシルト	(44.1)	(29.8)	－
244	32	12	施釉陶器	甕	2005002			北-Ⅲ-2	SD2002	灰シルト主	(21.5)	(35.0)	(14.8)
245	32	17	施釉陶器	甕	2005002	17世紀後半	丹波焼	北-Ⅲ-2	SD2002 上層		(25.8)	(19.8)	－
246	32	17	施釉陶器	徳利	2005002	19世紀前半以降	丹波焼	北-Ⅲ-2	SD2002	洪水砂より上	(14.1)	(9.7)	9.9
247	32	17	施釉陶器	大型瓶	2005002	近代以降		北-Ⅲ-2	SD2002	洪水砂より上	－	(24.45)	12.8
248	32	17	施釉陶器	鉢	2005002	17世紀後半～18世紀前半	唐津焼	北-Ⅲ-2	SD2002	灰シルト主	(19.8)	7.85	(7.08)
249	32	13	施釉陶器	鉢	2005002	17世紀後半～18世紀前半	唐津焼	北-Ⅲ-2	SD2002	鉄分まじり褐灰シルト	(23.8)	8.23	(9.25)

別表１　土器一覧（５）

報告No.	図版	写真図版	種　別	器　種	調査番号	時　期	産 地 等	出土地区	遺　構	層　位	法　量(cm)		
											口径	器高	底径
250	32	17	施釉陶器	鉢	2005002			北-Ⅲ-2	SD2002	灰シルト	(18.3)	10.45	(7.0)
251	32	25	施釉陶器	鉢	2005002			北-Ⅲ-2	SD2002 上層		(21.3)	(8.3)	－
252	32	18	施釉陶器	行平鍋	2005002			北-Ⅲ-2	SD2002、洪水砂より上	濁灰茶 洪水砂以下含む	(11.9)	(6.4)	－
253	32	12	施釉陶器	鍋	2005002		京焼系	北-Ⅲ-2	SD2002、洪水砂より上	濁灰茶 洪水砂以下含む	(14.6)	(8.2)	－
254	32	12	施釉陶器	灯明皿	2005002			北-Ⅲ-2	SD2002	洪水砂より上	4.18	1.1	2.75
255	32	12	施釉陶器	灯明皿	2005002			北-Ⅲ-2	SD2002まで	濁灰茶色細砂まじりシルト層	6.2	1.45	2.8
256	32	26	施釉陶器	御神酒徳利	2005002			北-Ⅲ-2	SD2002、洪水砂より上	濁灰茶 洪水砂以下含む	1.4	8.5	3.0
257	32	15	施釉陶器	御神酒徳利	2005002			北-Ⅲ-2	SD2002か		(1.8)	(7.9)	3.4
258	32	15	施釉陶器	御神酒徳利	2005002			北-Ⅲ-2	SD2002か		1.6	9.9	3.4
259	32	26	素焼	御神酒徳利	2005002			北-Ⅲ-2	SD2002まで	濁灰茶色細砂まじりシルト層	(2.9)	(15.0)	6.8
260	33	27	青磁	碗	2005002	近代以降		北-Ⅲ-2	SD2002	こげ茶色フショク土層中灰シルトの土	7.9	3.7	3.3
261	33	14	染付磁器	小碗	2005002	19世紀前半		北-Ⅲ-2	SD2002まで	濁灰茶色細砂まじりシルト層	7.8	4.35	3.15
262	33	29	染付磁器	小碗	2005002	近代以降		北-Ⅲ-2	攪乱土主 SD2002		7.8	4.8	3.9
263	33	20	染付磁器	碗	2005002	19世紀前半	瀬戸・美濃系	北-Ⅲ-2	SD2002まで	濁灰茶色細砂まじりシルト層	(8.1)	(4.5)	3.5
264	33	14	染付磁器	碗	2005002	18世紀代	肥前系	北-Ⅲ-2	SD2002埋土	濁灰茶色混レキ土まで	(9.4)	(5.3)	(4.2)
265	33	10	染付磁器	碗	2005002	18世紀後半	波佐見産	北-Ⅲ-2	SD2002	洪水砂層中	10.2	5.3	3.7
266	33	10	染付磁器	碗	2005002	18世紀後半	波佐見産	北-Ⅲ-2	SD2002	近世以降の攪乱土主	9.8	5.5	4.0
267	33	14	染付磁器	碗	2005002	18世紀後半	波佐見産	北-Ⅲ-2	SD2002	洪水砂より上	9.68	5.5	3.55
268	33	27	染付磁器	碗	2005002	18世紀後半	波佐見産	北-Ⅲ-2	SD2002	こげ茶色フショク土層中灰シルトの土	(10.2)	5.2	4.3
269	33	20	染付磁器	碗	2005002	19世紀前半	肥前系	北-Ⅲ-2	SD2002	濁灰色土中砂 洪水砂主	(10.2)	6.6	4.1
270	33	20	染付磁器	碗	2005002	19世紀前半	肥前系	北-Ⅲ-2	SD2002か		(10.0)	5.7	(4.1)
271	33	13	染付磁器	碗	2005002	18世紀後半	波佐見産	北-Ⅲ-2	SD2002	灰シルト主	(10.0)	(5.5)	3.9
272	33	21	染付磁器	碗	2005002	19世紀前半	肥前系	北-Ⅲ-2	SD2002	灰シルト	(11.1)	6.4	5.5
273	33	15	染付磁器	碗	2005002			北-Ⅲ-2	SD2002	濁灰茶色土混レキ土	(9.7)	(5.3)	(5.8)
274	33	16	染付磁器	碗	2005002	19世紀前半	肥前系	北-Ⅲ-2	SD2002埋土	濁灰茶色混レキ土まで	(10.5)	(5.9)	3.9
275	33	28	染付青磁	碗	2005002	18世紀代	肥前系	北-Ⅲ-2	SD2002	灰シルト主	(7.6)	(5.45)	－
276	33	30	染付磁器	湯呑碗	2005002		肥前系	北-Ⅲ-2	SD2002-a部分	濁灰茶色細砂まじりシルト	(8.5)	(7.0)	4.4
277	33	14	染付磁器	碗蓋	2005002	19世紀前半以降	瀬戸系	北-Ⅲ-2	SD2002まで	洪水砂～底	(8.3)	2.9	3.2
278	33	26	染付磁器	花瓶	2005002	18世紀後半	肥前系	北-Ⅲ-2	SD2002	キカイ掘削時	－	(8.0)	(3.8)
279	33	14	染付磁器	皿	2005002	18世紀前半	波佐見産	北-Ⅲ-2	SD2002 上層		12.6	3.4	4.3
280	33	29	染付磁器	皿	2005002	18世紀後半	肥前系	北-Ⅲ-2	SD2002	こげ茶色フショク土層中灰シルトの土	12.1	2.4	7.6
281	33	16	染付磁器	皿	2005002	18世紀後半	肥前系	北-Ⅲ-2	SD2002	こげ茶色フショク土層中灰シルトの土	13.0	3.7	7.1
282	33	21	染付磁器	段重	2005002	19世紀前半以降		北-Ⅲ-2	SD2002	近世以降の攪乱土主	(14.8)	5.3	(10.0)
283	33	16	染付磁器	鉢	2005002			北-Ⅲ-2	SD2002(上層)		－	(7.0)	10.6
284	33	19	土師器	蓋	2005002			北-Ⅲ-2	SD2003	攪乱土主	3.5	2.0	－
285	33	21	施釉陶器	壺蓋	2005002		京焼系	北-Ⅲ-2	SD2003、埋土	濁灰茶シルト	4.6	2.1	6.1
286	33	23	施釉陶器	茶壺	2005002		丹波焼	北-Ⅲ-2	SD2003、埋土	濁灰茶シルト	－	7.5	－
287	33	15	施釉陶器	インク瓶	2005002	近代以降		北-Ⅲ-2	SD2003	検出まで攪乱土含む	1.4	7.0	5.6
288	33	17	施釉陶器	植木鉢	2005002			北-Ⅲ-2	植木鉢埋納遺構		－	(10.8)	21.0
289	34	25	土師器	鍋	2005002			北-Ⅲ-2	SD2002	洪水砂より下	(46.0)	(4.9)	－
290	34	25	土師器	皿	2005002			北-Ⅰ		木棺墓アゼ取っぱらい時	(8.6)	1.9	(4.8)
291	34	4	土製品	五徳	2004242			北-Ⅱ		面検出	(26.2)	6.5	
292	34	25	無釉陶器	擂鉢	2004242		堺・明石産	北-Ⅱ	攪乱拡		(22.8)	(7.6)	－
293	34	18	無釉陶器	壺	2005002	16世紀後半～17世紀初頭	丹波焼	北-Ⅰ	コーナー南側	褐灰茶 混礫土(かたづけ?)	(10.5)	(6.1)	
294	34	17	施釉陶器	壺	2005002	17世紀初頭	唐津焼	北-Ⅲ-2	攪乱土主	濁灰茶色細砂まじりシルト含む	－	(19.1)	(14.3)
295	34	25	施釉陶器	甕	2005002	16世紀代	備前焼	北-Ⅰ		濁褐灰色シルト質極細砂	－	(7.9)	－
296	34		無釉陶器	火入れ	2005002		丹波焼	北-Ⅲ-1	南側溝		(13.6)	5.6	(14.55)
297	34	25	無釉陶器	甕	2005002	16世紀後半	丹波焼	北-Ⅰ		Ⅰa 濁灰茶色土 砂礫面まで	－	5.3	－
298	34	25	無釉陶器	甕	2005002	17世紀前半	丹波焼	北-Ⅰ	溝状落ち1 直上		－	4.5	－
299	34	24	無釉陶器	擂鉢	2005002	16世紀後半～17世紀初頭	丹波焼	北-Ⅰ	溝状落ち２の直上まで	1a濁灰茶色土Ⅰ	－	7.1	－
300	34	24	無釉陶器	擂鉢	2005002		堺・明石産	北-Ⅰ	H16年度調査区	埋土	－	(6.45)	－
301	34	24	無釉陶器	擂鉢	2005002		丹波焼	北-Ⅰ		砂礫層	－	(11.2)	－
302	34	24	無釉陶器	擂鉢	2005002		堺・明石産	北-Ⅲ-1	堀内	攪乱土	(41.2)	(11.3)	－
303	34	28	施釉陶器	甕	2005002		丹波焼	北-Ⅰ	コーナー南側	褐灰茶 混礫土(かたづけ?)	(34.8)	(6.7)	
304	34	28	施釉陶器	壺	2005002		丹波焼	北-Ⅰ		調査区コーナー部分 よごれた盛土 焼土まじり	(17.0)	(6.3)	－
305	34	29	施釉陶器	台付植木鉢	2004242	近代以降	瀬戸・美濃系	北-Ⅱ	中央の攪乱		－	(7.7)	23.5
306	34	28	施釉陶器	皿	2005002	17世紀前半	唐津焼	北-Ⅰ	溝状落ち1 直上		－	2.0	4.2
307	34	28	施釉陶器	皿	2004242	17世紀前半	唐津焼	北-Ⅱ		面検出	－	(2.1)	4.4
308	34	28	施釉陶器	天目茶碗	2005002	17世紀代	瀬戸・美濃系	北-Ⅰ	コーナー南側	褐灰茶 混礫土(かたづけ?)	(11.6)	(4.95)	－
309	34	29	施釉陶器	皿	2005002			北-Ⅰ	堀、上 埋土		11.3	2.8	6.2

別表１　土器一覧（６）

報告No.	図版	写真図版	種　別	器　種	調査番号	時　期	産 地 等	出土地区	遺　構	層　位	法　量(cm)		
											口径	器高	底径
310	35	15	施釉陶器	徳利	2004242	19世紀前半以降	丹波焼	北-Ⅱ	面検出 中央の攪乱		3.4	25.05	7.45
311	35	10	施釉陶器	火入れ	2004242		丹波焼	北-Ⅱ		面検出	(11.6)	6.0	(8.0)
312	35	18	施釉陶器	火入れ	2004242		丹波焼	北-Ⅱ	西攪乱拡		(11.75)	6.1	(8.5)
313	35	8	施釉陶器	壺蓋	2005002	19世紀前半	京焼系	北-Ⅲ-2	石垣レベルより下	盛土下、上半主	6.05	3.9	
314	35	11	施釉陶器	行平鍋	2004242	19世紀前半	京焼系	北-Ⅱ	中央の攪乱		(10.7)	(6.4) 把手込(8.1)	－
315	35	11	施釉陶器	醤油差し	2004242	近代以降	淡路淡陶社製	北-Ⅱ	中央の攪乱		－	6.5	6.2
316	35	28	青磁	碗	2005002		龍泉窯系	北-Ⅰ	北側ステップ	濁灰茶色土 主	－	(2.28)	(4.9)
317	35	19	施釉陶器	水滴	2004242			北-Ⅱ	中央の攪乱		1.25	3.05	4.06
318	35	26	施釉陶器	御神酒徳利	2005002			北-Ⅰ	東西方向 溝状落ち	濁灰色シルト	(1.9)	9.2	3.6
319	35	26	施釉陶器	樽形花瓶	2005002			北-Ⅰ	溝状 攪乱埋土		7.0	12.2	5.0
320	35	26	施釉陶器	樽形花瓶	2004242			北-Ⅱ	中央の攪乱		12.2	10.25	7.4
321	35	30	染付青磁	鉢	2005002		肥前系	北-Ⅲ-2	石垣レベルより下	盛土下、上半主	－	(8.1)	(11.2)
322	35	13	染付青磁	鉢	2004242	18世紀代	肥前系	北-Ⅱ	攪乱		－	(4.3)	10.7
323	35	15	白磁	御神酒徳利	2004242			北-Ⅱ	中央の攪乱		2.35	10.8	5.9
324	35	28	青磁	碗	2005002		龍泉窯系	北-Ⅰ	西側溝	濁(青)灰色土	－	(1.6)	(4.55)
325	35	21	染付磁器	碗	2005002			北-Ⅲ-2	石垣レベルより下	盛土下、上半主	10.68	5.18	(3.95)
326	35	23	染付磁器	碗	2004242	18世紀中頃～後半	波佐見産	北-Ⅱ	中央の攪乱		(10.52)	5.55	(3.8)
327	35	13	染付磁器	碗	2004242	18世紀前半	波佐見産	北-Ⅱ			(9.7)	(5.2)	(4.0)
328	35	7	染付磁器	碗	2004242	18世紀中頃～後半	波佐見産	北-Ⅱ			(9.7)	5.5	3.7
329	35	14	染付磁器	碗	2004242	18世紀中頃～後半	波佐見産	北-Ⅱ			(10.1)	5.4	4.2
330	35	30	染付磁器	碗	2004242	18世紀中頃～後半	波佐見産	北-Ⅱ		面検出	(9.8)	(5.6)	(4.2)
331	35	21	染付磁器	碗	2004242	18世紀中頃～後半	波佐見産	北-Ⅱ			10.1	5.6	4.2
332	35	30	染付磁器	碗	2004242	19世紀前半	瀬戸・美濃系	北-Ⅱ	西攪乱拡		(9.3)	(4.8)	(4.0)
333	35	23	染付磁器	碗	2005002	19世紀前半	肥前系	北-Ⅲ-2	攪乱土主		10.0	5.6	3.7
334	35	23	染付磁器	碗	2004242	19世紀前半	瀬戸・美濃系	北-Ⅱ	西攪乱拡		(9.0)	(5.0)	4.6
335	35	27	染付磁器	碗	2004242	19世紀前半以降		北-Ⅱ			(10.0)	(5.9)	(4.1)
336	35	30	染付磁器	碗	2004242	18世紀後半	肥前系	北-Ⅱ	中央の攪乱		8.75	5.5	4.98
337	35	21	染付磁器	碗蓋	2005002	19世紀前半	肥前系	北-Ⅲ			9.0	3.4	3.8
338	36	20	染付磁器	碗	2004242	19世紀前半	肥前系	北-Ⅱ	攪乱		(11.0)	6.65	(6.2)
339	36	27	染付磁器	鉢	2004242	幕末～明治初期		北-Ⅱ			(16.0)	(4.5)	－
340	36	13	赤絵磁器	鉢	2004242	近代以降		北-Ⅱ			(13.9)	(7.0)	5.9
341	36	30	染付磁器	皿	2004242	18世紀前半	波佐見産	北-Ⅱ	中央の攪乱		(12.3)	3.4	(4.05)
342	36	26	染付磁器	小皿	2004242	19世紀前半以降	瀬戸・美濃系	北-Ⅱ		面検出	9.7	1.9	4.9
343	36	30	染付磁器	碗蓋	2004242	19世紀前半	瀬戸・美濃系	北-Ⅱ	西攪乱拡		8.9	2.7	－
344	36	13	染付磁器	皿	2004242	17世紀後半	肥前系	北-Ⅱ			(18.5)	2.8	(10.3)
345	36	29	染付磁器	皿	2004242	18世紀後半～ 19世紀前半	肥前系	北-Ⅱ	中央の攪乱		(20.2)	3.7	(13.7)
346	36	13	染付磁器	皿	2004242	近代以降		北-Ⅱ			(23.6)	3.3	(15.5)
347	36	28	弥生土器	甕	980135	弥生後期後半		G-1			(12.6)	(6.7)	3.0
348	36	23	埴輪	円筒埴輪	2005002	古墳時代中期		北-Ⅰ	SD2001-a	溝底付近	－	(6.45)	－
349	36	23	埴輪	円筒埴輪	2005002	古墳時代中期		北-Ⅰ	東西方向 溝状落ち	濁灰色シルト	長(5.3)	幅(6.8)	厚1.45
350	36	23	須恵器	杯蓋	2005002	古墳時代後期		北-Ⅲ	南壁		(10.5)	(1.9)	
351	36	23	須恵器	高杯脚部	2005002	古墳時代後期		北-Ⅲ-2	SD2002	濁灰茶色細砂まじりシルト	(6.4)	(7.0)	(12.3)
352	36	13	須恵器	提瓶	2005002	古墳時代後期		北-Ⅲ-2	SD2002	灰シルト	－	(17.8)	－
353	36	23	須恵器	甕	2005002	古墳時代後期		北-Ⅰ	SD2001-b	中・下層	(24.7)	(5.1)	－
354	36	23	須恵器	甕	2005002	古墳時代後期		北-Ⅰ	SD1001	濁灰茶色シルトⅡ	(18.6)	(5.8)	－
355	36	23	須恵器	甕	2005002	古墳時代後期		北-Ⅲ-2	SD2002	濁灰茶色土混レキ土	(21.1)	(6.4)	－
356	36	18	須恵器	甕	2005002	古墳時代後期		北-Ⅰ	セクション3	濁灰茶混レキ土まで	－	(8.0)	－
357	36	23	土師器	甕	980135	古墳時代後期		G-1			(12.5)	(3.2)	－
358	36	23	土師器	杯蓋	980135	奈良時代		G-1			－	(0.95)	(13.42)
359	－	24	色絵磁器	鉢	2005002	近代以降		北-Ⅲ	南壁				
360	－		施釉陶器	徳利	2005002	18世紀代	丹波焼	北-Ⅲ-2	攪乱土及び下層含む				
361	－	17	施釉陶器	鍋？	2005002	19世紀前半	京焼系	北-Ⅲ-2	SD2002	濁灰茶色砂レキまじりシルト層			
362	－	12	埴輪		2005002	奈良時代中期		北-Ⅰ	SD1001 埋土	濁灰茶～焦茶混礫土			
363	－	12	埴輪		2005002	奈良時代中期		北-Ⅰ	SD1001 埋土	付近 抗列より北側			
364	－	12	埴輪		2005002	奈良時代中期		北-Ⅰ	東半 堀(南北)	埋土 上半			
365	－	4	土製品		2001040	18世紀代		南-2	堀				
366	－	10	土製品	七輪の五徳	2005002	19世紀前半		北-Ⅰ	東西方向溝状落ち	濁灰色シルト			
367	－	10	土製品	七輪の五徳	2005002	19世紀前半		北-Ⅲ-2	SD2002(堀)	洪水砂より上			
368	－	12	須恵器	脚部	2005002	奈良時代後期		北-Ⅰ	SD1001 埋土	付近 抗列より北側			
369	－	12	須恵器	脚部	2005002	奈良時代後期		北-Ⅰ	SD1001 埋土	付近 抗列より北側			
370	－	12	須恵器	高杯	2001040	奈良時代後期		南-3	8～10G	包含層	－	(2.1)	－
371	－	11	施釉陶器	椀	2005003			北-Ⅰ	SD1001 埋土	濁灰茶色混礫土			
372	－	11	施釉陶器	椀	2005004			北-Ⅰ	SD1001	濁灰茶色混礫土			
373	－	19	染付磁器	碗	2005002			北-Ⅲ-2	SD2002、洪水砂より上	濁灰茶 洪水砂以下含む			

別表２　木製品・金属器・石製品一覧（１）

報告No.	図版	写真図版	種　別	器　種	調査番号	出土地区	遺　構	層　位	法　量			
									長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)
W1	40	49	木製品	連歯下駄	2001040	南-1	掘		17.3	9.5	3.4	
W2	40	49	木製品	下駄	2001040	南-3	4～5G	掘	21.0	9.7	3.0	
W3	40	49	木製品	箱物の蓋	2001040	南-3	掘	上層	31.2	5.6	0.6	
W4	40	49	木製品	箱物の部材	2001040	南-3	掘	上層	28.0	21.1	1.2	
W5	41	49	木製品	桶の側板	2001040	南-3	4～5G	掘	11.2	8.3	1.55	
W6	41	49	木製品	桶・樽の底板	2001040	南-3	掘	上層	38.5	12.4	2.5	
W7	41	49	木製品	板材	2001040	南-1	掘		18.1	3.0	1.0	
W8	41	49	木製品	漆椀	2004242	北-Ⅱ	内堀SD01	下層	－	器高4.2+	底径9.2	
W9	41	49	木製品	漆椀底部	2004242	北-Ⅱ	内堀SD01	中層	－	器高1.5+	底径5.0	
W10	41	49	木製品	下駄	2004242	北-Ⅱ	内堀SD01	下層	18.1	7.6	2.9	
W11	41	49	木製品	下駄	2004242	北-Ⅱ	内堀SD01	下層	20.6	10.45	5.4	
W12	42	49	木製品	曲物か桶の底板	2004242	北-Ⅱ	内堀SD01	下層	12.1	10.95	1.4	
W13	42	49	木製品	樽・桶の底板か鏡板	2004242	北-Ⅱ	井戸	下層	35.3	8.95	1.55	
W14	42	50	木製品	結櫛(筋立櫛)	2005002	北-Ⅲ-2	掘、北肩、上層		13.0	4.9	0.4	
W15	42	50	木製品	下駄	2005002	北-Ⅲ-2	堀底まで	濁灰茶色細砂まじりシルト	14.75	8.3	1.8	
W16	42	50	木製品	下駄	2005002	北-Ⅲ-2	堀底まで	濁灰茶色細砂まじりシルト	13.6	7.55	2.35	
W17	42	50	木製品	下駄	2005002	北-Ⅲ-2	堀底まで	洪水砂～底	11.9	7.3	3.0	
W18	42	49	木製品	木札状の木製品	2005002	北-Ⅲ-2	掘内	濁灰茶色混レキ土～溝底	7.1	2.7	0.85	
W19	42	50	木製品	木札かヘラ状木製品	2005002	北-Ⅲ-2	堀底	濁灰茶色細砂まじりシルト	16.2	2.0	0.6	
W20	43	50	木製品	円柱状の部材	2005002	北-Ⅲ-2	掘内	濁灰茶色混レキ土～溝底	5.1	5.5	4.5	
W21	43	50	木製品	切匙	2005002	北-Ⅲ-2	堀底	濁灰茶色細砂まじりシルト	20.5	2.9	0.6	
W22	43	50	木製品	箱物の蓋	2005002	北-Ⅲ-2	濁灰茶攪乱土まじる	掘底 洪水砂より上洪水砂以下含む	26.7	3.8	0.55	
W23	43	50	木製品	桶・樽の底板	2005002	北-Ⅲ-2	堀底	濁灰茶色細砂まじりシルト	19.2	5.2	0.9	
W24	43	50	木製品	桶・樽の底板	2005002	北-Ⅲ-2	濁灰茶攪乱土まじる	掘底 洪水砂より上洪水砂以下含む	34.25	9.8	2.75	
W25	43	50	木製品	桶・樽の底板	2005002	北-Ⅲ-2	堀底まで	濁灰茶色レキまじりシルト	45.6	5.5	1.4	
W26	43	50	木製品	柄杓の柄	2005002	北-Ⅲ-2	SD2002 堀	掘底 濁灰茶色レキまじりシルト	66.3	2.95	1.5	
W27	44	50	木製品	半円形の板材	2005002	北-Ⅲ-1	SD2003	濁灰茶シルト	6.0	7.95	0.7	
W28	44	50	木製品	杓文字	2005002	北-Ⅲ-1	SD2003	濁灰茶シルト	21.8	7.7	0.8	
W29	44	51	木製品	黒漆塗容器蓋の取手	2005002	北-Ⅲ-1	SD0003 下層	埋土中、濁灰茶色土	14.2	2.15	30.8	
W30	44	50	木製品	容器蓋	2005002	北-Ⅲ-1	SD2003	濁灰茶シルト	15.7	15.6	0.75	
W31	44	50	木製品	曲物の底か蓋板	2005002	北-Ⅲ-1	SD2003	濁灰茶シルト	5.2	3.7	0.35	
W32	44	51	木製品	曲物	2005002	北-Ⅲ-1	SD2003底		口径13.0	器高5.8	底径15.5	
W33	44	51	木製品	木地椀	2005002	北-Ⅲ-1	SD2004	濁灰茶色シルト	口径11.0	器高4.2	底径7.6	
W34	44	51	木製品	下駄	2005002	北-Ⅲ-1	SD2004	濁灰茶色シルト	15.0	7.2	2.7	
W35	44	51	木製品	下駄	2005002	北-Ⅲ-1	SD2004	濁灰茶色シルト	18.2	7.2	1.9	
W36	45	51	木製品	漆椀	2005002	北-Ⅲ-1	SD1003	最上層	－	器高6.5+	底径(6.2)	
W37	45	51	木製品	紡績具(綛)	2005002	北-Ⅲ-1	SD0001	セクション1除去時	17.4	3.2	0.85	
W38	45	50	木製品	円形の板	2005002	北-Ⅲ	SD0001	(層土半)	5.5	5.5	1.75	
W39	45	51	木製品	漆椀の底部	2001040	南-3		包含層	－	器高1.3	7.8	
W40	45	50	木製品	漆塗容器	2001040	南-3		包含層	11.8	3.9	5.6	
W41	45	51	木製品	杓文字	2001040	南-3	1G	包含層	21.8	5.5	0.6	
W42	45	51	木製品	小判型曲物の底板	2001040	南-3		包含層	18.3	10.0	1.1	
W43	45	51	木製品	桶・樽の底板か蓋板	2001040	南-3	8～10G	包含層	18.4	7.2	1.3	
W44	45	51	木製品	桶・樽の底板か蓋板	2001040	南-3		包含層	29.4	11.3	1.9	
W45	45	51	木製品	棒状木製品	2005002	北-Ⅲ	西側溝	濁(青)灰色土	19.6	1.25	1.15	
W46	45	51	木製品	円盤状の木製品	2001040	南-3	2-3G	包含層	17.8	17.5	1.7	
M1	46	52	鉄製品	茎状の製品	2001040	南-3	8～10G	堀	3.3+3.9+1.85	1.45,0.6,0.55	0.4～0.45	1.4+1.3+0.3
M2	46	52	鉄製品	茎状の製品	2001040	南-3	8～10G	堀	2.4	1.2	0.3	1.0
M3	46	52	鉄製品	茎状の製品	2004242	北-Ⅱ	堀	南北畔 上層	4.9	0.5	0.5	1.4
M4	46	52	鉄製品	茎状の製品	2004242	北-Ⅱ	堀	上層	6.3	3.7	0.6	2.9
M5	46	52	鉄製品	不明	2004242	北-Ⅱ	堀	上層	4.3	3.25	0.7	9.7
M6	46	52	鉄製品	不明	2004242	北-Ⅱ	堀	中層	2.8	2.7	0.5	88.5 土器の重さ含
M7	46	52	鉄製品	釘か	2005002	北-Ⅰ	SD0001 上半		14.4	1.45	0.7	24.8
M8	46	52	銅製品	把手	2005002	北-Ⅰ	SD1001 埋土	濁灰茶～こげ茶混礫土	6.0	7.75	0.65	36.4
M9	46	52	銅製品	飾り金具	2005002	北-Ⅰ	SD1001 埋土	濁灰茶～こげ茶混礫土	3.5	4.35	0.15	8.1
M10	46	52	銅製品	金具	2005002	北-Ⅲ-1	SD2003(SD0003)	汚れた褐灰シルト	6.1	1.4	0.1	2.5
M11	46	52	銅製品	金具	2005002	北-Ⅲ-1	SD2003(SD0003)	汚れた褐灰シルト	5.9	1.45	0.1	2.5
M12	46	52	銅製品	装飾品	2005002	北-Ⅲ-2	堀底まで	洪水砂～底	7.2	3.5	1.5	43.0
M13	46	52	銅製品	簪	2005002	北-Ⅲ-2	堀内	灰シルト主	17.1	1.45	0.3	9.4
M14	46	52	銅製品	煙管	2001040	南-3	8～10G	包含層	7.5	1.5	0.1	6.1
M15	46	52	銅製品	煙管	2004242	北-Ⅲ	堀	中層	6.9	1.9	0.1	11.8
M16	46	52	銅製品	煙管	2005002	北-Ⅲ-2		キカイ後残土	7.5	1.1	1.1	10.0

別表２　木製品・金属器・石製品一覧（２）

報告No.	図版	写真図版	種　別	器　種	調査番号	出土地区	遺　構	層　位	法　量			
									長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)
M17	47	52	銅製品	銅銭	2004242	北-Ⅱ	SD01	中層	2.4	2.4	0.15	3.3
M18	47	52	銅製品	銅銭	2004242	北-Ⅱ	SD01	最下層	2.5	2.5	0.15	2.6
M19	47	52	銅製品	銅銭	2005002	北-Ⅲ-2	堀底まで	濁灰茶色砂まじりシルト	2.5	2.5	0.1	2.6
M20	47	52	銅製品	二銭銅貨	2005002	北-Ⅰ		Ⅰa 灰茶色土Ⅰ	3.2	3.2	0.2	13.4
BE1	46	52	鼈甲製	簪	2005002	北-Ⅰ	SD1001 埋土	濁灰茶～こげ茶	長13.4	幅6.6	厚0.2	
S1	47	53	石製品	硯	2005002	北-Ⅲ-2	堀	洪水砂より上	16.3	6.6	2.9	520
S2	47	53	石製品	硯	2004242	北-Ⅱ	堀	上層	7.6	5.2	0.9	60.5
S3	47	53	石製品	砥石	2005002	北-Ⅰ	セクション3	濁灰茶混礫土	10.5	6.7	1.2	180
S4	47	53	石製品	砥石	2005002	北-Ⅰ	コーナー南側	濁灰茶混礫土(かたづけ？)	7.7	4.6	3.8	160
S5	47	53	石製品	砥石	2005002	北-Ⅰ	SD1002-W		9.6	4.9	1.2	105
S6	48	53	石製品	一石五輪塔	2004242	北-Ⅱ		SD01	26.6	17.4	14.8	1230
S7	48	53	石製品	一石五輪塔	2005002	北-Ⅲ-2	堀内	灰シルト(洪水砂より上)	18.5	17.5	17.0	1100
S8	48	53	石製品	上臼	2005002	北-Ⅲ-2	堀底まで	濁灰茶色細砂まじりシルト層	14.5	15.2	9.2	2400
S9	48	53	石製品	上臼	2005002	北-Ⅲ-1	SD2003(SD0003)	汚れた褐灰シルト	27.3	15.9	7.3	3400

別表３　瓦・煉瓦・タイル・碍子・硝子一覧

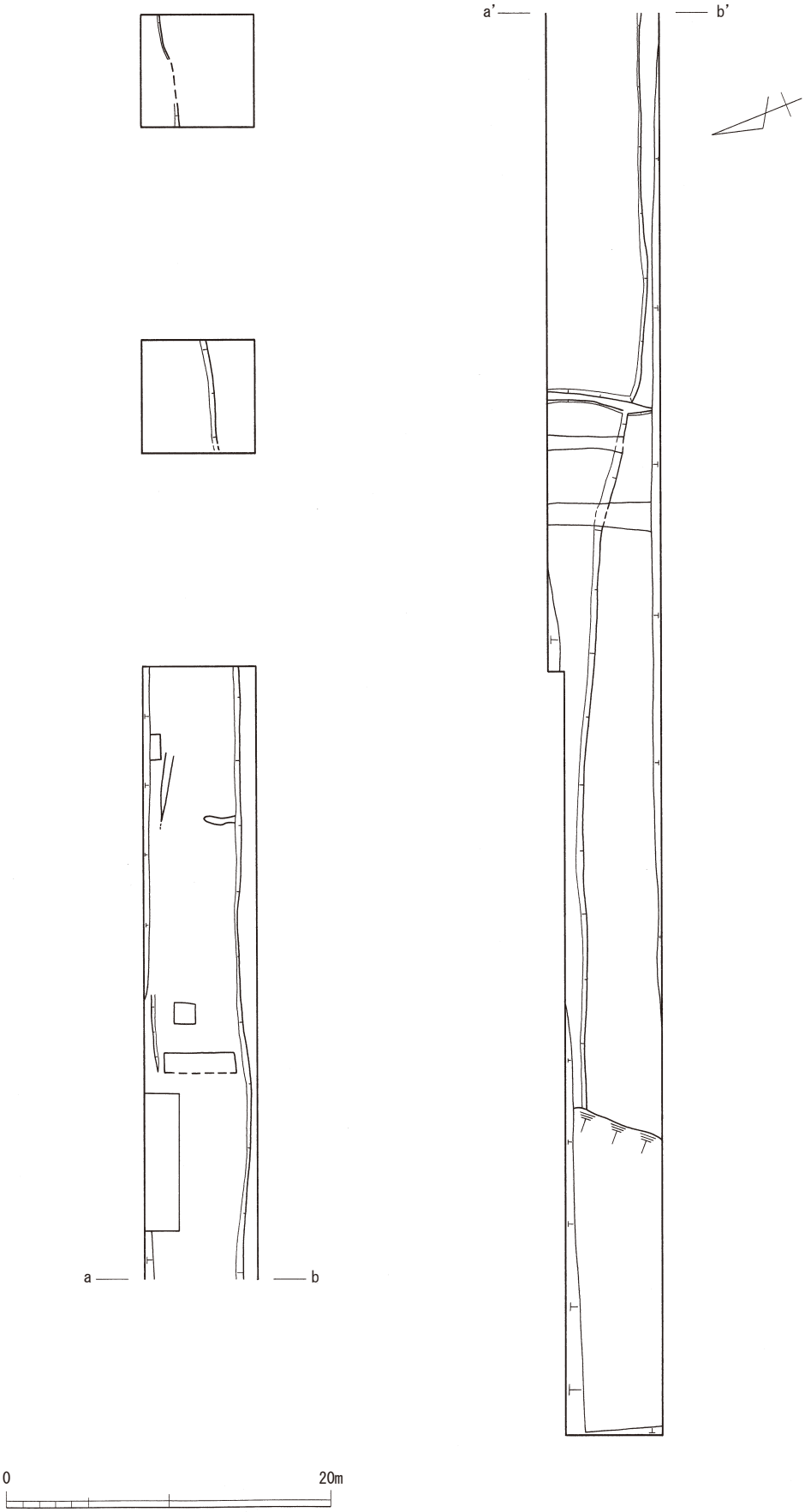
報告No.	図版	写真図版	種　別	器　種	調査番号	出土地区	遺　構	層　位	法　量(cm)		
									長	幅	厚
K1	37	47	瓦	軒丸瓦	2005002	北-Ⅰ	SD0001	層上半	瓦当径(13.4)	(6.8)	2.2
K2	37		瓦	軒丸瓦	2005002	北-Ⅲ-2	SD2002まで	洪水砂～底	14.0	14.0	2.0
K3	37	47	瓦	軒丸瓦	2005002	北-Ⅲ-2	SD1001	濁灰茶色シルトⅡ	瓦当径(13.7)	(2.9)	(2.2)
K4	37	47	瓦	軒丸瓦	2005002	北-Ⅲ-2	SD2002	濁灰色土中砂 洪水砂主	14.3	14.3	3.7
K5	37	47	瓦	軒丸瓦	2005002	北-Ⅲ-2	SD2002	濁灰色土中砂 洪水砂主	13.9	13.8	2.6
K6	37	47	瓦	軒丸瓦	2005002	北-Ⅲ-2	攪乱土主	濁灰茶色細砂まじりシルト含む	13.3	13.7	4.7
K7	37	47	瓦	軒丸瓦	2005002	北-Ⅰ	SD2001-a 東半	溝底	瓦当径14.2/長(11.3)	(3.8)	2.8
K8	37	47	瓦	軒丸瓦	2005002	北-Ⅲ-2	SD2002	洪水砂より下	10.4	15.3	2.4
K9	37	47	瓦	軒丸瓦	2005002	北-Ⅰ	SD0001	層上半	瓦当径6.5/長(5.0)	(3.3)	1.7
K10	37	47	瓦	軒丸瓦	2004242	北-Ⅱ			6.9	3.2	
K11	37	47	瓦	軒平瓦	2005002	北-Ⅰ		褐灰茶Ⅰ	4.0	9.3	1.8
K12	37	47	瓦	軒平瓦	2005002	北-Ⅰ	SD0001 中央		(12.2)	(14.85)	1.7
K13	38	48	瓦	軒桟瓦	2005002	北-Ⅰ	SD0001		27.2	27.4	高4.7
K14	38	48	瓦	鬼瓦	2005002	北-Ⅰ	東西方向 溝状落ち	濁灰色シルト	(22.4)	(22.0)	6.5
K15	38	48	瓦	鳥衾瓦	2005002	北-Ⅰ	SD1001	埋土	瓦当径13.2	内縁径9.2	内区径5.6
K16	38		瓦	丸瓦	2005002	北-Ⅲ-1		攪乱土	19.6	10.9	高4.7
K17	39	48	瓦	丸瓦	2005002	北-Ⅲ-2	SD2002まで	濁灰茶色細砂まじりシルト層	22.8	12.7	高さ5.9
K18	39	48	瓦	丸瓦	2005002	北-Ⅲ-2	SD2002まで	濁灰茶色細砂まじりシルト層	24.0	13.4	高さ5.6
K19	39	48	瓦	伏間瓦	2005002	北-Ⅰ	SD2001	底 暗灰色	23.7	17.9	高さ6.1
K20	39	48	瓦	伏間瓦	2005002	北-Ⅰ	SD2001	中・下層	(16.9)	23.85	1.85
B1	49	54	煉瓦	長方形、手抜き	2005002	北-Ⅰ	SD0001 上半		(13.9)	10.3	4.5
B2	49	54	煉瓦	長方形、手抜き	2005002	北-Ⅰ	SD0001 上半		(8.0)	10.7	6.0
T1	49	54	タイル	乾式、内装、6吋、平	2005002	北-Ⅲ-1	SD0003上面まで	攪乱土主	5.1	5.5	0.6
T2	49	54	タイル	乾式、内装、6吋、平	2005002	北-Ⅲ-1	SD2003対応	検出まで攪乱土含む	6.2	3.4	0.6
T3	49	54	タイル	乾式、内装、6吋、平	2005002	北-Ⅲ-1	SD0003上面まで	攪乱土主	6.5	3.4	0.6
T4	49	54	タイル	乾式、内装、6吋、平	2005002	北-Ⅲ-1		攪乱土	5.4	5.2	0.5
T5	49	54	タイル	乾式、内装、平	2005002	北-Ⅲ-1	北側ステップ	濁灰茶色土 主	(5.9)	(6.2)	0.6
T6	49	54	タイル	乾式、内装、平	2005002	北-Ⅲ-1	南壁ギワ	攪乱土中	(6.2)	(4.3)	0.55
T7	49	54	タイル	乾式、内装、平	2005002	北-Ⅲ-1	SD2003 南端		5.5	2.9	0.65
T8	49	54	タイル	乾式、内装、平	2005002	北-Ⅲ-1	SD2003 堀対応部分		2.6	2.7	0.55
T9	49	54	タイル	乾式、内装、平	2005002	北-Ⅲ-1	南壁ぎわ	攪乱部分	(2.2)	(2.6)	0.55
T10	49	54	タイル	乾式、内装、平	2005002	北-Ⅲ-1	SD0003下層	板材裏込め部分	(1.7)	(3.4)	0.55
T11	49	54	タイル	乾式、内装、平	2005002	北-Ⅲ-1	SD2003 堀対応部分		3.6	3.5	0.55
T12	49	54	タイル	乾式、内装、平	2005002	北-Ⅲ-1	南壁ぎわ	攪乱部分	(2.3)	(2.0)	0.55
T13	49	54	タイル	乾式、内装、長方形？	2005002	北-Ⅲ-1	SD2004	濁灰茶色シルト	(1.4)	(1.6)	0.6
T14	49	54	タイル	磁器質モザイク	2005002	北-Ⅰ	三角形部分	砂礫 灰褐色シルト まじり砂礫中	2.5	2.5	0.45
T15	49	54	タイル	磁器質モザイク長方形？	2005002	北-Ⅰ	三角形部分	砂礫 灰褐色シルト まじり砂礫中	1.8	(1.8)	0.55
T16	49	54	タイル	磁器質モザイク	2005002	北-Ⅲ-1	SD0003上面まで	攪乱土主	2.5	2.5	0.45
T17	49	54	タイル	磁器質モザイク	2005002	北-Ⅲ-1	SD0003上面まで	攪乱土主	2.5	(1.2)	0.45
T18	49	54	タイル	乾式、内装、3吋、平	2005002			表採	5.7	4.5	0.53
T19	49	54	タイル	乾式、内装、笠木	2005002			表採	15.2	3.6	1.5
I1	50	55	碍子類	懸垂碍子	2005002			表採	口径18.4	器高16.5	
I2	50	55	碍子類	茶台碍子	2005002	北-Ⅰ	SD1001 埋土	濁灰茶～焦茶混礫土	高8.15	最大径10.4	軸径2.0～2.4
I3	50	55	碍子類	茶台碍子	2005002	北-Ⅰ	SD1001 埋土	濁灰茶～焦茶混礫土	高7.0	最大径8.0	軸径1.9
I4	50	55	碍子類	クリート碍子	2005002	北-Ⅰ	SD1001 埋土		2.1	9.7	1.3
I5	50	55	碍子類	クリート碍子	2005002	北-Ⅲ-1	SD0003上面まで	攪乱土主	1.9	(3.2)	1.3
I6	50	55	碍子類	クリート碍子	2005002	北-Ⅲ-2	SD2002か？		2.0	(3.2)	1.4
I7	50	55	碍子類	磁器質電気関係器具	2005002	北-Ⅲ-1	SD2003対応	溝上層 攪乱土中主	(3.6)	(7.4)	2.2
I8	50	55	碍子類	磁器質屋内配線器具？	2005002	北-Ⅰ	SD1001 埋土	濁灰茶～焦茶混礫土	口径5.2	器高(3.7)	
G1	50	55	碍子類	磁器質機械栓	2005002	北-Ⅰ	SD0001	層上半	3.1	径2.50	
G2	50	55	瓶瓶	ガラス胴長瓶	2005002	北-Ⅰ	SD1001	濁茶色土	口径2.5	器高19.7	底径7.3 腹径7.6
G3	50	55	瓶瓶	ガラス液体縦長小瓶	2005002	北-Ⅰ	SD1001底近く		口径2.2	器高9.0	底径3.2 腹径3.6
G4	50	55	瓶瓶	ガラス壺	2005002	北-Ⅰ	溝状 攪乱埋土		口径2.2	器高5.3	底径4.6 腹径4.2
G5	50	55	瓶瓶	ガラスクリーム瓶	2005002	北-Ⅲ-1	SD0003 埋土中	石垣溝 埋土	口径4.4	器高4.5	底径3.6 腹径5.0

図　　版

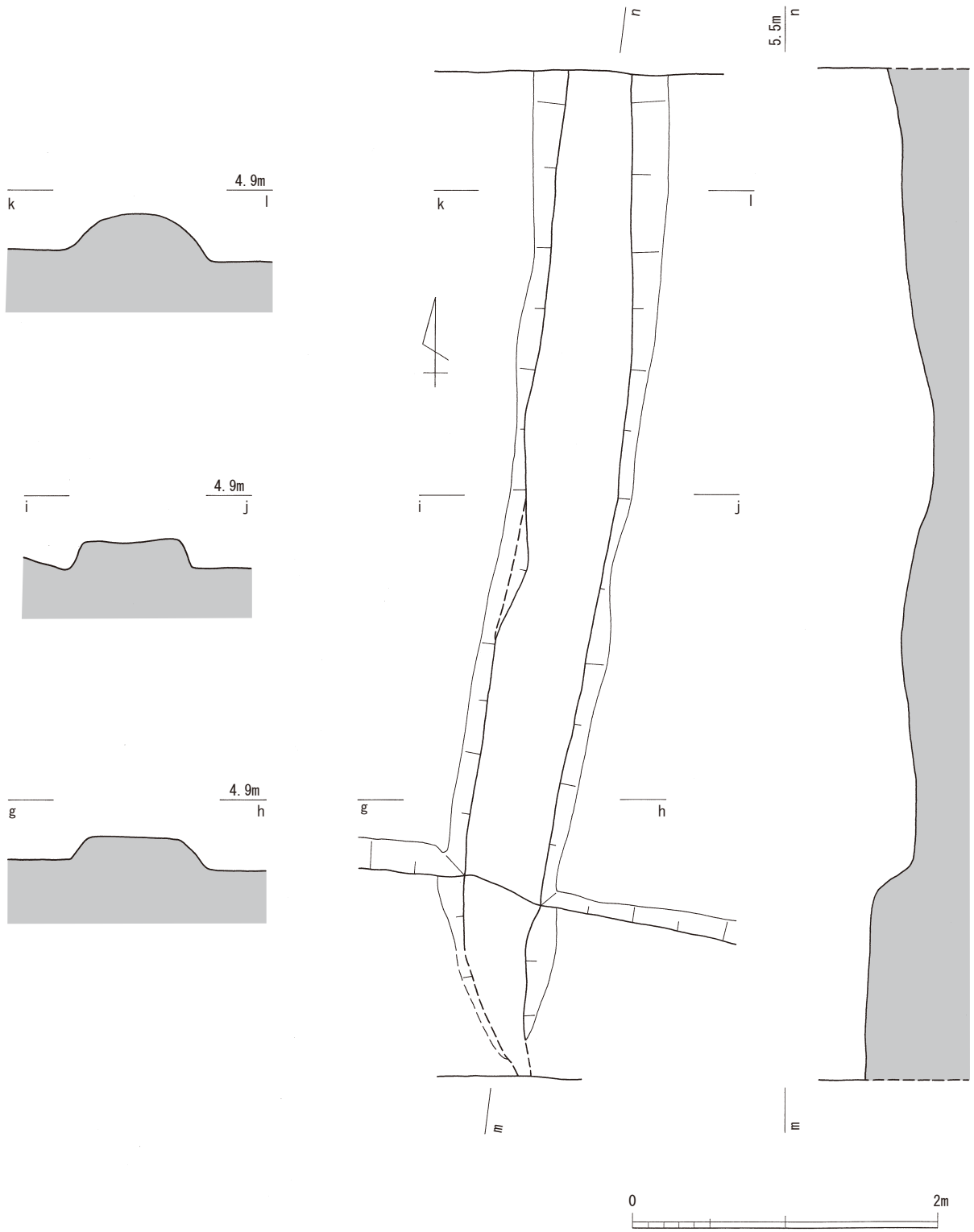
東町門
塚口城跡
聖マリア教会
塚口東町
福祉会館
願生寺
塚口本町一丁目
おだなり保育園
正玄寺
塚口御坊
南町会館
南町門
北-Ⅲ区
（平成17年度）
北-Ⅱ区
（平成16年度）
北-Ⅰ区
（平成17年度）
南区
（平成13年度）
G1
G2
G3
G4
G5
G6
G7
G8
G9
G10
G11
G12
G13
G14
G①
G②
G③
G④
G⑤
G⑥
G⑦
5.0
5.1
3.9
4.5
3.6
0
150m
■ G1～14　平成10年度
■ G①～⑦　平成12年度
堀（確定）
堀（推定）
調査区範囲

各年度調査地点位置図

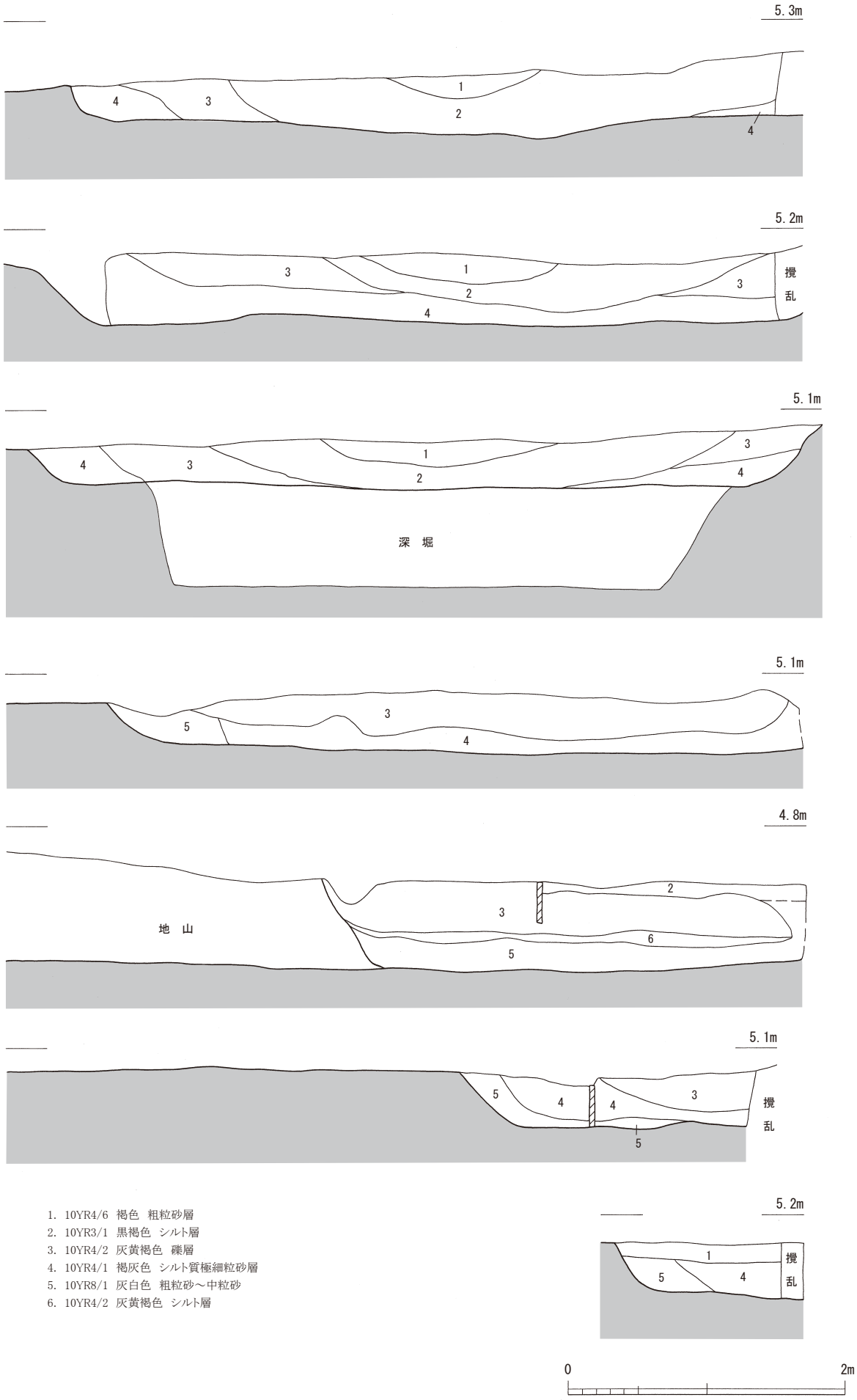
図版2



南区　平面図

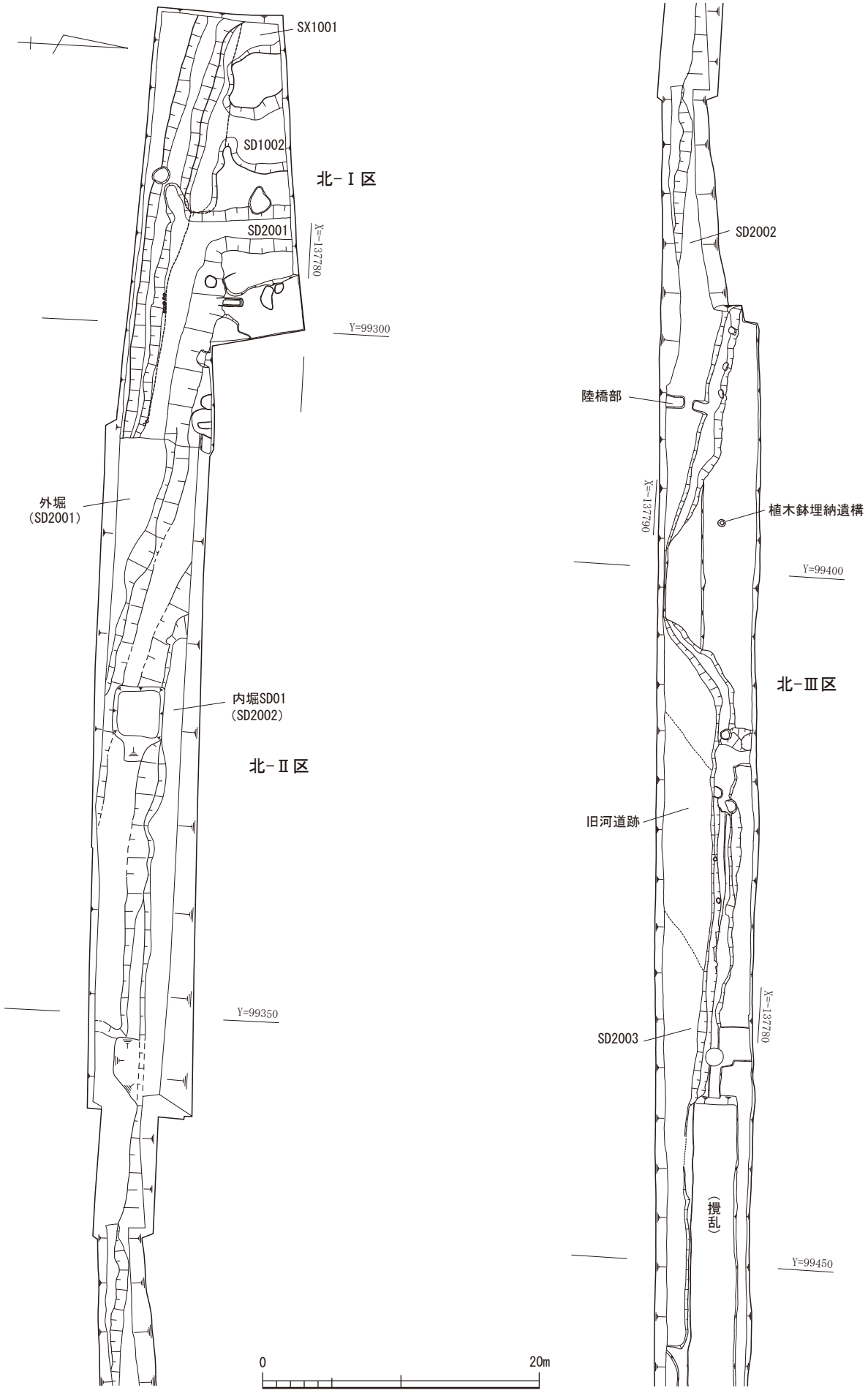


南区　橋状遺構



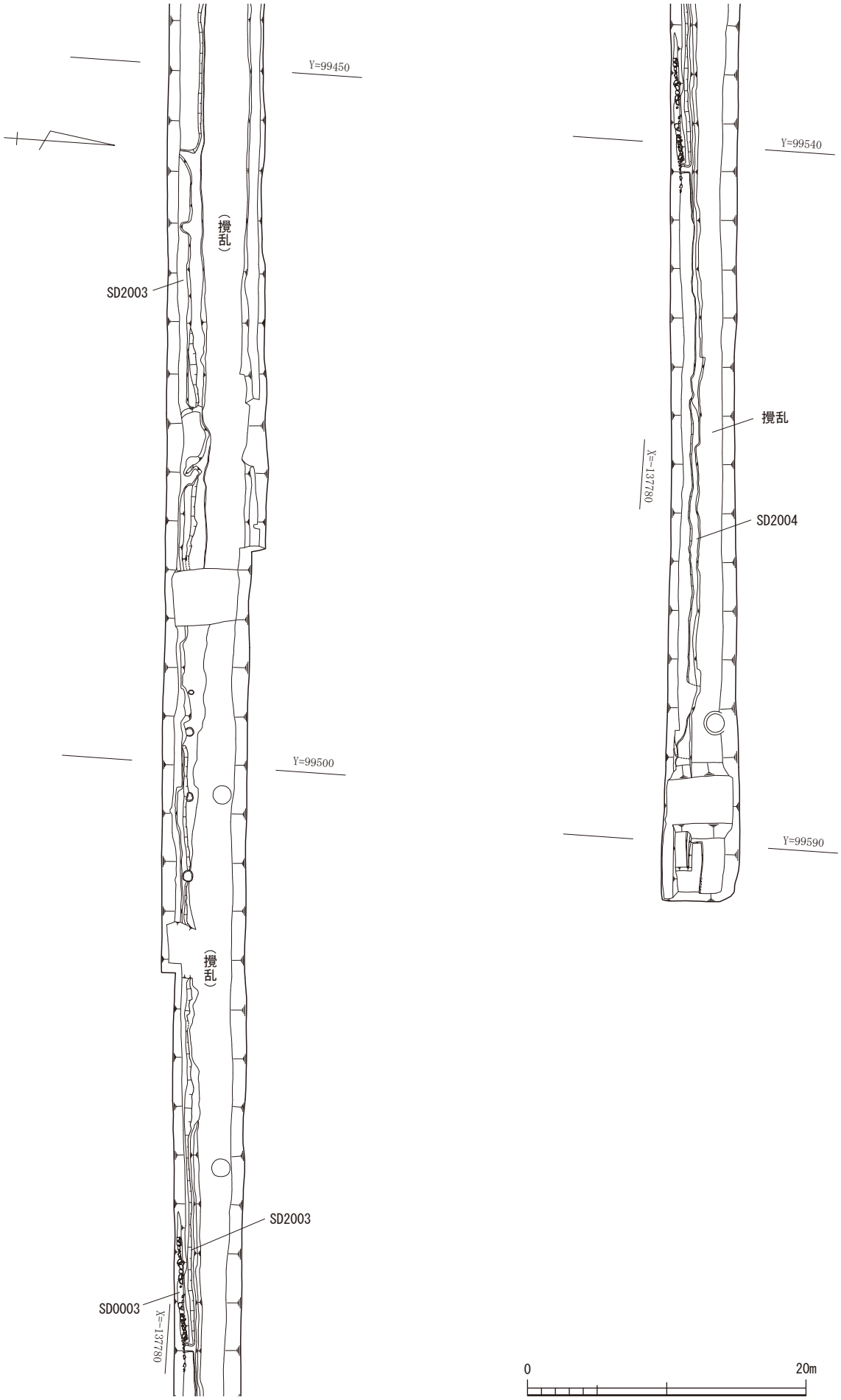
1. 10YR4/6 褐色 粗粒砂層
2. 10YR3/1 黒褐色 シルト層
3. 10YR4/2 灰黄褐色 礫層
4. 10YR4/1 褐灰色 シルト質極細粒砂層
5. 10YR8/1 灰白色 粗粒砂～中粒砂
6. 10YR4/2 灰黄褐色 シルト層

南区　畦断面図１～７

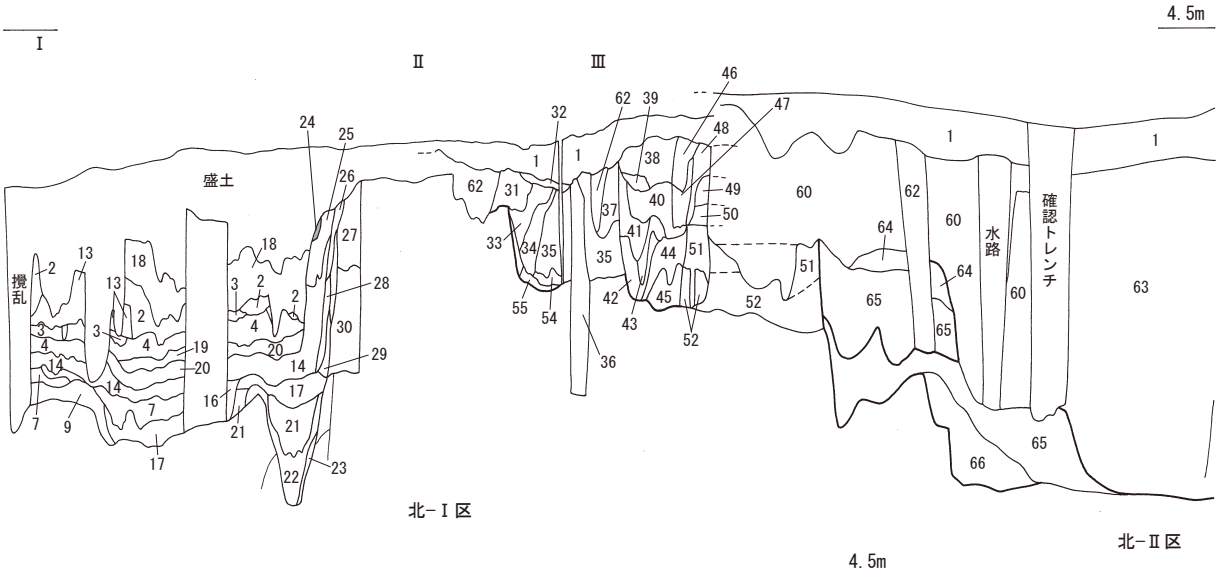


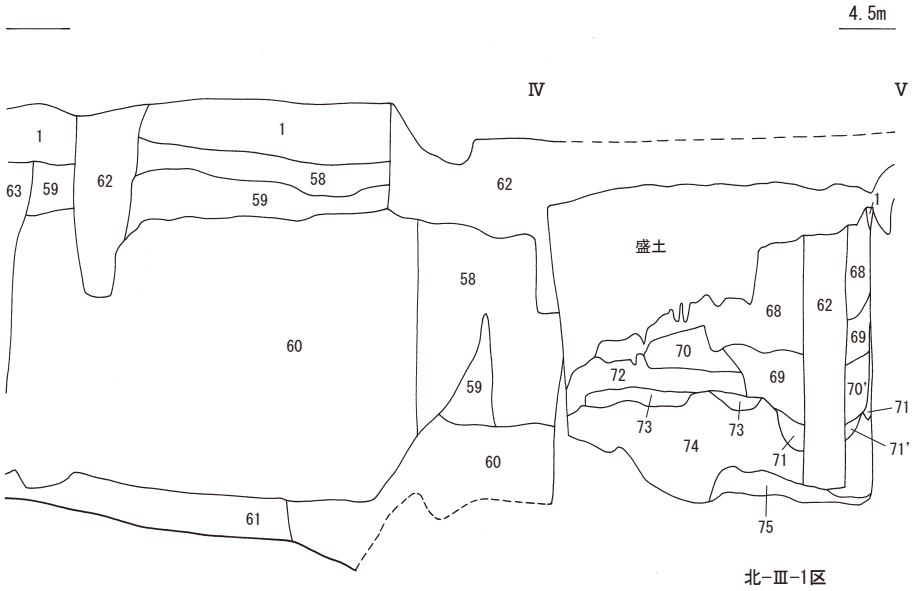
北－Ⅰ～Ⅲ区　遺構平面詳細図Ⅰ

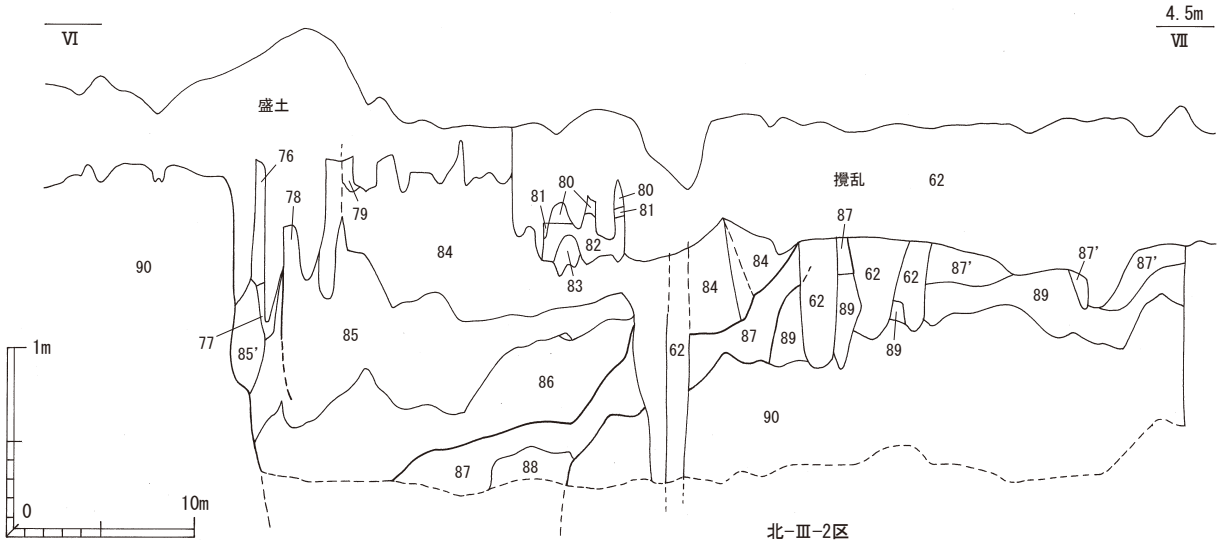
図版6



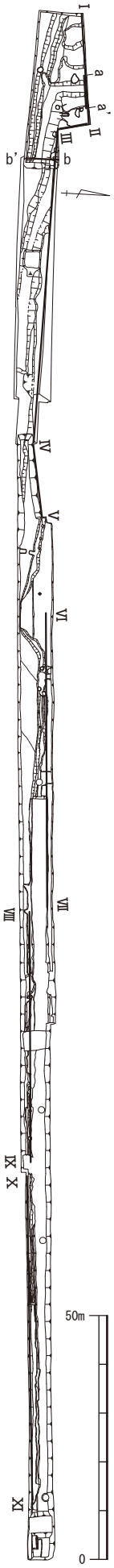
北－Ⅰ～Ⅲ区　遺構平面詳細図Ⅱ


4.5m
Ⅰ
Ⅱ
Ⅲ
盛土
撹乱
水路
確認トレンチ
北－Ⅰ区
北－Ⅱ区


4.5m
Ⅳ
Ⅴ
盛土
北－Ⅲ-1区

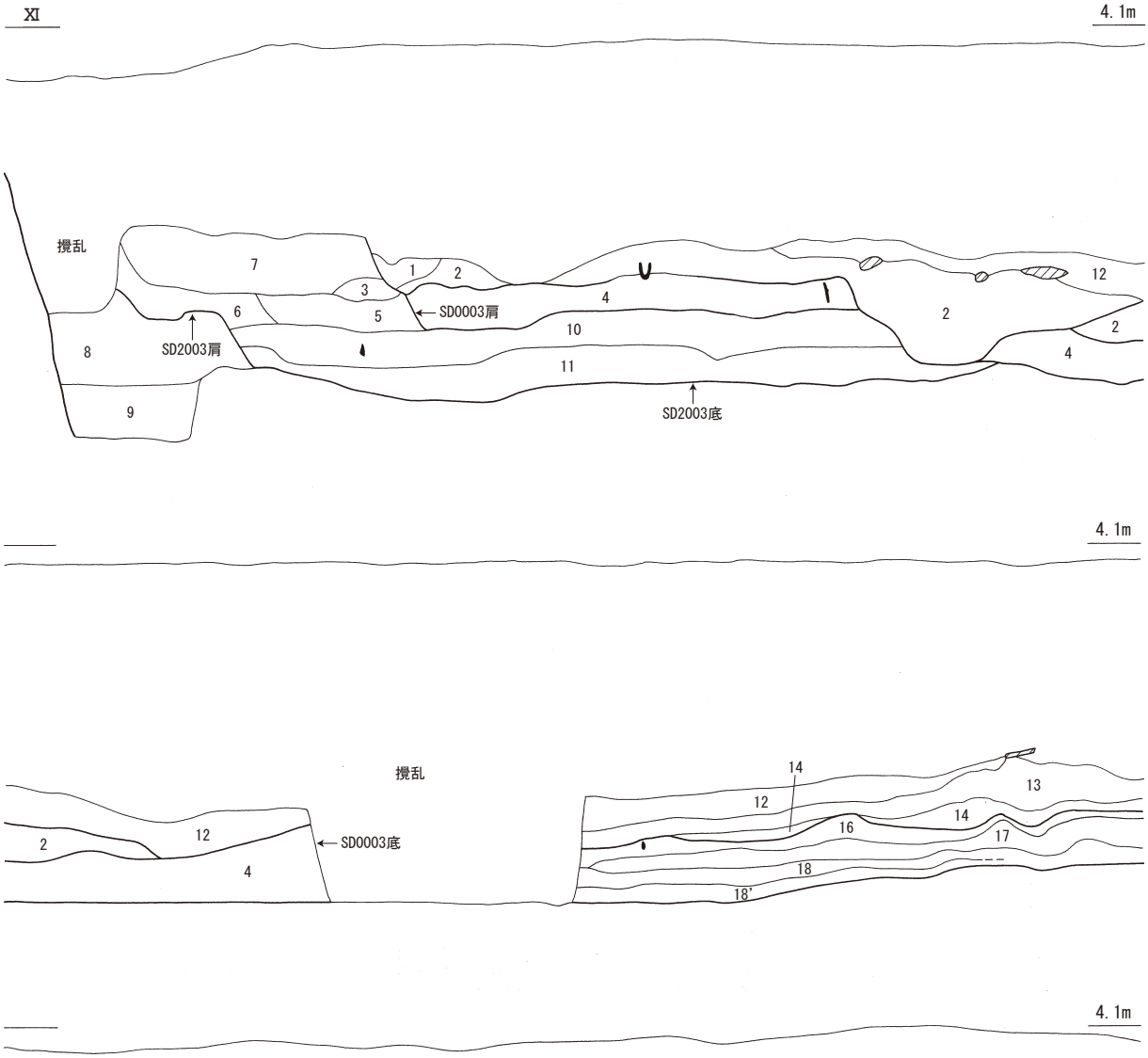

4.5m
Ⅵ
Ⅶ
盛土
撹乱
1m
0
10m
北－Ⅲ-2区

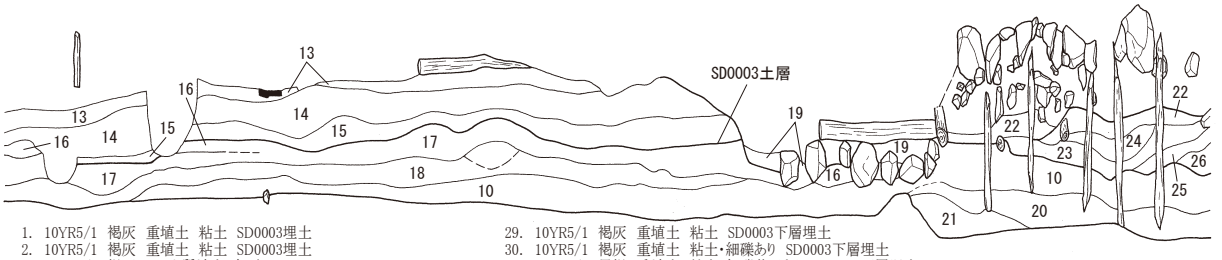
北－Ⅰ～Ⅲ区　土層断面図Ⅰ



1. 表土
2. N5/ 灰色壌質砂土 粗砂(土壌化している洪水砂)
3. 10YR5/1 褐灰色シルト質埴土 耕土
4. N5/ 灰色重埴土 炭粒含むシルト質極細砂
5. 10YR5/1 褐灰色シルト質埴土 瓦・砂礫含むシルト質極細砂
6. N5/ 灰色重埴土 炭粒若干含むシルト 粘性あり
7. N5/ 灰色シルト質埴土 粘土に近い
8. 10YR5/1 褐灰色シルト質埴土 粗砂・細礫混じり極細砂
9. 10YR5/1 褐灰色シルト質重埴土 細礫少量含むシルト
10. N5/ 灰色重埴土 径5cm程度の礫含む マンガン多く含む
11. 10YR5/1 褐灰色重埴土 粘土に近い
12. 10層の下半 マンガン少ない
13. 7.5Y5/1 灰色砂質壌土 極細砂やや粒子粗い
14. 3・7と 同じ Mn含む 間に鉄分 土壌化する
15. 3と同じ、やや砂多い
16. 10YR5/1 灰褐色シルト質埴土 粗砂・細礫若干含む
21の谷部への流れ込みと考えられる
17. 10YR6/1 灰褐色砂質埴壌土 粗砂多い
18. 10YR7/2 にぶい黄橙色シルト質埴壌土 細砂多い
19. 7と同じ極細砂質シルト
20. 5・19と同じ やや土壌化した暗調なシルト
21. 17と同じ 砂礫Ⅰ
22. 10YR4/1 褐灰色重埴土 粘土に近く礫含む
23. 2.5Y4/1 黄灰色シルト質埴土 粗砂若干含む
24. 焼土層
25. 2.5Y5/1 黄灰色シルト質埴壌土 炭粒若干含む 粘土に近い
26. 2.5Y6/3 にぶい黄色壌質砂土 細砂含む 径3cm程度の礫含む
27. 7.5YR6/8 橙色シルト質埴土 粘土に近い(10YR7/2のブロック含む)
28. 2.5Y5/1 黄灰色シルト質埴土 細砂含む 径5cmの礫含む
29. 28と同じ 地山ブロック入る
30. 10YR7/8 黄橙色砂壌土 粗砂 径3cm程度の礫含む
31. 10YR2/1黒褐細砂混じりシルト質壌土 煉瓦・遺物多量に包含する
32. 2.5Y8/6 黄粘土(土間か)
33. 5YR5/1褐灰粗砂混じりシルト質埴壌土
34. 5YR5/1褐灰粗砂混じりシルト質埴壌土 4層と同一
35. 10BG6/1青灰粗砂 瓦片・焼土多量に含む
36. 2.5YR5/6 明褐細砂 若干粗砂を含む焼土層
37. 10R5/8 赤 細砂を含む壌質砂土 焼土層
38. 2.5YR5/4 にぶい赤褐 粗砂混じり壌質砂土 径8cm程度の礫含む
39. 2.5YR5/6 明褐粗砂混じり砂壌土
40. 5B6/1 青灰粗砂混じり砂質壌土 焼土含む
41. 7.5YR5/1 褐灰粗砂 井戸埋土 瓦片、径10cm程度の礫密に含む
42. 7.5YR4/1 褐灰細砂混じりシルト質埴壌土
43. 10YR4/3 にぶい黄橙細砂混じりシルト質埴壌土 炭粒含む
44. 10YR4/3 にぶい黄橙細砂混じりシルト質埴壌土 小礫含む
45. 10YR6/2 灰黄褐砂質埴壌土 黄色粘土含む
46. 7.5YR4/1 褐灰粗砂・礫混じりシルト質埴壌土
47. 7.5YR6/1 褐灰細砂混じりシルト質埴壌土
48. 7.5YR4/1 褐灰粗砂・礫混じりシルト質埴壌土 細砂と若干の粗砂含む
49. 10YR7/8 黄橙シルト質埴土 細砂、
一部10 YR5/2灰黄褐シルトブロックを含む
50. 49と比べ10 YR5/2灰黄褐シルトブロックが少ない
51. 10YR7/6 明黄褐シルト質埴土
微砂の均一層に一部10 YR5/2灰黄褐シルトブロックを含む
52. 2.5Y7/4 浅い黄シルト質埴土 細砂・焼土若干含む 径3cmの細礫あり
53. 10YR7/3 にぶい黄橙細砂 焼土粒若干含む
54. 10YR7/3 にぶい黄橙細砂 若干土壌化している
55. 10YR7/3 にぶい黄橙細砂 遺構面を構成する
56. 2.5Y6/2 灰黄色砂壌土 粗砂、
一部細砂のブロック含み縞状 鉄分含む
57. 礫層
58. 旧表土(土壌層)
59. 整地層(18世紀以降)
60. 黄褐礫混じりシルト(内堀SD01埋土 中層)
61. 暗黒灰中礫混じりシルト(内堀SD01埋土 下層)
62. 撹乱
63. 青灰シルト～黒色シルト(内堀SD01埋土 上層)明治以降
64. 暗褐小礫混じり砂質シルト(土壌層)
65. 暗褐中礫混じり粗砂(埋め土)
66. 暗黒灰シルト(内堀SD01堆積土 下層)
67. 黒灰小礫～粗砂(内堀SD01堆積土 下層)
68. 10YR7/6 黄橙シルト質壌土 細砂・細礫大量に含む
69. 10YR5/2 灰黄褐シルト質壌土 細砂・細礫小量含む
70. 7.5YR5/1 褐灰重埴土 粘土均一層
70'. 10YR4/2 灰黄褐シルト質壌土 細砂含む、腐植土混じる
71. N4/ 灰砂土 シルト質、粗砂やや粗い
71'. 極細砂質
72. 7.5YR5/1 褐灰重埴土 粘土均一層
73. 10YR4/1 褐灰重埴土 粘土均一層
74. 10YR3/1 黒褐砂壌土 粗砂・細礫多量に含む
径5cm内外の円礫多く含む
75. 10YR4/1 褐灰重埴土 粘土均一層、60と比べ礫少ない
堀底のシルト堆積
76. 10 YR6/8 明黄褐シルト質埴土 細砂・粘土ブロックあり
77. 10YR3/3 暗褐シルト質埴壌土 小礫含む
78. 7.5Y3/1 オリーブ黒 重埴土 粘性強い
79. 2.5Y5/4 黄褐砂土 微細、粘土ブロック含む
80. 10 YR4/3 にぶい黄褐シルト質埴壌土 土壌化、小礫若干含む
81. 10 YR6/6 明黄褐砂土 極小の礫含む
82. 10 YR7/3 にぶい黄褐シルト質埴壌土 細砂含む やや土壌化
83. 10YR3/4 明褐シルト質壌土 粘性若干強い 土壌化
84. 橙灰白 砂質シルト(地山) 旧河道堆積物
85. 橙灰 シルト質砂礫 径1～4cmの亜角・亜円礫主、最大径8cmの礫含み、
マトリックスはシルト質砂 旧河道堆積物
85'. 黄灰砂 旧河道堆積物
86. 灰砂 径1cm以下の礫混入 旧河道堆積物
87. 黄褐砂礫 径2cm以下の亜角・亜円礫主、最大径6cmの礫、
マトリックスは粗砂 旧河道堆積物
87'. 橙灰シルト質砂 よく締まる 旧河道堆積物
88. 灰砂 旧河道堆積物
89. 橙灰砂礫(シルト混入) 径1～3cmの亜角・亜円礫主、最大径6cmの礫、
マトリックスは砂、締まりよし
90. 橙灰砂礫 径3～9cmの亜角・亜円礫主、最大径14cmの礫、
マトリックスは粗砂、締まりよし
91. 橙灰シルト質砂礫 径2～10cmの亜角～亜円礫主体 締まりよし
92. 褐色 砂 締まりよし
93. 褐色砂礫 径1～3cmの亜角～亜円礫主体
94. 褐灰色 砂 締まりよし
95. 灰色砂礫 径1～8cmの亜角～亜円礫主体
96. 褐色 砂
97. 褐色砂礫 径4～11cmの亜角～亜円礫主体、締まりよし

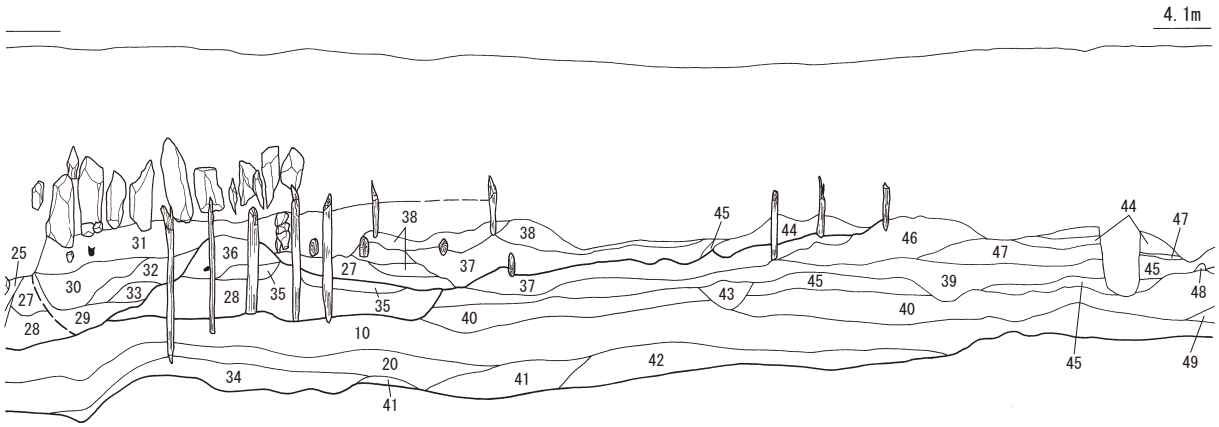
北－Ⅰ～Ⅲ区 土層断面図Ⅱ

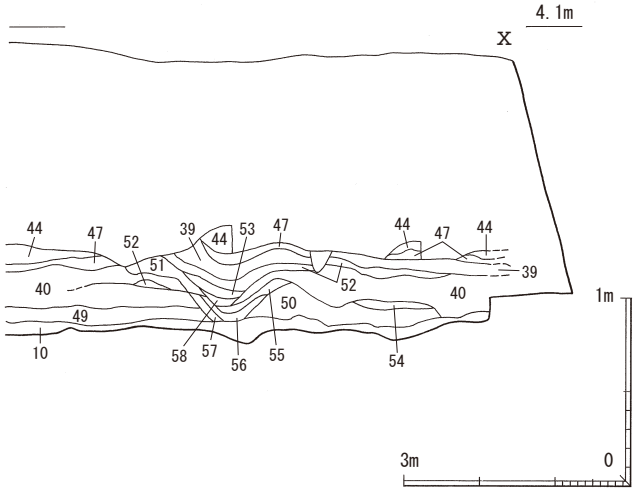




1. 10YR5/1 褐灰 重埴土 粘土 SD0003埋土
2. 10YR5/1 褐灰 重埴土 粘土 SD0003埋土
3. 10YR6/1 褐灰 シルト質埴土 細砂
4. 10YR5/1 褐灰 重埴土 粘土 SD0003埋土 2との間に砂層
5. 10YR5/1 褐灰シルト
6. 10YR5/1 褐灰シルト SD2003埋土
7. 10YR6/2 灰黄褐 軽埴土 細砂 茶灰色調、極細砂質
8. 10YR5/2 褐灰砂質埴土 粗砂層 (地山)
9. 5Y6/2 灰オリーブ砂壌土 粗砂・礫多し
10. 10YR5/1 褐灰シルト質埴土 細砂・礫多く含む(濁茶灰色混礫土)
11. 10YR5/1 褐灰シルト質埴土 細砂・礫多く含む(濁茶灰色混礫土) 10との間に茶灰シルトを挟む
12. 10YR5/1 褐灰 重埴土 粘土、炭含む SD0003埋土
13. 10YR5/1 褐灰 重埴土 SD0003上層埋土
14. 10YR5/1 褐灰 重埴土 SD0003上層埋土
15. 10YR5/1 褐灰 重埴土 灰色細砂を含む SD0003上層埋土
16. 10YR5/1 褐灰 重埴土 粘土 4層と同一
17. 10YR5/1 褐灰 重埴土 粘土
18. 10YR5/1 褐灰 重埴土 粘土
18'. 10YR5/1 褐灰 重埴土 粘土
19. 10YR5/1 褐灰 重埴土 粘土に近い
20. 7.5 YR 4/1 褐灰 重埴土
21. 2.5 Y 4/1 黄灰砂壌土 細砂層
22. 10YR4/1 褐灰シルト質埴土 細砂層 塵芥を含む
23. 10YR4/1 褐灰シルト質埴土
24. 10YR4/1 褐灰シルト質埴土
25. 10YR4/1 褐灰シルト質埴土 粘土層
26. 10YR4/1 褐灰シルト質埴土 粘土層
27. 10YR3/1 黒褐 重埴土 粘土層
28. 10YR3/1 黒褐 重埴土 粘土層
29. 10YR5/1 褐灰 重埴土 粘土 SD0003下層埋土
30. 10YR5/1 褐灰 重埴土 粘土・細礫あり SD0003下層埋土
31. 10YR3/1 黒褐 重埴土 粘土・細礫若干あり SD0003下層埋土
32. 10YR5/1 褐灰 重埴土 粘土・細礫あり SD0003下層埋土
33. 10YR5/1 褐灰 重埴土 粘土・細礫あり SD0003下層埋土
34. 10YR3/1 黒褐 重埴土 粘土
35. 10YR3/1 黒褐 重埴土 粘土層 SD1003埋土
36. 10YR4/1 褐灰シルト質埴土 細砂・細礫含む SD0003下層埋土
37. 10YR4/1 褐灰シルト質埴土 細砂・細礫含む SD0003下層埋土
38. 10YR3/1 黒褐 重埴土 粘土・細礫若干あり SD0003下層埋土
39. 10YR5/1 褐灰 重埴土 粘土(灰色シルト) 若干土壌化する
40. 10YR5/1 褐灰 重埴土 粘土(灰色シルト) 土壌化する
41. 10YR3/1 黒褐 重埴土 粘土
42. 10YR3/1 黒褐 重埴土 粘土 砂多し
43. 10YR5/1 褐灰 重埴土 粘土
44. 10YR5/1 褐灰シルト質埴土 粗砂・細礫含む
45. 10YR5/1 褐灰 重埴土 粘土 礫少量含む 鉄分集積する
46. 10YR5/1 褐灰 重埴土 細砂、やや粘土含む
47. 10YR5/1 褐灰 重埴土 粘土 礫少量含む
48. 10YR5/1 褐灰 重埴土 粘土(灰色シルト) 若干土壌化する
49. 10YR5/1 褐灰 重埴土 粘土(灰色シルト) 土壌化する
50. 10YR5/1 褐灰 重埴土 粘土(灰色シルト)
51. 10YR5/1 褐灰 重埴土 粘土(灰色シルト) 若干細礫含む
52. 10YR5/1 褐灰 重埴土 粘土(灰色シルト) 若干細礫含む
53. 10YR5/1 褐灰 重埴土 粘土(灰色シルト) 若干細礫含む
54. 10YR5/1 褐灰 重埴土 粘土(灰色シルト) 若干細礫含む
55. 10YR5/1 褐灰 重埴土 粘土(灰色シルト) 若干細礫含む
56. 10YR5/1 褐灰 重埴土 粘土(灰色シルト) 若干細礫含む
57. 10YR5/1 褐灰 重埴土 粘土(灰色シルト) 礫を含まない
58. 10YR5/1 褐灰 重埴土 粘土(灰色シルト) 若干細礫含む

北－Ⅲ－２区　南壁土層断面図Ⅰ

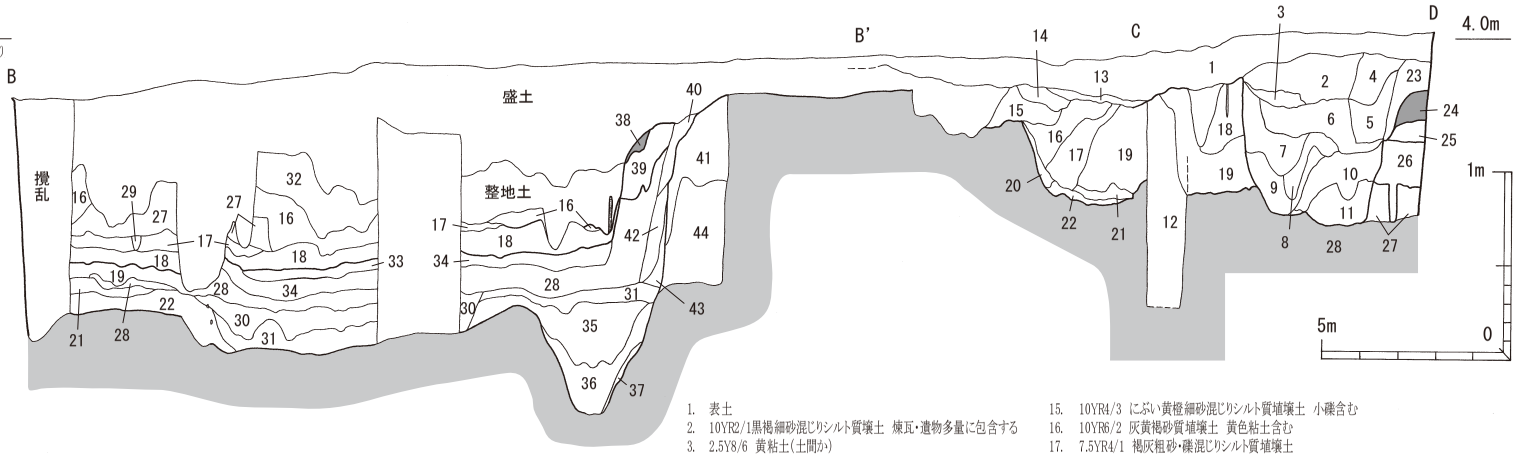




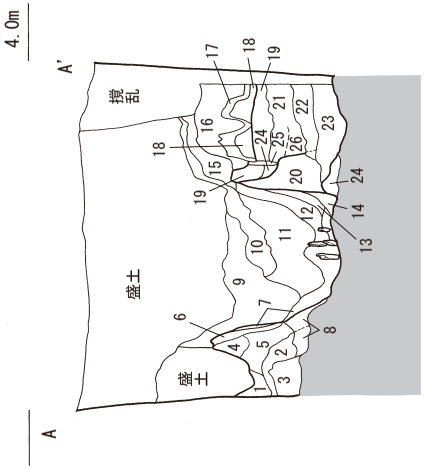
北－Ⅲ－２区　南壁土層断面図Ⅱ

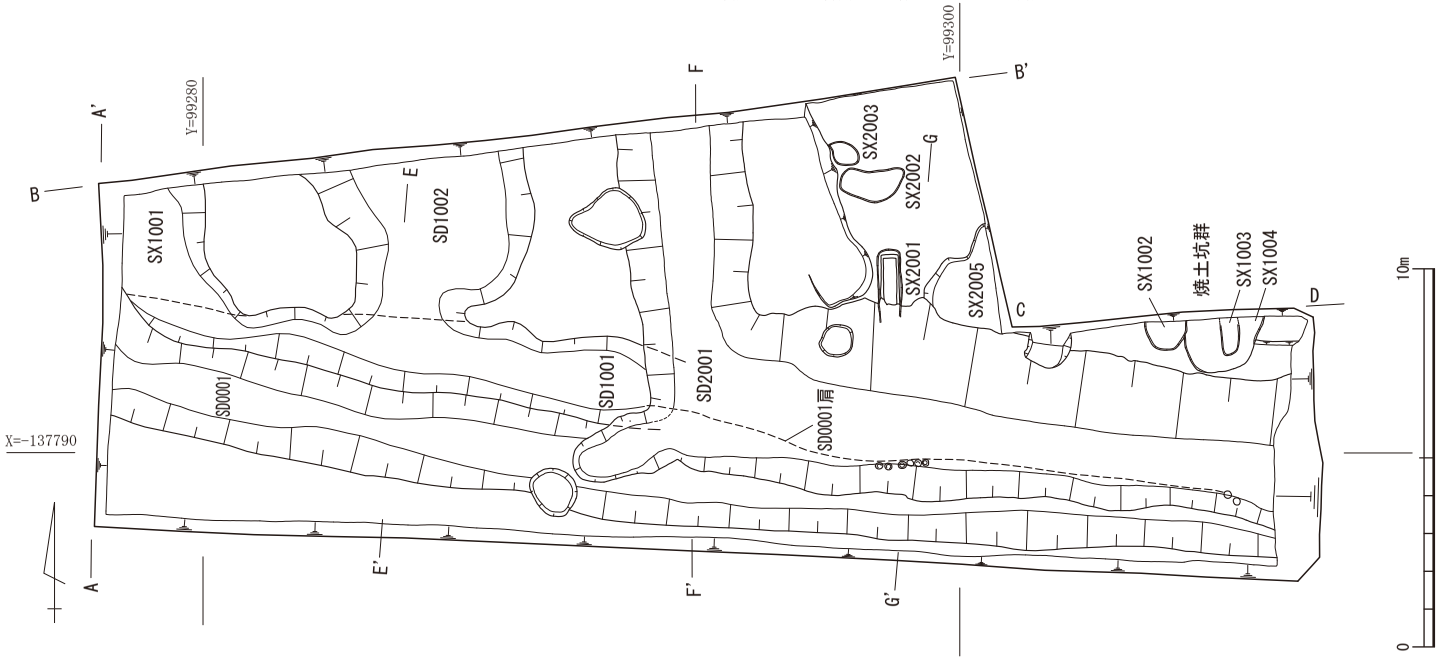
図版11

北ーⅠ区　上層・下層遺構全体図

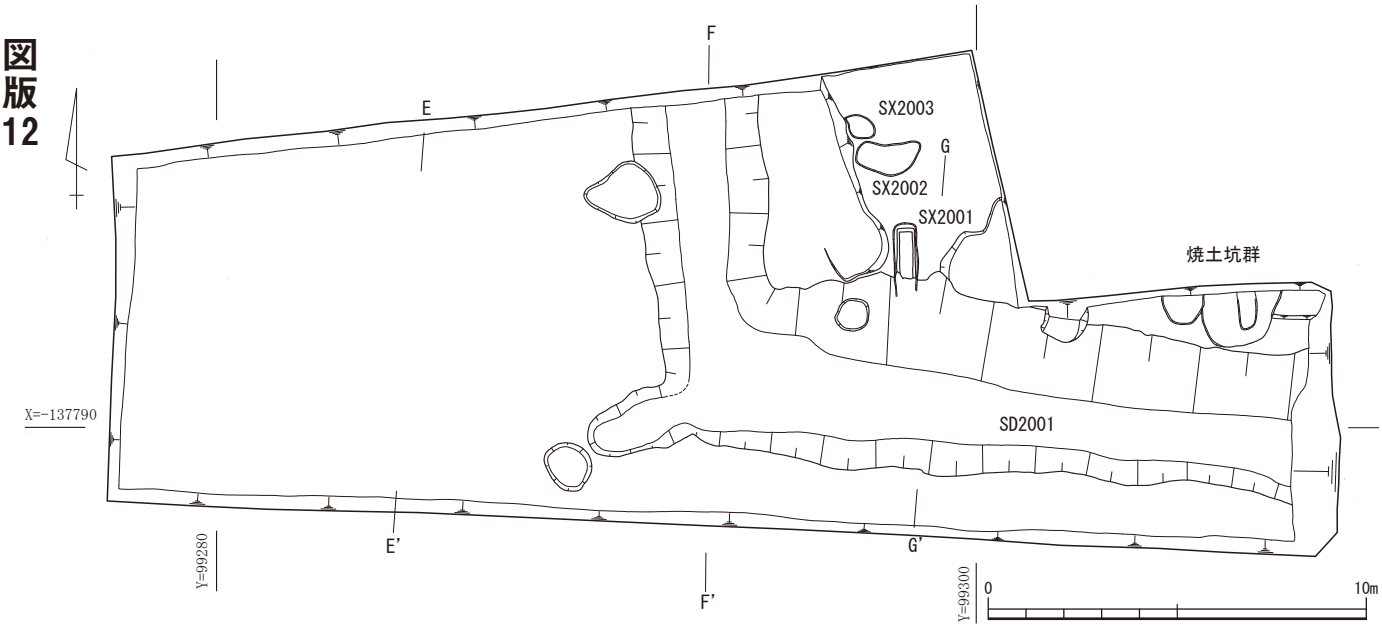


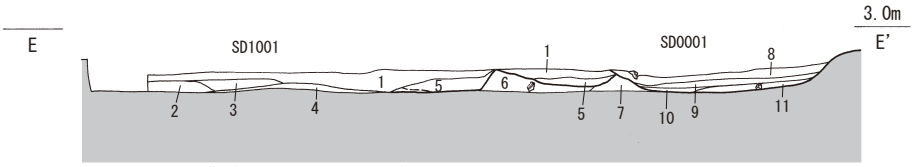
1. 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色 シルト質埴土(極細砂混じりシルト) 炭化物あり
2. 10Y5/1灰色 シルト質埴土 (シルト混じり細砂)
3. N5/ 灰色砂壌土 (粗砂)
4. 5Y5/1灰色シルト質埴壌土 炭化物・細砂含む(シルト質極細砂)
5. 4層と同一 鉄分含む(極細砂質シルト)
6. 7.5Y5/1灰色シルト質埴壌土 微砂・炭化物・瓦含む(シルト混じり極細砂)
7. N4/ 灰色重埴土(炭化物・含む 暗灰色調のシルト)
8. N6/ 灰色砂土(粗砂・瓦・径3～6cm礫含む シルト混じり中～細砂)
9. 10Y5/1灰色 シルト質埴土 (SD0001埋土)
10. 7.5Y5/1灰色シルト質埴壌土 炭化物若干含む
11. 7.5YR5/1灰色壌質砂土 微砂均一
12. 2.5GY6/1 オリーブ灰色壌質砂土 細砂均一
13. N4/ 灰色重埴土(炭化物・含む 粘土質)
14. N5/ 灰色重埴土 瓦・径5cm前後礫含む
15. 10YR7/6 明黄色褐砂壌土 粗砂・径10cm内外礫含む
16. N5/ 灰色壌質砂土 粗砂(土壌化している洪水砂)
17. 10YR5/1 褐灰色シルト質埴土 耕土
18. N5/ 灰色重埴土 炭粒含むシルト質極細砂
19. 10YR5/1 褐灰色シルト質埴土 瓦・砂礫含むシルト質極細砂
20. N5/ 灰色重埴土 炭粒若干含むシルト 粘性あり
21. N5/ 灰色シルト質埴土 粘土に近い
22. 10YR5/1 褐灰色シルト質埴土 粗砂・細礫混じり極細砂
23. 10YR5/1 褐灰色シルト質重埴土 細礫少量含むシルト
24. N5/ 灰色重埴土 径5cm程度の礫含む マンガン多く含む
25. 10YR5/1 褐灰色重埴土 粘土に近い
26. 24層の下半 マンガン少ない
27. 7.5Y5/1 灰色砂質壌土 極細砂やや粒子粗い
28. 17・21と 同じ Mn含む 間に鉄分 土壌化する
29. 17と同じ、やや砂多い
30. 10YR5/1 灰褐色シルト質埴土 粗砂・細礫若干含む 21の谷部への流れ込みと考えられる
31. 10YR6/1 灰褐色砂質埴壌土 粗砂多い
32. 10YR7/2 にぶい黄橙色シルト質埴壌土 細砂多い
33. 21と同じ極細砂質シルト
34. 19・33と同じ やや土壌化した暗調なシルト
35. 31と同じ 砂礫Ⅰ
36. 10YR4/1 褐灰色重埴土 粘土に近く礫含む
37. 2.5Y4/1 黄灰色シルト質埴土 粗砂若干含む
38. 焼土層
39. 2.5Y5/1 黄灰色シルト質埴壌土 炭粒若干含む 粘土に近い
40. 2.5Y6/3 にぶい黄色壌質砂土 細砂含む 径3cm程度の礫含む
41. 7.5YR6/8 橙色シルト質埴土 粘土に近い(10YR7/2のブロック含む)
42. 2.5Y5/1 黄灰色シルト質埴土 細砂含む 径5cmの礫含む
43. 42と同じ 地山ブロック入る
44. 10YR7/8 黄橙色砂壌土 粗砂 径3cm程度の礫含む



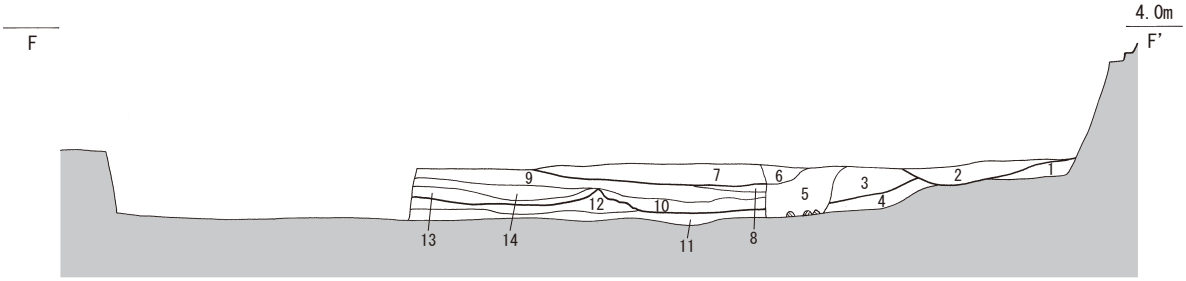


1. 表土
2. 10YR2/1黒褐細砂混じりシルト質埴土 煉瓦・遺物多量に包含する
3. 2.5Y8/6 黄粘土(土間か)
4. 5YR5/1褐灰粗砂混じりシルト質埴壌土
5. 5YR5/1褐灰粗砂混じりシルト質埴壌土 4層と同一
6. 10BG6/1青灰粗砂 瓦片・焼土多量に含む
7. 2.5YR5/6 明褐細砂 若干粗砂を含む焼土層
8. 10R5/8 赤 細砂を含む壌質砂土 焼土層
9. 2.5YR5/4 にぶい赤褐 粗砂混じり壌質砂土 径8cm程度の礫含む
10. 2.5YR5/6 明褐粗砂混じり砂壌土
11. 5B6/1 青灰粗砂混じり砂質壌土 焼土含む
12. 7.5YR5/1 褐灰粗砂 井戸埋土 瓦片、径10cm程度の礫密に含む
13. 7.5YR4/1 褐灰細砂混じりシルト質埴壌土
14. 10YR4/3 にぶい黄橙細砂混じりシルト質埴壌土 炭粒含む
15. 10YR4/3 にぶい黄橙細砂混じりシルト質埴壌土 小礫含む
16. 10YR6/2 灰黄褐砂質埴壌土 黄色粘土含む
17. 7.5YR4/1 褐灰粗砂・礫混じりシルト質埴壌土
18. 7.5YR6/1 褐灰細砂混じりシルト質埴壌土
19. 7.5YR4/1 褐灰粗砂・礫混じりシルト質埴壌土 細砂と若干の粗砂含む
20. 10YR7/8 黄橙シルト質埴土 細砂、一部10 YR5/2灰黄褐シルトブロックを含む
21. 20と比べ10 YR5/2灰黄褐シルトブロックが少ない
22. 10YR7/6 明黄褐シルト質埴土 微砂の均一層に一部10 YR5/2灰黄褐シルトブロックを含む
23. 2.5Y7/4 浅い黄シルト質埴土 細砂・焼土若干含む 径3cmの細礫あり
24. 10YR7/3 にぶい黄橙細砂 焼土粒若干含む
25. 10YR7/3 にぶい黄橙細砂 若干土壌化している
26. 10YR7/3 にぶい黄橙細砂 遺構面を構成する
27. 2.5Y6/2 灰黄色砂壌土 粗砂、一部細砂のブロック含み縞状 鉄分含む
28. 礫層

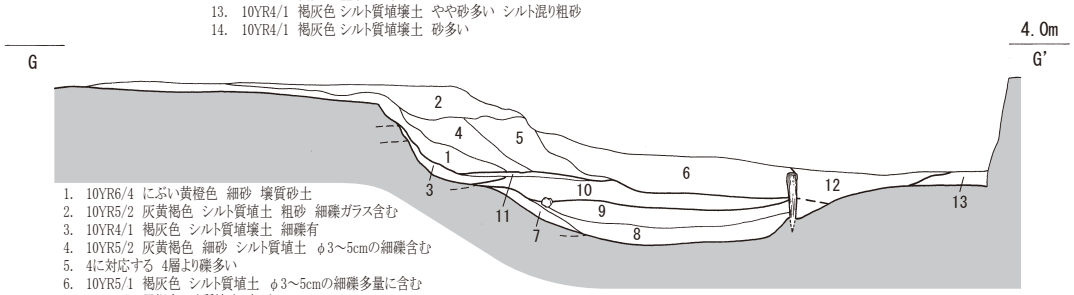




1. 2.5Y5/1 黄灰色 重埴土 酸化鉄粒化3%程含む(SD1001埋土)
2. 2.5Y5/1 黄灰色 重埴土 酸化鉄粒化3%程含む 2.5Y7/1 灰白色 重埴土ブロック3%程含む(SD1001埋土)
3. 10YR4/3 褐灰色 重埴土 酸化鉄粒化含む(SD1001埋土)
4. 2.5Y7/1 灰白色 砂土φ1～2mmの均一層(SD1001埋土)
5. 10YR4/1 褐灰色 重埴土(SD1001埋土)
6. 10YR4/2 褐灰色 重埴土 極細砂混りシルト(畦畔か)
7. 10YR5/1 褐灰色 重埴土 φ3cm程度の礫含む やや砂多い
8. 10YR3/1 黒褐色 重埴土 有機物若干含む (SD0001埋土)
9. 10YR3/1 黒褐色 重埴土 やや砂多い(SD0001埋土)
10. 10Y6/1 灰色 φ1～2mmの砂土(SD0001埋土)
11. 5Y6/2 灰オリーブ色 φ1～2mmの砂土(SD0001埋土)



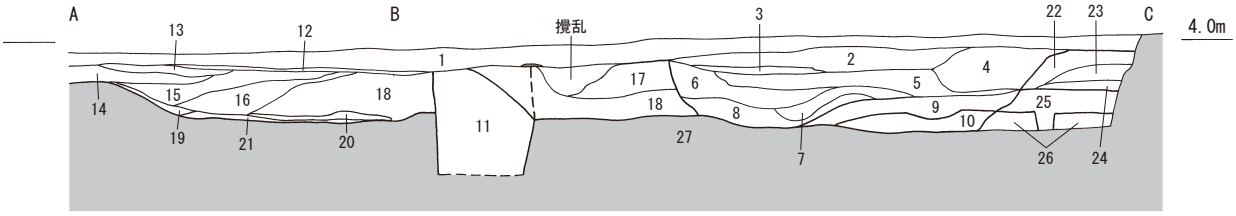
1. 5Y5/1 灰色 砂壌土
2. 7.5Y4/1 灰色 砂土 φ3～10cmの礫含む 遺物有(SD0001下半)
3. 7.5YR2/1 黒色 シルト質埴土 φ3～10cmの礫多量に含む
4. 10BG5/1 青灰色 砂土 φ1mmの均一砂層
5. 10YR4/1 褐灰色 シルト質埴壌土 φ10cmの礫含む 底部に護岸用材木有
6. 10YR4/1 褐灰色 シルト質埴壌土 礫なし
7. 10YR3/5 暗褐色 シルト質埴壌土 木片と炭化物有(水田土壌化)
8. 10YR3/5 暗褐色 シルト質埴壌土
9. 10YR4/1 褐灰色 壌質砂土 φ3～5mmの細砂 シルトブロック有(盛土)
10. 10YR4/1 褐灰色 シルト質埴土 φ3cm以下の礫を若干含む
11. 10YR4/1 褐灰色 シルト質埴土 やや砂多い 礫を多く含む φ5cm内外の円礫密
12. 10YR4/1 褐灰色 重埴土 中砂混りシルト
13. 10YR4/1 褐灰色 シルト質埴壌土 やや砂多い シルト混り粗砂
14. 10YR4/1 褐灰色 シルト質埴壌土 砂多い



1. 10YR6/4 にぶい黄橙色 細砂 壌質砂土
2. 10YR5/2 灰黄褐色 シルト質埴土 粗砂 細礫ガラス含む
3. 10YR4/1 褐灰色 シルト質埴壌土 細礫有
4. 10YR5/2 灰黄褐色 細砂 シルト質埴土 φ3～5cmの細礫含む
5. 4に対応する 4層より礫多い
6. 10YR5/1 褐灰色 シルト質埴土 φ3～5cmの細礫多量に含む
7. 10YR3/1 黒褐色 砂質壌土 粗砂
8. N3/ 暗灰色 重埴土 細砂で粘土多い(SD2001下半)
9. 10YR4/1 褐灰色 砂質埴壌土 粗砂粘土(SD2001上半)
10. 2.5Y5/1 黄灰色 砂質埴壌土 細砂 Fe含む(SD1001)
11. 10YR4/1 褐灰色 重埴土 以下粘土に近い
12. 5Y4/1 灰色 砂壌土 細礫やや有
13. N4/ 暗灰色 壌質砂土 粗砂・細礫含む

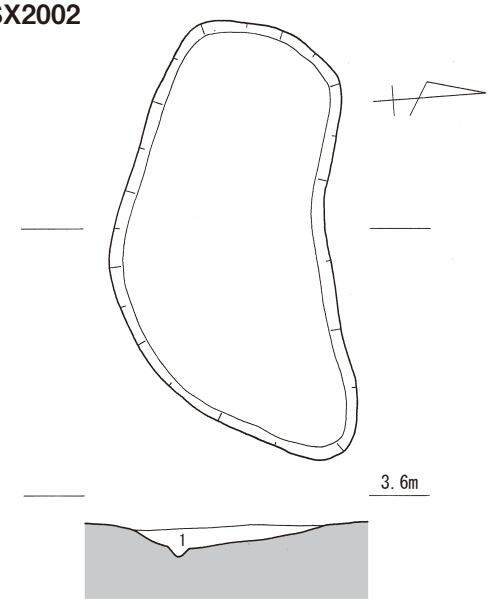
0 2m

北－Ⅰ区　下層遺構全体図・土層断面図



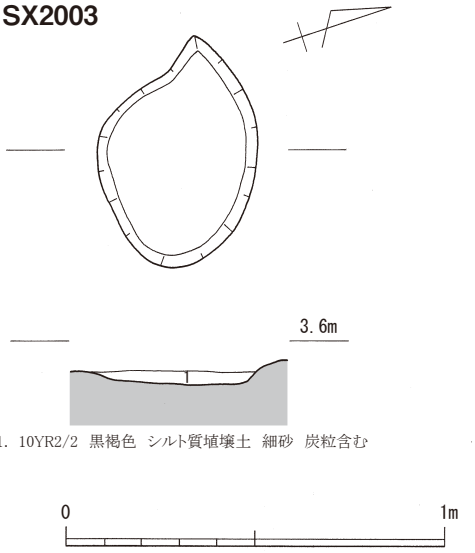
1. 表土
2. 10YR2/1 黒褐色 細砂混りシルト質壌土
   煉瓦・遺物多量に包含する
3. 2.5Y8/6 黄色 粘土(土間か)
4. 5YR5/1 褐灰色 粗砂混りシルト質壌土
5. 10BG6/1 青灰色 粗砂 瓦片・焼土多量に含む
6. 2.5YR5/6 明褐色 細砂 若干粗砂含む焼土層
7. 10R5/8 赤色 細砂含む壌質砂土 焼土層
8. 2.5YR5/4 にぶい赤褐色 粗砂混り壌質砂土
   φ8cm程度の礫含む
9. 2.5YR5/6 明褐色 粗砂混り砂壌土
10. 5B6/1 青灰色 粗砂混り砂質壌土 焼土含む
11. 7.5YR5/1 褐灰色 粗砂 井戸埋土 瓦片、
    φ10cm程度の礫密に含む
12. 7.5YR4/1 褐灰色 細砂混りシルト質埴壌土
13. 10YR4/3 にぶい黄橙色 細砂混りシルト質埴壌土 炭粒含
14. 10YR4/3 にぶい黄橙色 細砂混りシルト質埴壌土 小礫含む
15. 10YR6/2 灰黄褐色 砂質埴壌土 黄色粘土含む(SX2005埋土)
16. 7.5YR4/1 褐灰色 粗砂・礫混りシルト質埴壌土(SX2005埋土)
17. 7.5YR6/1 褐灰色 細砂混りシルト質埴壌土(SX2005埋土)
18. 7.5YR4/1 褐灰色 粗砂・礫混りシルト質埴壌土
    細砂と若干の粗砂含む(SX2005埋土)
19. 10YR7/8 黄橙色 シルト質埴土 細砂、一部10YR5/2
    灰黄褐色シルトブロック含む(SX2005埋土)
20. 20.と比べ10YR5/2 灰黄褐色シルトブロックが少ない(SX2005埋土)
21. 10YR7/6 明黄褐色 シルト質埴土 微砂の均一層に一部10YR5/2
    灰黄褐色シルトブロック含む(SX2005埋土)
22. 2.5Y7/4 浅黄色 シルト質埴土 細砂・焼土若干含む
    φ3cmの細礫あり
23. 10YR7/3 にぶい黄橙色 細砂 焼土粒若干含む
24. 10YR7/3 にぶい黄橙色 細砂 若干土壌化している
25. 10YR7/3 にぶい黄橙色 細砂 遺構面を構成する
26. 2.5Y6/2 灰黄色 砂壌土 粗砂、
    一部細砂のブロック含み縞状 酸化鉄含む
27. 礫層

SX2002



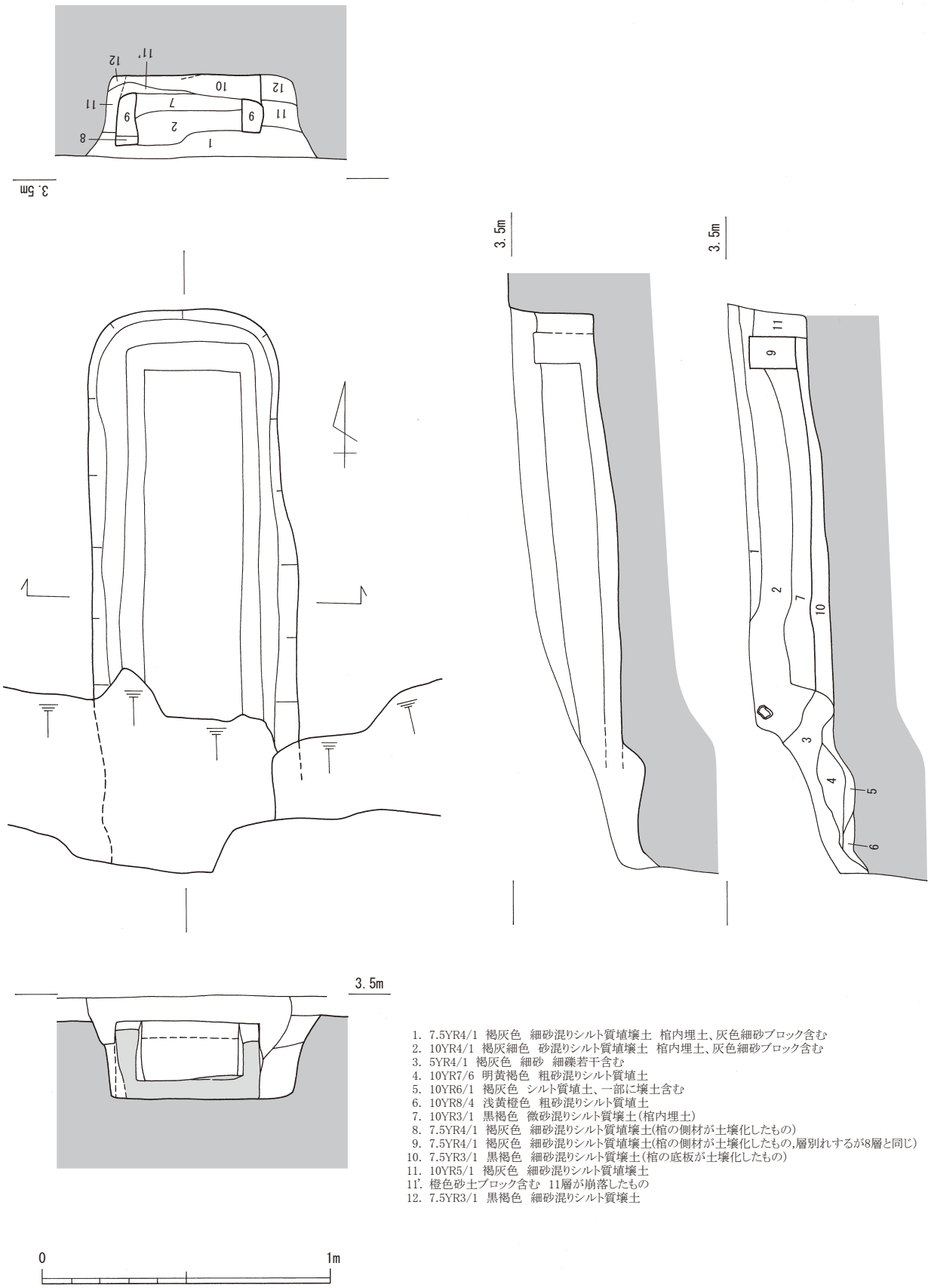
1. 10YR2/2 黒褐色 シルト質埴壌土 細砂 炭粒含む

SX2003



1. 10YR2/2 黒褐色 シルト質埴壌土 細砂 炭粒含む

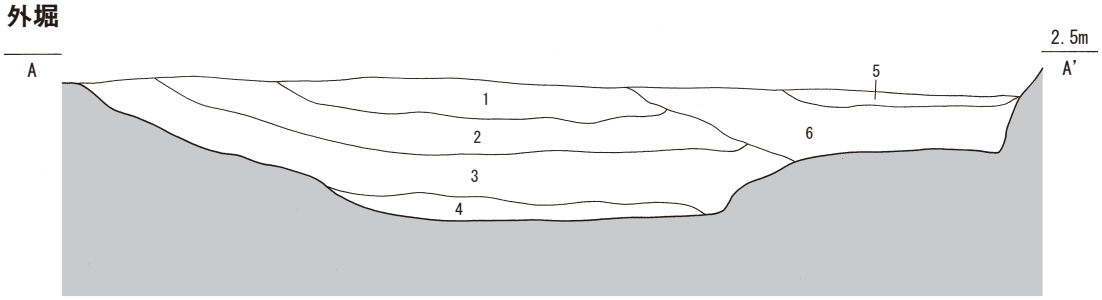
北ーⅠ区 下層遺構図



1. 7.5YR4/1 褐灰色 細砂混りシルト質埴壌土 棺内埋土、灰色細砂ブロック含む
2. 10YR4/1 褐灰細色 砂混りシルト質埴壌土 棺内埋土、灰色細砂ブロック含む
3. 5YR4/1 褐灰色 細砂 細礫若干含む
4. 10YR7/6 明黄褐色 粗砂混りシルト質埴土
5. 10YR6/1 褐灰色 シルト質埴土、一部に壌土含む
6. 10YR8/4 浅黄橙色 粗砂混りシルト質埴土
7. 10YR3/1 黒褐色 微砂混りシルト質壌土(棺内埋土)
8. 7.5YR4/1 褐灰色 細砂混りシルト質埴壌土(棺の側材が土壌化したもの)
9. 7.5YR4/1 褐灰色 細砂混りシルト質埴壌土(棺の側材が土壌化したもの,層別れするが8層と同じ)
10. 7.5YR3/1 黒褐色 細砂混りシルト質壌土(棺の底板が土壌化したもの)
11. 10YR5/1 褐灰色 細砂混りシルト質埴壌土
11'. 橙色砂土ブロック含む 11層が崩落したもの
12. 7.5YR3/1 黒褐色 細砂混りシルト質壌土

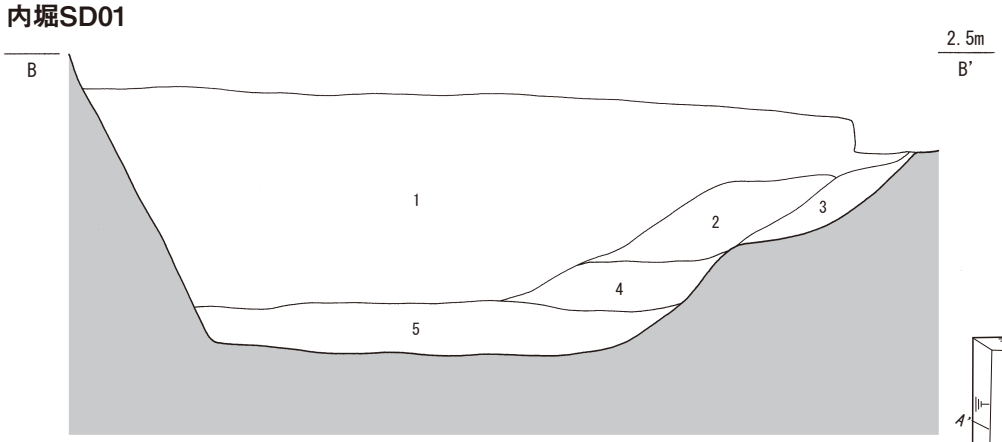
北ーⅠ区　木棺墓 SX2001

外堀

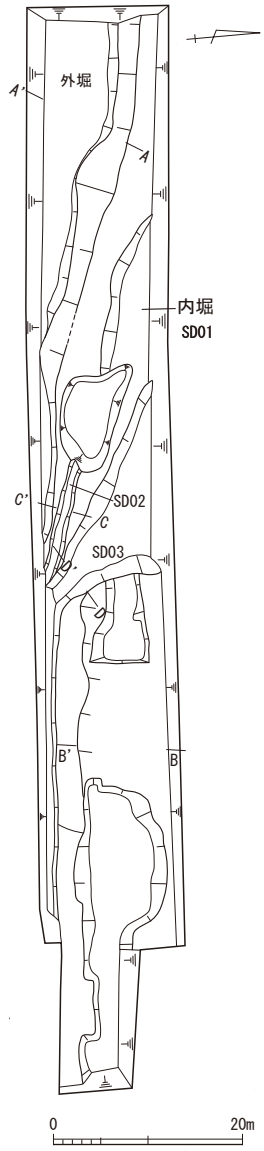


1. 暗褐灰色　中礫混りシルト(埋土)
2. 褐灰色　中礫混りシルト(埋土)
3. 暗灰色　シルト混り中礫～粗砂(洪水)
4. 黒灰色　シルト(自然堆積)
5. 黒灰色　シルト(極めて新しい埋土)
6. 暗灰色　シルト混り中砂～中礫(埋土)

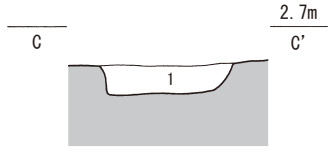
内堀SD01



1. 盛土(埋土)
2. 灰色　砂礫　シルト混り(埋土)
3. 暗灰色　シルト(埋土)
4. 灰色　中礫混り粗砂(埋土)
5. 黒灰色　中礫混り砂質シルト(埋土)

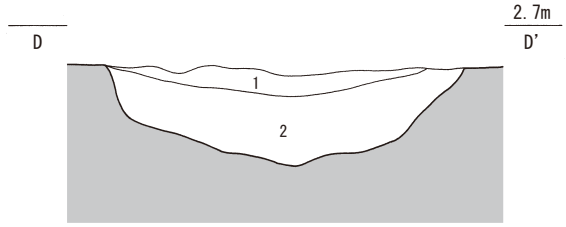


SD02



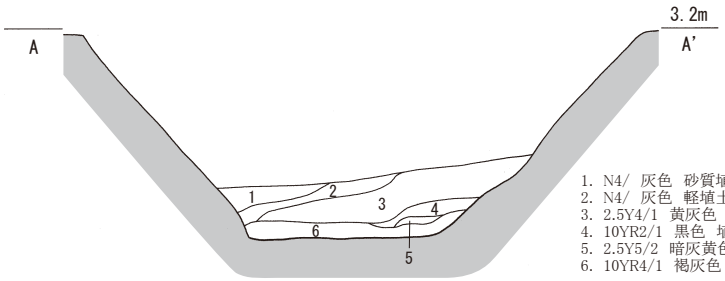
1. 黒色　シルト混り粗砂(埋土)

SD03

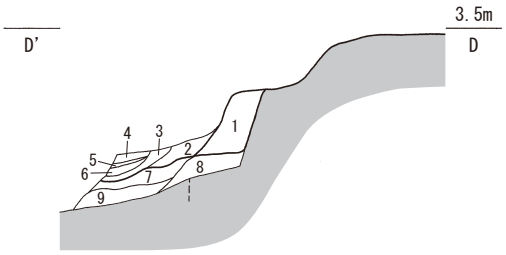


1. 青灰色　シルト混り黒灰色砂質シルト(埋土)
2. 黒灰色　礫混りシルト(埋土)

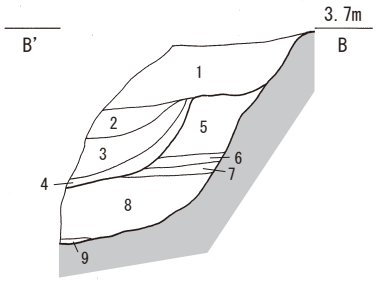
北－Ⅱ区　全体図・土層断面図



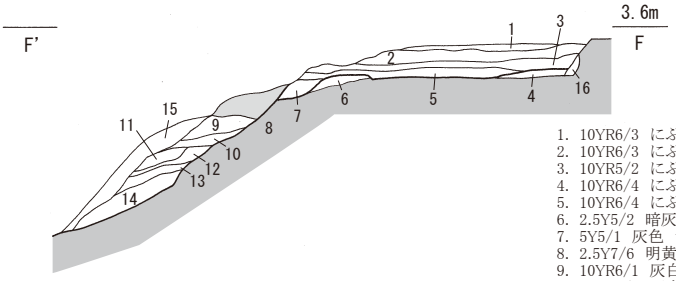
1. N4/ 灰色 砂質埴土 粗砂多く上層は細砂広がる
2. N4/ 灰色 軽埴土 微砂 φ1～3cmの礫混じる
3. 2.5Y4/1 黄灰色 砂質埴壌土 粗砂 細礫若干混じる
4. 10YR2/1 黒色 埴壌土 植生痕有 粘土に近い
5. 2.5Y5/2 暗灰黄色 シルト質埴土 粘土に近い
6. 10YR4/1 褐灰色 シルト質埴土 粘土に近い



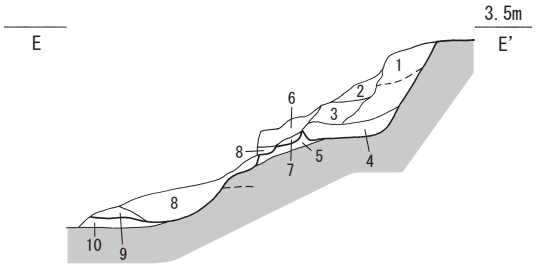
1. 2.5Y1/5 黄白色 軽埴土 粗砂とφ5cmの粗砂含む
2. 10YR2/5 灰黄褐色 シルト質埴土 細砂 若干粗砂有
3. 10YR3/4 にぶい黄褐色 シルト質埴土 細砂
4. 7.5YR1/2 黒色 埴壌土 細砂 植生有
5. 7.5YR2/4 灰褐色 シルト質埴土 若干粘土に近い
6. 5Y2/5 灰オリーブ色 重埴土 若干細砂有
7. 10Y1/6 灰色 砂土 若干粘土含む
8. 10YR6/8 明黄褐色 砂土 荒い粗砂
9. 10BG5/1 青灰色 砂土 細砂均一



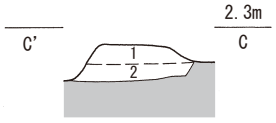
1. 10YR4/1 褐灰色 重埴土 粘土の均一層
2. 10YR5/2 灰黄褐色 シルト質壌土 細砂・細礫を少量含む
3. 10YR4/2 灰黄色 シルト質壌土 細砂・植生あり 腐植土混り
4. N4/ 灰色 砂土 粗砂やや多い
5. 10YR4/1 褐灰色 シルト質埴土 粘土に近い
6. 10YR4/1 褐灰色 シルト質埴土 細礫若干含む
7. 10YR4/1 褐灰色 シルト質埴土 φ5cm程度の礫若干含む
8. 10YR3/1 黒褐色 砂壌土 粗砂・細礫多量に含む φ5cm内外円礫多数
9. 10YR4/2 褐灰色 重埴土 粘土均一層 礫やや少ない



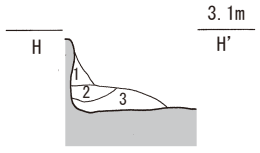
1. 10YR6/3 にぶい黄橙色 シルト質埴土 細砂 小礫若干含む
2. 10YR6/3 にぶい黄橙色 炭若干含む 細砂
3. 10YR5/2 にぶい黄褐色 炭若干含む 微砂
4. 10YR6/4 にぶい黄橙色 軽埴土 微砂
5. 10YR6/4 にぶい黄橙色 黄色ブロック若干含む
6. 2.5Y5/2 暗灰黄色 シルト質埴土 若干粘土混じる
7. 5Y5/1 灰色 シルト質埴土 橙色ブロック混じる 細砂
8. 2.5Y7/6 明黄褐色 軽埴土 粘土に近い
9. 10YR6/1 灰白色 砂質埴壌土 細砂 酸化鉄若干混じる
10. 10YR6/1 灰白色 粗砂 粘土若干含む
11. 10YR4/1 褐灰色 埴壌土 細砂 若干細礫含む
12. 10YR6/1 灰白色 砂壌土 細砂 若干粘土混じる
13. 10YR5/1 褐灰色 砂壌土 細砂 酸化鉄含む
14. 10YR5/1 褐灰色 砂壌土 粗砂に細礫と粘土混じる
15. 10YR5/1 褐灰色 壌質砂土 細砂 細礫若干混じる
16. 10YR5/3 にぶい黄褐色 砂壌土 粗砂に礫多く含む 少量粘土含む



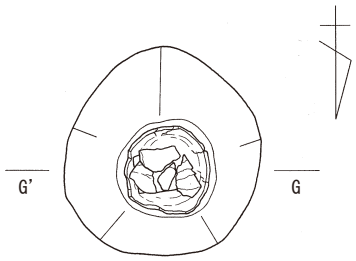
1. 2.5Y2/5 灰黄色 シルト質細砂 黄色ブロック混じる
2. 2.5Y2/5 灰黄色 細砂シルト質埴土
3. 2.5Y1/6 黄灰色 シルト質埴土 細砂 黄色ブロック混じる
4. 10YR1/5 褐灰色 重埴土 粘土に粗砂若干含む
5. 10YR1/7 灰白色 砂質埴土 粗砂と粘土混じる
6. 10YR1/5 褐灰色 シルト質埴土
7. 10YR1/4 褐灰色 シルト質埴土
8. 7.5YR4/1 褐灰色 シルト質埴土 細砂 壌土ブロック含む
9. 5GY7/1 明オリーブ灰色 砂土
10. 10YR5/3 にぶい黄褐色 シルト質埴土 砂土に近い 細砂に粗砂混り

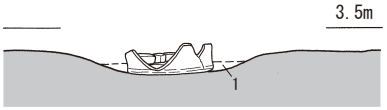


1. 2.5Y5/2 黄褐色 砂土 粗砂 φ10cm程の礫を多量に含む
2. 5BG4/1 暗青灰色 砂土 粗砂 φ10cm程の礫を多量に含む

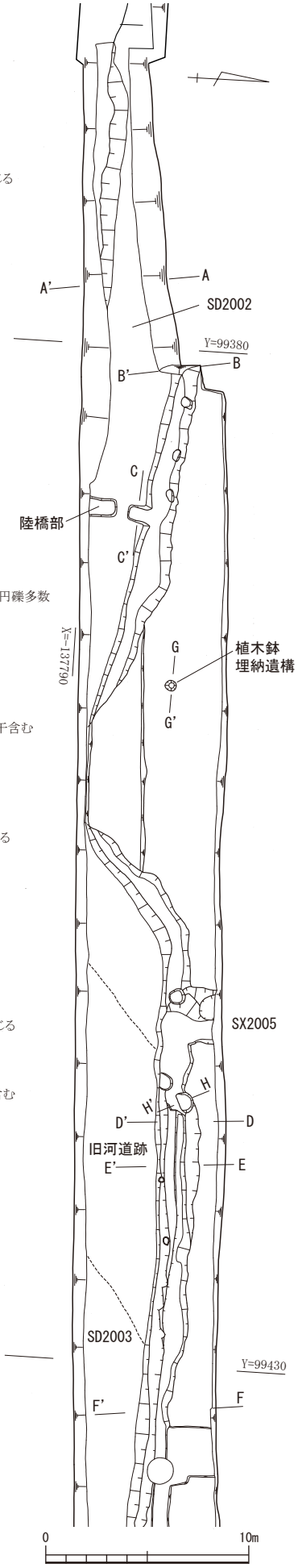


1. 2.5Y5/1 黄灰色 シルト質埴土 細砂 黄色粘土含む
2. 2.5Y5/1 黄灰色 重埴土 微砂 酸化鉄の浸食有
3. 2.5Y4/1 黄灰色 粘土 礫若干含むφ5cm程度





1. 10YR2/1 黒色シルト質壌土 細砂均一(埋土)



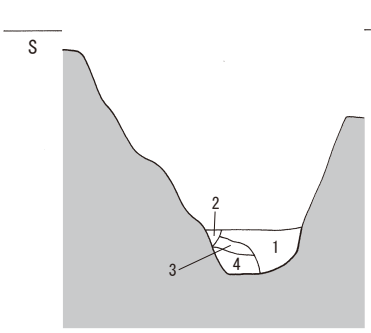
0 2m

SD2002・SD2003 各断面

0 50cm

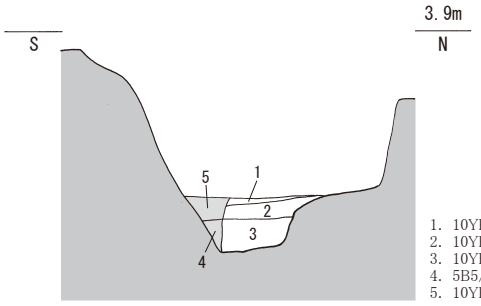
植木鉢埋納遺構

北ーⅢ区 下層遺構Ⅰ



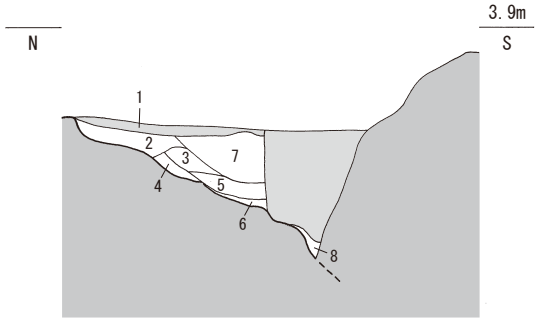
1. 10YR3/1 黒褐色 シルト質埴壌土 遺物有
2. 2.5Y4/1 黄灰色 埴壌土 細砂・細石含む
3. 10YR7/4 にぶい黄橙色 重埴土 粘土に近い(SD2003埋土)
4. 10YR5/1 褐灰色 重埴土 粘土(SD2003埋土)

SD2003・sec8 東壁



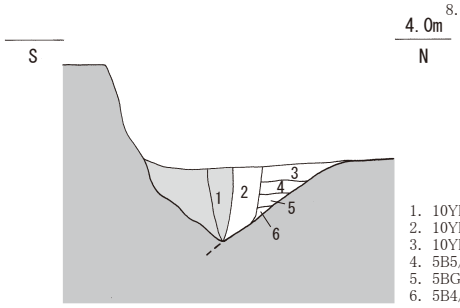
1. 10YR5/1 褐灰色 シルト質埴土 細砂 10cm大の礫・瓦含む
2. 10YR5/2 灰黄褐色 重埴土 微砂 粘土に近い
3. 10YR3/1 黒褐色 シルト質埴壌土 細砂 遺物含む
4. 5B5/1 青灰色 重埴土 粘土に近い(攪乱土)
5. 10YR4/1 褐灰色 シルト質埴壌土 細砂 小石含む(攪乱土)

SD2003・sec9 東壁



1. 7.5YR7/1 褐灰色 シルト質埴壌土 細砂 細石含む(攪乱土)
2. 7.5YR7/1 褐灰色 シルト質埴土 φ2～3cmの細石多い(SD2003埋土)
3. 7.5YR5/1 褐灰色 微砂 重埴土 硬い(SD2003埋土)
4. 7.5YR4/1 褐灰色 シルト質細砂 やや粗砂
5. 10YR5/1 褐灰色 重埴土 シルト(SD2003埋土)
6. 2.5Y5/2 暗灰黄色 砂土(地山) 粗砂 岩板(SD2003埋土)
7. 10YR4/2 灰黄褐色 細砂 シルト質埴土 φ5cm大の礫混じる
8. 10YR2/1 黒色 粗砂 砂壌土

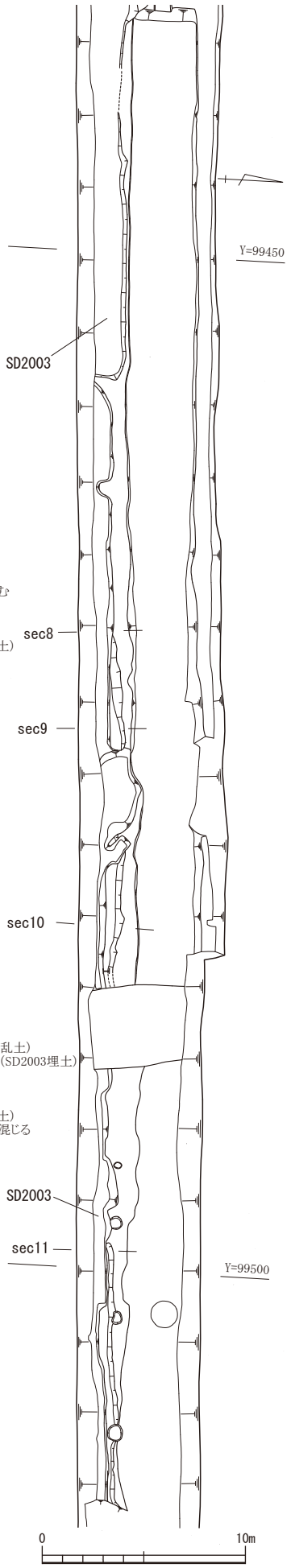
SD2003・sec10 西壁



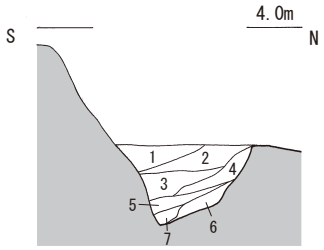
1. 10YR3/1 黒褐色 シルト質埴土(攪乱土)
2. 10YR5/1 褐灰色 シルト質埴土 微砂 シルトに近い
3. 10YR5/3 にぶい黄褐色 重埴土 細砂若干含む
4. 5B5/1 青灰色 重埴土 粘土に近い
5. 5BG5/1 青灰色 重埴土 粗砂混じる
6. 5B4/1 暗青灰色 重埴土 粗砂若干多い

SD2003・sec11 東壁

0 2m

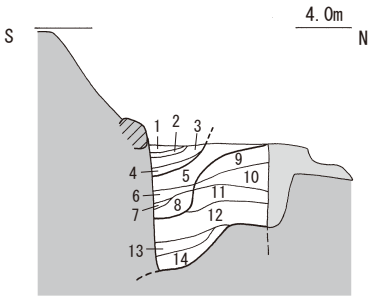


北ーⅢ区 下層遺構Ⅱ



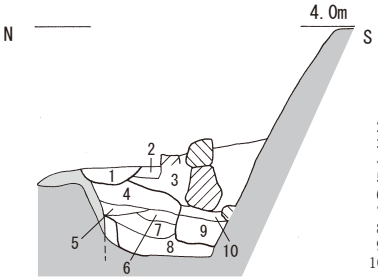
1. 10YR3/2 シルト質埴壌 細砂含む
2. 10YR5/3 にぶい黄褐色 重埴 微砂 粘土
3. 2.5Y5/1 黄灰色 重埴土 粘土
4. 2.5Y4/1 黄灰色 重埴土 細砂 若干砂混じる
5. N4/ 灰色 重埴土 粘土
6. 7.5Y4/1 灰色 重埴土 粘土 粗砂 φ5cm程度の礫
7. 7.5Y4/1 灰色 重埴土 粘土

SD2003・sec12 東壁



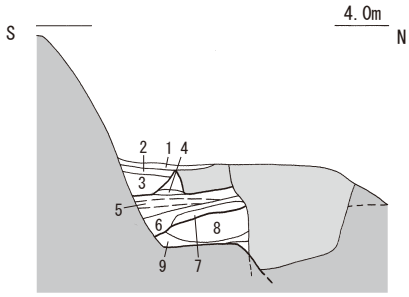
1. 2.5Y5/1 黄灰色 砂質埴土 細砂混じる やや粘土(SD0003下層埋土)
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質埴土 細砂混じる やや粘土(SD0003下層埋土)
3. 2.5Y4/1 黄灰色 軽埴土(SD0003下層埋土)
4. 2.5Y4/3 オリーブ褐色 軽埴土 ほぼ粘土(SD0003下層埋土)
5. 2.5Y3/2 黒褐色 重埴土 やや微砂混じる(SD1003埋土)
6. 7.5Y2/1 黒色 重埴土(SD1003埋土)
7. 2.5GY3/1 暗オリーブ灰色 シルト質壌土 小石混じる(SD1003埋土)
8. 5GY4/1 暗オリーブ灰色 軽埴土 細砂・小石混じる(SD1003埋土)
9. 7.5YR4/2 灰褐色 砂壌土(人為的埋土)
10. 7.5YR5/3 にぶい褐色 砂質壌土 ほぼ粘土に近い 鉄分浸透 水田耕土
11. 5Y3/2 オリーブ黒色 重埴土 小石多少含む
12. 5Y4/1 灰色 砂壌土 粗砂 φ10cm以下の礫を多く含む
13. 2.5GY2/1 黒色 重埴土 粘土 シルト(SD2003埋土)
14. 5B2/1 青黒色 埴壌土 細砂 小石若干含む(SD2003埋土)

SD2003・sec13 東壁



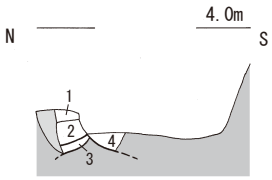
1. 2.5Y4/3 オリーブ褐色 砂壌土 粗砂 礫多く含む
2. 10YR3/3 暗褐色 シルト質壌土 やや粘土(SD0003下層)
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト質壌土 やや粘土(SD0003下層)
4. 10YR3/2 黒褐色 砂質壌土 ほぼ粘土 粗砂含む
5. 2.5GY3/1 暗オリーブ灰色 軽埴土 礫多少含む
6. 2.5Y3/1 黒褐色 砂壌土 粗砂 φ10cm以下の礫含む
7. 2.5GY3/1 暗オリーブ灰色 砂壌土 粗砂 φ10cm以下の礫含む
8. 5B2/1 青黒色 埴壌土 細砂 小石若干含む
9. 10YR3/1 黒褐色 シルト壌土 細砂(SD0003下層)
10. 10YR3/1 黒褐色 シルト壌土 シルト分強い タイル含む(SD003下層)

SD2003・sec14 西壁



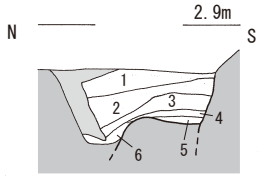
1. 2.5YR5/2 暗灰黄色 砂土
2. 10YR3/1 黒褐色 シルト質埴壌土 微砂 炭化物含む(SD0003埋土)
3. 5Y3/2 オリーブ黒色 壌質砂土 炭化物・植物遺体含む(SD0003埋土)
4. 5Y6/1 灰色 砂質埴土 粘土に近い(淡い灰茶色シルト)
5. 2.5Y3/1 黒褐色 シルト質壌土 粘土に近い 植物遺体多く含む
6. 2.5Y3/2 黒褐色 シルト質壌土 粘土に近い 植物遺体多く含む
7. 5Y3/2 オリーブ黒色 砂壌土 粗砂を多く含む
8. セクション13の12 セクション14の6・7に対応する 人為的埋土
9. 7.5Y2/1 黒色 砂質壌土 粗砂 小石多く含む

SD2003・sec15 東壁



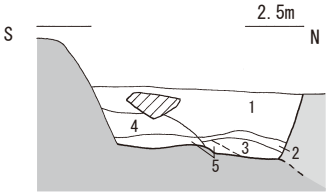
1. 10YR3/1 黒褐色 シルト質埴壌土 微砂 炭化物含む(SD0003埋土)
2. 5Y3/2 オリーブ黒色 壌質砂土 炭化物・植物遺体含む(SD0003埋土)
3. セクション13の12 セクション14の6・7に対応する 人為的埋土
4. 2.5Y3/1 黒褐色 シルト質壌土 粘土に近い 植物遺体多く含む(SD2004埋土)

SD2004・sec16 西壁



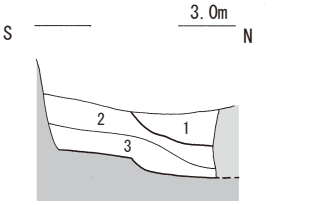
1. 5Y3/2 オリーブ黒色 壌質砂土 炭化物・植物遺体含む(SD0003下層)
2. 2.5Y3/1 黒褐色 シルト質壌土 粘土に近い 植物遺体多く含む(SD0003下層)
3. 2.5Y3/2 黒褐色 砂質埴土 粘土に近い 炭と植物遺体を含む(SD1003埋土)
4. 5Y2/2 オリーブ黒色 シルト質埴壌土 炭混じる 微砂含む
5. 7.5Y3/2 オリーブ黒色 シルト質埴壌土 炭混じる 微砂含む
6. やや暗調 SD2004の埋土 暗灰茶シルト(SD2004埋土)

SD2004・sec17 西壁



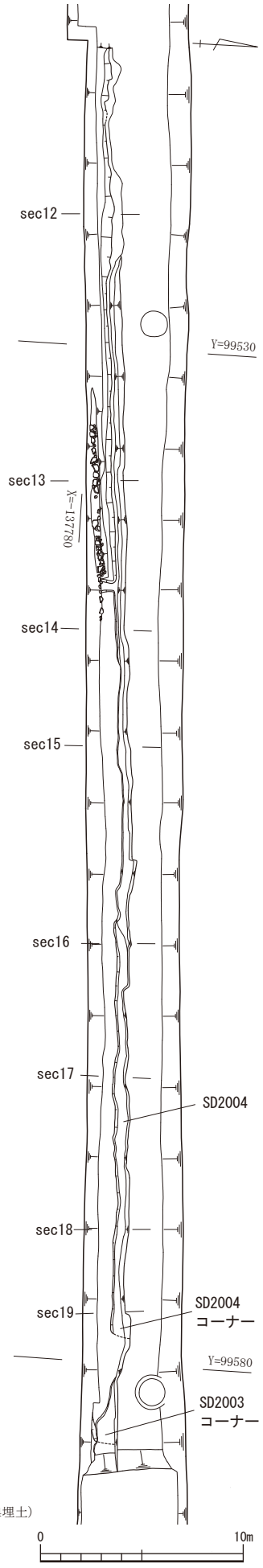
1. セクション17の2～6に対応する(SD0003埋土)
2. やや暗調 SD2004の埋土 暗灰茶シルト(SD0003埋土)
3. 5Y5/1 灰色 砂壌土 粗砂 礫混じる 基本的に4と同じ
4. 10YR4/1 褐灰色 重埴土 粘土 礫混じる 人為的埋土
5. 10YR4/1 褐灰色 粗砂多い 灰色シルト 人為的埋土 粗砂混じりシルト

SD2004・sec18 東壁

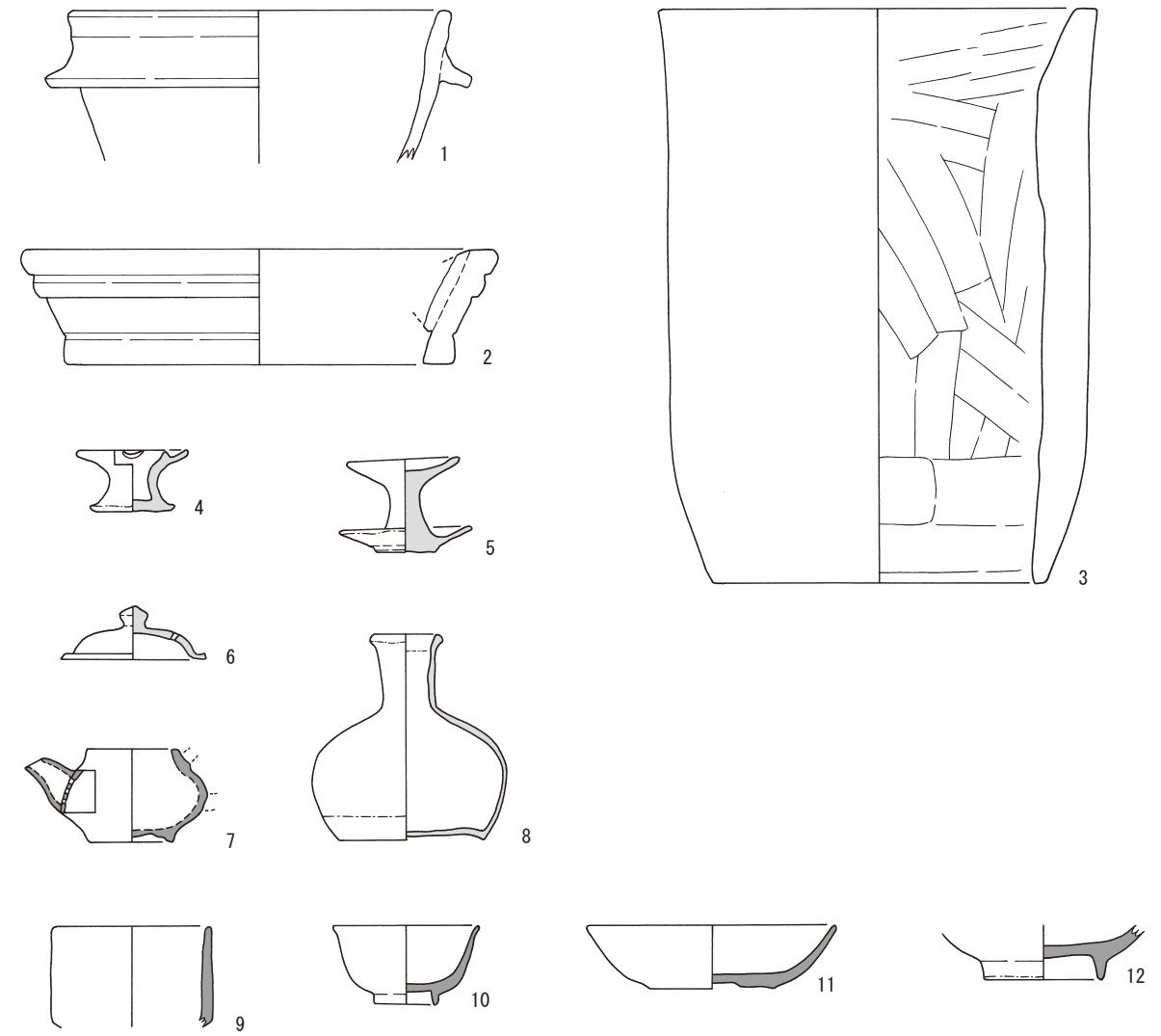


1. セクション17の2～6に対応する(SD1003埋土)
2. 10YR4/1 褐灰色 重埴土 粘土 礫混じる 人為的埋土
3. 10YR4/1 褐灰色 粗砂多い 灰色シルト 人為的埋土 粗砂混じりシルト(SD2004埋土)

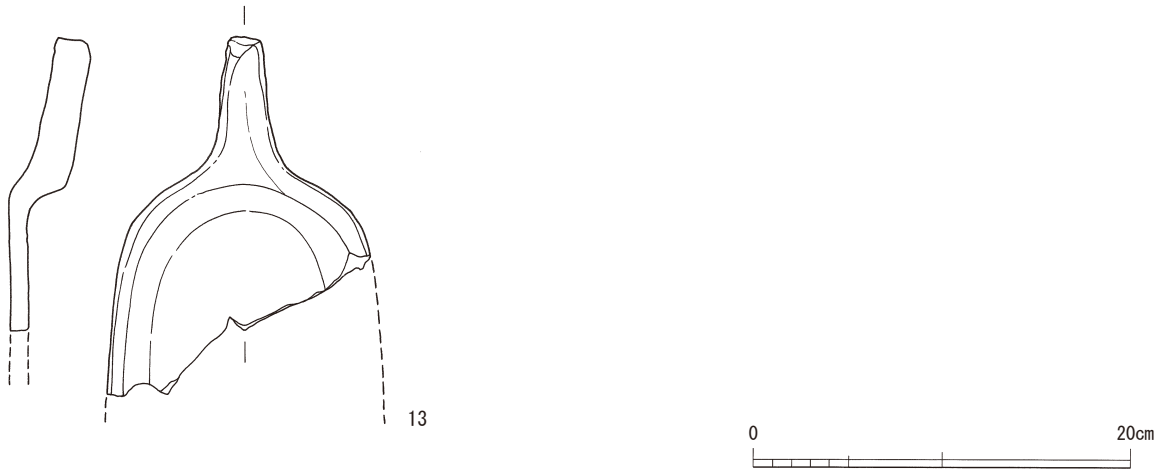
SD2004・sec19 東壁



北ーⅢ区 下層遺構Ⅲ

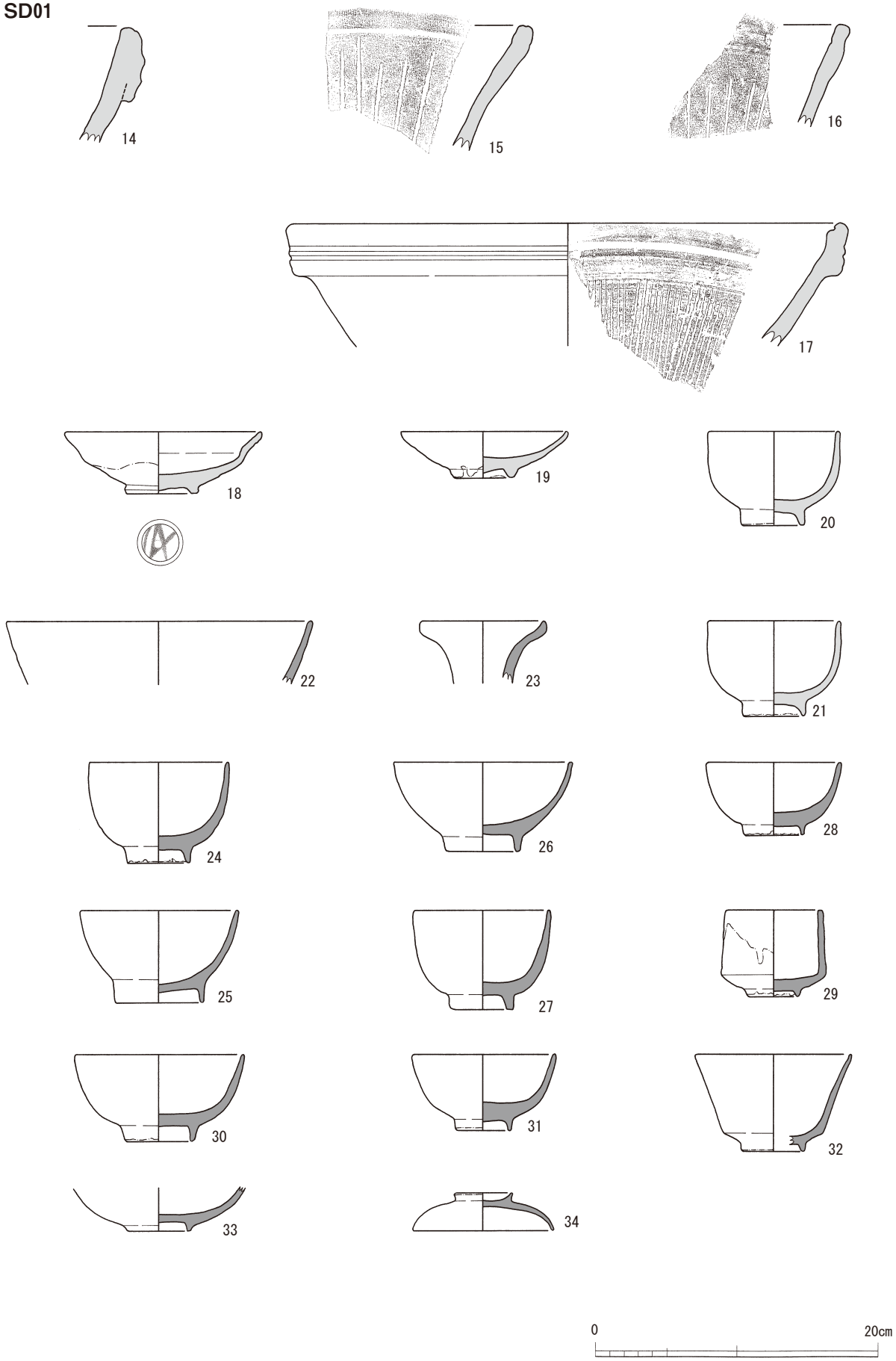


SD03

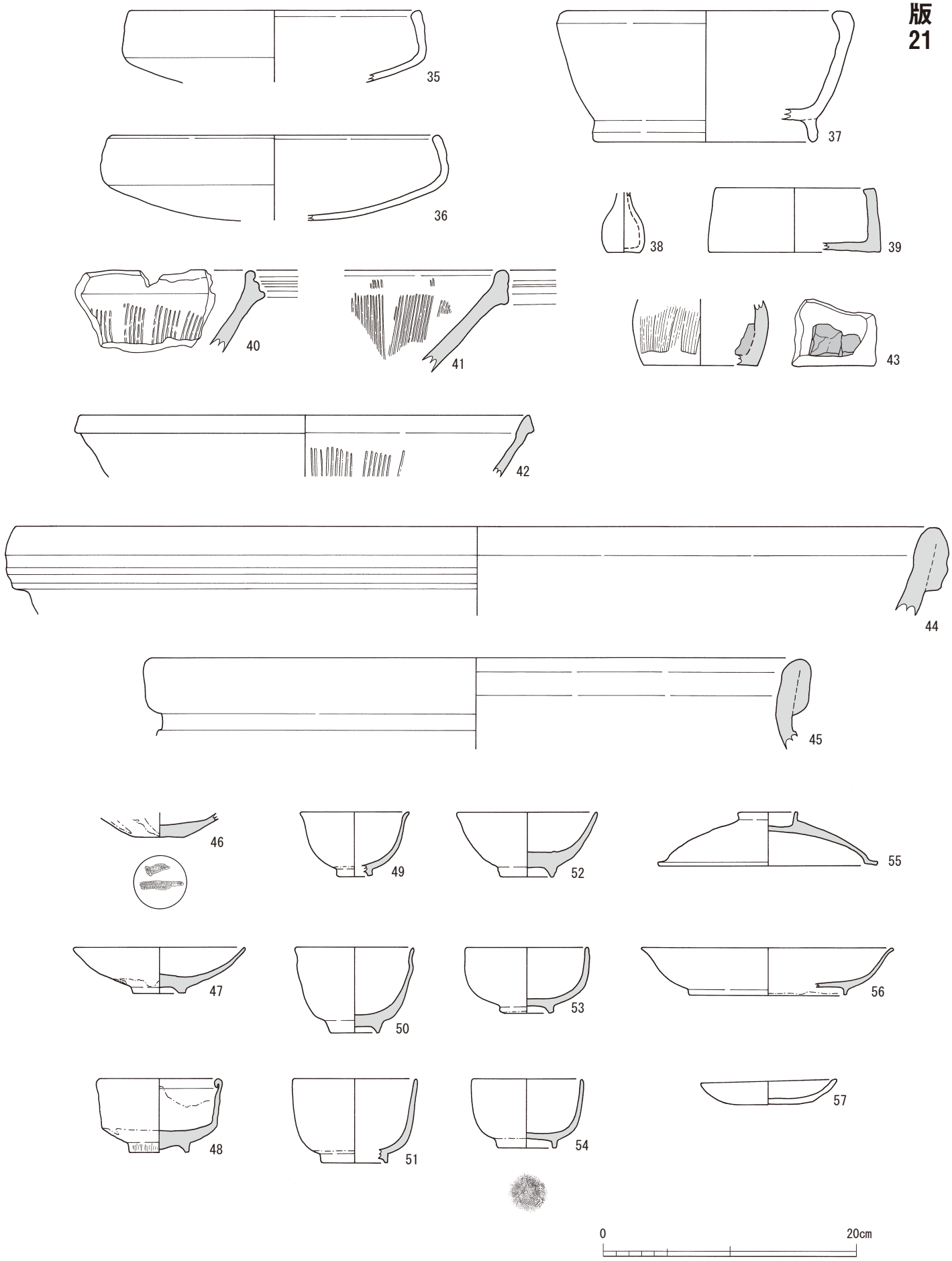


南－３区・北－Ⅱ区　上層（土器１）

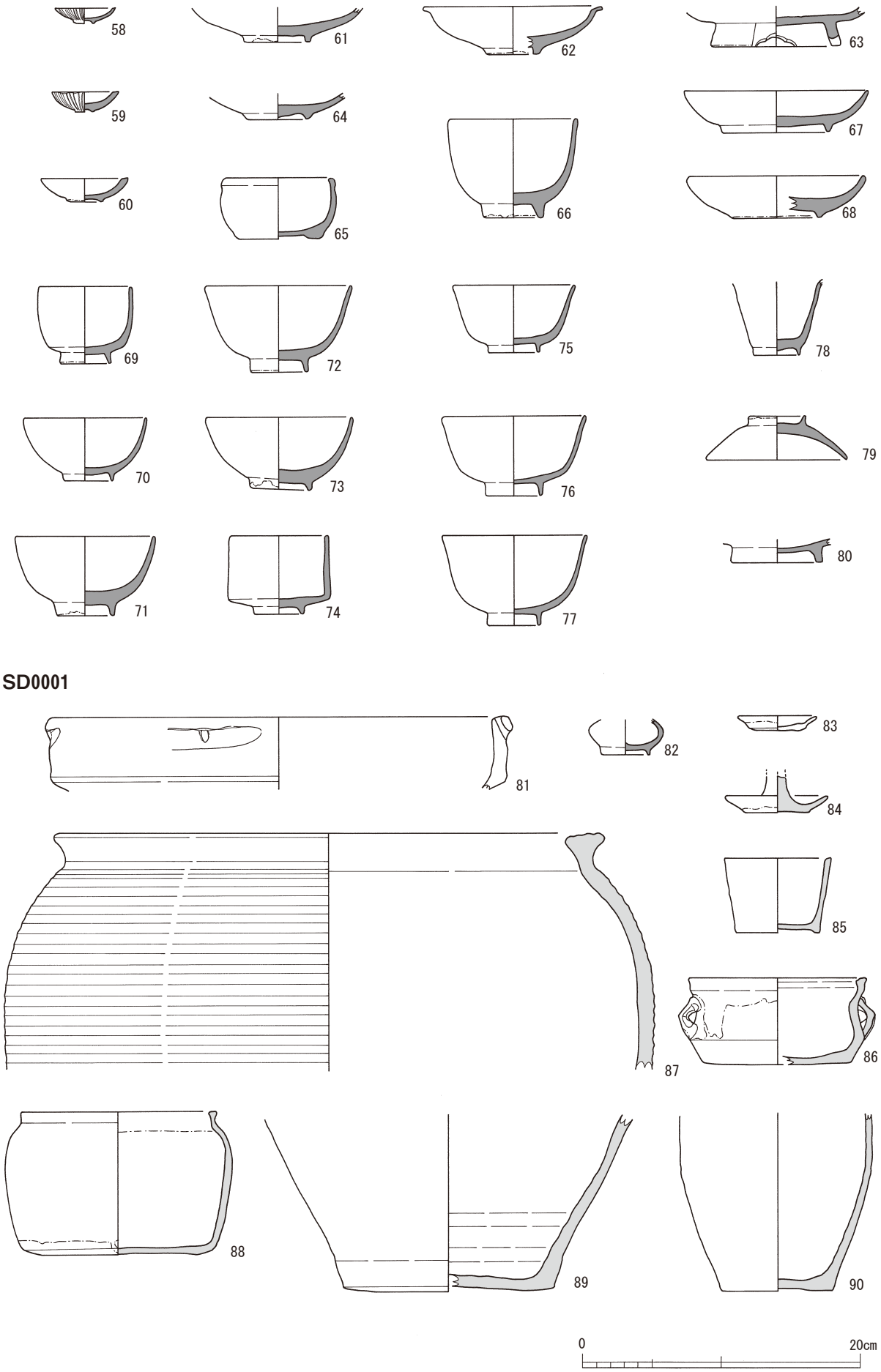
SD01



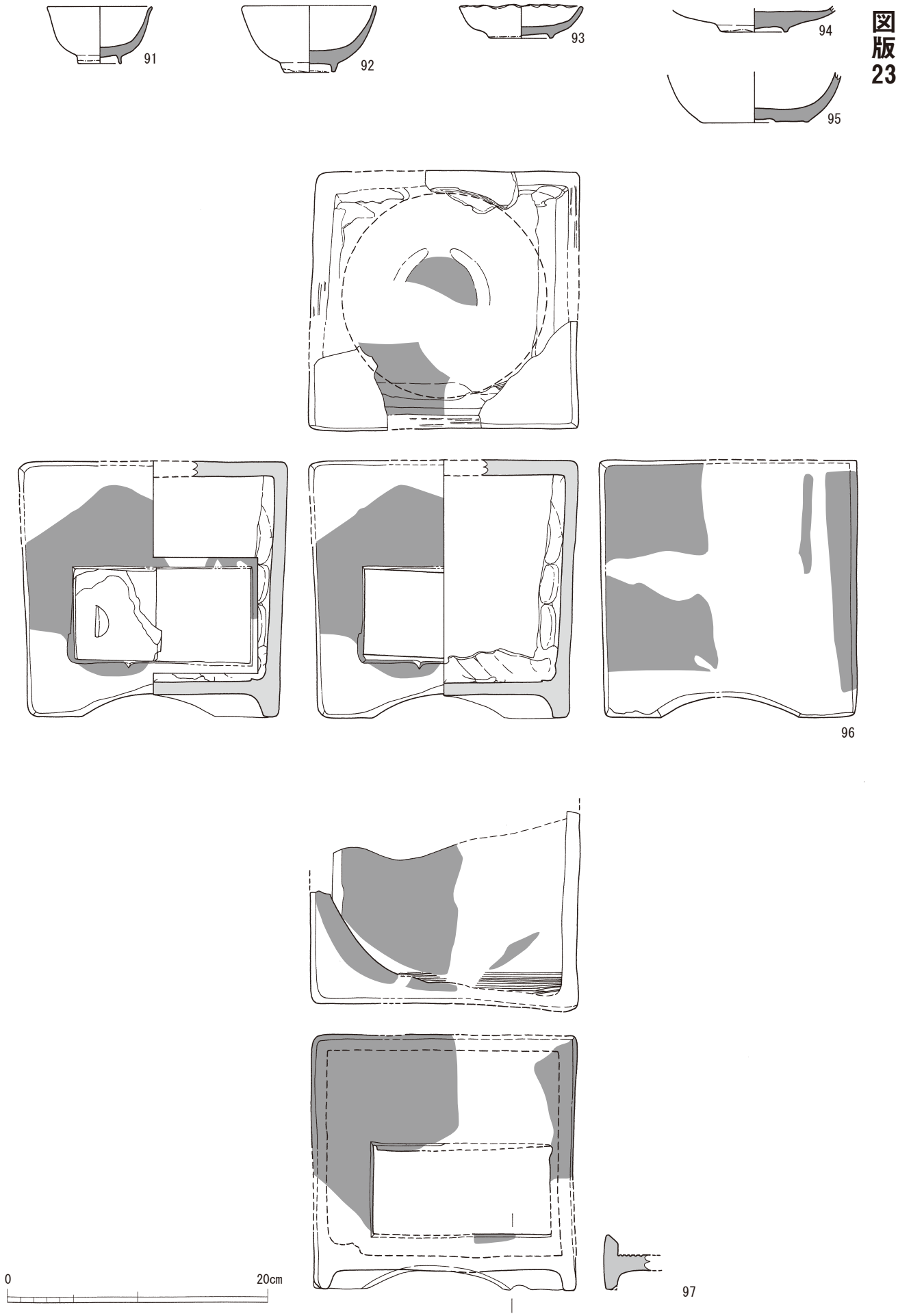
北－Ⅱ区　SD01（内堀）（土器 2）



北ーⅡ区　下層・堀１（土器３）

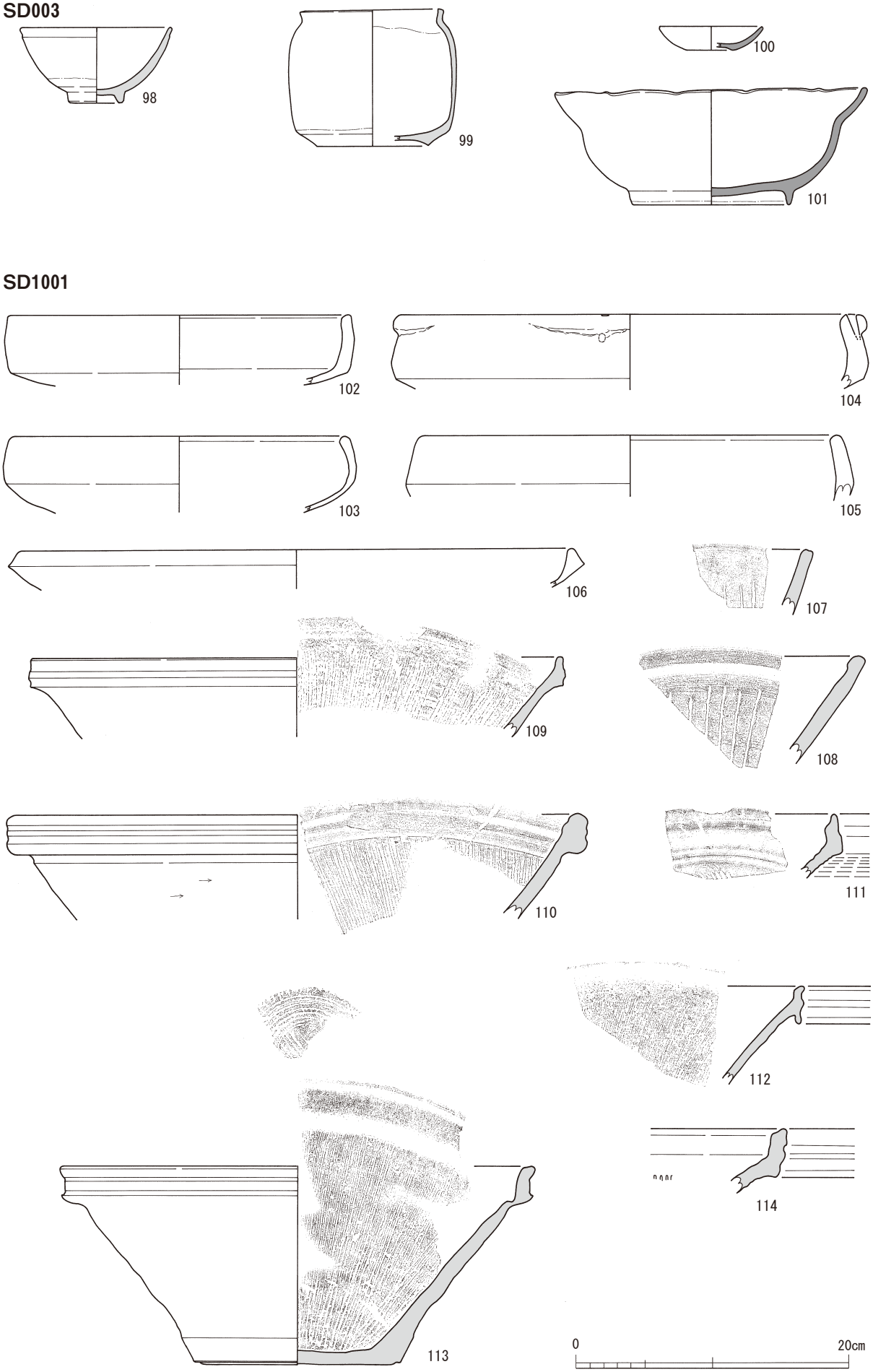


北ーⅡ区　下層・堀２　北ーⅠ区　SD0001（土器４）

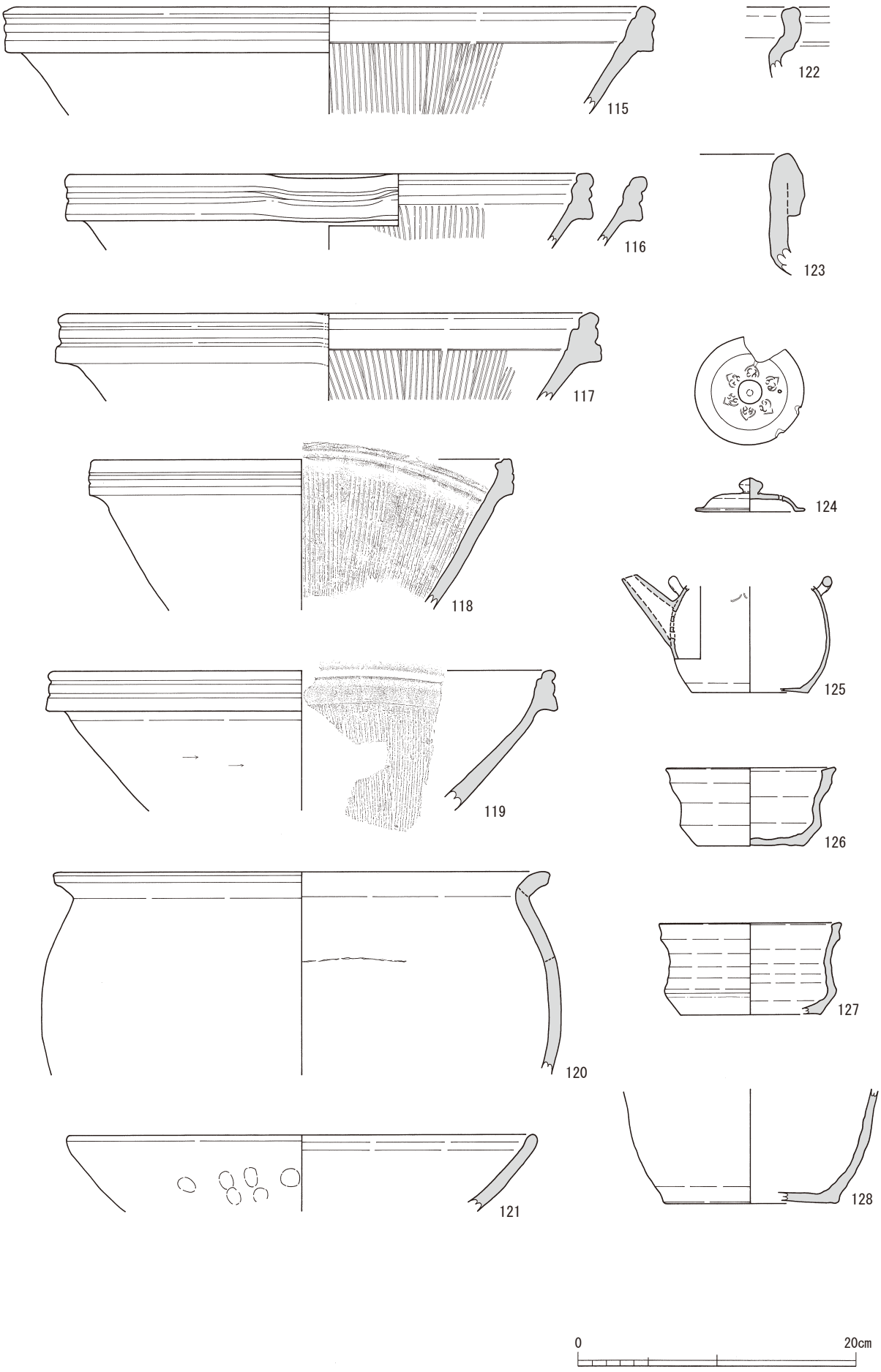


北－Ⅰ区　SD0001（土器5）

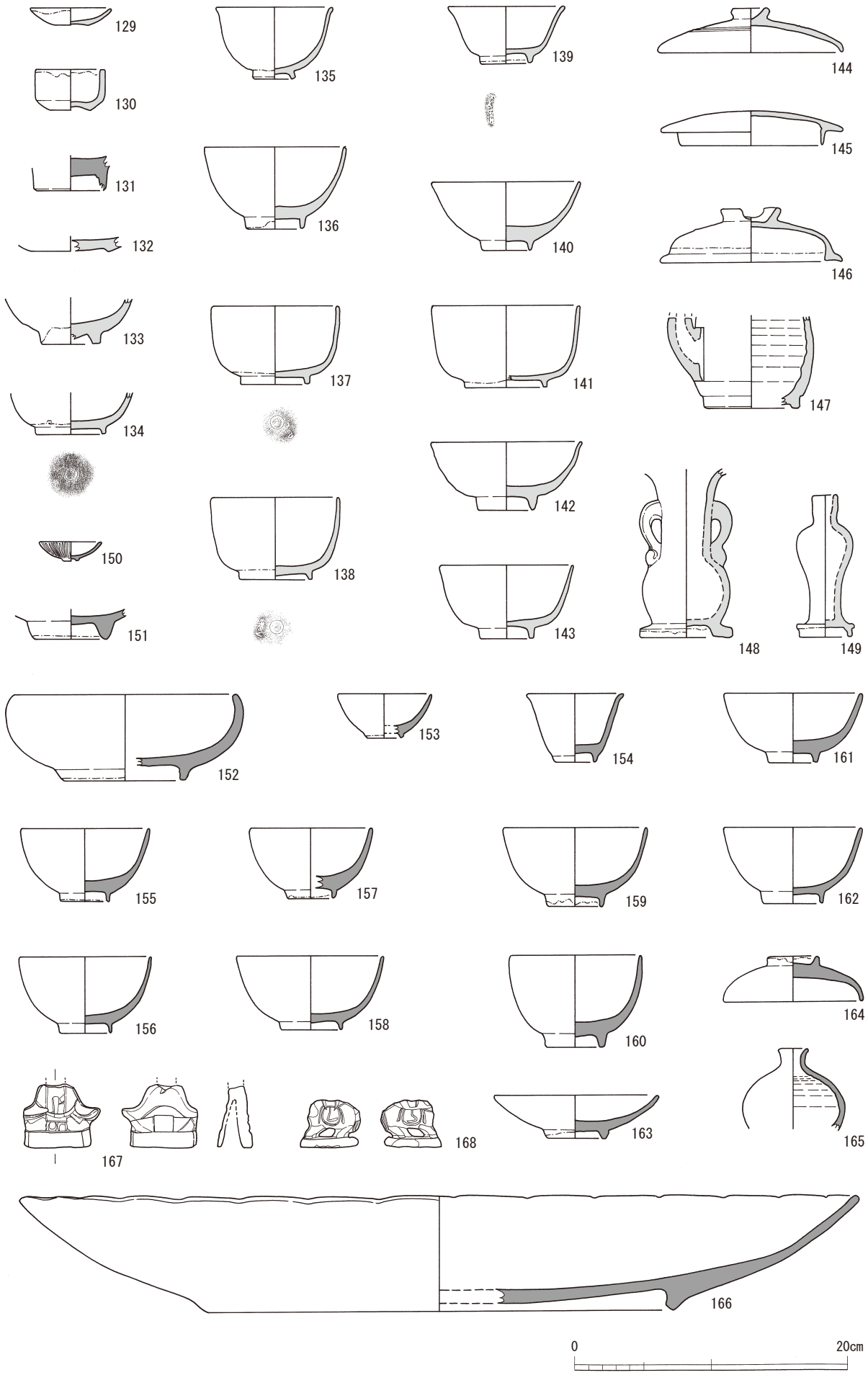
SD003



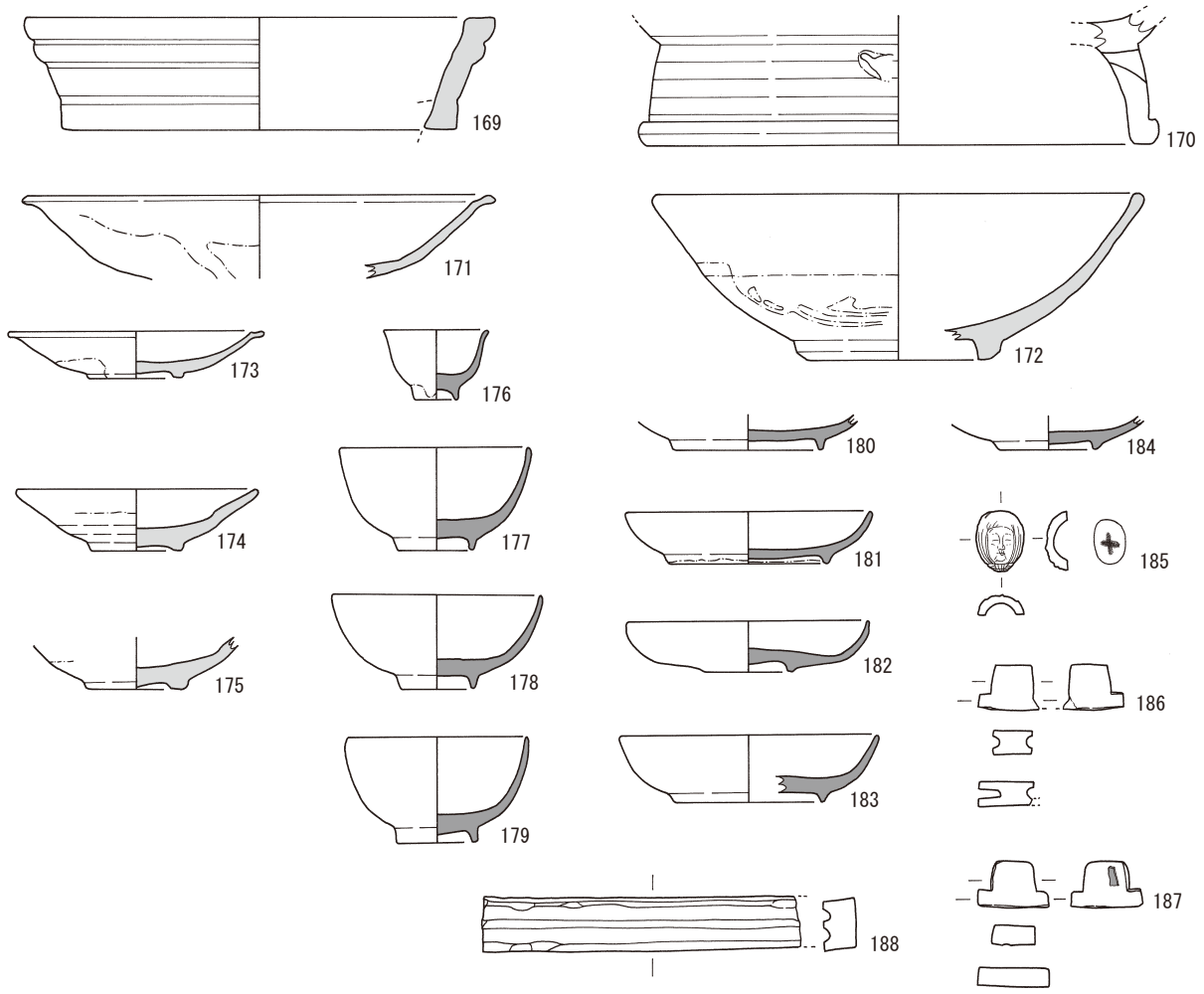
北－Ⅲ－１区　SD003・北－Ⅰ区　SD1001（土器６）



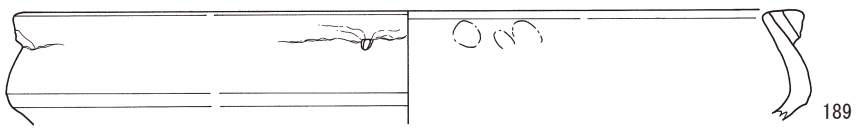
北－Ⅰ区　SD1001（土器７）



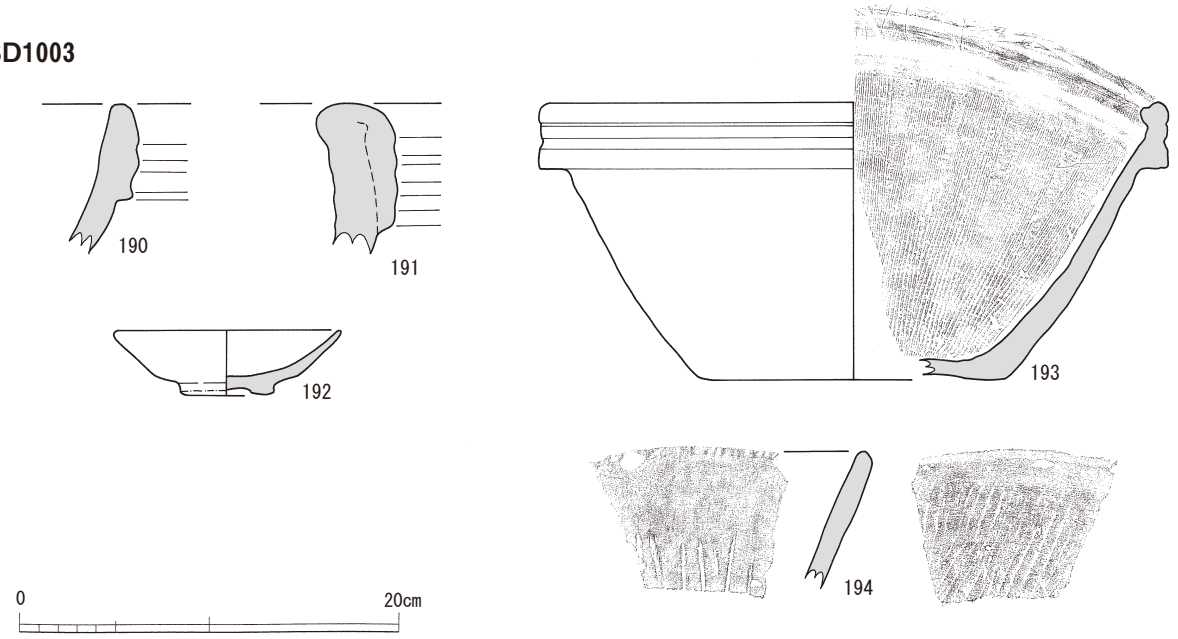
北－Ⅰ区　SD1001（土器8）



SD1002



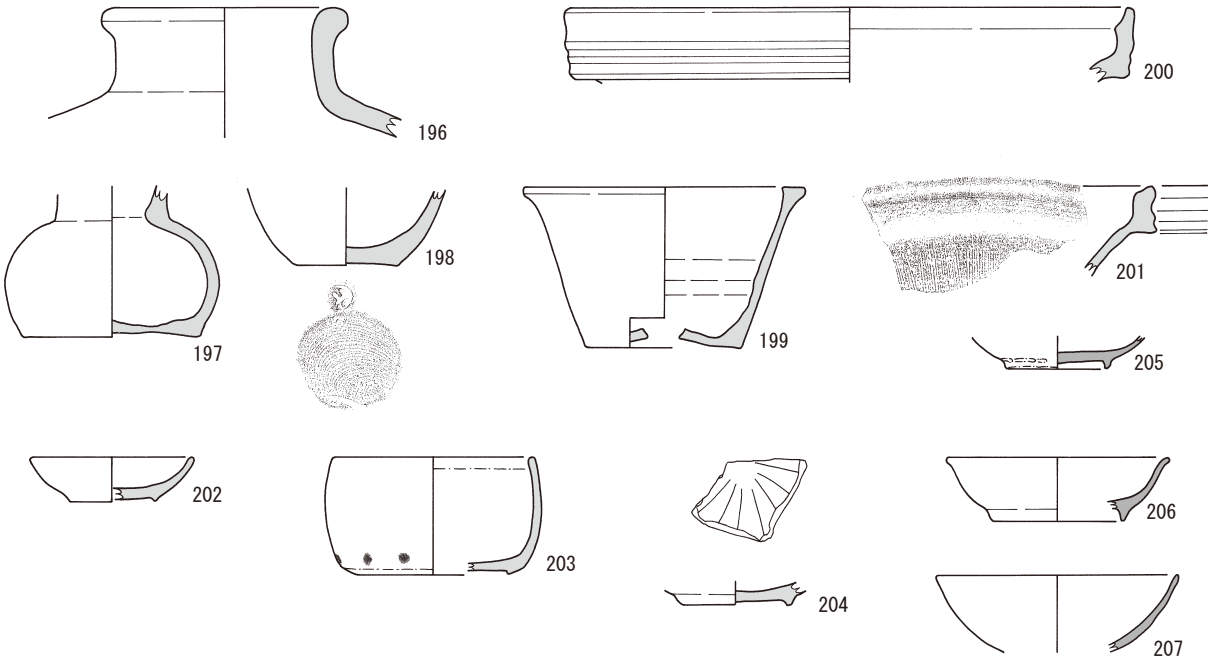
SD1003



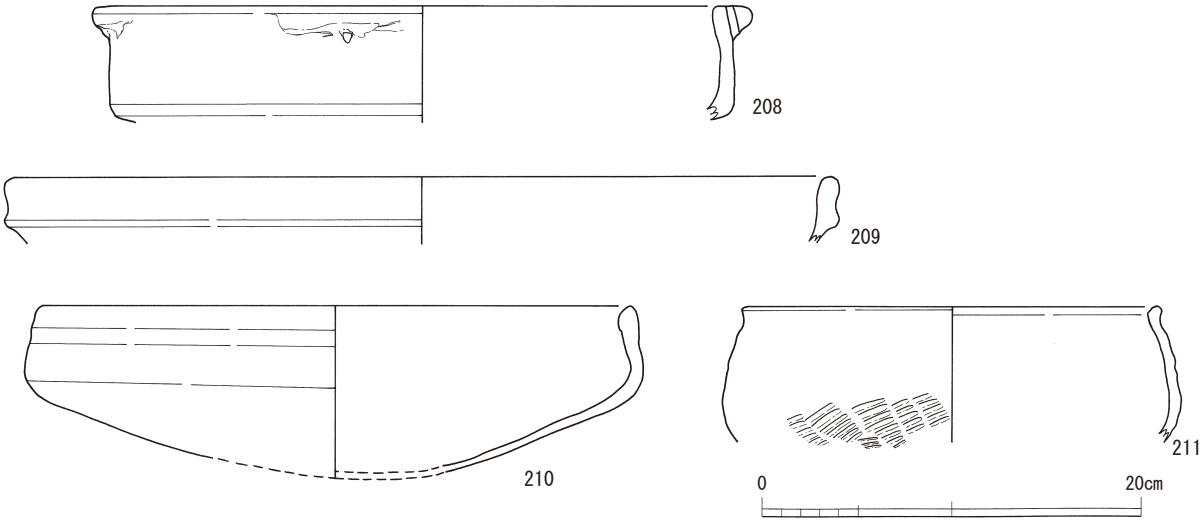
北ーⅠ区　SD1001 ～ SD1003（土器 9）

SX1001

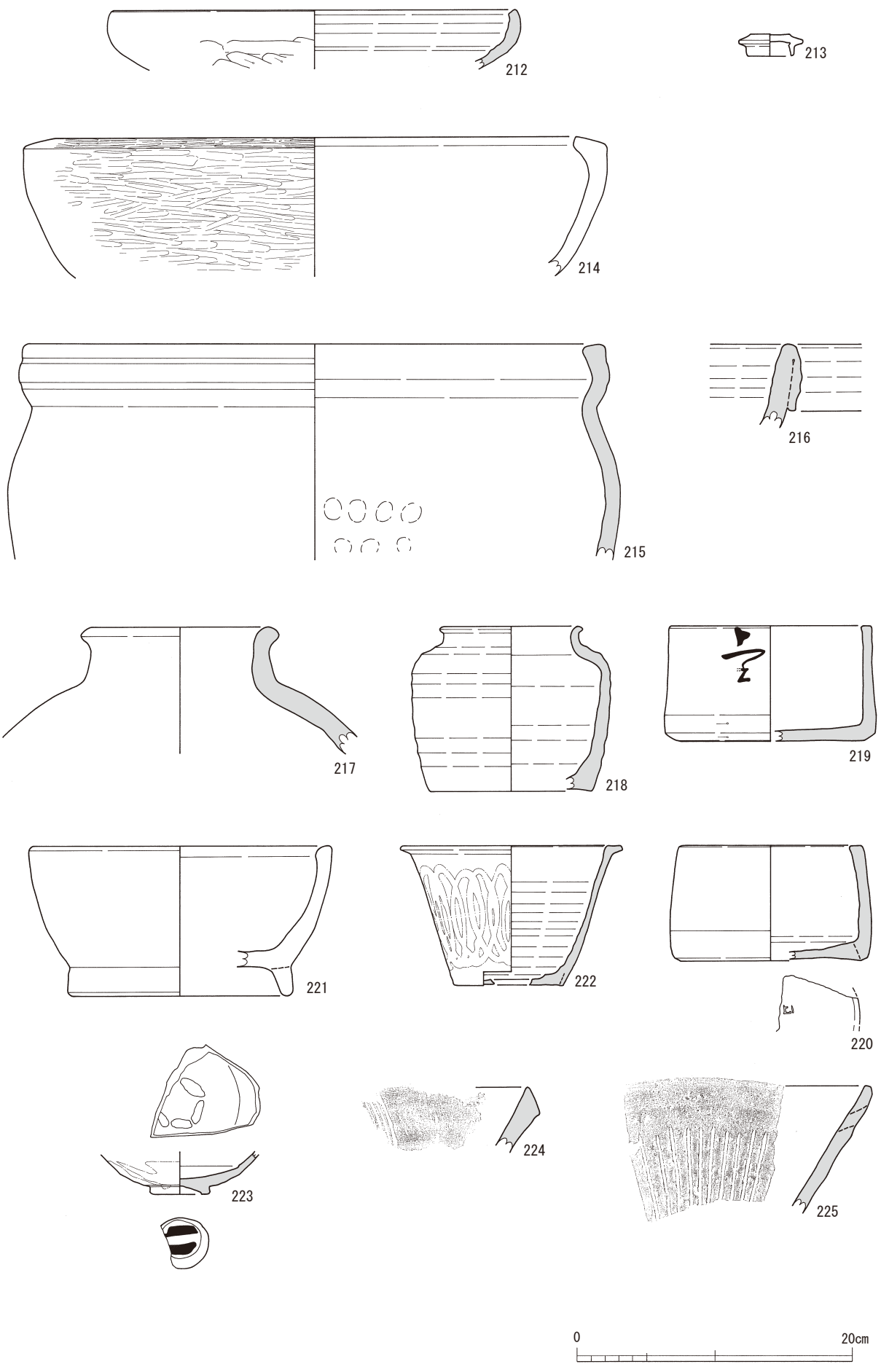
SD2001



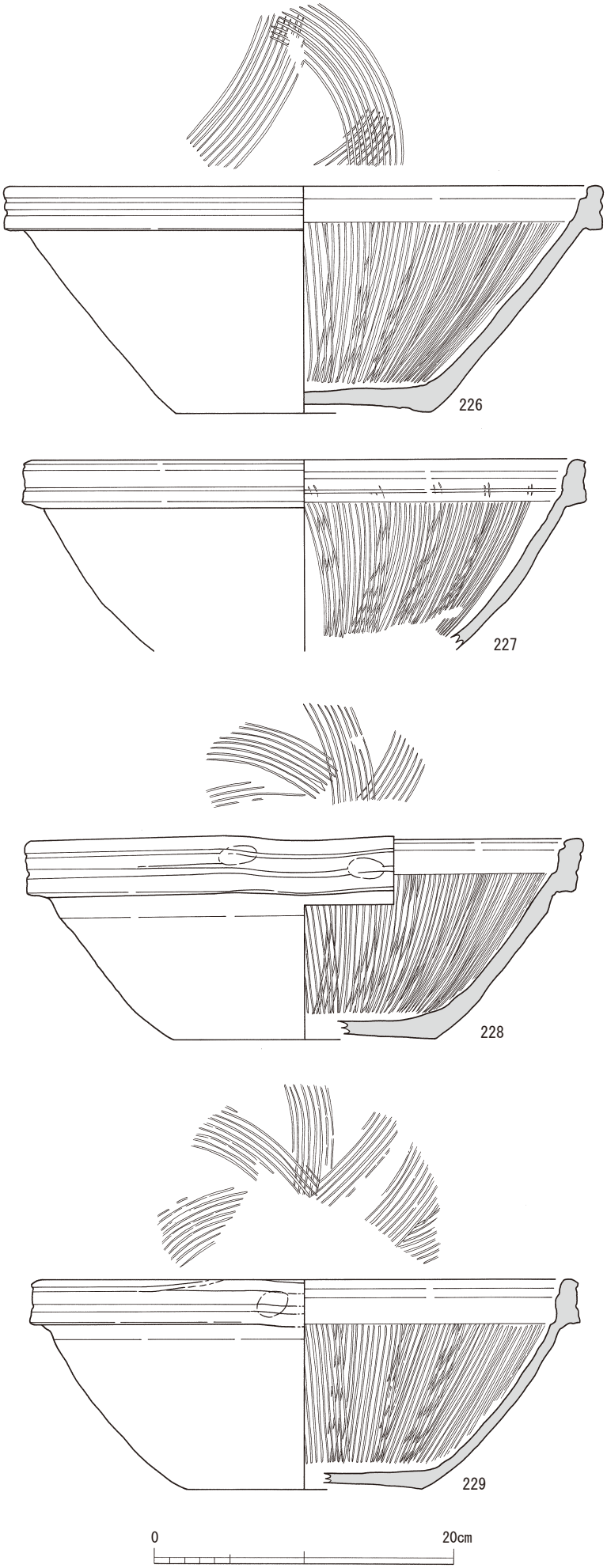
SD2002



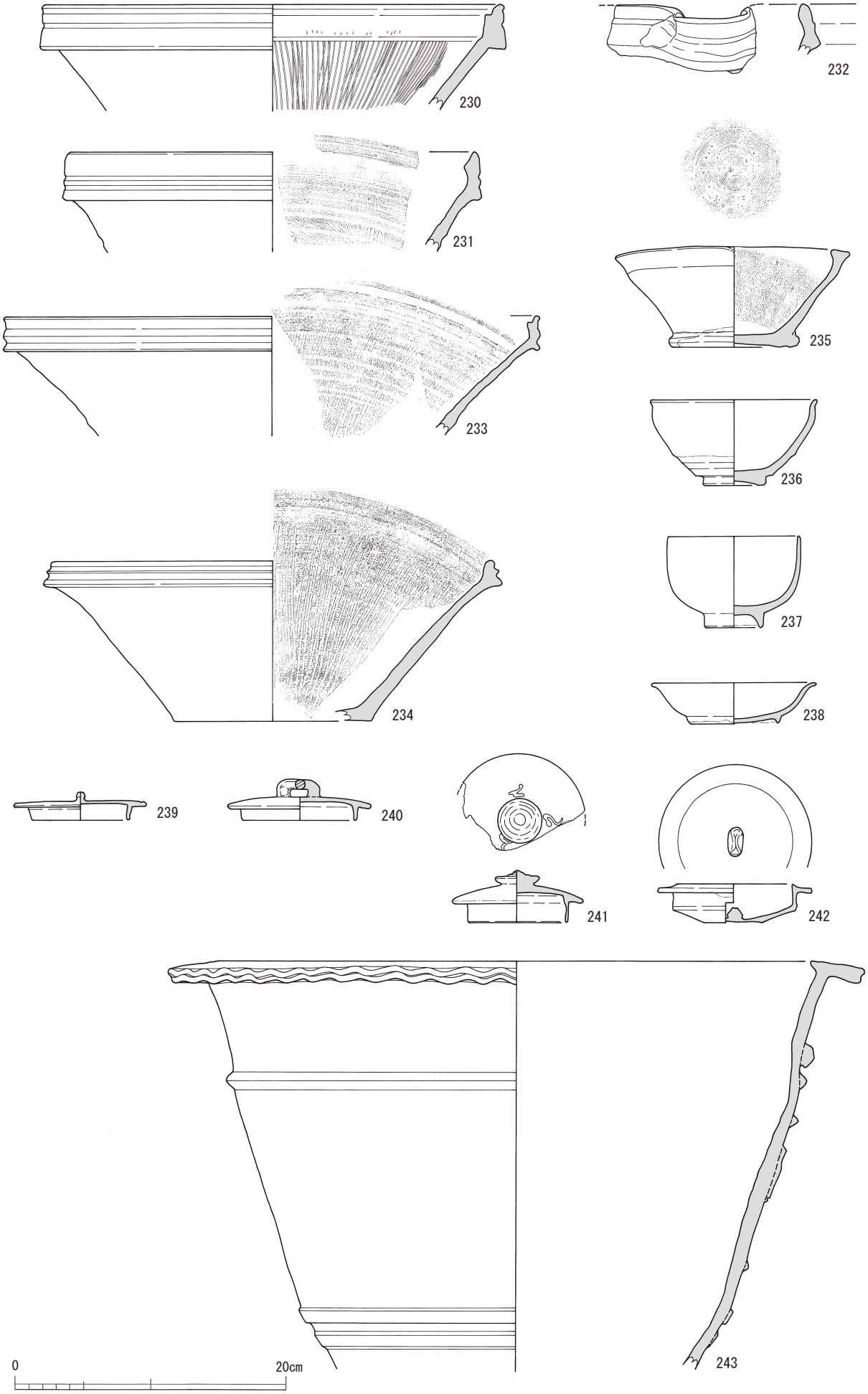
北－Ⅰ区　SX1001・SD2001・北－Ⅲ－２区　SD2002（土器 10）



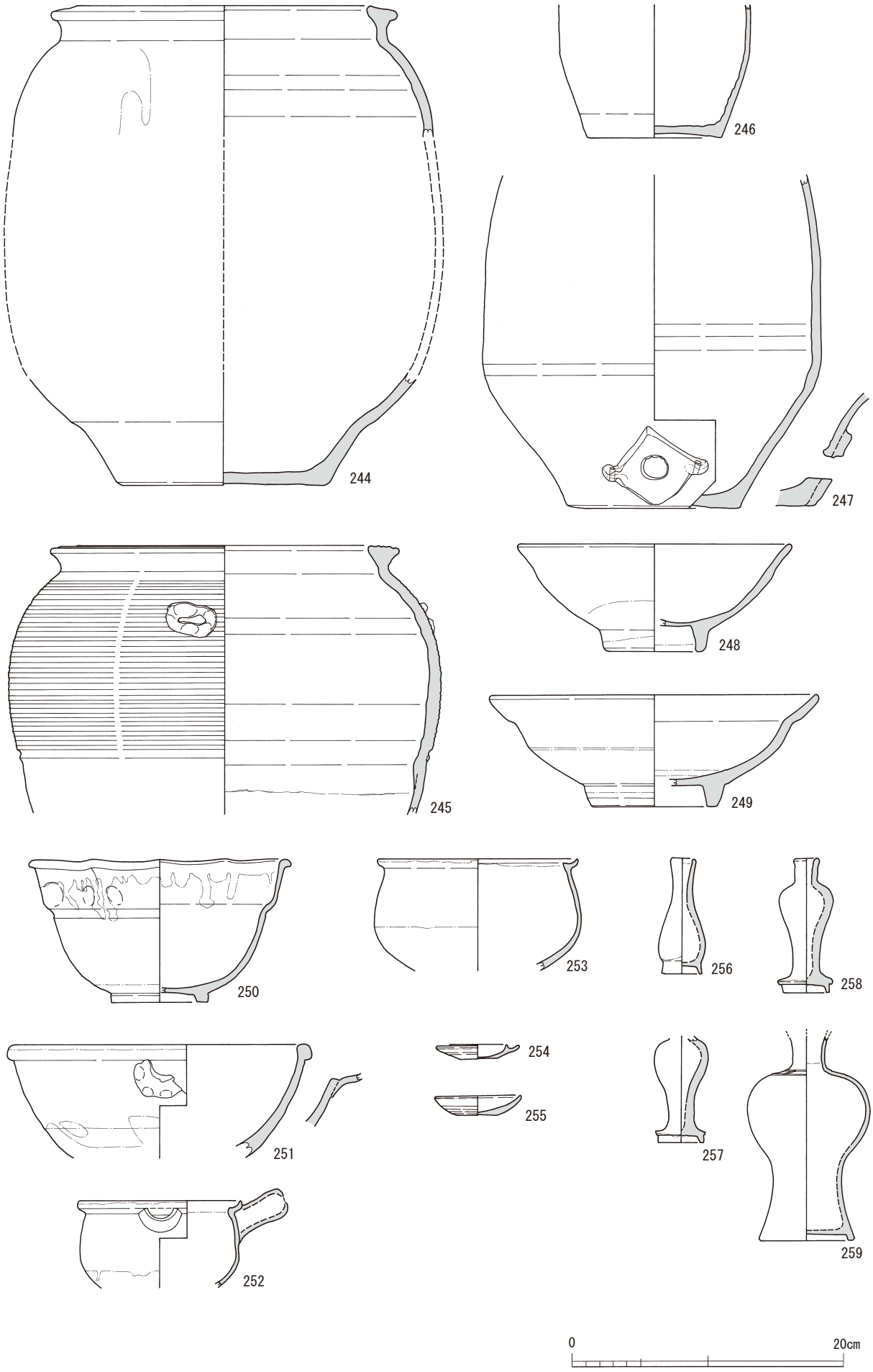
北ーⅢー2区　SD2002（土器11）



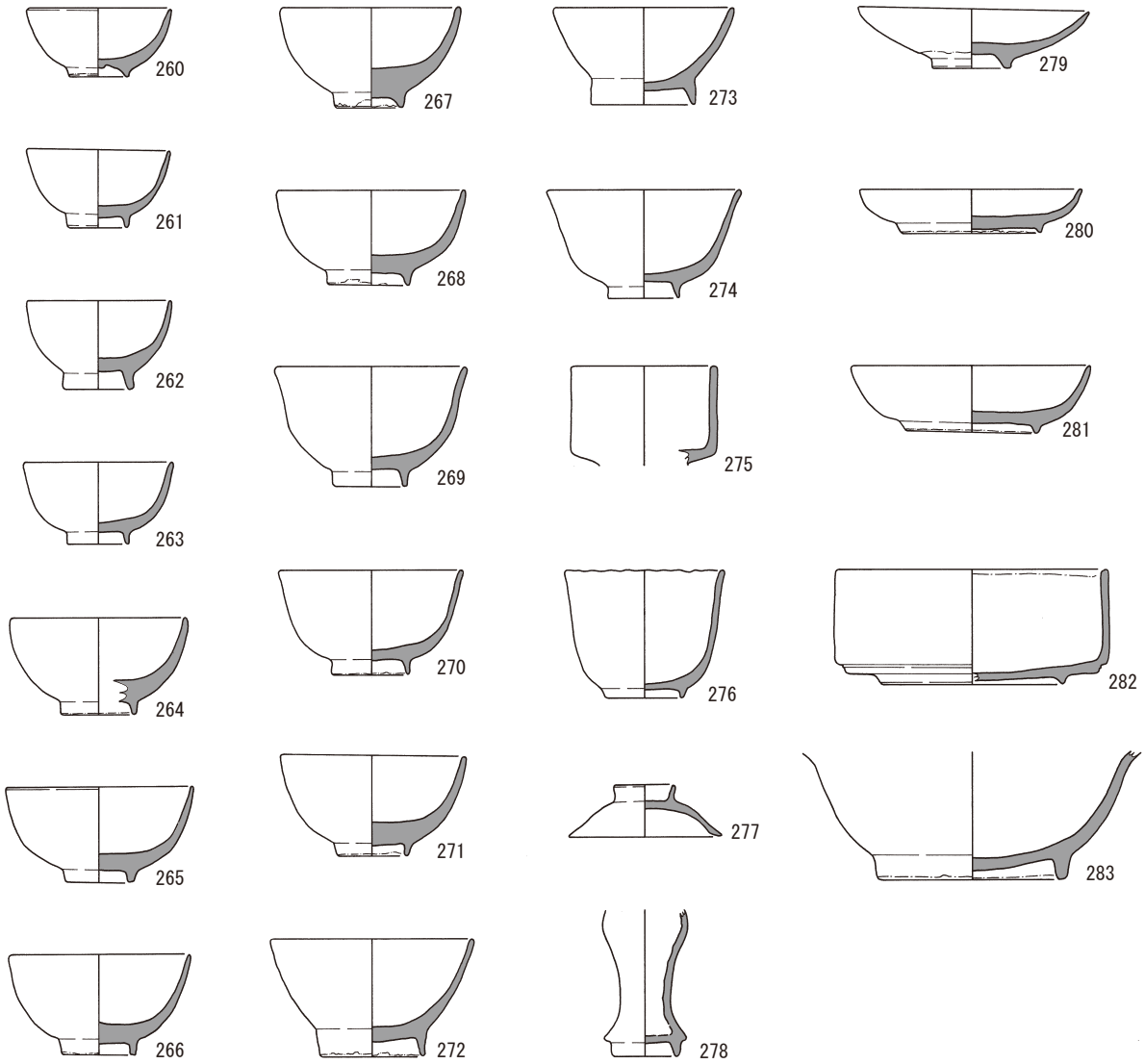
北ーⅢー2区　SD2002（土器12）



北ーⅢー2区　SD2002（土器13）

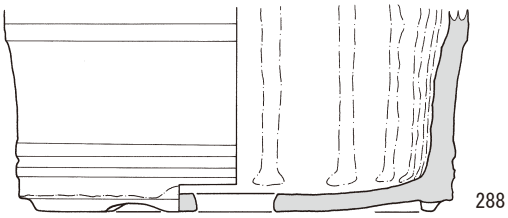


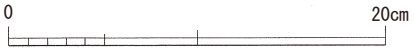
北ーⅢー2区　SD2002（土器14）



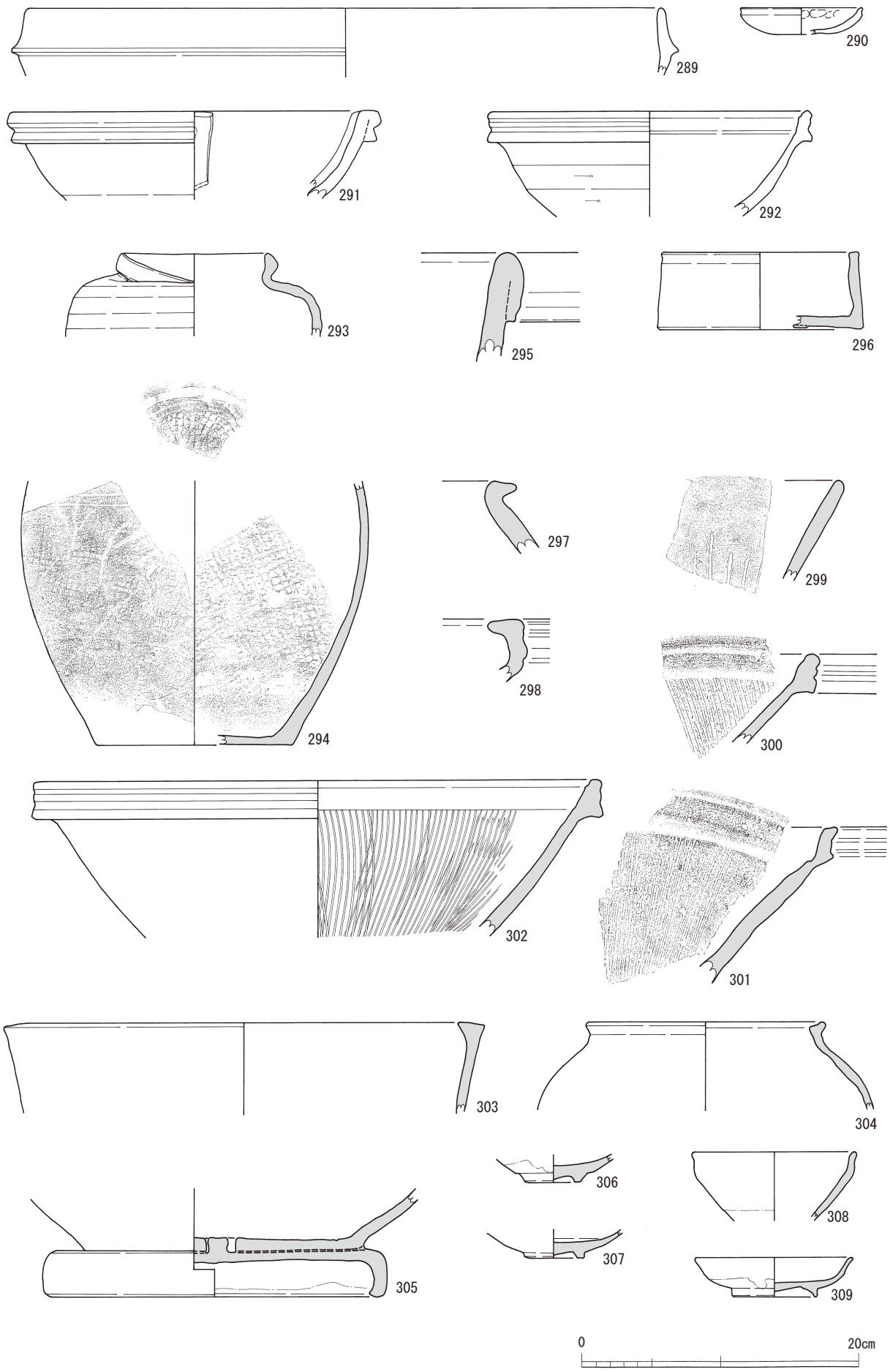
SD2003

植木鉢埋納遺構

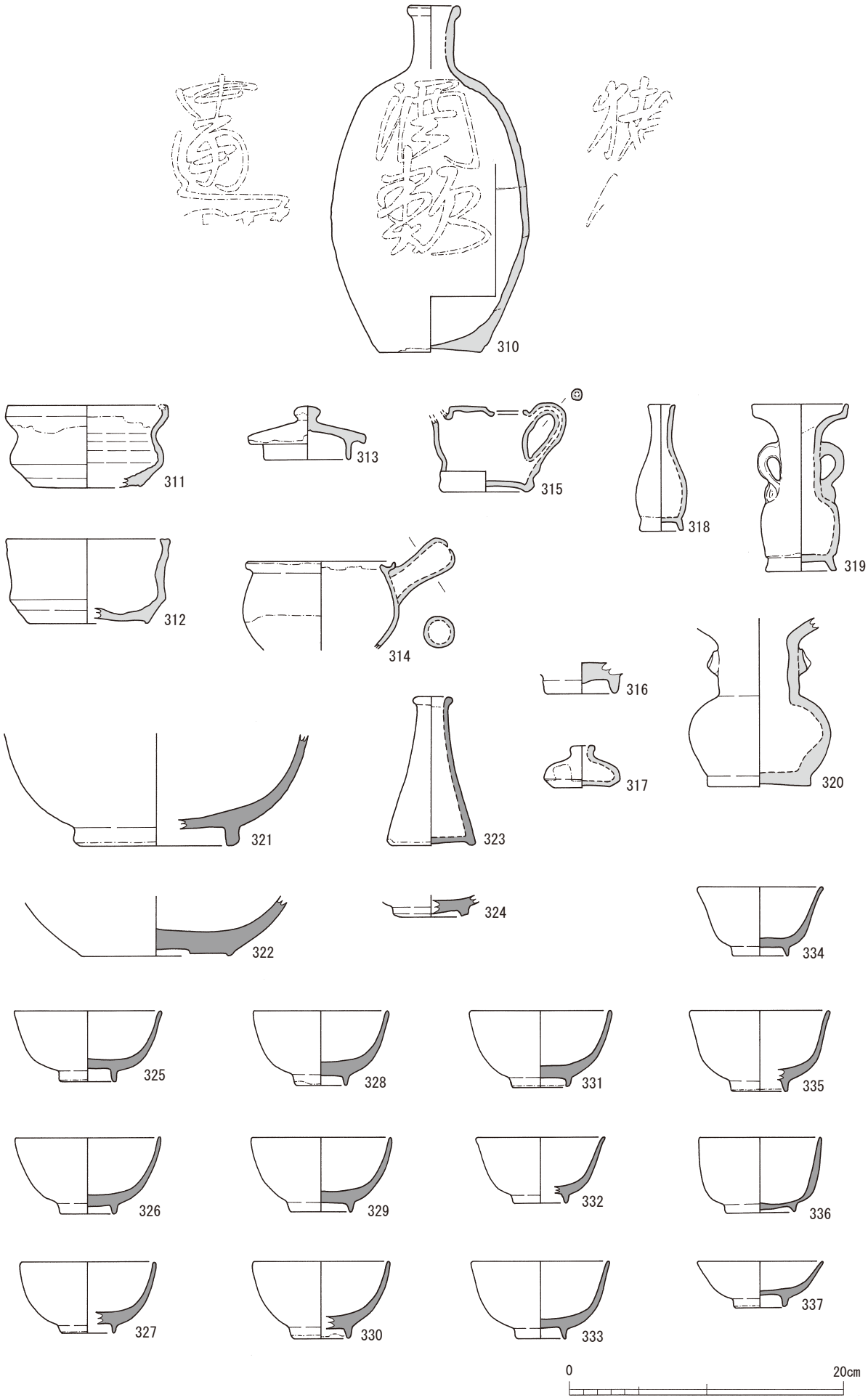




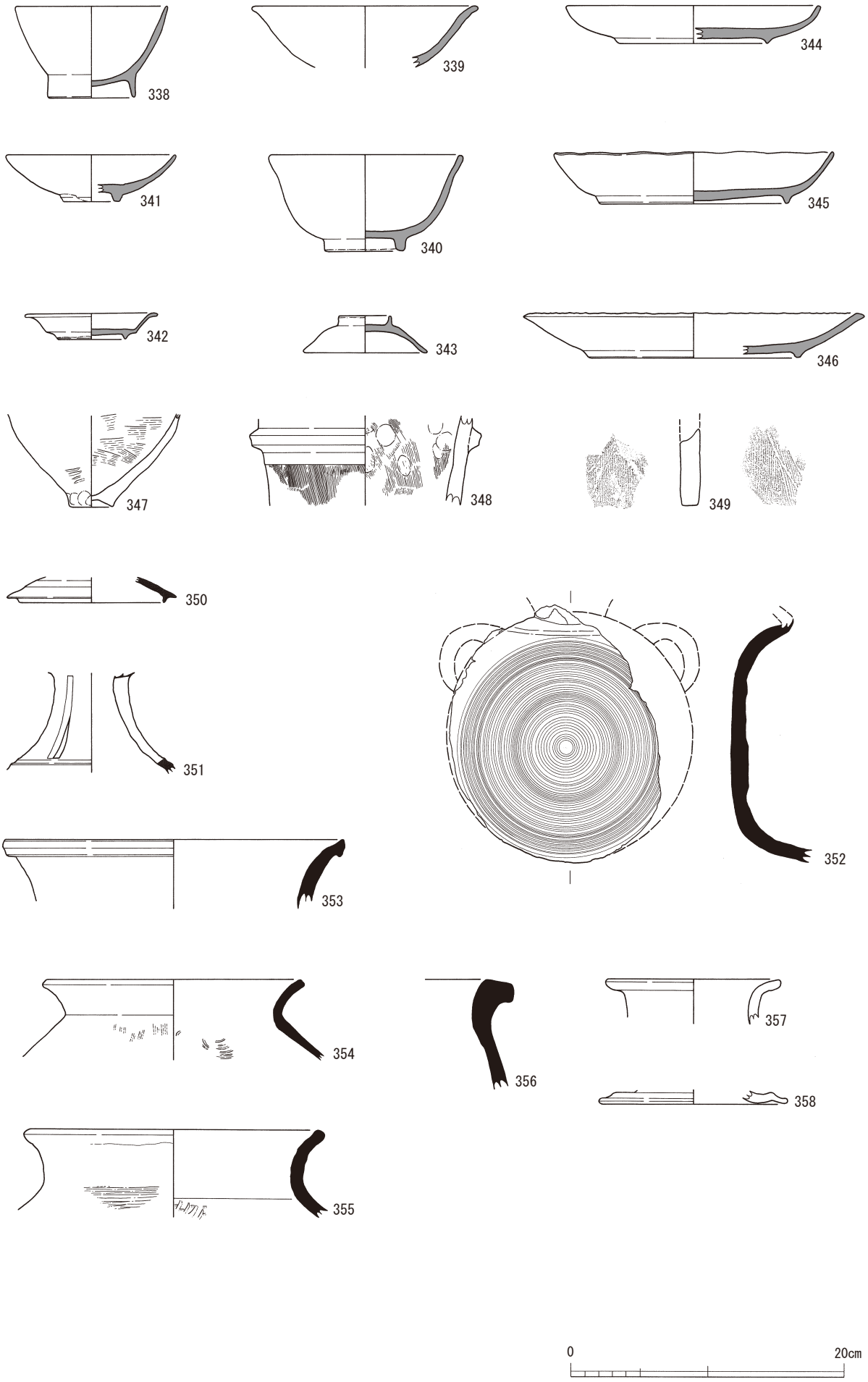
北ーⅢー２区　SD2002・SD2003・植木鉢埋納遺構（土器 15）



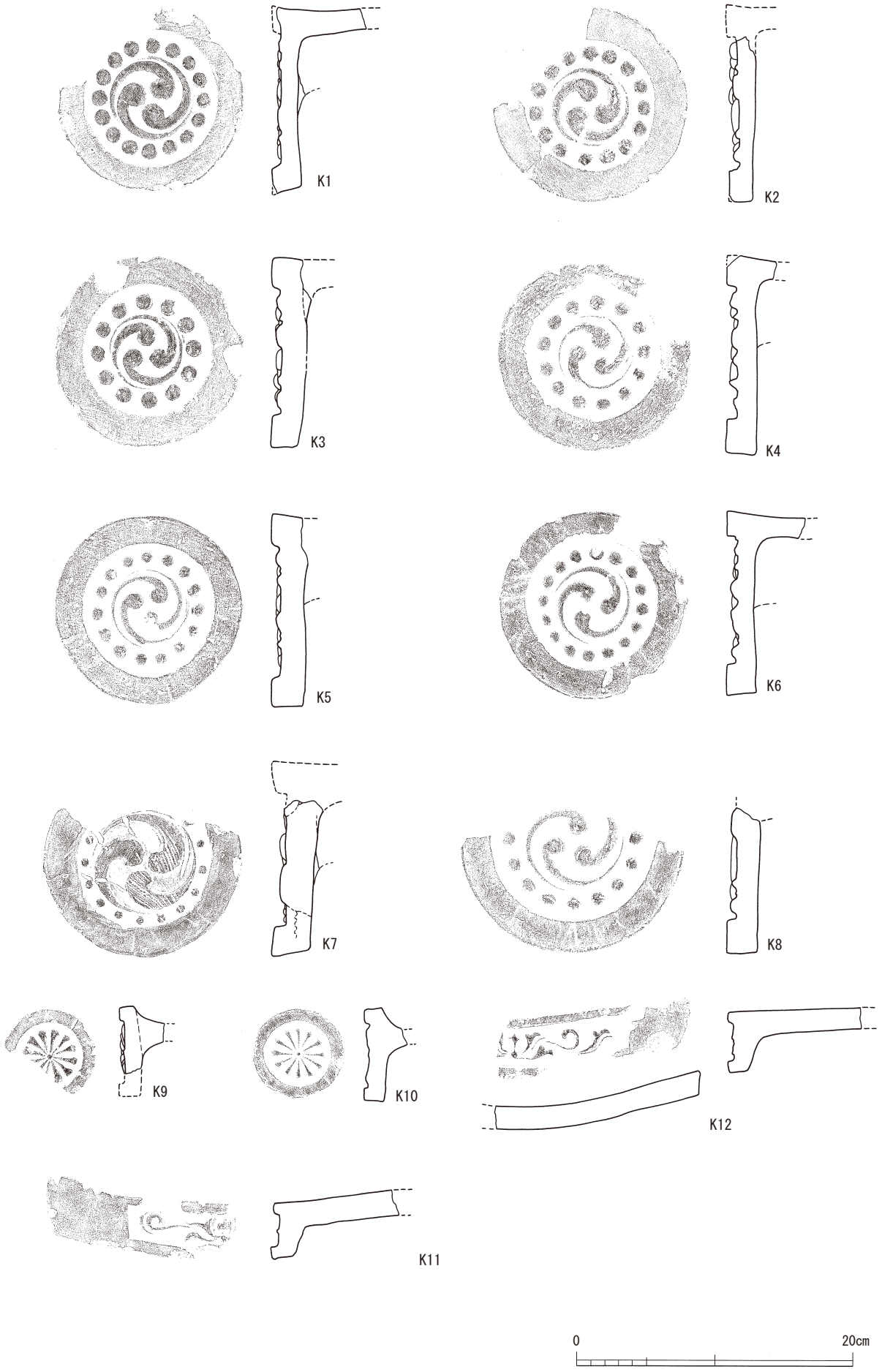
北－Ⅲ－２区　SD2002・包含層１（土器 16）


310
311
312
313
314
315
316
317
318
319
320
321
322
323
324
325
326
327
328
329
330
331
332
333
334
335
336
337
0
20cm

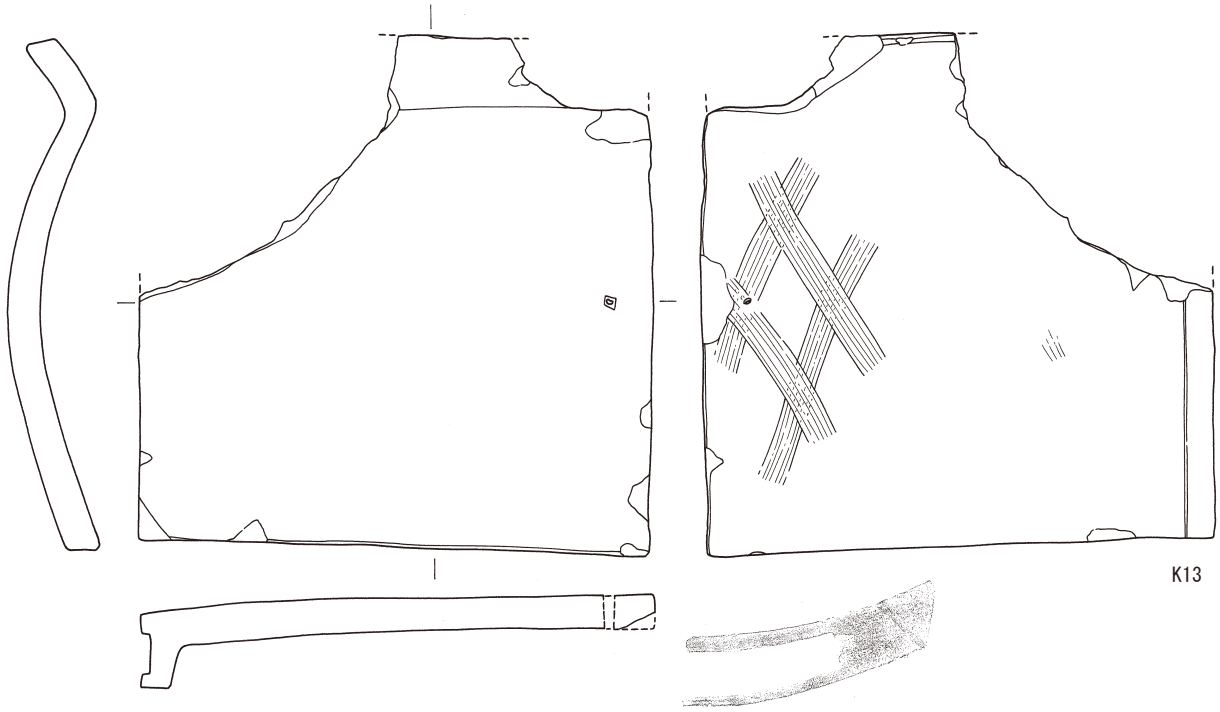
包含層２（土器 17）


338
339
344
341
340
345
342
343
346
347
348
349
350
351
352
353
354
356
357
358
355
0
20cm

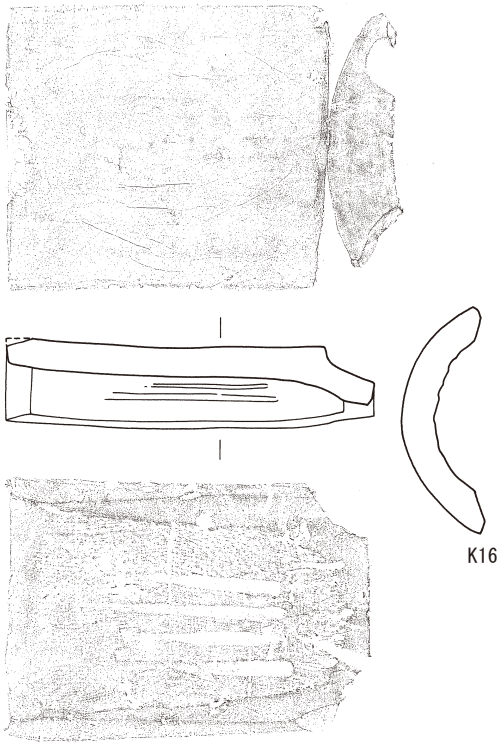
包含層3（土器18）

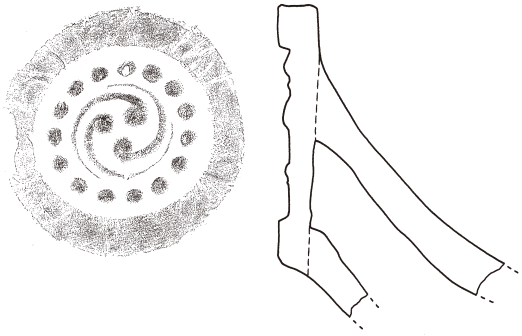


瓦1

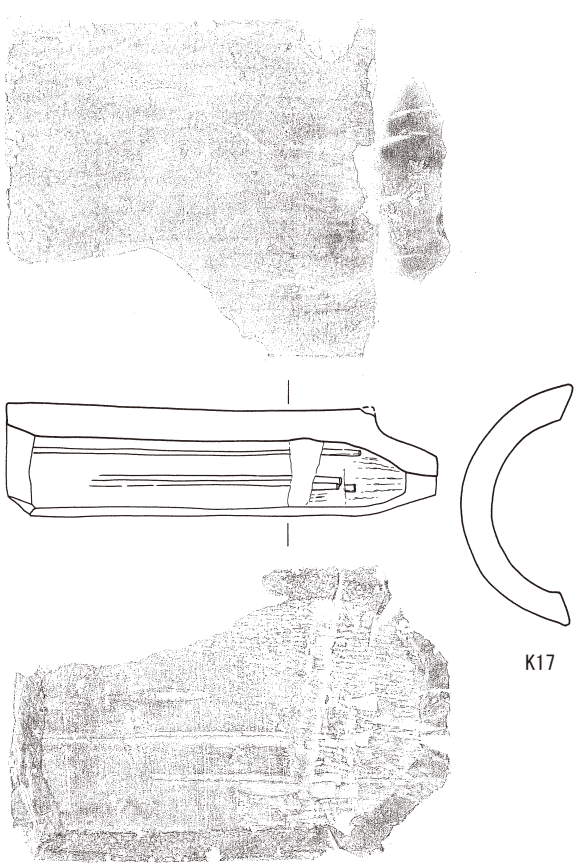

K13

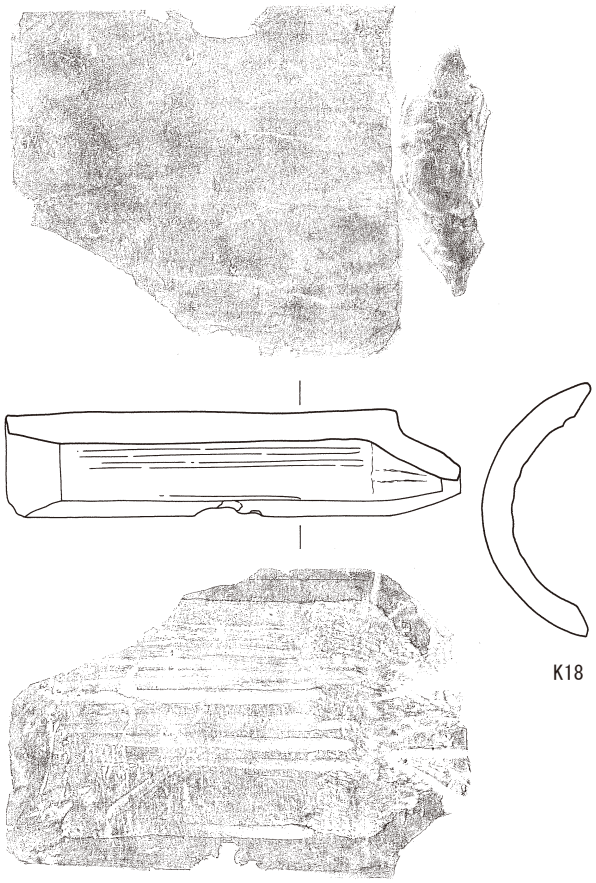
K14

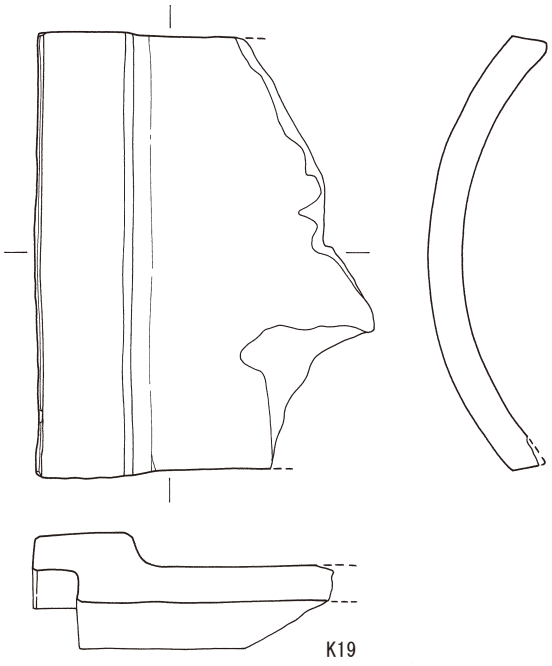

K16

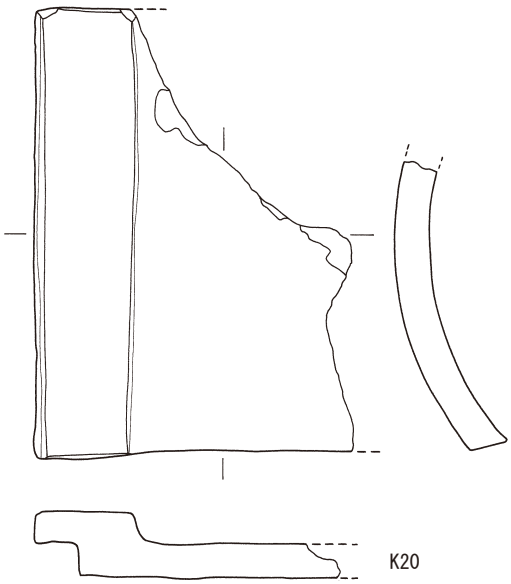

K15

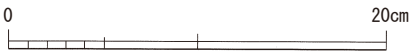
0
20cm

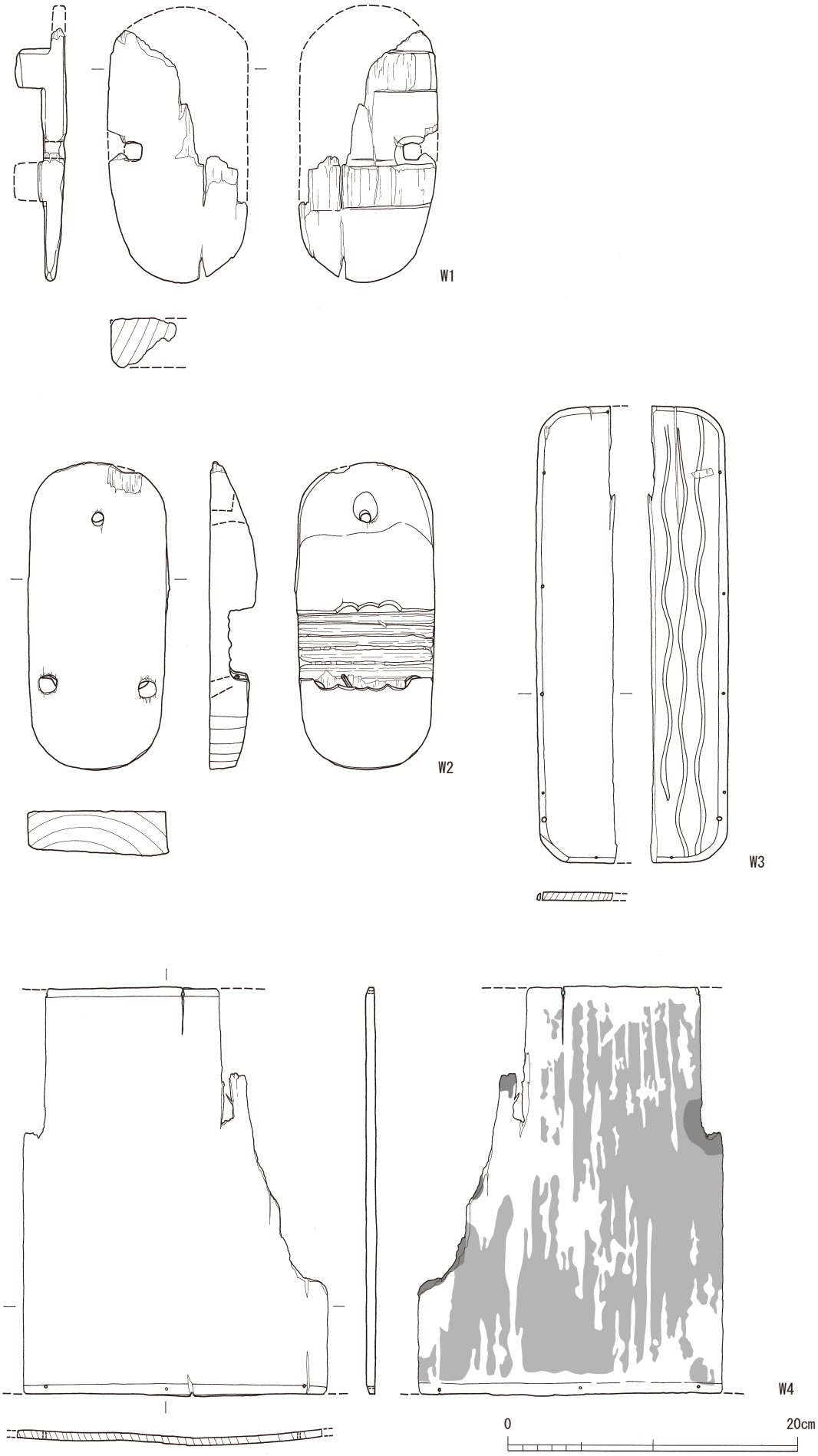

K17


K18

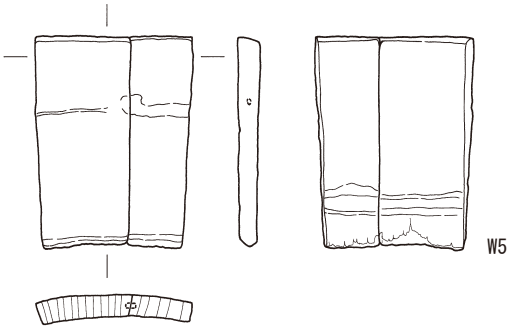

K19

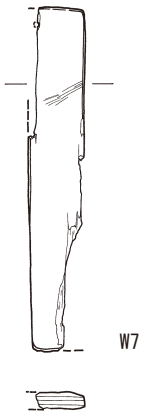

K20

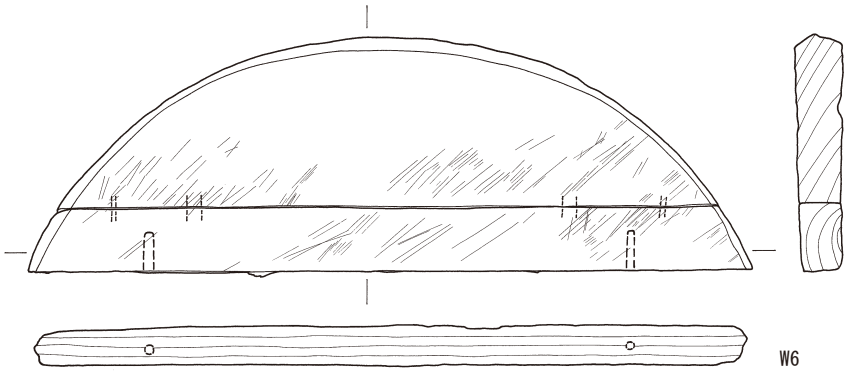

0
20cm

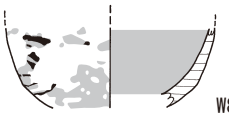


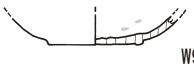
木製品 1

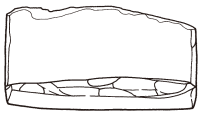


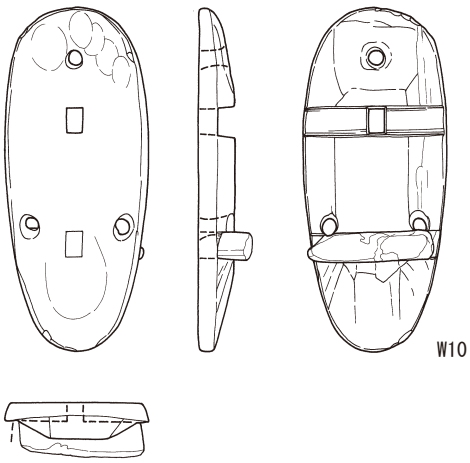


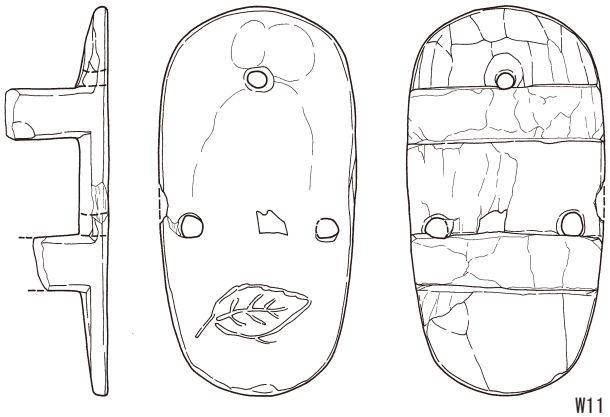


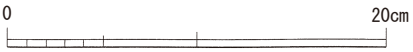




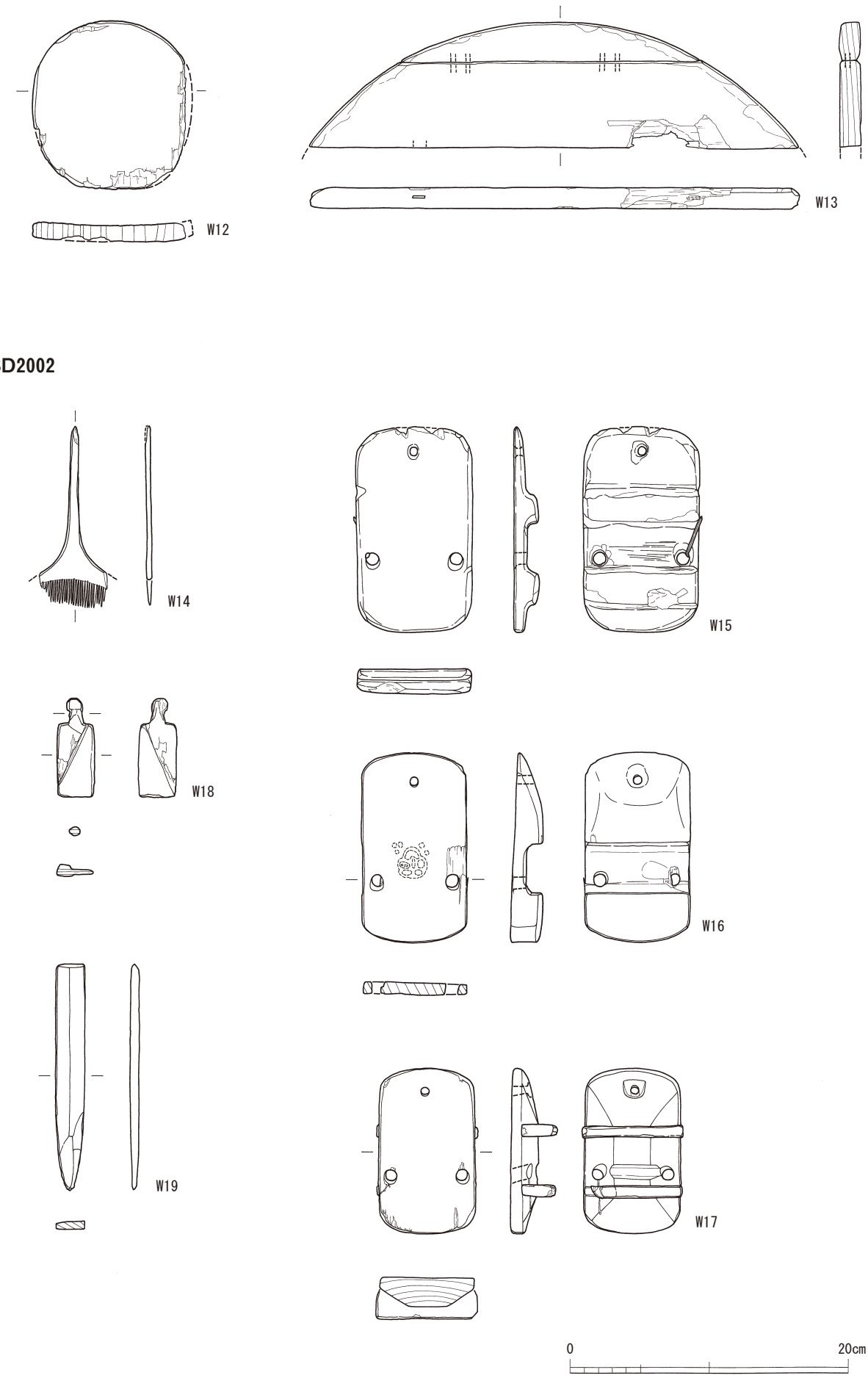




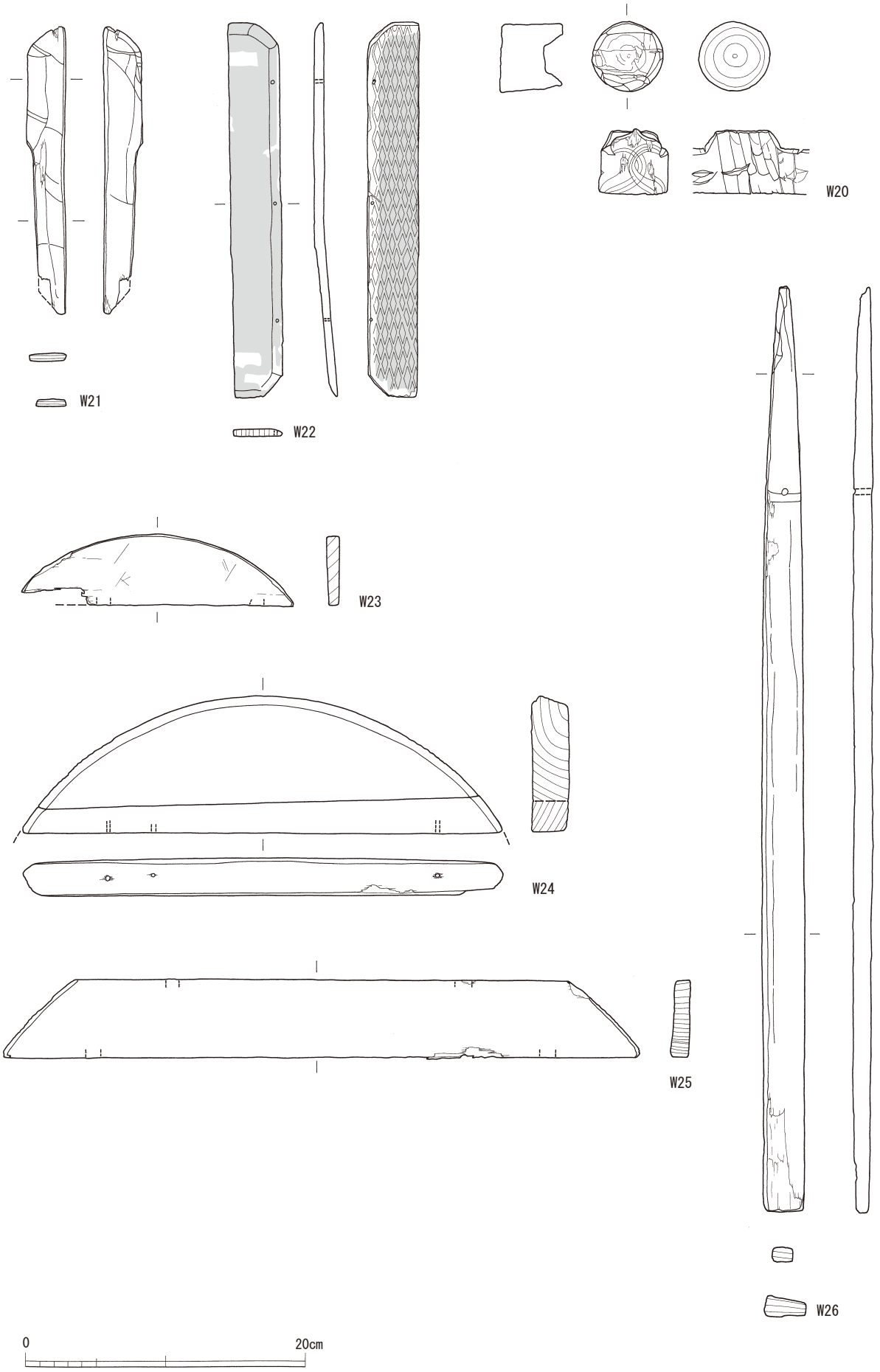




木製品 2

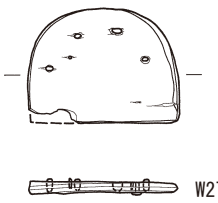


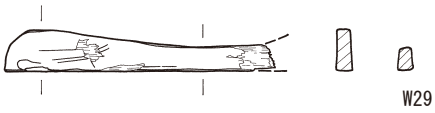
木製品 3

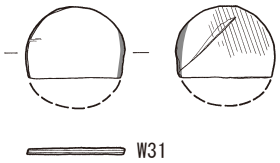


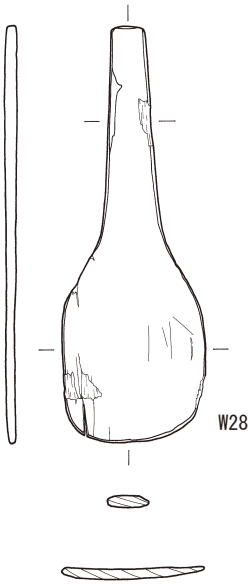
木製品 4

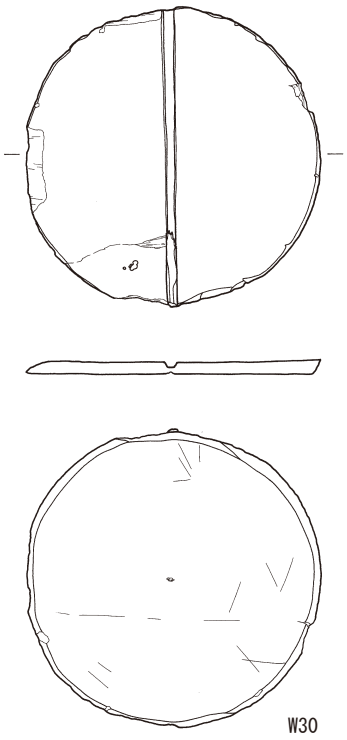
SD2003

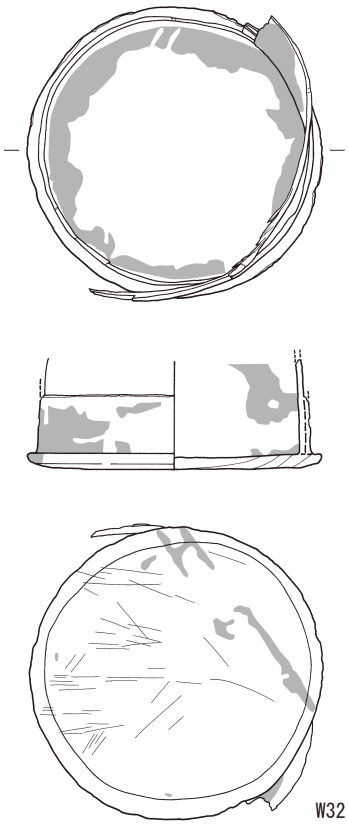




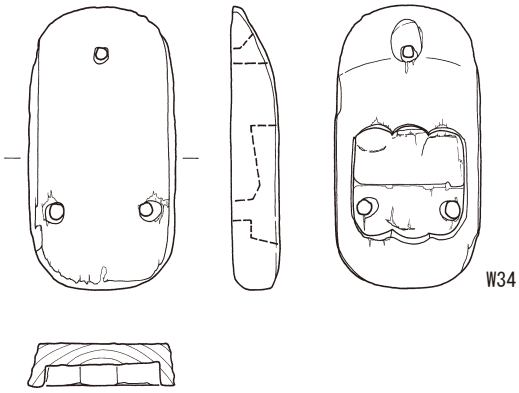


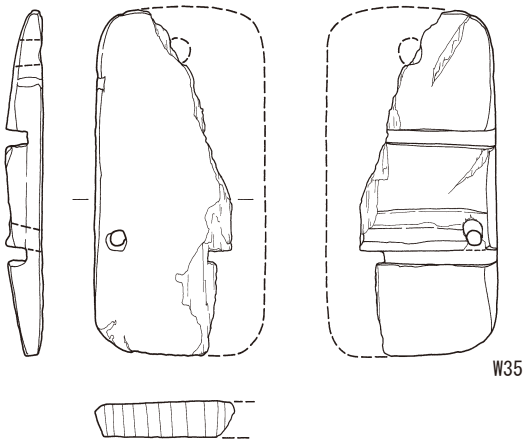




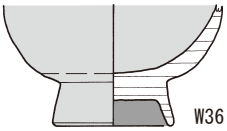


SD2004

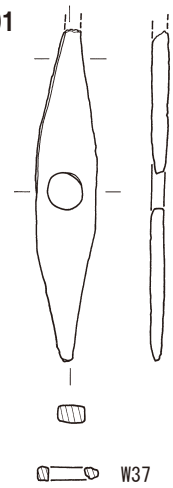


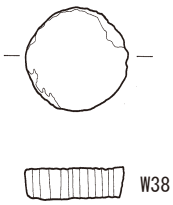


SD1003

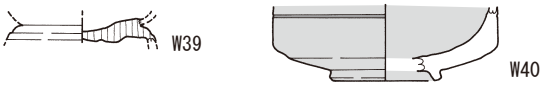


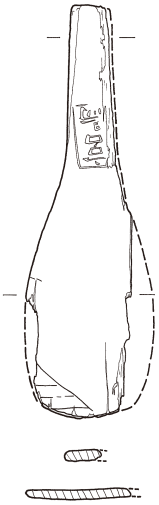
SD0001

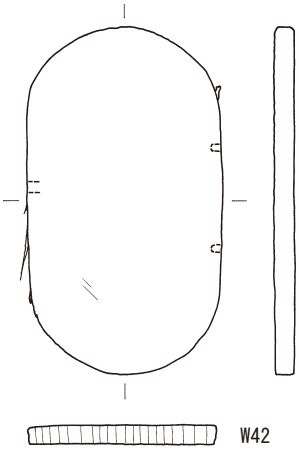


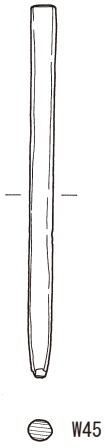


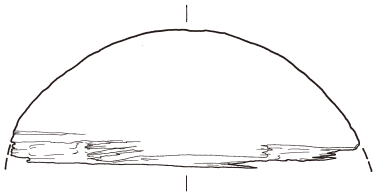
各地区の包含層及び確認調査出土木器

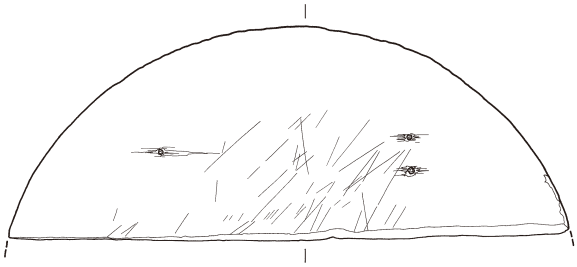


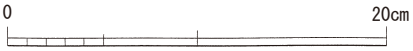


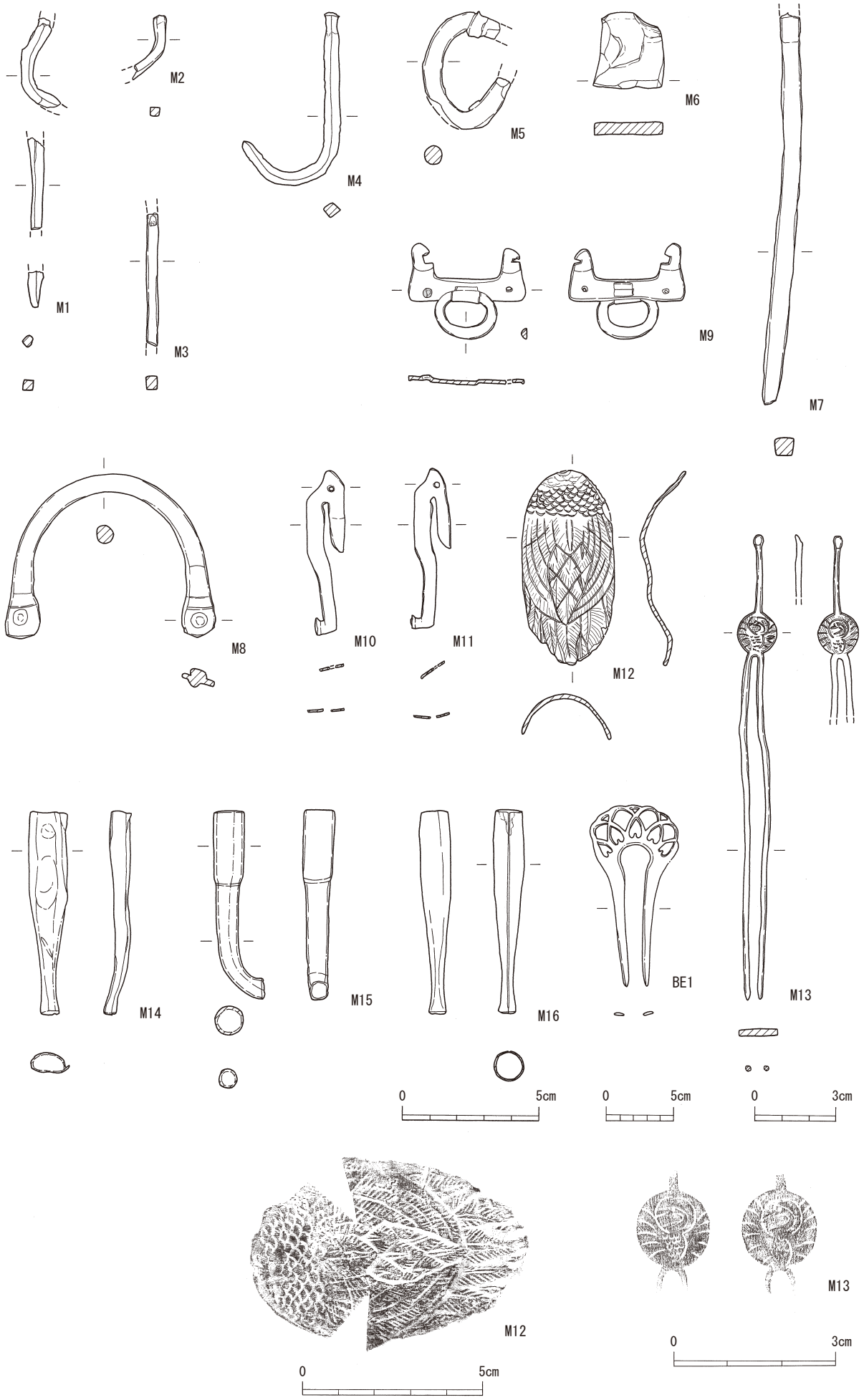




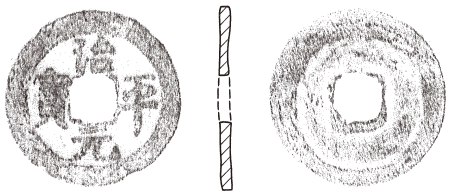


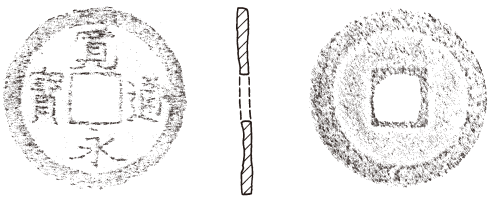


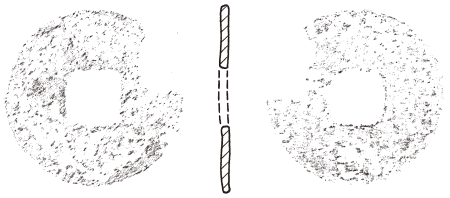


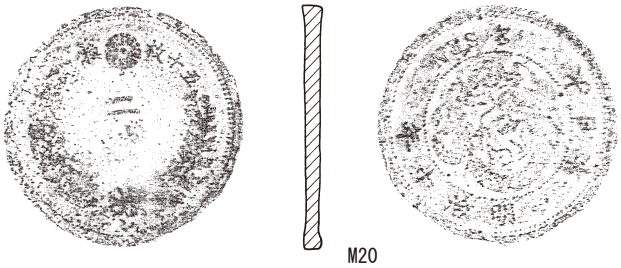

M1
M2
M3
M4
M5
M6
M7
M8
M9
M10
M11
M12
M13
M14
M15
M16
BE1
0
5cm
0
5cm
0
3cm
M12
0
5cm
M13
0
3cm

金属器 1

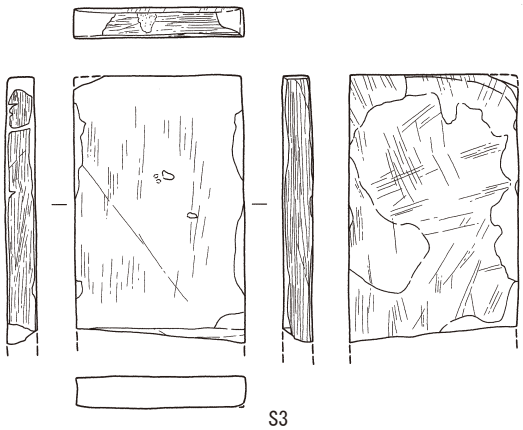


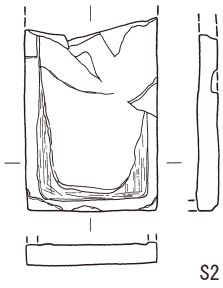






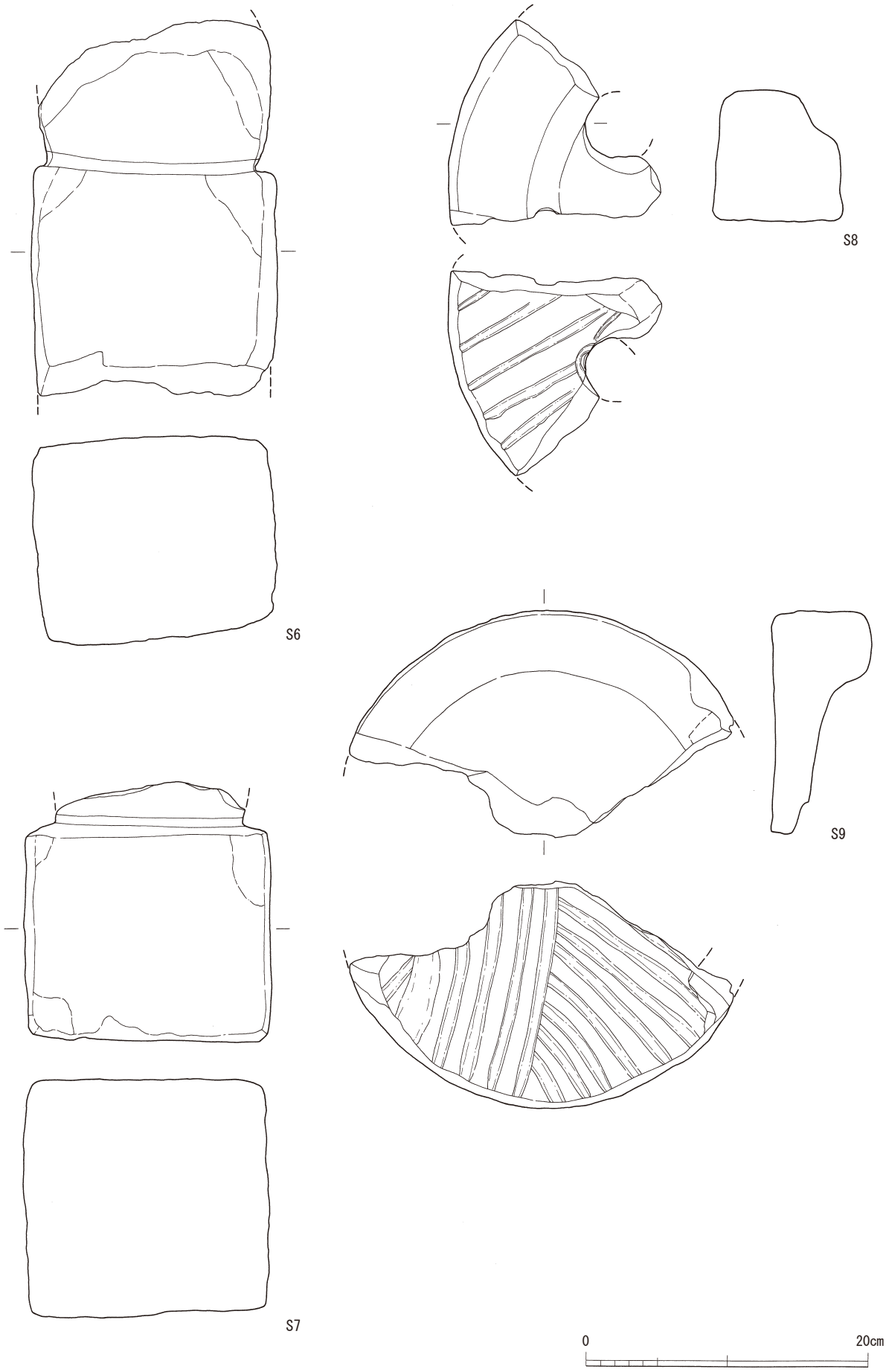
0 3cm



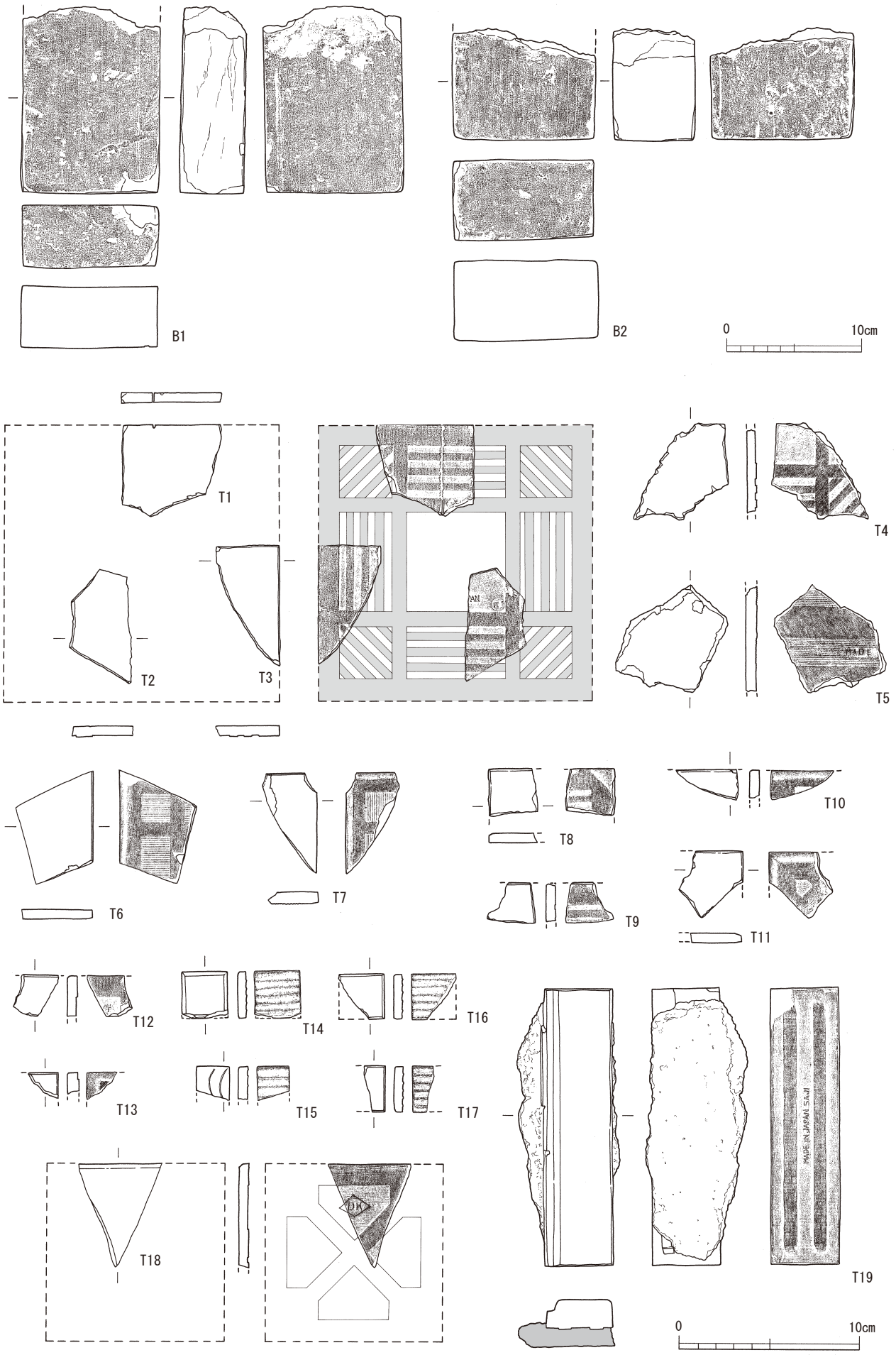


0 10cm

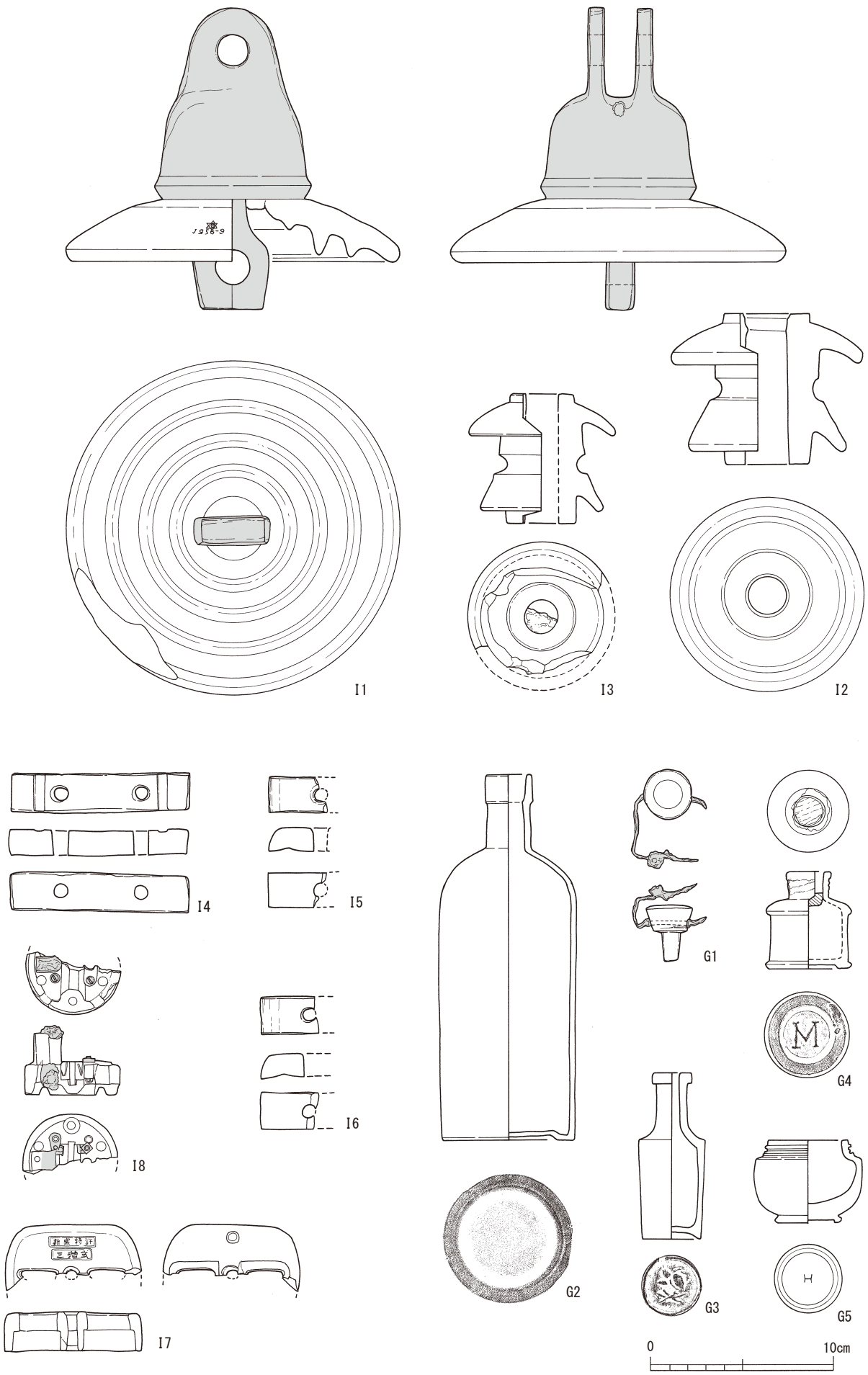
金属器２・石製品１



石製品 2


B1
B2
0
10cm
T1
T2
T3
T4
T5
T6
T7
T8
T9
T10
T11
T12
T13
T14
T15
T16
T17
T18
T19
MADE IN JAPAN SAN
0
10cm

煉瓦・タイル



碍子・硝子瓶

写 真 図 版

塚口城跡遠景（南上空から）

塚口城跡遠景（西上空から）

空中写真

塚口城跡遠景（北上空から）

塚口城跡遠景（東上空から）

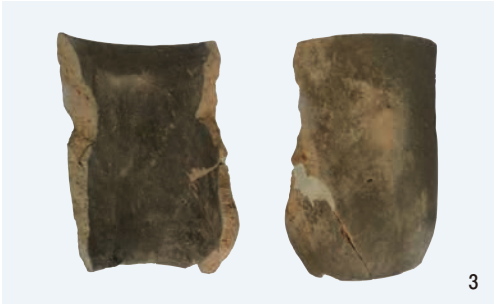
出土瓦

出土土器

出土煮炊具

1

2


3

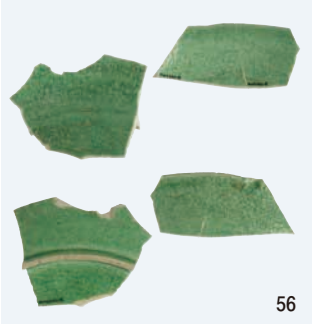
22

37

4

83

85


56

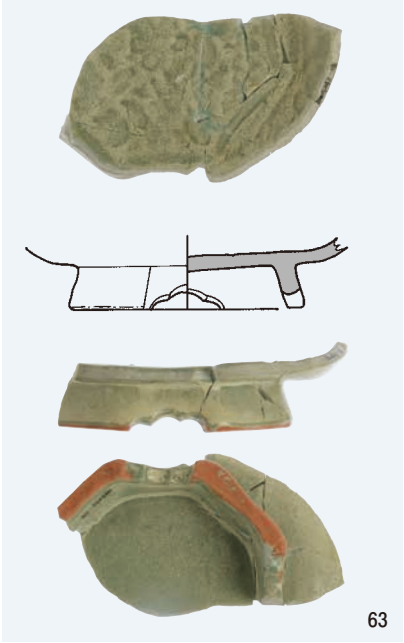
5

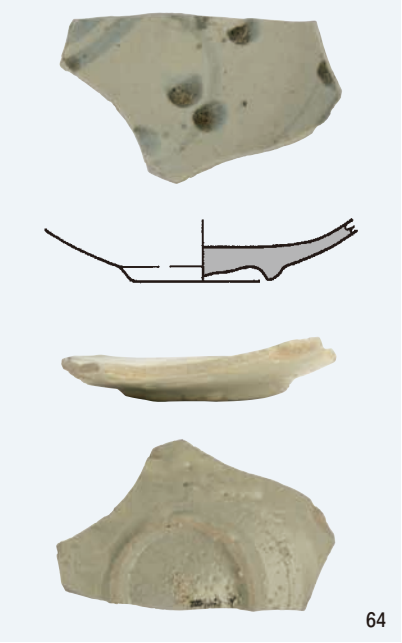
19

365

291

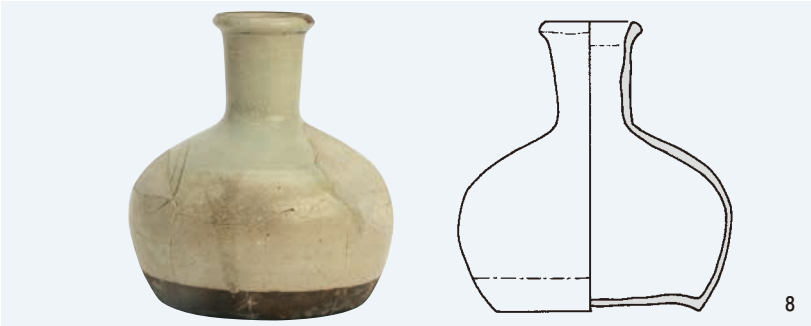
39

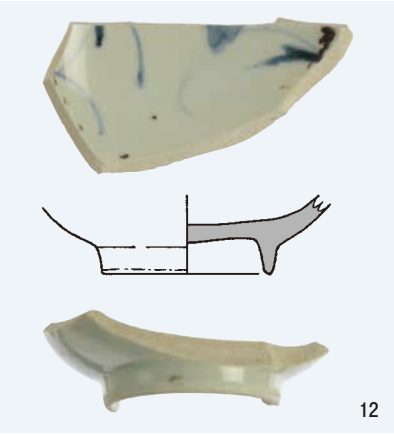

63


64

33

土器(1)

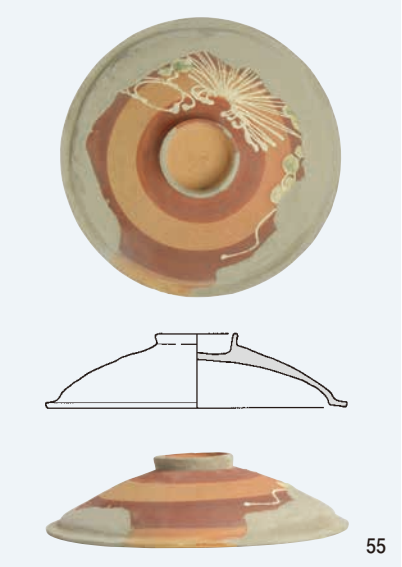

8

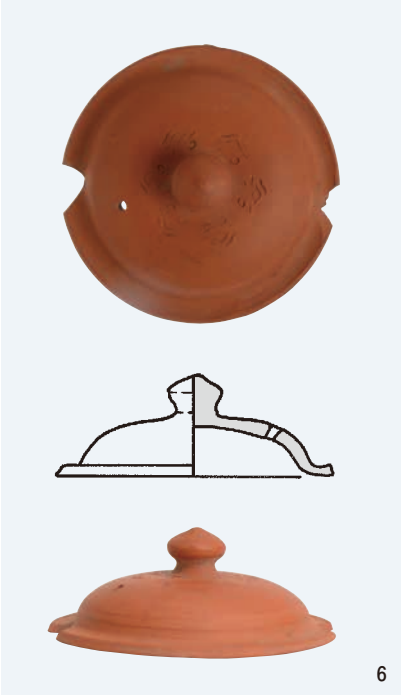

12

13

18

50

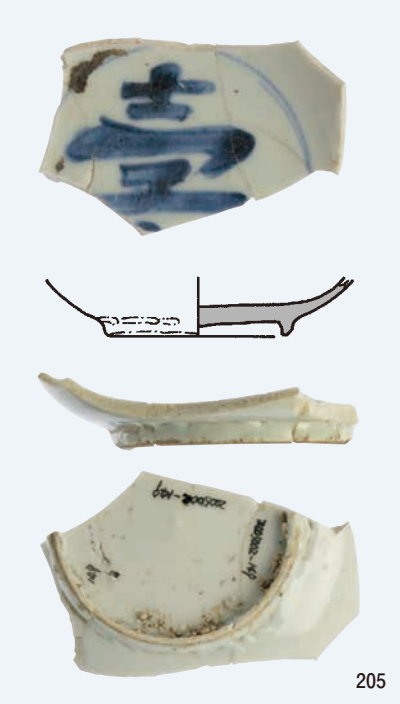

55


6

9

34

土器(2)

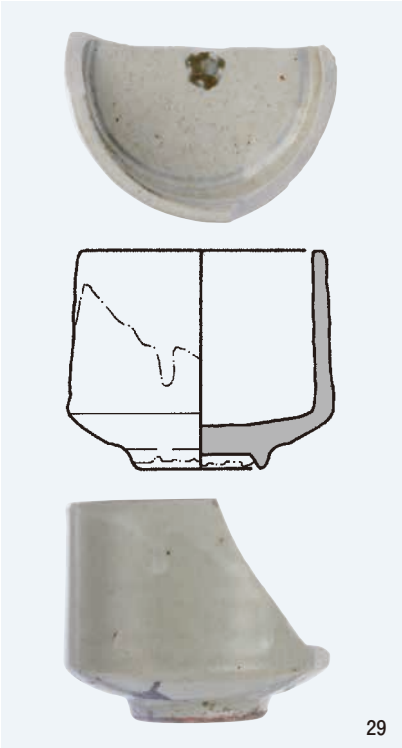


土器(3)

土器(4)

土器(5)

28


29

32

54

69

35

36

31

47

151

土器(6)

51

210

238

241

311

95

96

97

366 367

265

266

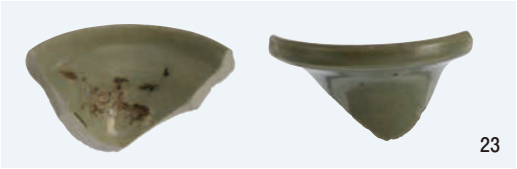
土器(7)

58

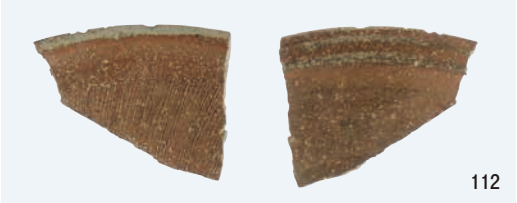
59

60

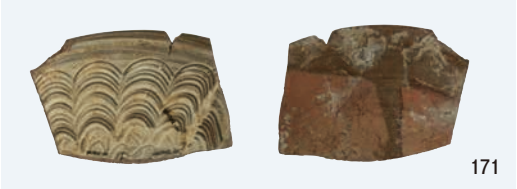
150


23

43


112

113


171

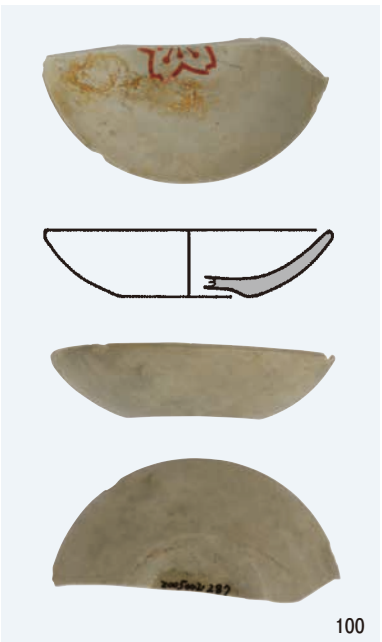
371 372

7

163

314

315


100

土器(8)

61

79

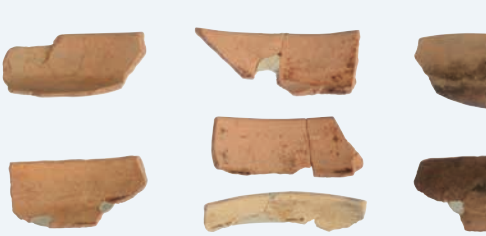
142

178

107 108 109 110 111

244

364 362 363 369 370 368


102 104 105 103 106

169 170

173 174 175

20

253

254

255

132

21

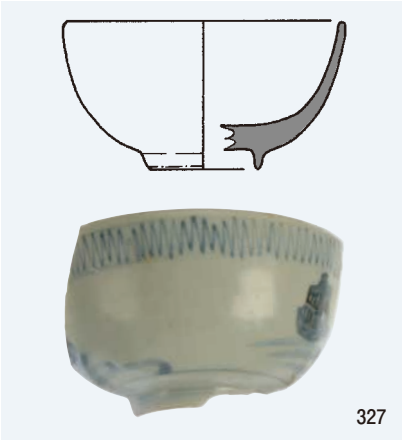
土器(9)

65

271

322

161


327

340

249

346

352

344

土器(10)

67

179

181

267

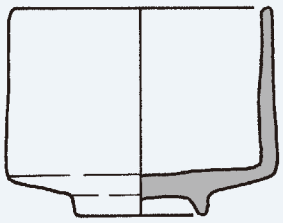
329

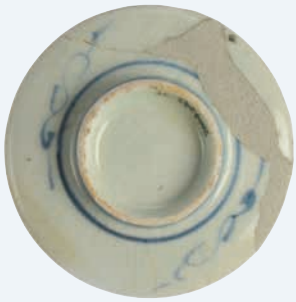
277

264

279

261




74

323

257

258

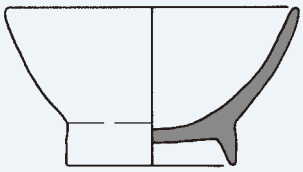
231

232

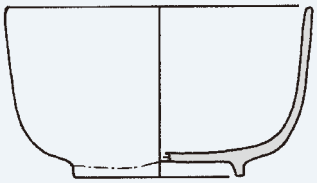
195

310

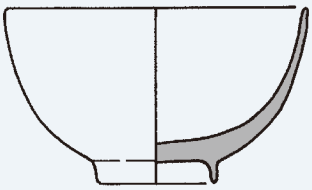
287



273

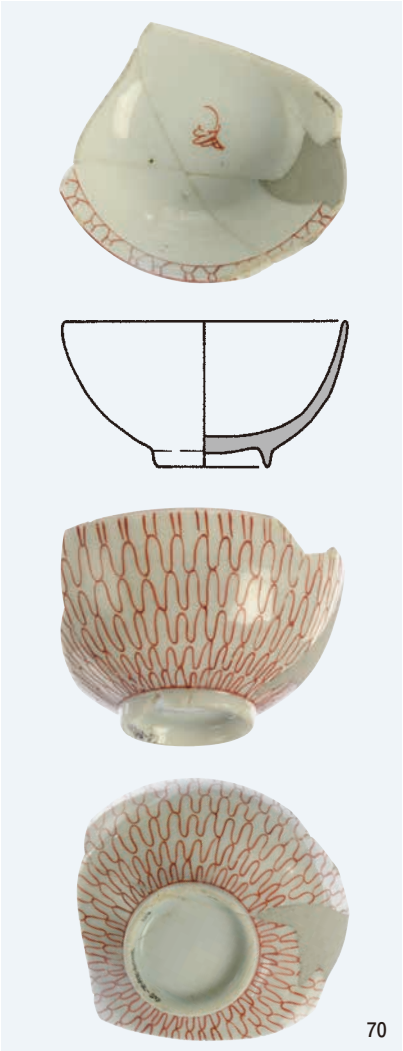


141



156

土器(12)

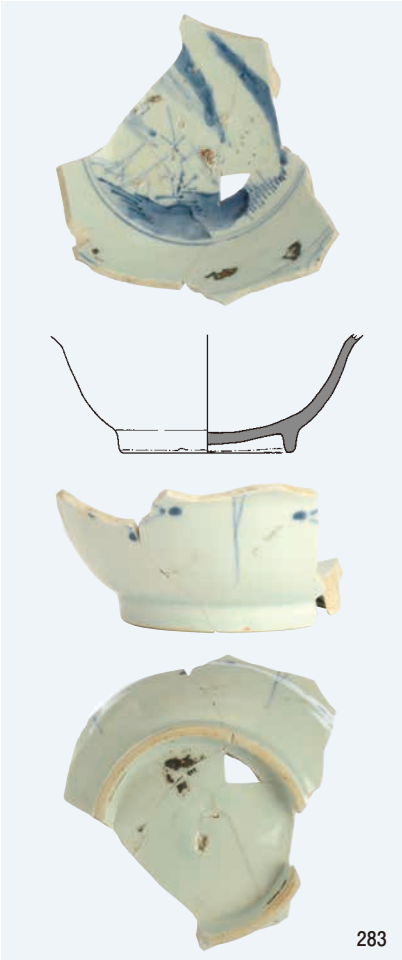

70

91

274

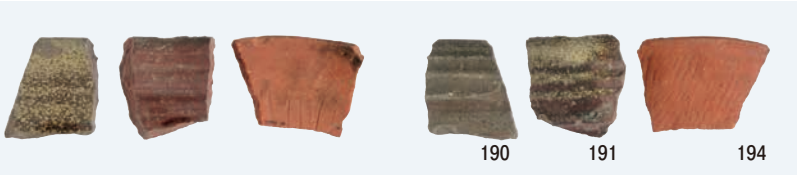
76

281


283

147
227
247
248
250
294
361
221
203
213
72
126
133
222
288
99
88
245
246
90

土器(14)


190
191
194

189

193

200
209
211
201
212
208
214

75

199

312

94

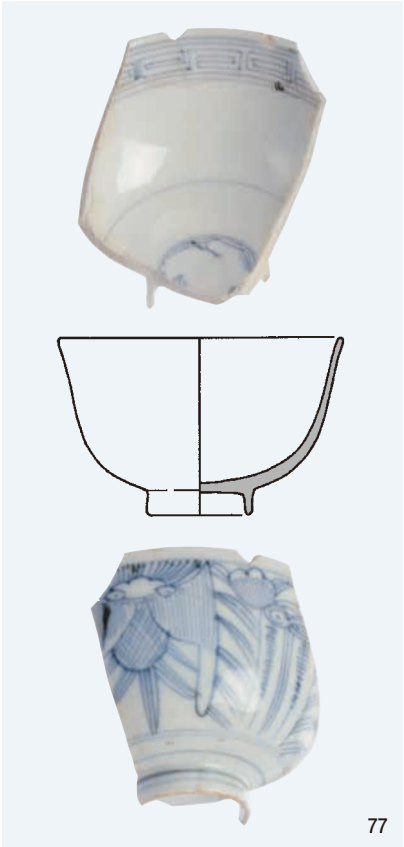
252

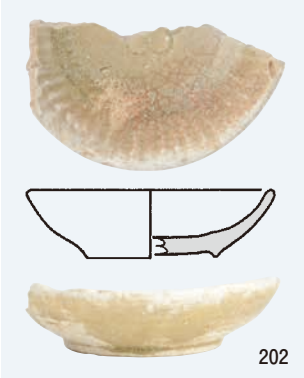
219

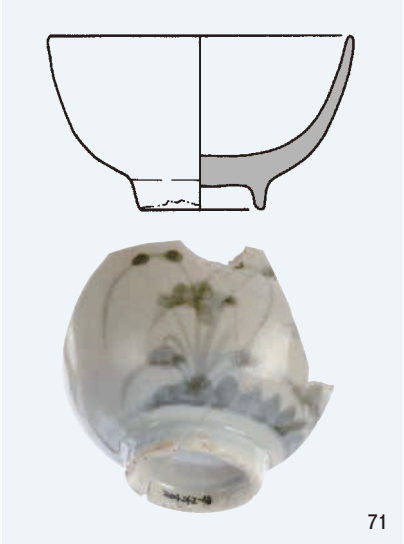
356

293

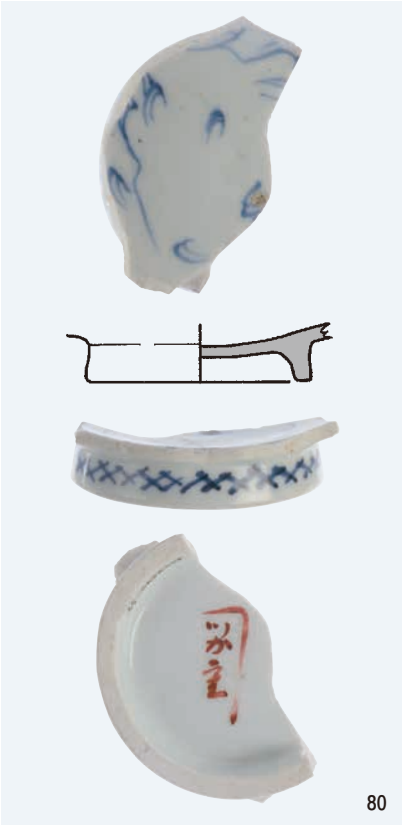
土器(15)

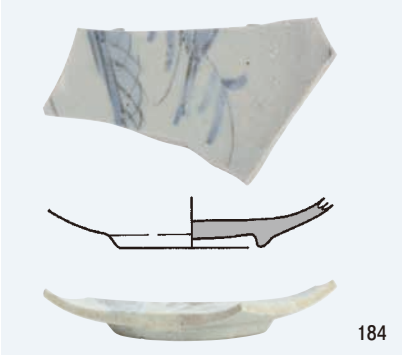


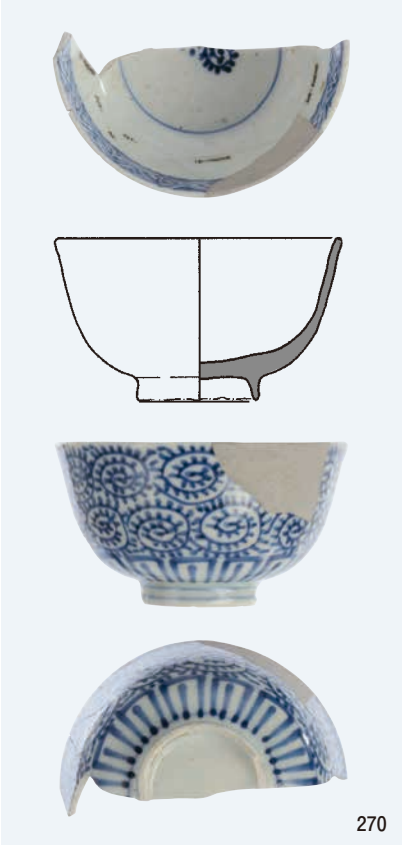




土器(16)


80


184

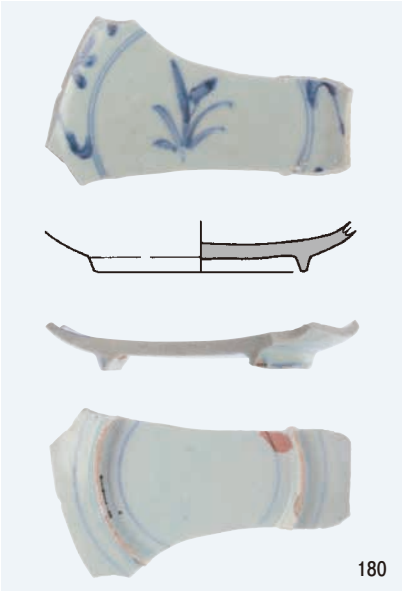

270

263

101

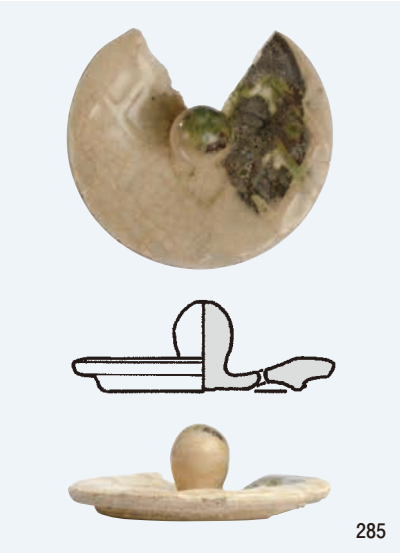
269

338

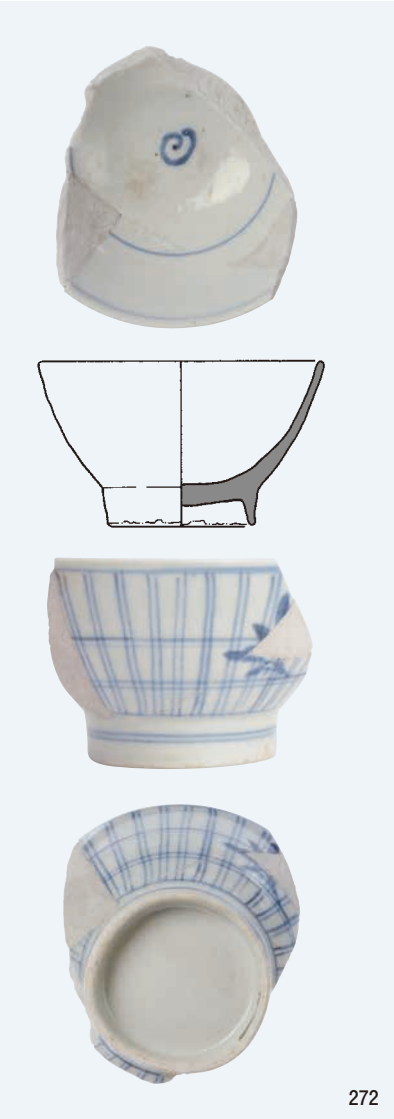

180

87

89


285

282


272

325

331

337

140

92

93

143

78

154

124

125

198

220

土器(19)

140

92

93

143

78

154

124

125

198

220

土器(19)

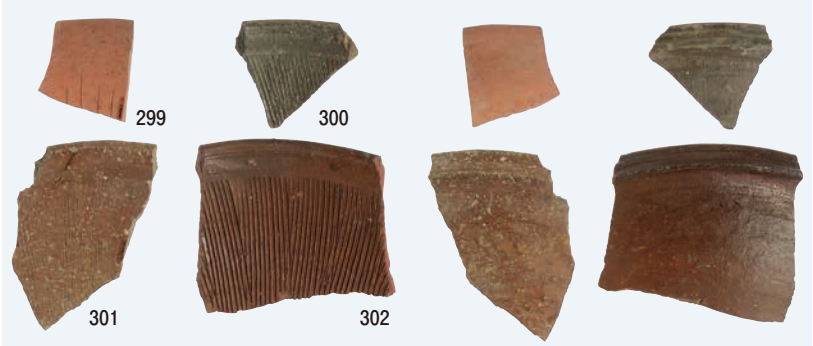
土器(20)

167

168

185

187 186 188


299 300 301 302

229

235

138

136

359

土器(21)

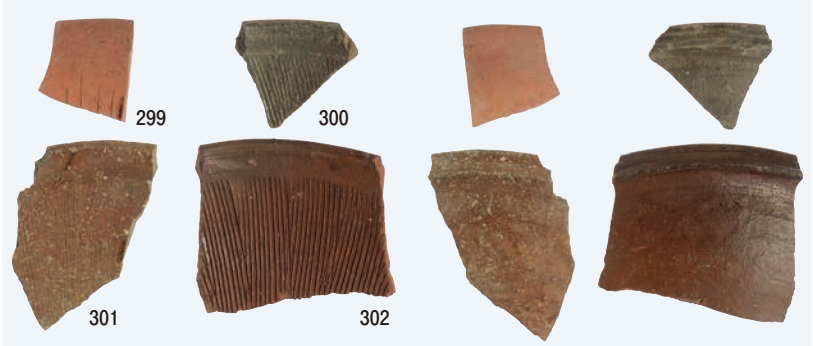
土器(20)

167

168

185

187 186 188


299 300 301 302

229

235

138

136

359

土器(21)

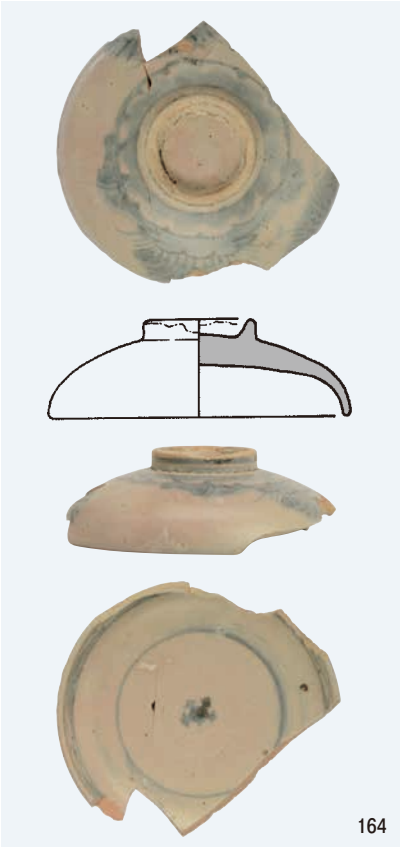
215
216
223
224
225
289
290
292
295
297
298
84
131
134
197
217
237
242
251
114
115
116
117
119
130
118
120
121
122
123
144

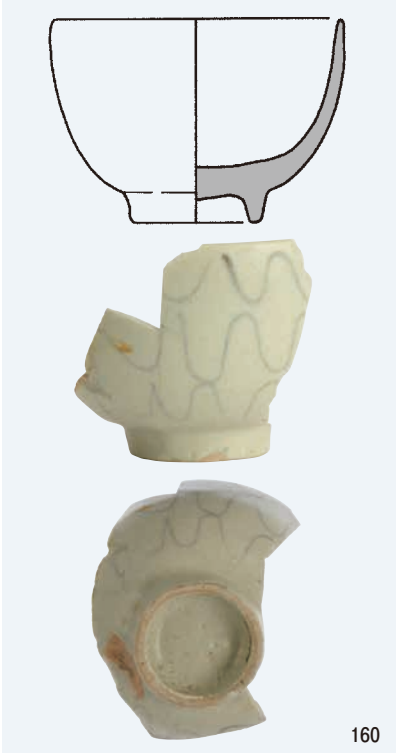
土器(22)

土器(23)

152

158


164

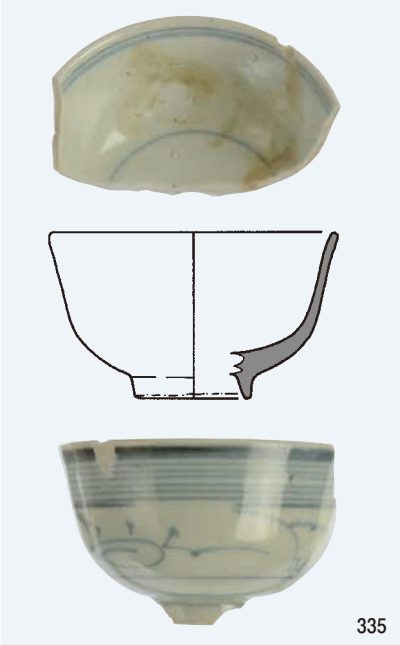

160

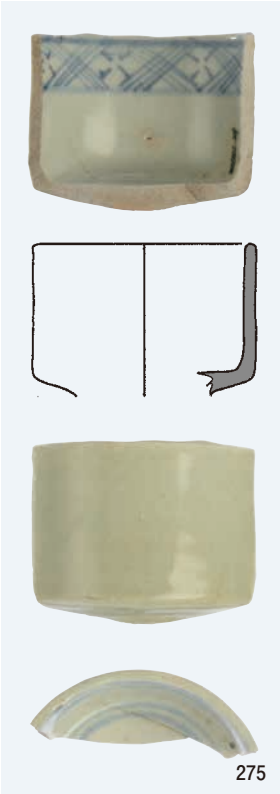
260

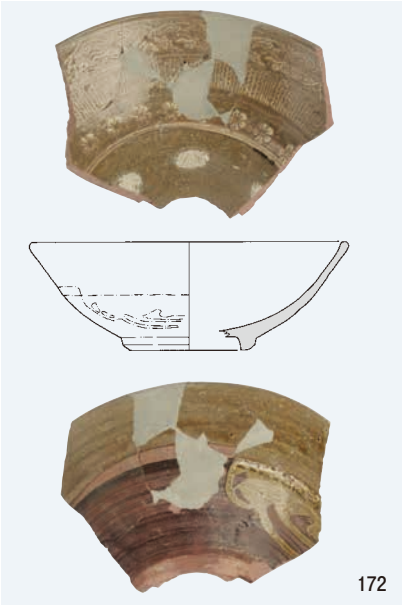
339

192

268


335



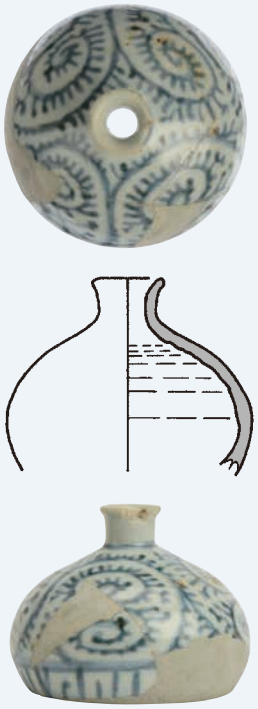


土器(25)

309

280

345


165

262

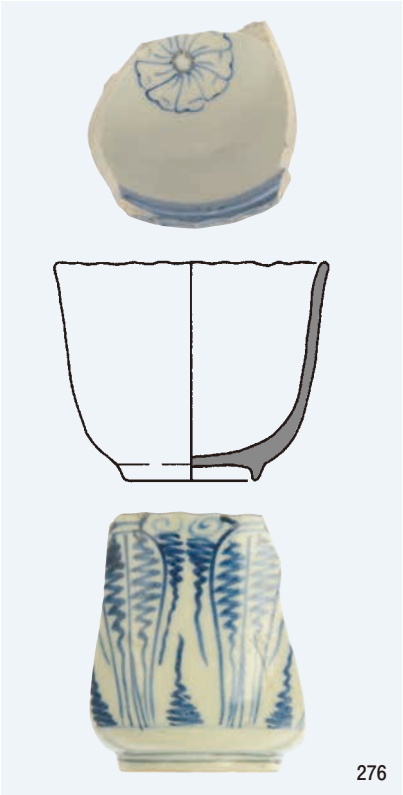
228

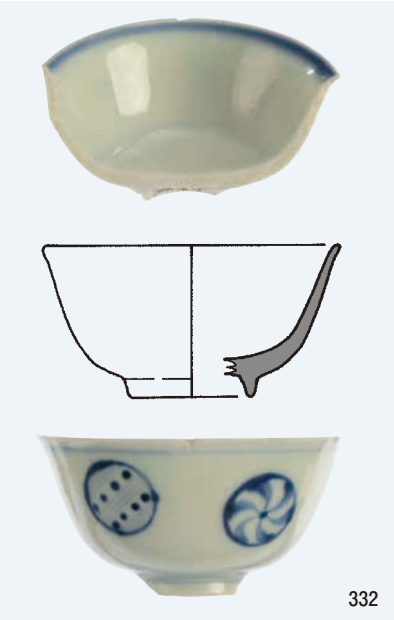
196

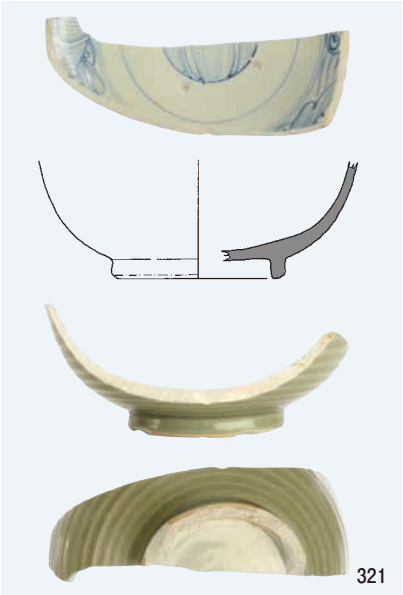
218

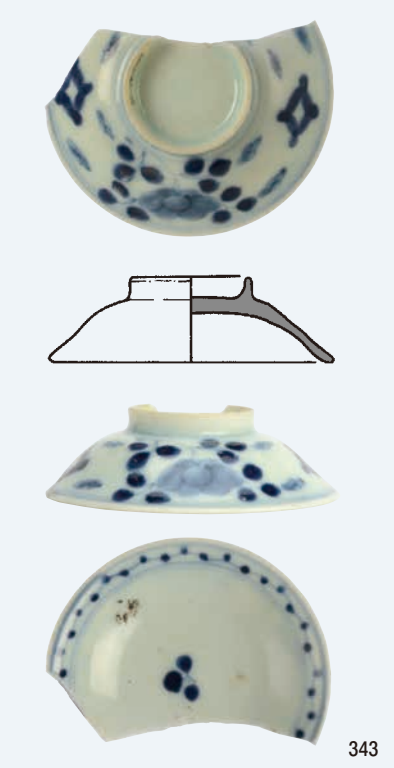
98

305









土器(27)

塚口城跡垂直写真

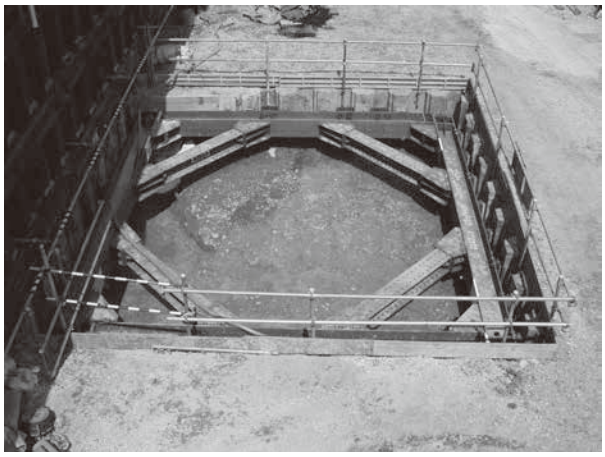
南区

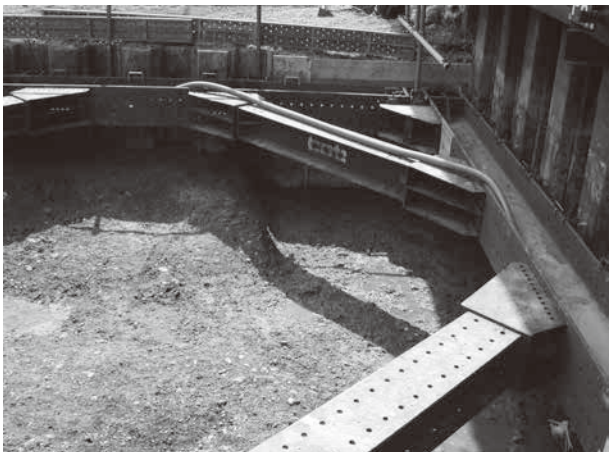
3区堀全景（東から）

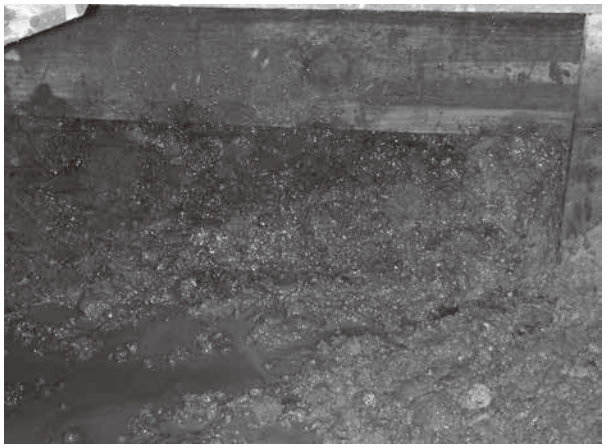
3区堀全景（西から）

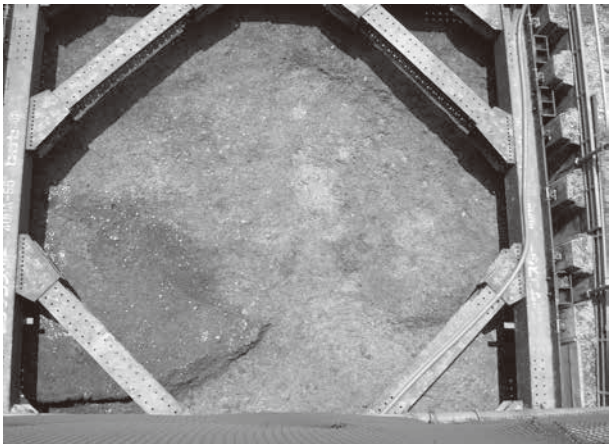
調査区全景（東から）

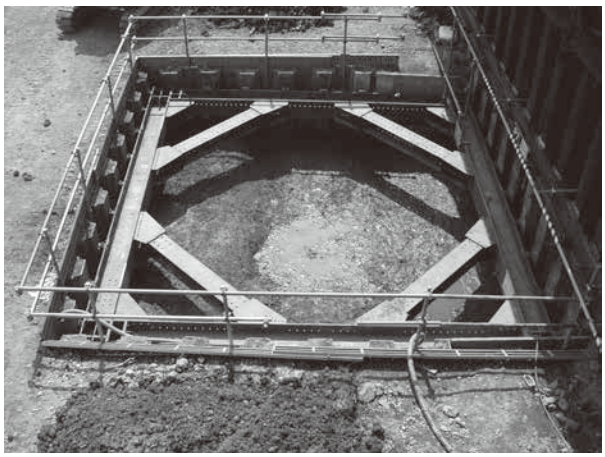
調査区全景（西から）


1区全景（西から）


1区堀（東から）


1区堀


1区全景（北から）


2区全景（東から）

調査地全景（東から）

南区

3区畦畔1断面(東から)

3区畦畔2断面(東から)

3区畦畔3断面(東から)

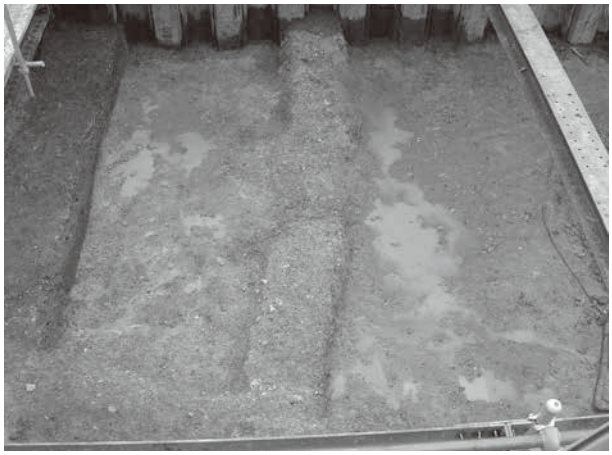
3区畦畔6～8断面(東から)

3区畦畔6断面(東から)

3区畦畔9断面(東から)

3区No.2橋状遺構(南から)

3区No.6橋状遺構(南東から)



3区No.6橋状遺構(南から)

東門付近(南西から)

3区調査風景

機械掘削(西から)

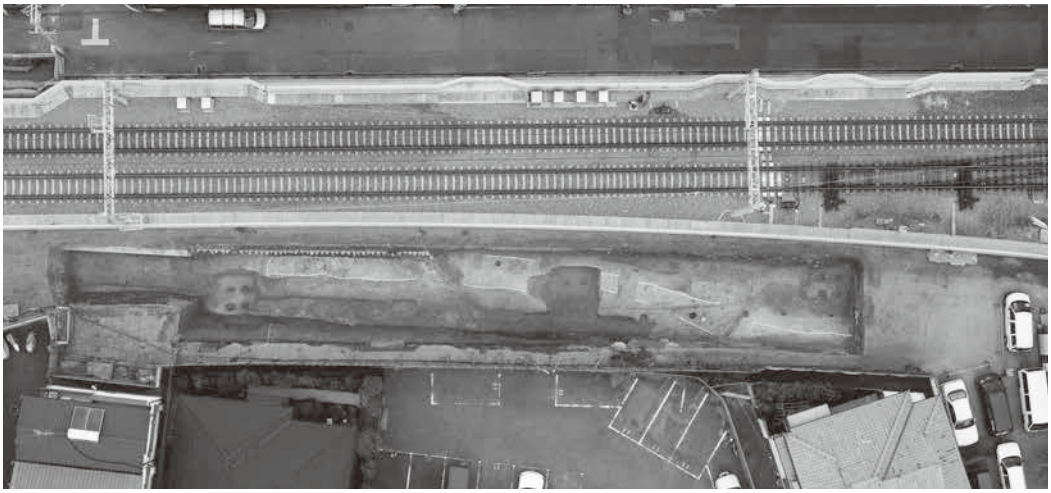
調査風景

調査風景

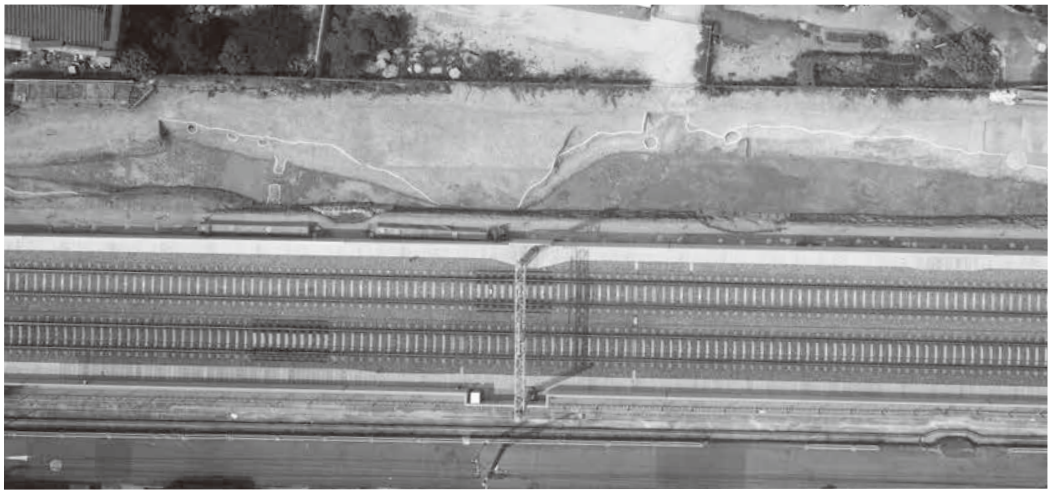
調査区全景(東から)

調査区全景(東から)

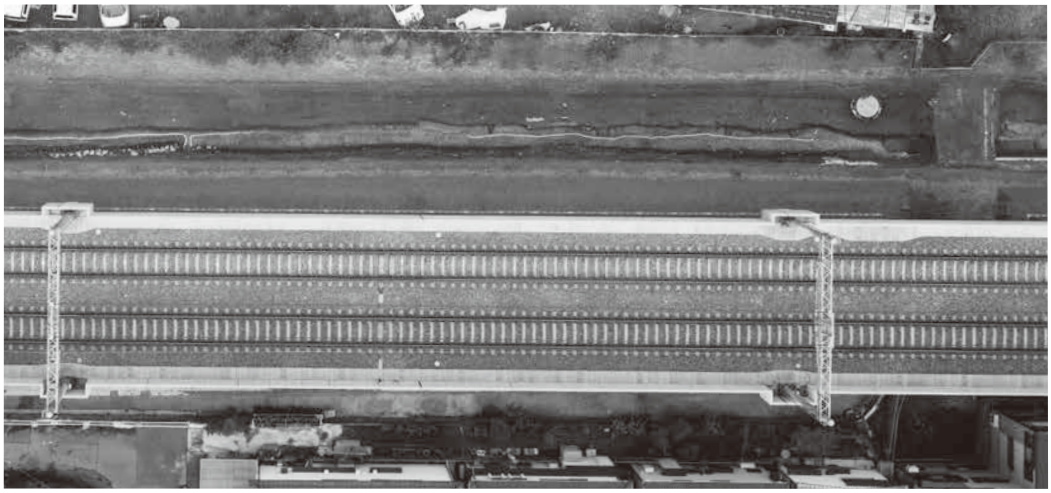
外堀の状況
（2005年度）



内堀・外堀の状況
（2004年度）



内堀の蛇行状況
（2005年度）



内堀の西端の状況
（2005年度）

全景（東から）

全景（西から）

全景（東から）

内堀と外堀（西から）

外堀内の柱穴（南東から）

堀 断面（西から）

2004年度の調査

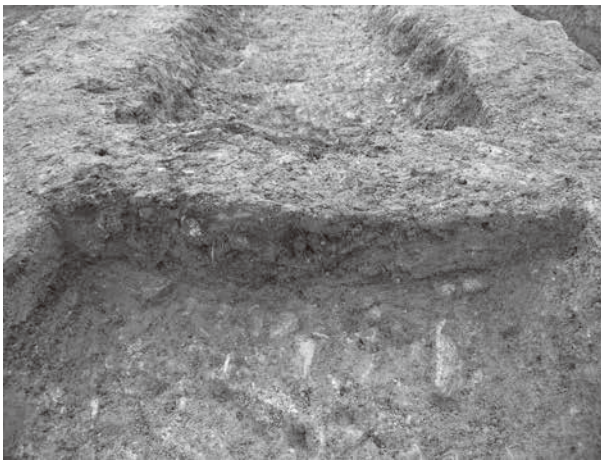
北-Ⅱ区西壁（南東から）

北-Ⅱ区北壁 西端部（南東から）

北-Ⅱ区北壁（南西から）

SD01 断面（西から）

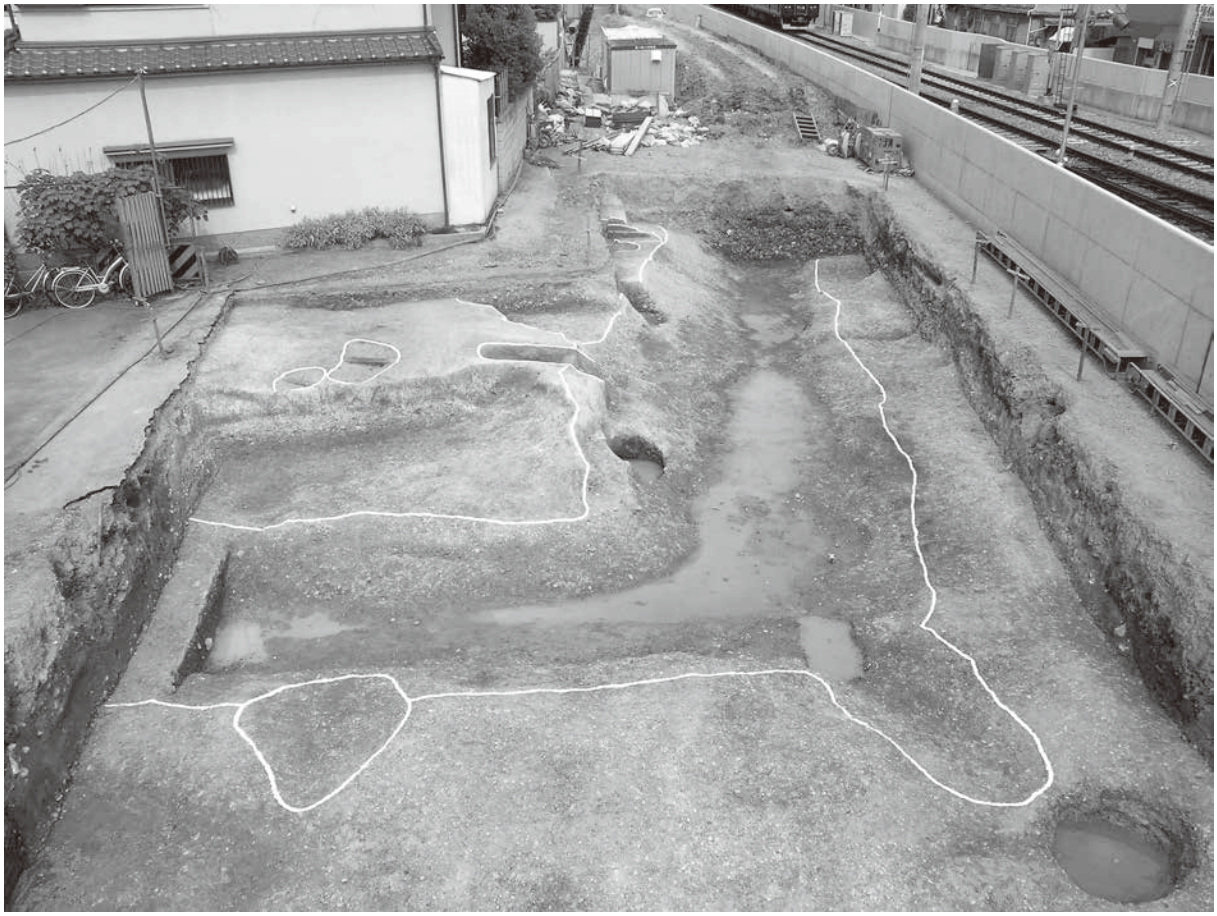
SD02（西から）



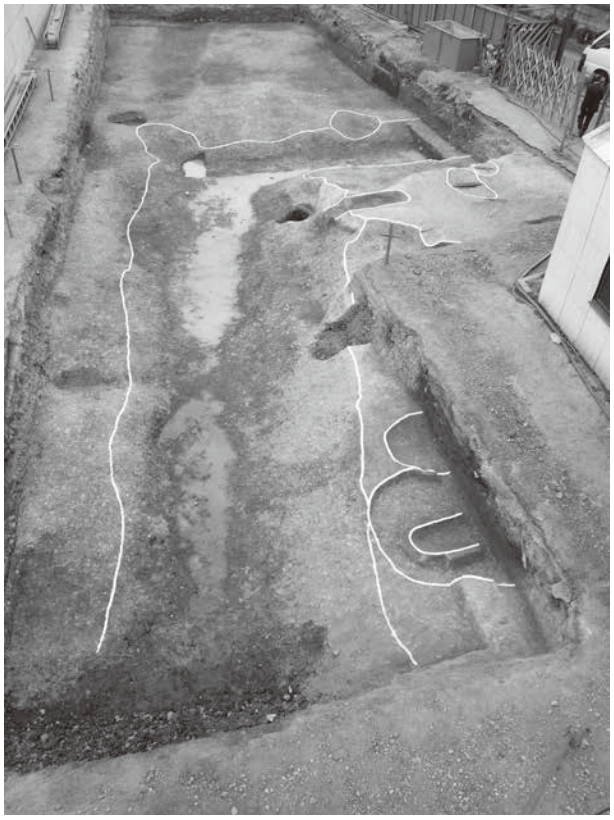
SD02 断面（西から）

SD03（北西から）

SD01 一石五輪塔出土状況

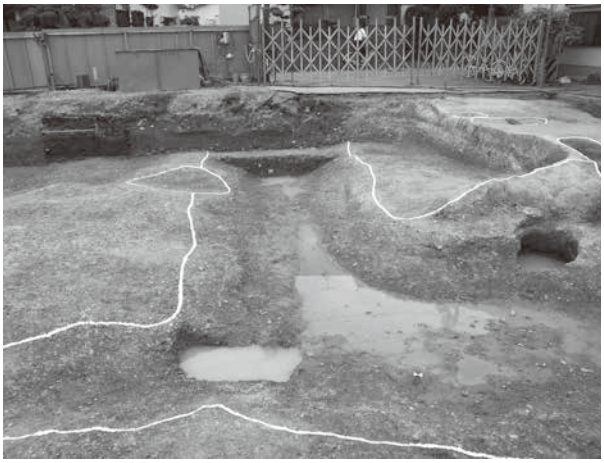


北-Ⅰ区 全景(東から)



北-Ⅰ区 全景(東から)

北-Ⅰ区 外堀内側の状況



北-Ⅰ区 SD2001(南から)

2005年度の調査

木棺墓 SX2001（北から）

SX2001完掘（北から）

SX2001検出状況（北から）

北壁際の焼土部分（南から）

SX2001ほか検出状況（南から）

SX2001ほか（北から）

SX2002（東から）

SX2003（東から）

北-Ⅰ区 SD2001東壁の土層断面(西から)

SD2001北壁の土層断面(南から)

SD2001コーナー部分土層(南東から)

北-Ⅰ区 西壁(南東から)

北-Ⅲ-1区 全景(西から)

北-Ⅲ-1区 全景(東から)

北-Ⅲ-1区 全景近接(東から)

2005年度の調査

北-Ⅲ-2区 全景(西から)

北-Ⅲ-2区 全景近接(東から)

北-Ⅲ-3区 全景(西北から)

北-Ⅲ-3区 全景(東から)

SD2002張出部の状況(西から)

SD2002張出部周辺(東から)

北-Ⅲ-1区 張出部と陸橋(西から)

SD2002陸橋(北から)

SX2004（南から）

SD2003セクション10（西から）

SD2003セクション13（東から）

SD2003曲物出土状況（東南から）

SD2003東コーナー（北東から）

SD2003ブリッジ部分（西南から）

SD2004セクション19（東から）

SD2004セクション18（西から）

2005年度の調査

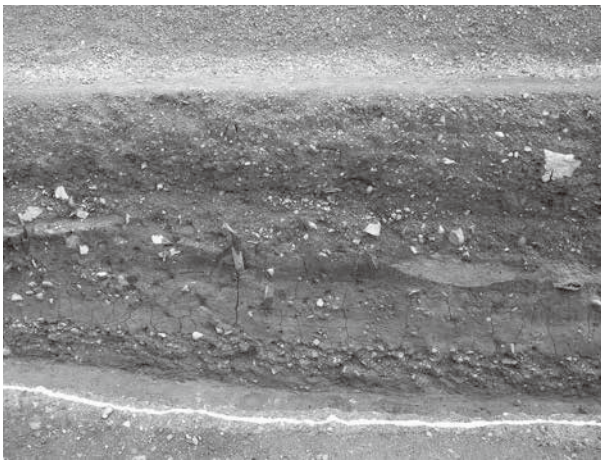
下層旧河道の状況 近接

下層旧河道の状況(南西から)

北-Ⅲ-2区 東端南壁 SD2003 コーナー

北-Ⅲ-2区 東端南壁

北-Ⅲ-2区 東半南壁



北-Ⅲ-2区 中央付近 南壁

北-Ⅲ区 セクション6(東から)

SD2002セクション5(東から)

SD0003石積護岸（西南から）

SD0003石積（東南から）

SD0003石積状況（南から）

SD0003石組（東から）

SD0003石組（北から）

SD0003下層板材護岸（北から）

SD0003下層杭列（北から）

立命館大学 青木哲哉先生の現地指導

2005年度の調査

SD2001断割状況（南から）

北-Ⅰ区東端 断割状況（東から）

北-Ⅲ-1区東端 下層の状況（南西から）

北-Ⅲ-1区 下層の状況（東から）

北-Ⅲ-1区東半 下層の状況（南西から）

下層精査状況

北-Ⅲ-2区西半 下層の状況

北-Ⅲ-2区中央 下層の状況（南から）

K1

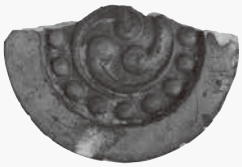
K3

K4

K5

K6

K7


K8

K9

K10

K11

K12

瓦(1)

瓦(2)

W1

W2

W3

W4

W8

W9

W5

W6

W7

W11

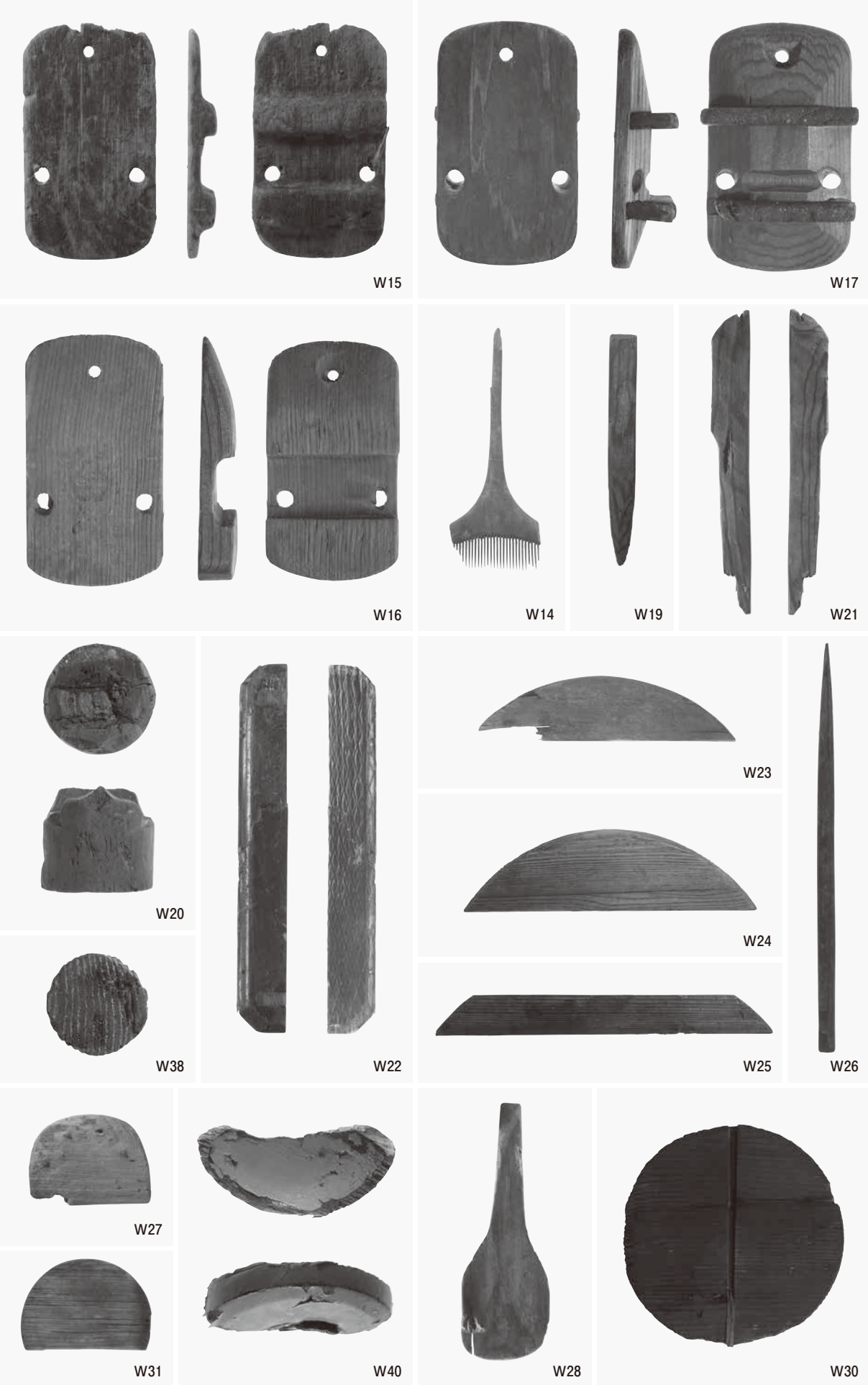
W10

W12

W18

W13

木製品(1)


W15
W17
W16
W14
W19
W21
W20
W23
W24
W38
W22
W25
W26
W27
W31
W40
W28
W30

木製品(2)

W32

W33

W29

W36

W37

W34

W35

W42

W41

W45

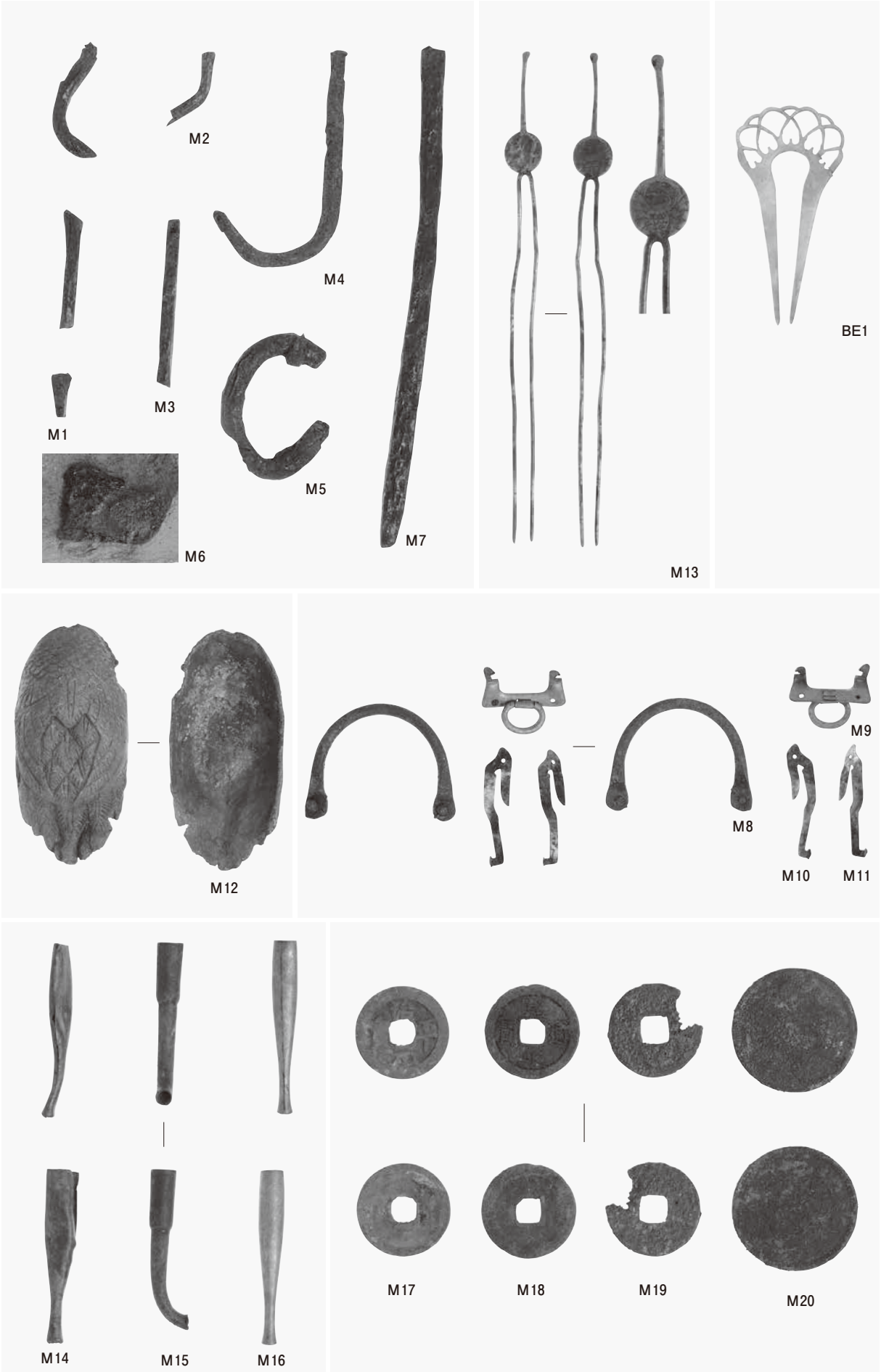
W39

W43

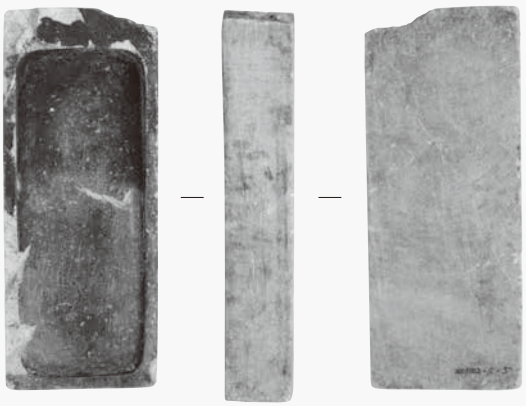
W44

W46

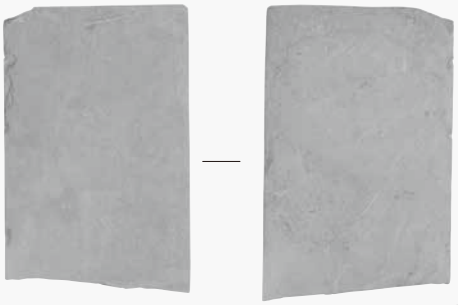
木製品(3)


M1
M2
M3
M4
M5
M6
M7
M13
BE1
M12
M8
M9
M10
M11
M14
M15
M16
M17
M18
M19
M20

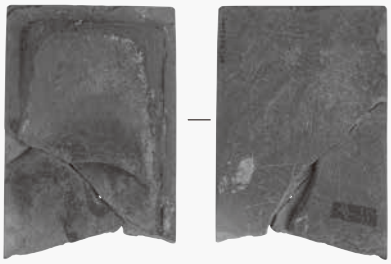
金属器



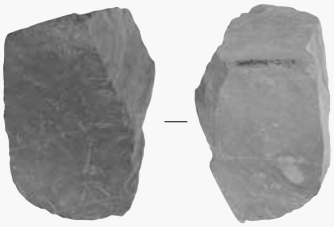
S1



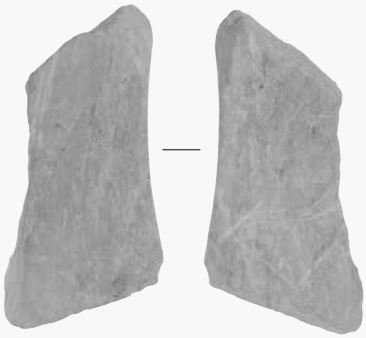
S3



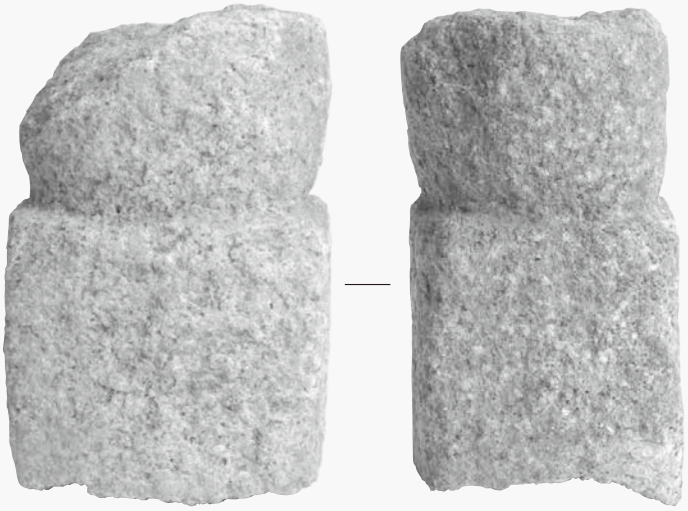
S2



S4



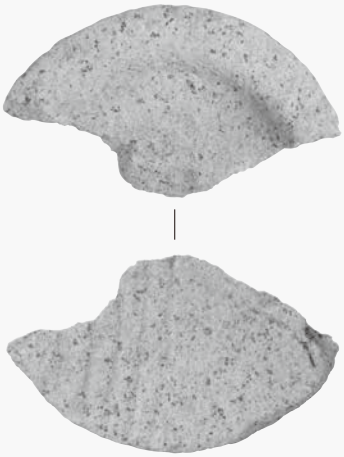
S5



S6

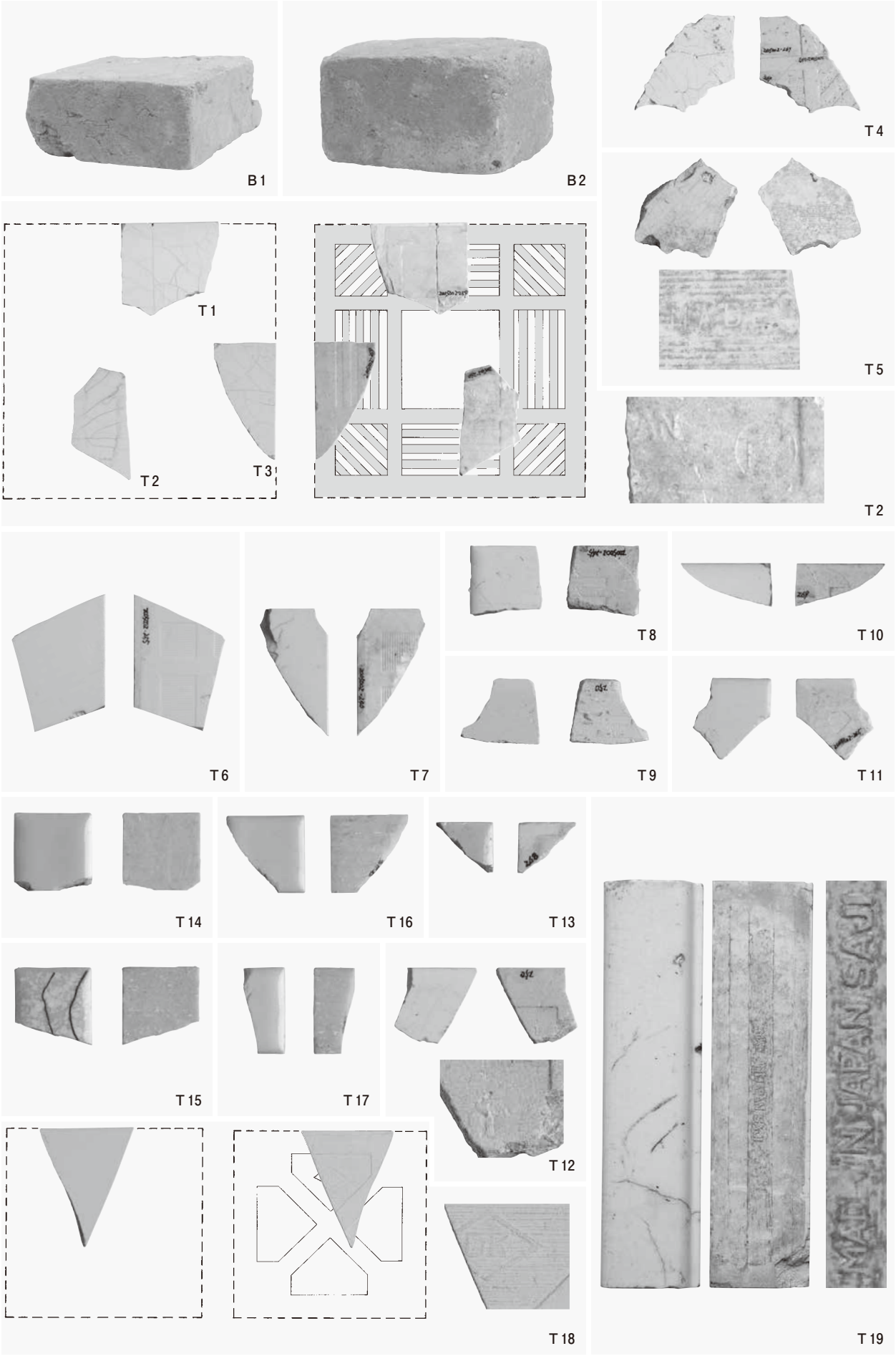
S8

S7



S9

石製品


B1
B2
T4
T1
T2
T3
T5
T2
T6
T7
T8
T10
T9
T11
T14
T16
T13
T15
T17
T12
T18
T19

煉瓦・タイル

碍子類・瓶類

報　告　書　抄　録

ふりがな	つかぐちじょうあと
書名	塚口城跡
副書名	都市計画道路尼崎伊丹線立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第442冊
編著者名	岡田章一・渡辺　昇・西口圭介・深井明比古・青木哲哉・㈱パレオ・ラボ
編集機関	公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
所在地	〒675－0142　兵庫県加古郡播磨町大中１丁目１番１号（兵庫県立考古博物館内）　Tel 079－437－5561
発行機関	兵庫県教育委員会
所在地	〒650－8567　兵庫県神戸市中央区下山手通５丁目10番１号　Tel 078－362－3784
発行年月日	平成25(2013)年３月26日
資料保管機関	兵庫県立考古博物館
所在地	〒675－0142　兵庫県加古郡播磨町大中１丁目１番１号　Tel 079－437－5589

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間（遺跡調査番号）	調査面積（㎡）	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
塚口城跡	尼崎市塚口本町１丁目	28202	030036	34°45′10″	135°25′11″	19980925～19980929（980135）	55㎡	記録保存調査
						20010528～20010717（2001040）	805㎡	
						20040910～20041007（2004200）	165㎡	
						20050124～20050314（2004242）	408㎡	
						20050523～20050923（2005002）	1675㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
塚口城跡	集落	古墳時代	土坑	埴輪・須恵器	
	城郭	戦国～安土桃山時代	堀・橋状遺構	土師器・陶磁器・漆椀	

要約	浄土真宗の塚口御坊として装備され、織豊期に城跡として整備された塚口城跡の南側端部の調査で、記録通り幅３間の堀であったが、二重堀であることが確認された。城跡以前の遺構も僅かながら残存していた。

兵庫県文化財調査報告　第442冊

尼崎市

塚 口 城 跡

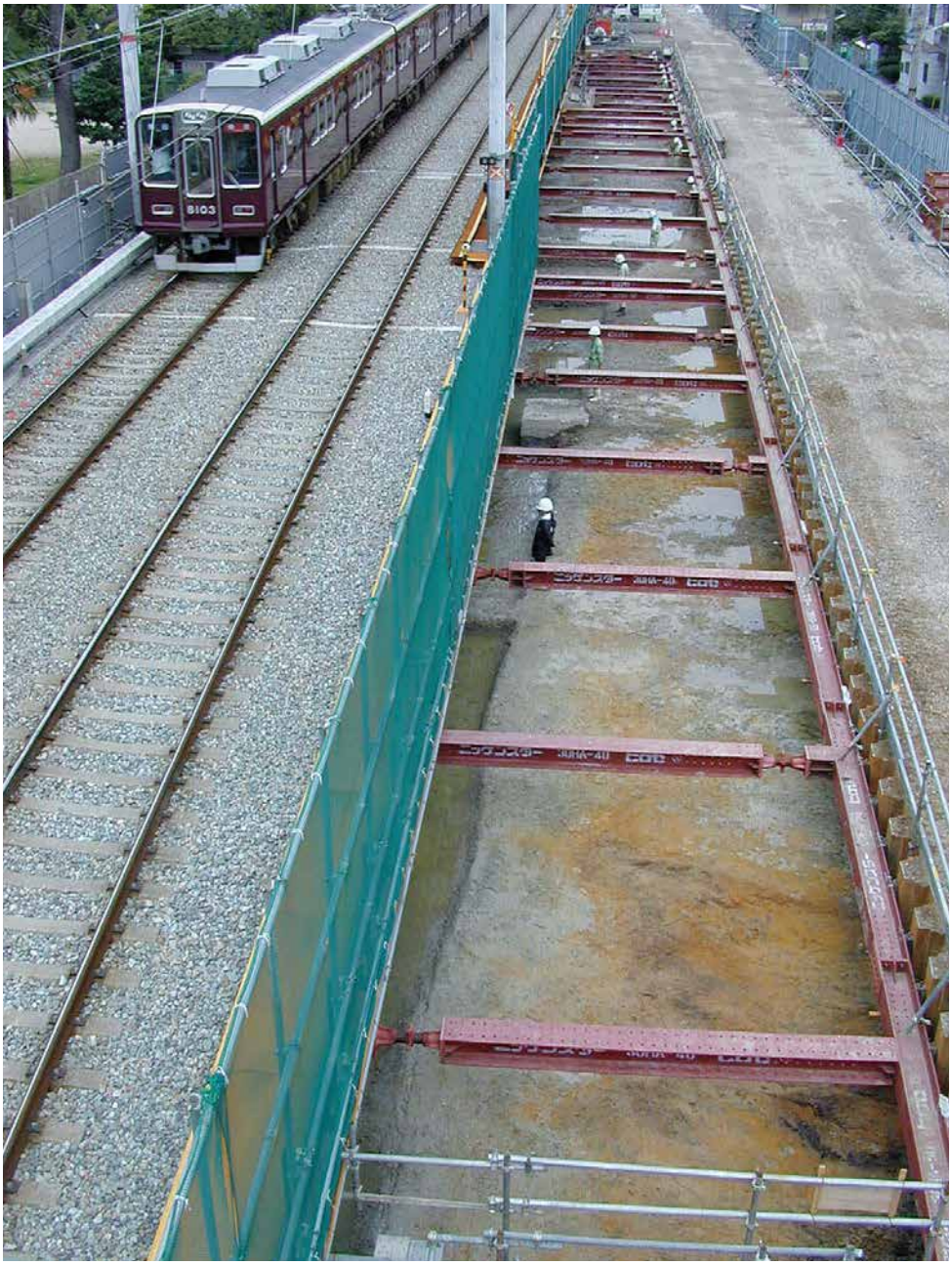
－ 都市計画道路尼崎伊丹線立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 －

平成25(2013)年３月26日　発行

編　集　　公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中１丁目１番１号
（兵庫県立考古博物館内）

発　行　　兵庫県教育委員会
〒650-8567　兵庫県神戸市中央区下山手通５丁目10番１号

印　刷　　丸山印刷株式会社
〒676-8566　兵庫県高砂市神爪１丁目11番33号


8103